

やま さき い せき

# 山崎 遺跡

国道 488 号長沢バイパス社会資本整備総合交付金（改良）工事  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015 年 3 月

益田市教育委員会

やま さき い せき

# 山崎 遺跡

国道488号長沢バイパス社会資本整備総合交付金（改良）工事  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2015年3月

益田市教育委員会

## 序

本報告書は、益田市教育委員会が平成 22 年度から 23 年度にかけて実施した国道 488 号長沢バイパス社会資本整備総合交付金（改良）工事に伴う山崎遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。

当該地は国道 488 号バイパス改築（改良）工事に伴う残土処理場候補地として選定されたことから、平成 21 年度に事業主体者の島根県益田県上整備事務所より埋蔵文化財包蔵確認についての協議依頼があり、埋蔵文化財包蔵地が存在する可能性が考えられたため、同年度の秋季に試掘確認調査を実施しました。

当初は周知遺跡の嶽城跡（中世の山城）の麓にあたることから中世遺跡の可能性を想定していましたが、試掘調査の結果、縄文時代の遺跡が所在し、当該地一帯に広がりをもつことが確認されました。この結果に基づき、事業主体者の協力を頂いた上で開発事業前に本発掘調査を実施しました。

遺跡からは、約 8000 年前に遡る押型文上器といわれる縄文時代早期の土器をはじめ、約 4000 年から 3000 年前の約 1000 年間にわたる縄文時代後期の土器が多量に出土したほか、東日本から伝播したといわれ、島根県では初見となる上器埋設炉のほか、石囲炉、竪穴住居などの遺構も発見されました。

当時の人びとの移動状況や生活環境、居住（集落形成）の変遷、縄文文化の伝播形態などを知る上で多くの情報を提供する貴重な遺跡であり、益田の原始時代に新たな歴史像が加えられました。

本書で紹介する調査成果が今後の西日本における縄文研究への一助となることを期待するとともに、地域の教育や活性化のために活用を図っていきたいと考えております。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の刊行にあたり、ご協力頂きました島根県益田県上整備事務所、地元の方々並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 27 年 3 月

益田市教育委員会

教育長 村 川 修

## 例　　言

1. 本書は、益山市教育委員会が島根県益山県土整備事務所からの委託により平成 22 年度から平成 23 年度までに実施した国道 488 号長沢バイパス社会资本整備総合交付金（改良）工事に伴う山崎遺跡埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2. 本書で報告する遺跡は下記のとおりである。

島根県益田市西見町澄川イ 824-2 ほか 山崎遺跡

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 益山市教育委員会

平成 22 年度 国道 488 号長沢バイパス社会资本整備総合交付金（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

【事務局】 益田市教育委員会文化財課

木原 光（課長）、河野敏弘（課長補佐）

【調査員】 山本浩之（主任）

【調査補助員】 世良 啓（嘱託職員）

平成 23 年度 国道 488 号長沢バイパス社会资本整備総合交付金（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

【事務局】 益田市教育委員会文化財課

木原 光（課長）、河野敏弘（課長補佐）、山本浩之（主査）

【調査員】 山本浩之（主査）

【調査補助員】 世良 啓（嘱託職員）

平成 24 年度 国道 488 号長沢バイパス社会资本整備総合交付金（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

【事務局】 益山市教育委員会文化財課

木原 光（課長）、町部 裕（課長補佐）、山本浩之（主査）

【調査員】 山本浩之（主査）

【調査補助員】 世良 啓（嘱託職員）

平成 25 年度 国道 488 号長沢バイパス防災安全交付金（改良）工事（2 月補経済対策）に伴う埋蔵文化財発掘調査業務

【事務局】 益田市教育委員会文化財課

木原 光（課長）、石田 公（課長補佐）、山本浩之（主査）

【調査員】 山本浩之（主査）

【調査補助員】 世良 啓（嘱託職員）

平成 26 年度 国道 488 号（長沢バイパス）社会资本整備総合交付金（改築）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務  
【事務局】 益山市教育委員会文化財課  
木原 光（課長）、石田 公（課長補佐）、山本浩之（主査）  
【調査員】 山本浩之（主査）

4. 調査に係る経費は、島根県益山市整備事務所が負担した。
5. 現地調査及び報告書作成に関しては、以下の機関、方々から指導、助言をいただいた（所属は当時）。  
島根県教育庁文化財課、中村友博（山口大学人文学部教授）、田中義昭（元島根大学教授）、石賀裕明（島根大学総合理工学部教授）、酒井哲弥（島根大学総合理工学部准教授）、竹広文明（広島大学大学院文学研究科・文学部准教授）、泉拓良（京都大学大学院文学研究科・文学部教授）、千葉豊（京都大学埋蔵文化財調査センター教授）、矢野健一（立命館大学文学部教授）、柳浦俊一（島根県古代文化センター）、幡中光輔（同）、角山徳幸（島根県教育委員会）、松尾允晶（同）、渡邊友千代（匹見上公民館長）、稻田陽介（島根県埋蔵文化財調査センター）、渡邊聰（同）
6. 発掘調査作業及び整理作業には、下記の方々に参加していただいた。  
平成 22 年度  
相川正則、安部美穂、石川浩二、石川巖生、伊藤 忠、今山義雄、川本清子、佐藤泰彦、高松信自、福場政信、間庭 誠、村上晴子、山本吉一、渡邊 進  
平成 22・23 年度  
石川伸枝、石川巖生、石田基臣、岩本雅江、岩本裕紀、大谷準一、大谷三知子、大庭寿正、岡本昌幸、角山 進、可部秀治、川崎育子、河野正幸、児玉 葉、佐々木直人、佐藤泰彦、澤江守男、島田 保、城市幸男、高松信自、武田為久、田中 優、山原美代子、寺井亞悠美、寺戸 悟、豊田 煦、西坂松子、西田 勝、羽板和良、平谷吾郎、平原親志、広野拓司、藤井初義、藤原 稔、増見祥典、益井 清、三浦竜之介、宮川 仁、椋 務、椋 庄蔵、村上武夫、村上晴子、糀山泰廣、森 伊佐男、山根定男、山根春夫、横田幸和、領家 刚、渡辺政喜  
整理作業（平成 22 年度～平成 26 年度）  
青木仁美、青江昌一、世良 啓、寺戸淳二、藤原剛志、三浦竜之介、両見美鈴  
※平成 22 年度の発掘作業員については、株式会社ひきみと人材派遣契約を締結した。平成 22 年度後半以降の作業員は益山市が直接雇用した。
7. 指図中の方位は測量法による第Ⅲ系座標 X 軸の方向を指す。また、平面直角座標系 XY 軸は世界測地系による。レベルは海拔高を示す。
8. 現地及び遺物写真は山本が行い、遺構図・土層図などのデジタルデータ収集は川良が行った。

9. 本報告書の執筆及び編集は、幅中、柳浦の助言を得て山本が行った。
10. 自然科学的分野の分析を次の方に依頼し、また第5章では下記の方々から下稿をいただいた。  
花粉分析：文化財調査コンサルタント株式会社  
柳浦俊一（島根県立古代出雲歴史博物館）  
幅中光輔（山雲市文化環境部 文化財課）
11. 遺跡整備（除草）業務については社団法人 シルバー人材センター（理事長 篠川 清）、出土遺物整理業務（注記・実測・トレス）についてはいなか舎（代表 山中義昭）、自然科学的分析（花粉分析）については文化財調査コンサルタント株式会社（代表取締役 渡邊正巳）、土器埋設炉模型作製業務については有限会社グリーンセンター芳樹園（代表取締役 宮迫芳樹）、3次元地形測量業務については株式会社トーワエンジニアリング（代表取締役 佐藤浩）、空中写真撮影業務については株式会社エイティック 益山営業所（所長 渡部徳一）に委託した。また作業員駐車場の貸借について豊田 薫氏にご協力を頂いた。
12. 遺物実測図の修正、遺物挿図・觀察表の作成は、柳浦が行った。
13. 本書に掲載した出土遺物及び実測図、写真等は益山市教育委員会文化財課で保管している。  
なお、出土遺物の註記は、発掘調査の進捗によって同一遺構出土でも異なる表記をした場合がある。これらは整理段階で出土地点別に分類し、最終的には本書の記載に沿って調査区、遺構ごとにまとめて収藏した。

## 本文目次

第1章 調査に至る経緯	(山本)	1
第2章 遺跡の位置と周辺の遺跡	(山本)	2
第3章 遺跡の立地と調査の経過	(山本)	5
第4章 調査の成果	(山本)	8
第1節 A・B区の調査		8
1. 上層の堆積と遺物の分布状況		
2. 出土遺物		
第2節 C区の調査		17
1. 土層の堆積状況と検出遺構		
2. 縱穴住居1		
3. 石窯炉1		
4. C区出土遺物		
第3節 F区の調査		36
1. 土層と遺構検出状況		
2. S R 1 出土遺物		
3. S R 2 出土遺物		
4. F区出土遺物		
第4節 D・E区の調査		72
1. 上層の堆積状況		
2. 縱穴住居2		
3. 石窯炉2		
4. D・E区出土遺物		
第5節 追加資料・出土地点不明資料		82
第5章 考察		85
第1節 山崎遺跡における後期初頭から後期前葉の土器様相	(幡中光輔)	85
-C区山上上器の検討より-		
第2節 山崎遺跡発掘の成果と意義	(柳浦俊一)	89
第6章 まとめ	(山本)	91
附 章 自然科学分析	(渡辺正巳)	93
第1節 花粉分析		

## 挿図目次

益山市匹見町の位置と縄文遺跡	1	第11図 C区土層堆積状況	20
第1図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図	3	第12図 C区縦穴住居1	21
第2図 遺跡発掘前の地形	7	第13図 C区縦穴住居1・SK01	
第3図 調査後の地形測量図	9	・SK02(石窯炉)・石窯炉1	22
第4図 A・B区遺物出土状況	11	第14図 C区縦穴住居1出土遺物(1)	23
第5図 A・B区土層堆積状況図	12	第15図 C区縦穴住居1出土遺物(2)	24
第6図 A・B区山上遺物(1)	13	第16図 C区山上遺物(1)	27
第7図 A・B区出土遺物(2)	14	第17図 C区出土遺物(2)	28
第8図 A・B区出土遺物(3)	15	第18図 C区出土遺物(3)	29
第9図 A・B区出土遺物(4)	16	第19図 C区出土遺物(4)	30
第10図 C区遺構・遺物検出状況図	19	第20図 C区出土遺物(5)	31

第21図	C区出土遺物（6）	32	第52図	D・E区出土遺物（3）	80
第22図	F区遺構配図	37	第53図	追加資料1・出土地点不明土器	83
第23図	F区土層堆積状況図	38	第54図	追加資料2・出土地点不明遺物	84
第24図	S R 1 出土遺物（1）	41	第55図	C区型式別出土層位 (グリッド取上分)	88
第25図	S R 1 山上遺物（2）	42	第56図	C区型式別山上地點① (後期初頭／東部瀬戸内・山陰系)	88
第26図	S R 1 山上遺物（3）	43	第57図	C区型式別出土地點② (後期初頭～中期後葉・山陰系)	88
第27図	S R 1 出土遺物（4）	44	第58図	C区型式別出土地點③ (後期前葉～九州系)	88
第28図	S R 1 出土遺物（5）	45			
第29図	S R 1 出土遺物（6）	46			
第30図	S R 1 出土遺物（7）	47			
第31図	S R 1 山上遺物（8）	48			
第32図	S R 1 出土遺物（9）	49			
第33図	S R 1 出土遺物（10）	50	図1	調査区平面図(試料採取地點)	93
第34図	S R 1 出土遺物（11）	51	図2	試料採取地点断面図(試料採取位置)	94
第35図	S R 1 出土遺物（12）	52	図3	EWT-1の花粉ダイアグラム (百分率)	97
第36図	S R 1 山土遺物（13）	53	図4	EWT-1の花粉ダイアグラム (含有量)	97
第37図	S R 2 出土遺物（1）	59	図5	EWT-3の花粉ダイアグラム (百分率)	99
第38図	S R 2 出土遺物（2）	60	図6	EWT-3の花粉ダイアグラム (含有量)	100
第39図	S R 2 出土遺物（3）	61	図7	EWT-6の花粉ダイアグラム (百分率)	101
第40図	S R 2 山上遺物（4）	62	図8	EWT-6の花粉ダイアグラム (含有量)	102
第41図	F区出土遺物（1）	63	図9	NST-1の花粉ダイアグラム (百分率)	103
第42図	F区出土遺物（2）	64	図10	NST-1の花粉ダイアグラム (含有量)	104
第43図	F区出土遺物（3）	65			
第44図	F区山上遺物（4）	66			
第45図	E区・EWT-1遺構・遺物出土状況図	73			
第46図	E区豎穴住居2(SI01)平面図	74			
第47図	E区豎穴住居2断面図	75			
第48図	E区豎穴住居2十畳埋設坪・EWT-1石回廊2	75			
第49図	E区豎穴住居2(SI01)出土遺物	76			
第50図	D・E区出土遺物（1）	78			
第51図	D・E区出土遺物（2）	79			
[附章]					
			図1	調査区平面図(試料採取地點)	93
			図2	試料採取地点断面図(試料採取位置)	94
			図3	EWT-1の花粉ダイアグラム (百分率)	97
			図4	EWT-1の花粉ダイアグラム (含有量)	97
			図5	EWT-3の花粉ダイアグラム (百分率)	99
			図6	EWT-3の花粉ダイアグラム (含有量)	100
			図7	EWT-6の花粉ダイアグラム (百分率)	101
			図8	EWT-6の花粉ダイアグラム (含有量)	102
			図9	NST-1の花粉ダイアグラム (百分率)	103
			図10	NST-1の花粉ダイアグラム (含有量)	104
[附章]					
			表1	微化石検査結果	96
			表2	花粉化石組成表	106

## 挿表目次

周辺の遺跡一覧表	3	第12表	F区山上石器観察表	71	
第1表 A・B区出土土器観察表	16	第13表	E区豎穴住居2出土土器観察表	76	
第2表 A・B区山上石器観察表	17	第14表	D・E区出土土器観察表	80	
第3表 C区豎穴住居1出土土器観察表	24	第15表	D・E区山上石器観察表	81	
第4表 C区豎穴住居1出土石器観察表	24	第16表	追加資料・出土地点不明土器観察表	82	
第5表 C区出土土器観察表	33	第17表	追加資料・出土地点不明石器観察表	85	
第6表 C区山上石器観察表	35	第18表	出土地点別出土点数表	91	
第7表 S R 1 出土土器観察表	53				
第8表 S R 1 出土石器・土製品観察表	57				
第9表 S R 2 山上土器観察表	67				
第10表 S R 2 山上石器観察表	69				
第11表 F区出土土器観察表	70				
[附章]					
		表1	微化石検査結果	96	
		表2	花粉化石組成表	106	

## 図版目次

図版1	山崎遺跡全景 (発掘調査後 北東から)	図版15	EWT-4・SR1・SR2河床部下層 の状況
図版2	(上) 発掘調査後の全景 (南から) (下) 発掘調査前の状況 (A・B区及びC・F区)		1. EWT-4 2. SR1 試掘坑1 3. SR1 試掘坑2 4. SR1 試掘坑3 5. SR1・2間 試掘坑4 6. SR2 試掘坑5
図版3	(上) C・F区発掘調査前の状況 (下) D・E区及びA・B区 発掘調査前の状況	図版16	(上) D・E区発掘調査後の状況 (下) D区発掘調査後の状況
図版4	(上) D・E区発掘調査前の状況 (下) A・B区発掘調査後の状況 (東から)	図版17	(上) 壁穴住居2 檢出当初の状況 (下) 壁穴住居2 一次堆積土検出状況
図版5	(上) B区発掘調査後の状況 (東から) (下) A・B区土層堆積状況 (NST-1北壁)	図版18	(上) 壁穴住居2 完掘状況 (下) 壁穴住居2 上層堆積状況
図版6	(上) A区土層堆積状況 (下) A区遺物出土状況	図版19	(上) 壁穴住居2 土器埋設炉 (下) E区石窯炉2
図版7	C・F区発掘調査後全景 (南から)	図版20	(上) A・B区出土土器 (1) (下) A・B区出土土器 (2)
図版8	(上) C区発掘調査後の状況 (下) SR1とSR3 土層切り合い状況 (EWT-3)	図版21	(上) A・B区出土土器 (3) (下) A・B区出土土器 (4)
図版9	(上) 壁穴住居1 檢出状況 (北から) (下) 壁穴住居1 完掘状況 (北から)	図版22	(上) A・B区出土土器 (5) (下) A・B区出土土器 (6)
図版10	壁穴住居1 上層堆積状況 1. 南北ベルト北半 2. 南北ベルト南半 3. 東西ベルト東半 4. 東西ベルト西半	図版23	A・B区出土遺物
図版11	壁穴住居1・石窯炉1 1. SK01 2. SK01 3. 壁穴住居1 石窯炉 4. 壁穴住居1 石窯炉 5. 壁穴住居1 石窯炉 6. 石窯炉1	図版24	(上) 壁穴住居1 出土土器 (下) 壁穴住居1 出土石器
図版12	(上) F区発掘調査後の状況 (北から) (下) F区 SR1とSR2 発掘調査状況	図版25	(上) C区山上土器 (1) (下) C区出土土器 (2)
図版13	1. SR1土層 (東西ベルト 南から) 2. SR1土層 (南壁 北から) 3. SR2土層 (南壁 北から) 4. SR1遺物出土状況 (C区SR3との切り合い部分)	図版26	(上) C区出土土器 (3) (下) C区出土土器 (4)
図版14	(上) SR1遺物出土状況 (下) SR1遺物山上状況	図版27	(上) C区出土土器 (5) (下) C区出土土器 (6)
		図版28	(上) C区出土土器 (7) (下) C区山上土器 (8)
		図版29	(上) C区出土土器 (9) (下) C区出土石器 (1)
		図版30	(上) C区山上土器 (2) (下) SR1出土土器 (1)
		図版31	(上) SR1出土土器 (2) (下) SR1出土土器 (3)
		図版32	(上) SR1山上土器 (4) (下) SR1出土土器 (5)
		図版33	(上) SR1出土土器 (6) (下) SR1出土土器 (7)
		図版34	(上) SR1山上土器 (8)

	(下) S R 1 山出土器 (9)
図版35	(上) S R 1 山出土器 (10)
	(下) S R 1 出土土器 (11)
図版36	(上) S R 1 出土土器 (12)
	(下) S R 1 出土土器 (13)
図版37	(上) S R 1 出土土器 (14)
	(下) S R 1 山出土器
図版38	(上) S R 2 出土土器 (1)
	(下) S R 2 出土土器 (2)
図版39	(上) S R 2 出土土器 (3)
	(下) S R 2 出土土器 (4)
図版40	(上) S R 2 山出土器 (5)
	(下) S R 2 出土石器
図版41	(上) F 区出土土器 (1)
	(下) F 区出土土器 (2)
図版42	(上) F 区出土土器 (3)
	(下) F 区出土石器 (1)
図版43	(上) F 区出土石器 (2)
	(下) 穴住居 2 出土土器
図版44	(上) 穴住居 2 土器埋設炉の土器
	(下) D・E 区出土土器 (1)
図版45	(上) D・E 区出土土器 (2)
	(下) D・E 区出土土器 (3)
図版46	(上) D・E 区出土石器
	(下) 追加資料・出土地点不明土器 (1)
図版47	(上) 追加資料・出土地点不明土器 (2)
	(下) 追加資料・出土地点不明石器

図版48	上器施文・圧痕
	1. 卷貝殻頂部刺突・側面押圧
	2. 二枚貝腹縁刺突
	3. 卷貝条痕
	4. 二枚貝条痕
	5. 摺り戻し繩文
	6. 卷貝疑似繩文
	7. 底部圧痕(種子か)
	8. 底部卷貝圧痕
[附章]	
顕微鏡写真 (P110)	
	N S T-1 試料 No. 7
	E W T-1 試料 No. 1、No. 3
	E W T-6 試料 No. 2
	ツガ属
	スギ属
	アカガシ亜属
	コナラ亜属
	ソバ属
	アカザ科・ヒユ科
	アブラナ科
	キク亜科
	イネ科
	イノモトソウ科
	ヨモギ属
	タンボポ亜科
	シノブ属

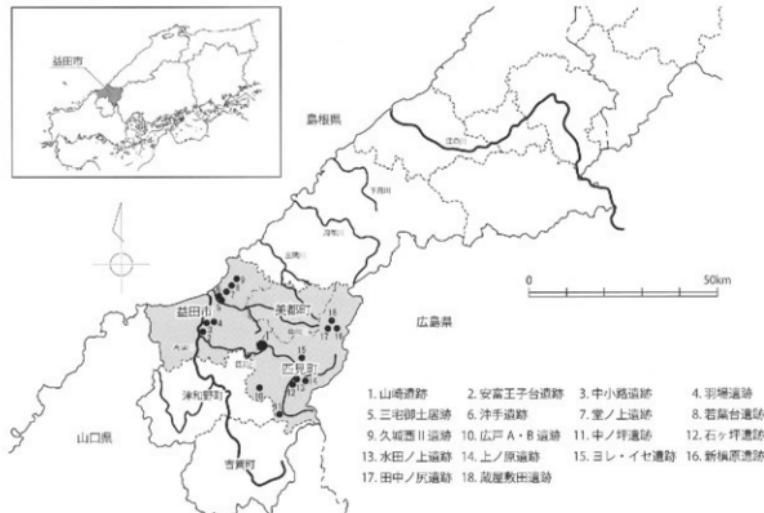
# 第1章 調査に至る経緯

益田市匹見町では、東・西方向に貫通して益田市横田町の国道9号に接続する国道488号において、澄川地区を中心に長沢バイパス改築（改良）工事の話が進められており、平成21年6月9日付け益整第1846号で事業者である島根県益田県上整備事務所から残土処理場予定地内に係る埋蔵文化財についての協議依頼を受けた。

分布調査からは、開発予定区域（面積約20,000m<sup>2</sup>）の周辺には原始から中世に至る周知遺跡が点在すること。また区域内は2河川の相会地という立地条件等により発達した河岸段丘の形成を窺えることより埋蔵文化財包蔵の可能性を推定できたことから、当該区域のうちの河川沿い（南側）の削平推定範囲と上流側（東側）の既往開発工事に伴う残土埋立範囲を除いた西半域の約10,000m<sup>2</sup>を対象とした試掘調査の必要性を平成21年6月15日付け益教文第36号で回答している。

試掘調査は任意に13箇所の試掘坑を設けて、平成21年10月23日から同年12月11日まで実施した。その結果、大半の調査区から縄文時代後期の遺物が確認され、中でも高位置から中位置にかけての段丘面では縄文時代早期に係る遺物も少量確認されたことから遺跡と確認されたもので、当該地点の地名から山崎（やまさき）遺跡と呼称することとし、平成21年12月14日付け益教文第111号で遺跡発見の手続きを終了した。なお開発予定区域の西端域からは、近代に稼働した索道・澄川駅の建物基礎跡も確認されている。

この調査結果を基に、事業者に対しては開発行為前の発掘調査の必要性を伝えた上で協力をお願いする一方で、事業者・関係部局との継続的な協議の実施や開発対象地の公有化を行っている。そ



益田市匹見町の位置と縄文遺跡

して文化財保護法第 94 条第 1 項等に係る埋蔵文化財発掘の通知（平成 22 年 9 月 21 日付け益整第 3055 号）や文化財保護法第 99 条第 1 項等に係る埋蔵文化財発掘調査の通知（平成 22 年 10 月 18 日付け益教文第 118 号）などの文化財保護法上の所定の手続きを行い、事業者との受託契約を締結の後は、平成 22 年 11 月から 2 カ年度にわたり遺跡の推定範囲約 5,700m<sup>2</sup>を対象とした本発掘調査を実施することになった。

## 第 2 章 遺跡の位置と周辺の遺跡

益田市は、島根県の西端に位置し、総面積 733.24km<sup>2</sup>を測る石西地域の中核都市である。地理的にみると、北は約 33km の海岸線で日本海に面し、東は浜田市、西は山口県、鹿足郡津和野町・吉賀町と境を接し、南は中国山地の脊梁部で広島県と境界を分け合っており、旧国は石見（いわみ）国に属して、西は長門（ながと）国に接した（位置図参照）。

平成の大合併で平成 16 年 11 月に旧美都町と旧匹見町が益田市に編入し新益田市が発足して、本年度で 10 周年の節目を迎えている。益田市の人口は平成 27 年 1 月末時点 49,252 人（世帯数 21,567）であり、そのうち市南部に位置する匹見町は総面積 300.08km<sup>2</sup>を測り、人口 1,274 人（世帯数 697）を数えている。

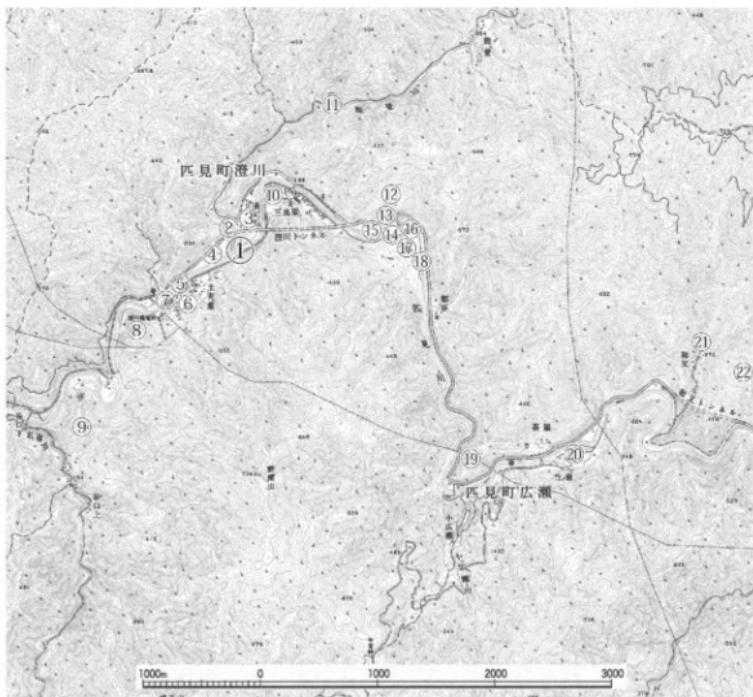
本遺跡の所在する澄川（すみがわ）地区は、匹見町内における 7 地区（旧大字単位）のうちの 1 地区に当たり、町域の北西側に位置し、標高は河岸段丘の可耕地で 140 ~ 180 m、そして大部分は 500 ~ 700 m 台の山地で占められているという立地である。地区を貫流する匹見川（一級河川）は、小さな蛇行を繰り返しながら、中流の長尾原で能登川、下流の大津で北流した石谷川の支流を集め、凡そ北東方向に流化して高津川（一級河川）に合流している。その人文活動域といえば、その匹見川が形成した持三郎・三山原・長尾原・上井原などの集落地区内の段丘地や河川の合流地にみることができるが、本地区には現在 190 人（世帯数 101）の人口を数えることができる。

このうち三山原地内は、明治 22 年に広瀬・石谷などの大字単位を含めて匹見下村として成立した当時、役場などの諸官庁が置かれ、北西部域の中心的役割を果たした場所であった。それは匹見上村・道川村との 3ヶ村の合併によって、匹見村となった昭和 30 年（同 31 年には町制が施行され、匹見町となる）まで続くが、活計を支えた農林業が衰微した現在でも、郵便局・公民館などに余脈をみることができる。

さて長尾原（なごうばら）に位置する山崎（やまさき）遺跡は、島根県益田市匹見町澄川イ 824-2 ほかに所在している。当該地は南側を西流する匹見川と西側を南流する能登川との相会地にあたり、舌状に突出した匹見川右岸の河岸段丘上に位置する。そこは周知遺跡の城跡（中世山城）の山裾南側にあたり、標高 153 ~ 161 m を測って匹見川に向かって緩やかに傾斜しており（比高差は約 10 ~ 12 m）、遺跡は山麓中腹から河端部まで広がりをみせている。発掘調査前の地形観察では、河岸段丘は上位・中位・下位の 3 段が確認されており、いずれも水田として利用されていた。

ここで益田市域に目を転じて、縄文遺跡の分布について着目してみたい（位置図参照）。旧益田市では安富王子台遺跡（縄文時代後晩期）、中小路遺跡（縄文時代晩期）、羽場遺跡（縄文時代晩期）、沖手遺跡（縄文時代後晩期：丸木舟）、三宅御十居跡（史跡：縄文時代晩期）、堂ノ上遺跡・久城西 II 遺跡（縄文時代尖頭器）、若葉台遺跡（縄文時代後期：陥し穴）などがみられるが、遺跡数としては限られる一方で、縄文遺跡が集中する地域は山間地の匹見町といえ、70ヶ所を超える縄文遺跡が確認されている。代表的なもので、広戸 A・B 遺跡（縄文時代後期）、中ノ坪遺跡（市史跡：

縄文時代前期)、石ヶ坪遺跡(市史跡:縄文時代中後期)、水田ノ上遺跡(市史跡:縄文時代後晚期)、上ノ原遺跡(市史跡:縄文時代早期)、ヨレ・イセ遺跡(市史跡:縄文時代後晚期)、新横原遺跡(県史跡:旧石器時代、縄文時代早前期)、田中ノ尻遺跡(市史跡:縄文時代前期)、蔵屋敷田遺跡(市



第1図 遺跡位置と周辺の遺跡分布図

番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号	番号	遺跡名	種別	時代	遺跡番号
①	山崎遺跡	集落地	縄文	S 212	⑫	金山溢銅山跡	鉱山跡	近世	S 174
②	長尾原遺跡	集落地	中世		⑬	芝遺跡	集落地	縄文	S 175
③	櫛城跡	山城跡	中世	S 178	⑭	小田原遺跡	散布地	縄文	S 176
④	アガリ遺跡	散布地	縄文	S 182	⑮	舟戸遺跡	散布地	縄文	S 173
⑤	寺ノ前遺跡	散布地	縄文	S 183	⑯	長蓮寺跡	寺院跡	近世	S 172
⑥	殿遺跡	散布地	弥生	S 184	⑰	山根ノ下遺跡	集落地	中世	S 171
⑦	土井原土井跡	鉱跡	中世	S 185	⑱	小泓遺跡	散布地	縄文	S 170
⑧	叶松城跡	山城跡	中世	S 186	⑲	広瀬城跡	山城跡	中世	S 168
⑨	金山城跡	山城跡	中世	S 187	⑳	沖ノ原遺跡	集落地	縄文	S 167
⑩	田屋ノ原遺跡	散布地	弥生	S 177	㉑	和又古墳	古墳	古墳	S 166
⑪	丸潤鉄跡	製鉄跡	近世	S 179	㉒	藤盤御城跡	山城跡	中世	S 165

周辺の遺跡一覧表

史跡：縄文時代早期）などがみられて枚挙にいとまがない。また縄文時代後晩期に限ってみると、匹見町内では匹見地区と広瀬・澄川地区に遺跡が集中する様子が看取でき、時期別に縄文文化の変遷や流入過程を辿れる上で興味深いといえる。

また本報告する澄川地区長尾原の山崎遺跡周辺には、昨今の発掘調査成果も含めた多くの遺跡を確認することができる（第1図）。

例えは原始遺跡では、土井原に縄文時代中期に比定される船元式・波子式・春日式・甲木II式土器などが出土した寺ノ前遺跡、弥生土器などが出土した殿（なわて）遺跡、三出原に縄文時代中期末～後期前葉の土器と多出した弥生土器を特徴とする田屋ノ原遺跡などがみられるとともに、能登川を挟んだ近辺の西側地点に縄文時代中期末と想定される織維土器や縄文時代前期初頭の羽島下層式土器、春日式上器などが出土した土井原のアガリ遺跡などが確認できる。

また持三郎には、鐘崎式土器が出土した芝遺跡、縄文時代後晩期のものと考えられる舟戸遺跡、縄文時代後晩期の小泓（こぶけ）遺跡や縄文時代中期後半の里木皿式土器の出土した小田原遺跡などがみられることから、当該地区においては比較的縄文人にとっての生活適地と推測できるが、弥生遺跡は貧弱といえ、また今のところ古墳は確認できないという疎密度がみられる。

中世遺跡としては、まず持三郎の山根ノ下遺跡（市史跡）があげられる。発掘調査では鎌倉時代末期の住居址が検出されているが、和鏡・鉄劍・青磁・白磁なども確認されたことから、当該期における支配階級者の住居跡であったと想定されている。また山城としては、山崎遺跡から1km下流側の土井原に叶松城跡（市史跡）があり、その山裾には寺戸氏（益田氏の家臣）の居館とも推測できる「ドイ」の地名が遺る。そして本遺跡の北側上には叶松城跡の枝城であったと想定される前述の嶽城跡も存在するなど、山間地における地侍たちの割拠の様子を窺い知ることができる。また生産遺跡としては、嶽城跡至近の北側に位置し、製鉄遺跡と捉えられる長尾原遺跡がみられるが、精銅の可能性や寺戸氏との関係も推測されている。

このように中世を概観すると、本地区は平安時代末期までは国衙（別府）領であったものの、以降は西石見に転属した益田氏の影響下にあったと推定されている。同氏の基本台帳である「益田本郷御年貢井田數目録帳」（1376年）や「益田本郷田数注文」には奥十二島として区分され、すみかハ（澄川）名・物三郎（持三郎）名・なかわら名・まさき（山崎）名・さなてハラ（三出原）名などの具体的な名田もみえることで、南北朝期には益田氏の勢力が及んでいたと考えられることから、本遺跡名の「山崎」は当該期以降に遺されてきた地名と推測できる。

なお近世の藩政期には浜田藩の支配を受け、三出原には正徳年間（1711～1715）に益田代官所の付設としての澄川山張所が設けられていた。一方、美都町の丸山鉛山と同鉛床にあることから、本地區でも金山・魚ヶ原などといった銅採掘坑跡も少なくなく、現に同地の谷口は銅生産地として大森鉛山領（天領）であったとされる。このほか製鉄遺跡として能登に丸渕鉛跡、火ノ口鉛跡があった。参考として「角川日本地名大事典-32-島根県」には、明暦2年（1656年）のものとして本地區は「戸数137、村高353石」と記されている。

近代以降には、匹見町の農林業を支えてきた索道（ケーブルによる空中輸送を行う交通機関）が人正11年から昭和26年までの約30年間にわたって稼働しており、本遺跡の西側には索道・澄川駅が存在していた。

## 第3章 遺跡の立地と調査の経過

平成 22 年度の山崎遺跡の発掘調査は、平成 22（2010）年 11 月 8 日から平成 23 年 3 月 18 日まで行った。広域に及ぶ調査対象地では、さらに詳細な上層堆積状況や検出遺構・出土遺物の疎密などを確認して調査計画を策定する必要があったため、最初に南北を任意に 2 分する東西トレンチ（通称：EWT-1～-4）とそれに直交する南北トレンチ（通称：NST-1・-2）という「逆 T 字」状の調査トレンチを設けることとした。

その結果、東西トレンチの中央部と東半部及び南北トレンチの南部（中央寄りからは、縄文時代後期に係る多量の遺物が確認され、南北トレンチの北半部からは縄文時代早期に係る押型文土器がまとまりをもって発見された。一方、東西トレンチの西半部は河床礫が多くみられ、索道・澄川駅の建設に伴うと推定される過度の影響も窺えることから、遺跡としては希薄である様子が看取された。

追加した各試掘坑の調査状況も鑑みて、遺跡地西側の索道・澄川駅跡一帯の約 1,700m<sup>2</sup>は発掘調査の非対象範囲と判断する中で、当該年度は東西トレンチを境に北域（A・B 区を含む上段面、C 区の中段面、D・E 区の中～下段面）を中心に調査を実施することとした。E 区南側には一段低い段丘面があり、ここにも試掘坑を設定した。ここでは遺物・遺構ともに検出されなかったことから、面的調査は行わなかった。

調査順序は、まず多量の遺物や集石状遺構が検出された東半域の東西トレンチ（EWT-1）を中心精査を行っているが、遺物の広がりを認められた南側に拡張し（E 区）、調査終盤には北側（D 区）へと調査範囲を広げた。

一方で、試掘調査や南北トレンチの調査結果から、上位面についてでは耕作土から遺物包含層上面までを広域に重機で掘削した。堆積土の除去後には、さらに東側と西側に東西トレンチ（EWT-5・-6）を追加して遺跡の希薄状況を確認した上、縄文時代早期に係る文化面の集中範囲を特定している。要するに南北トレンチの北半部（NST-1）一帯に該当するが、調査後半にはその両側を任意に拡張して（A・B 区）精査を行った。

また中位面西域は C 区として設定しているが、東西トレンチ（EWT-3）と南北トレンチ（NST-2）からの遺物の多量状況を鑑みて、東半部を中心に面的な精査を行い、遺物包含層の上層までを掘削した。一方の東域は、三角状に突出した中高位域の砂丘域と判断されたことから、その他調査区として遺跡の希薄範囲と扱った。

この調査では、E 区から県内で初見となる土器埋設炉を作り穴住居 1 棟と集石状遺構及び多量の縄文時代後期中葉～後葉の遺物、C 区の東半部から多量の縄文時代後期初頭～前葉の遺物、そして A・B 区からはまとまりをもった縄文時代早期の押型文土器と被熱及び盤状の集石群が確認されており、約 2,000m<sup>2</sup>の調査を終了した。

また平成 23 年度の発掘調査は、平成 23（2011）年 4 月 18 日に再開し、同年 8 月 12 日まで行った。東西トレンチの南側に設定した下位面の F 区を中心に、北側の C 区下層を掘り進め、A 区は拡張を行うなどして精査に努めた。東域は、D 区をさらに掘り下げて東端まで拡張すると同時に、後半にはその他調査区の地山までの掘削を終了している。

F 区は遺物包含層が比較的厚く堆積して、緩斜面の東側並びに西側に旧河道（S R 1・2）に伴う土器溜りが 2 箇所確認された。そこを中心に縄文時代後期前葉～中葉を主体とする多量の上器が出土して、旧 2 河道の時期差も窺うことができた。また C 区からは石窯炉を作り穴住居 1 棟と数基の土坑、柱穴が確認されている。

なお、F区西側のEWT-4 試掘坑2では、耕作土直下で河床疊が大量に検出された。(図版15) ここでは遺物・遺構とも検出されなかったことから、面的調査の対象としなかった。

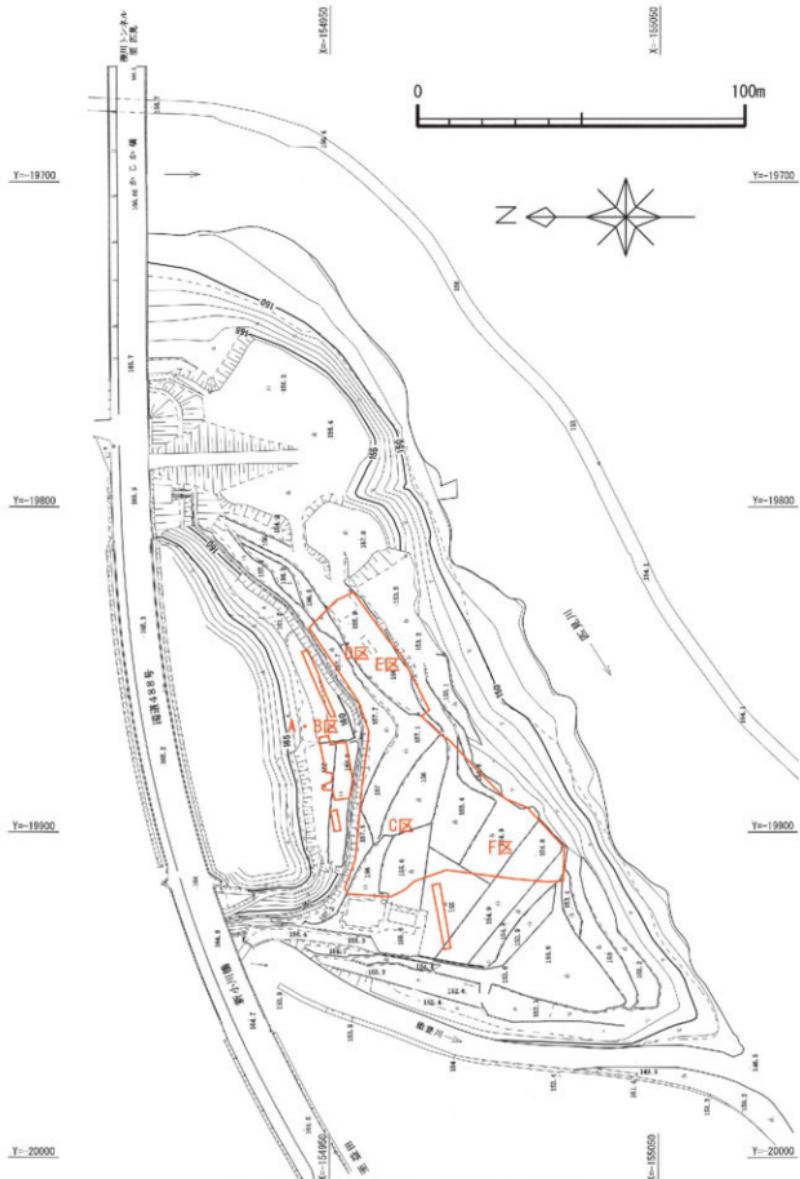
A区拡張区からは、盤状あるいは被熱した集石群に伴って押型文上器の分布がみられたとともに、D区からは縄文時代後期中葉～後葉土器の出土とともに、少數の柱穴状遺構が確認されて、約2,000m<sup>2</sup>の調査を終了している。

よって総面積4,000m<sup>2</sup>に及ぶ発掘調査を行ってきたが、当該遺跡からは総数85,506点の遺物が出土している。うち縄文上器類は84,431点で全体の98.7%を占め、次いで石器類592点の0.7%という割合となる。また層位・層名については基本的に調査区ごとに表記しており、本報告では注記名の仮を外した層名を採用している。

なお調査期間中とその後の資料整理期間には、多くの専門家・研究者に貴重な指導・助言を賜わり(例言参照)、また島根大学の石賀教授には土壤分析のご協力を頂いている。そして島根県立古代山雲歴史博物館(現在)の柳浦氏と出雲市文化環境部 文化財課(現在)の幡中氏には、実地調査及び出土遺物に関する一貫した指導を頂くなどの多大なご協力を賜った。

発掘調査の終了に近い平成23年7月31日には、現地説明会を開催して50名を超える多くの見学者が来館された。その後、遺跡全体に係る空中写真撮影及び3次元地形測量業務を実施して、約10ヵ月の期間を要した発掘調査を終了した。

なお調査期間中の平成23年7月24日には、市民学習センターで開催された「歴史講座」において、泉拓良教授と矢野健一教授に西日本の縄文文化をテーマとした講演を頂き、また発掘調査成果の普及・啓発事業として、同年7月16日から11月14日まで匹見上公民館との共催企画「森に育まれた匹見の縄文文化展」～山崎遺跡にみる縄文の世界～を匹見、美都、益田地区の順で巡回して開催し、さらに10月22日から12月11日までの「発掘調査展2011」(益田市立歴史民俗資料館)でも紹介を行うなど、期間中には多くの来場者を迎えることができた。



第2図 遺跡発掘前の地形 (S=1/1500)

## 第4章 調査の成果

### 第1節 A・B区の調査（第4・5図・図版4～6）

1. 土層の堆積と遺物の分布状況 北見川からの比高約22mにある、15×70mの細長い上位段丘に立地する。当初のトレンチ調査で、調査区の中央で主に遺物が出土したことから、ここを重点的に発掘調査した。東側のEWT-5や西側のEWT-6では遺物が出土しなかったため、ここでは上層の確認にとどめた。

遺物は、9層上面で出土した（第5図・図版6）。9層より上位の層は、角礫を含み斜行して堆積していたことから、上位からの流入土と思われた。9層以下は均質で細かな土壌で、比較的安定した状態で堆積した土壤と考えられる。9層と11層はやや黒い土壤で、遺物包含層の可能性が考えられたが、9層以下からは遺物は出土しなかった。

9層上面では、とくにA区（図版4）とEWT-5で河床礫が多く出土した。遺物はA区で河床礫に混じて出土した。遺物の分布は、おおまかに東北から西南に向かっている状況がみえる。

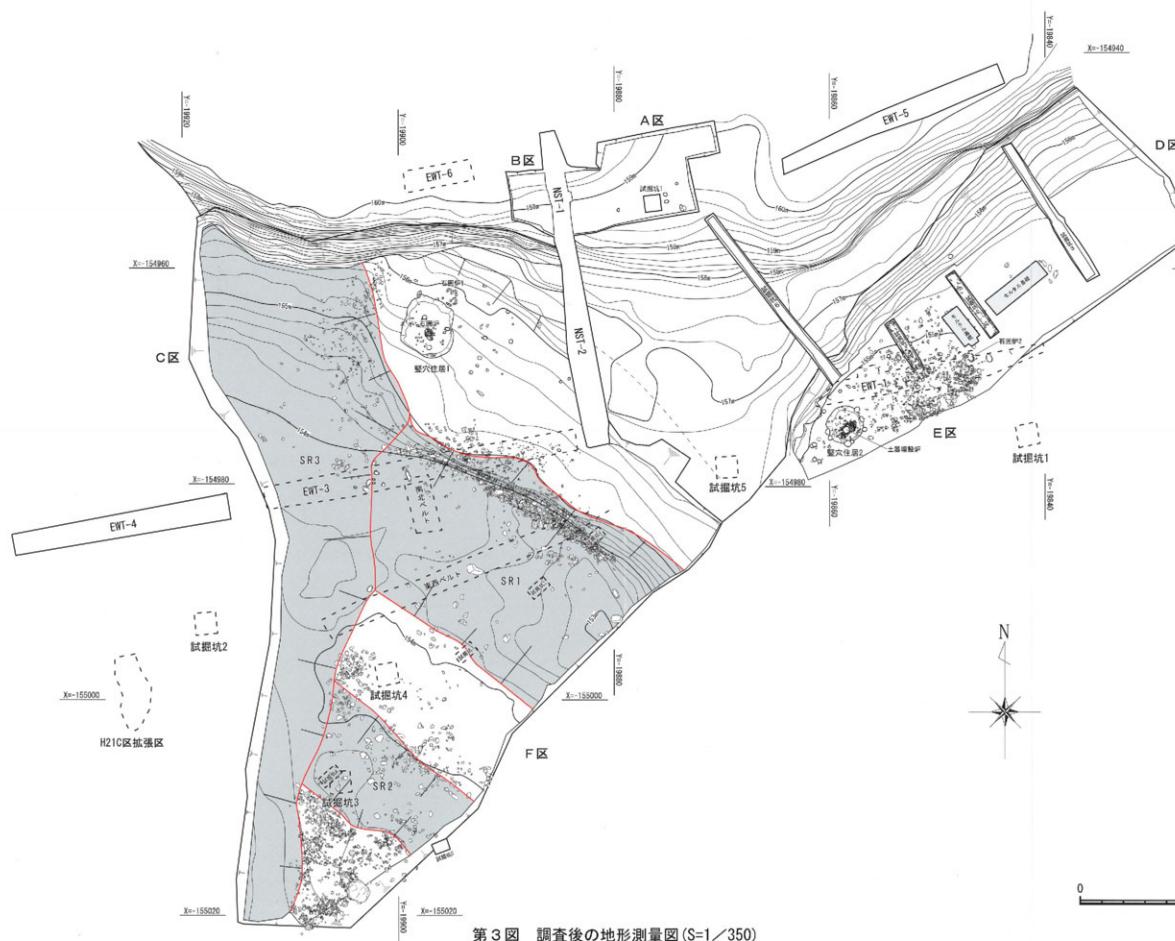
2. 出土遺物（第6～9図・図版20～23） 第6図1～第8図2は早期・押型文土器である。第6図1・2・6～8は黄島式である。1・2・8は格子口押型文で、2には内面にも押型文が施されている。6・7は山形押型文で、ともに横位施文である。

これ以外は楕円押型文で、楕円文の長軸は0.5～1.9cmと幅がある。楕円文の長軸が1cm以上を測るものは、口縁部内面に斜行沈線文が施されることが多く、高山寺式と考えてよい。これらは楕円文が平板で、施文後ナデが加えられることが多いようで、第7図3・4・8、第8図1・2などは楕円文がナデ消されている。第6図24は、上端部まで楕円文がみられるため浅鉢形に復元したが、上端は擬口縁の可能性がある。口縁内面の斜行沈線は断面形「レ」の字状を呈し、端部が鋭い工具が使われたようである。第7図4は口縁部内面に刻み目状に短い沈線文、その下に長い斜行沈線が施されている。

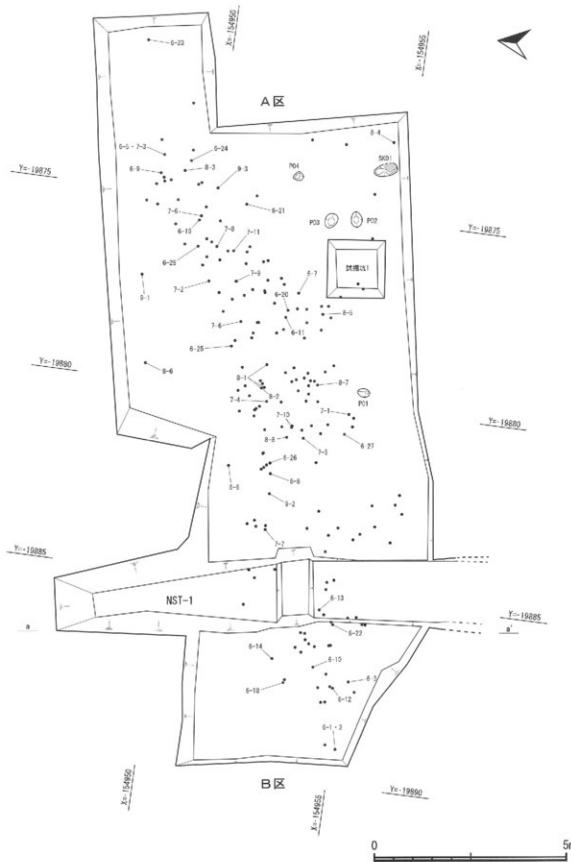
楕円文の長軸が0.5～1cmを測るもの（第6図3～5、9・10・12～18）は、上述の高山寺式と明らかに楕円文の大きさが違うので、黄島式か高山寺式か迷う土器である。いずれも楕円文上面が平坦で、文様の重複が著しい点は、高山寺式に似ている。

第8図3・4は後期上器である。3は小池原上層式である。4は沈線文を挟んで斜行する短沈線が2段に施される土器で、波頂部には円形文が配される。型式不詳だが、津雲A式または彦崎K1式に似た様相を持つ。

第8図5～8・第9図1～3は、磨石・叩石である。第9図4は磨製石斧で、後期に属する可能性がある。

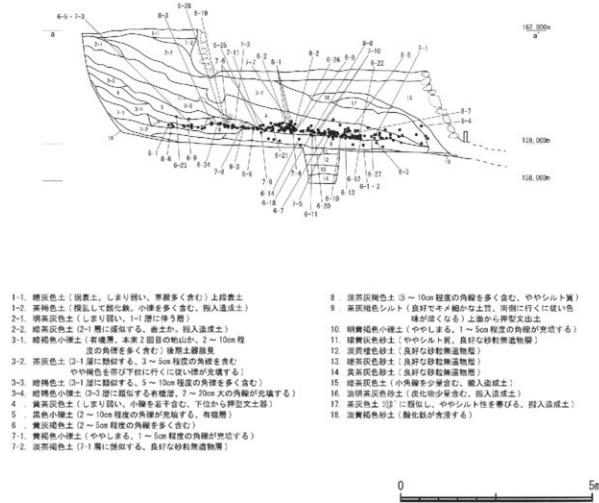


第3図 調査後の地形測量図 (S=1/350)

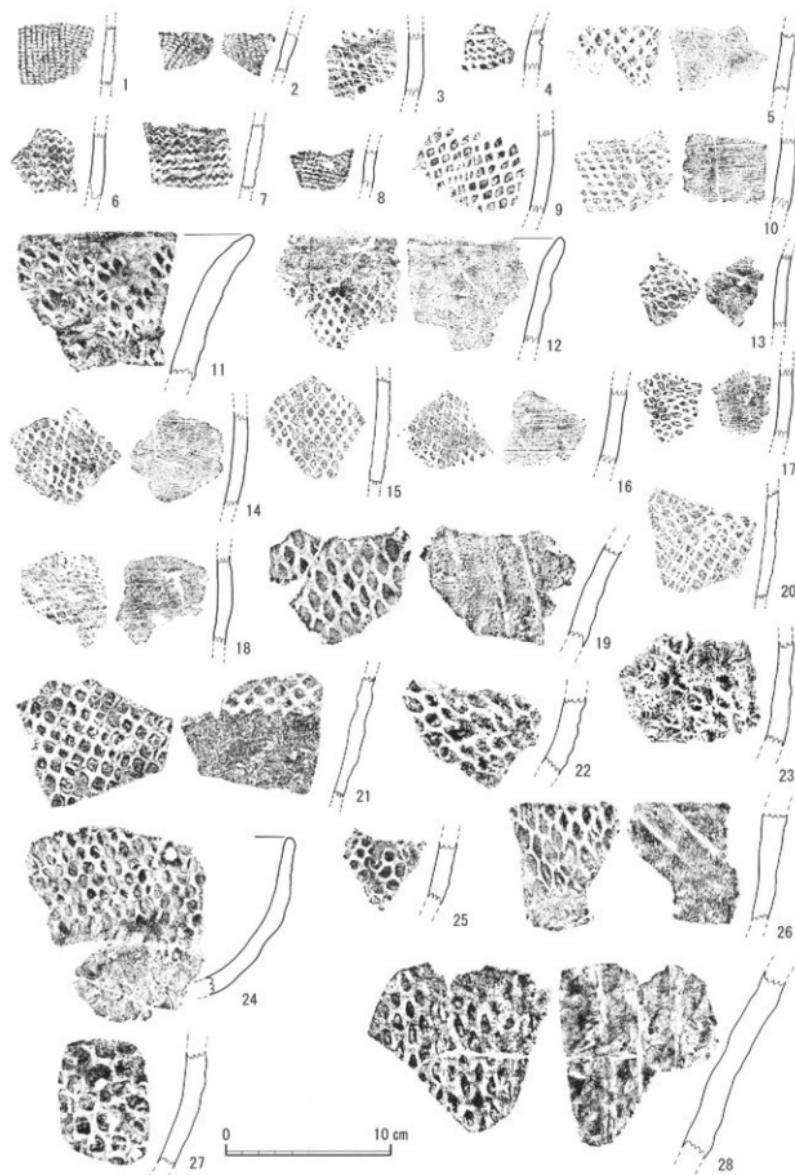


第4図 A・B区遺物出土状況 (S=1/100)

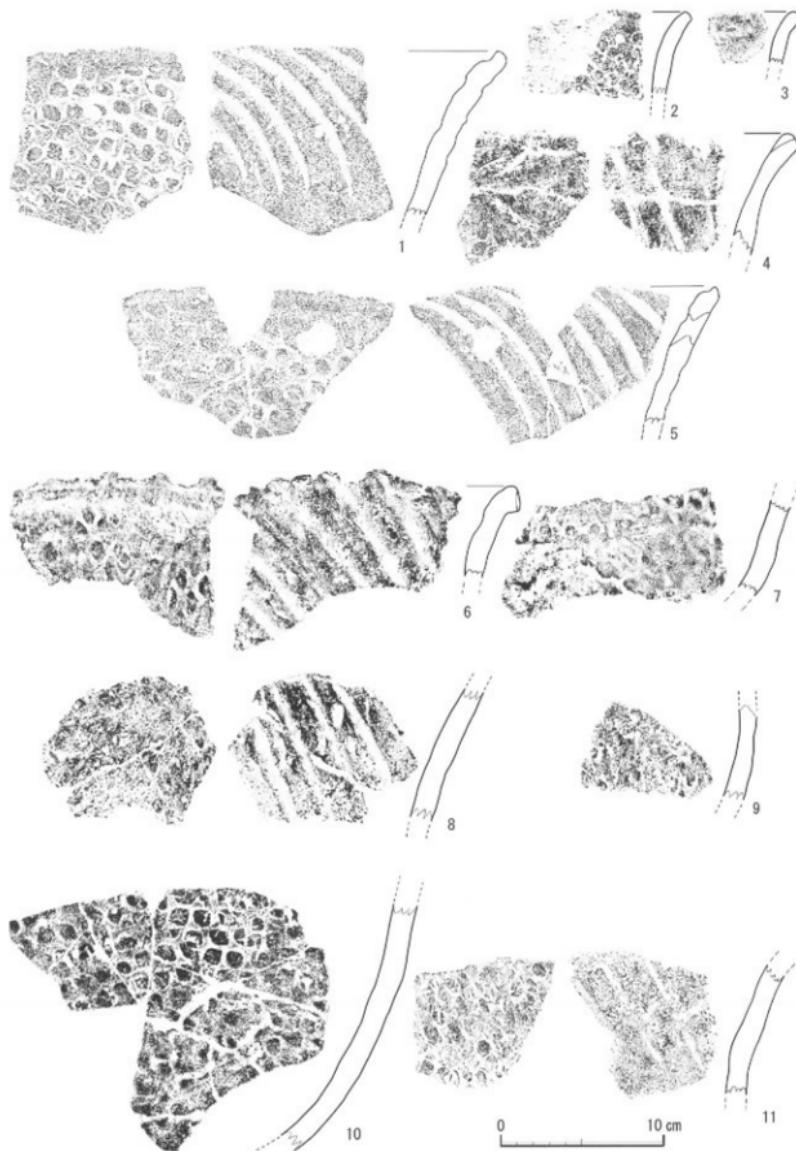
NST-1 西壁



第5図 A・B区土層堆積状況図(S=1/100)



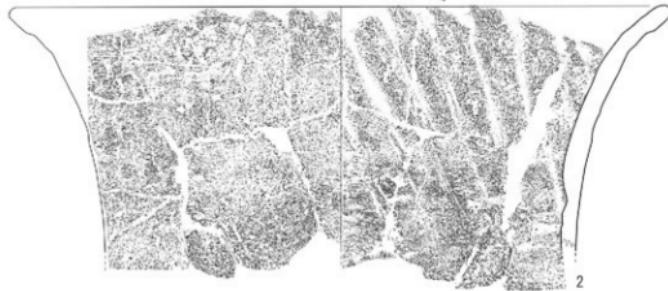
第6図 A・B区出土遺物（1）



第7図 A・B区出土遺物（2）



1



2

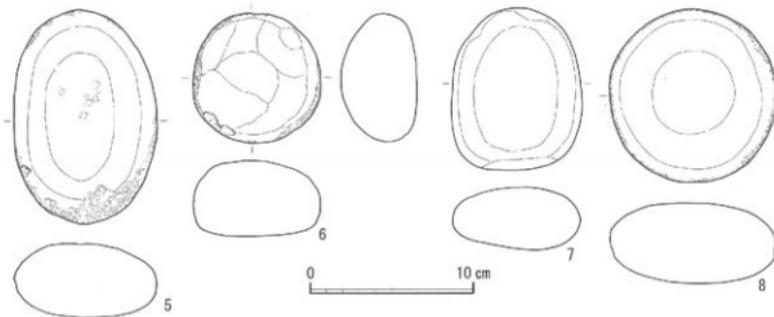


3



4

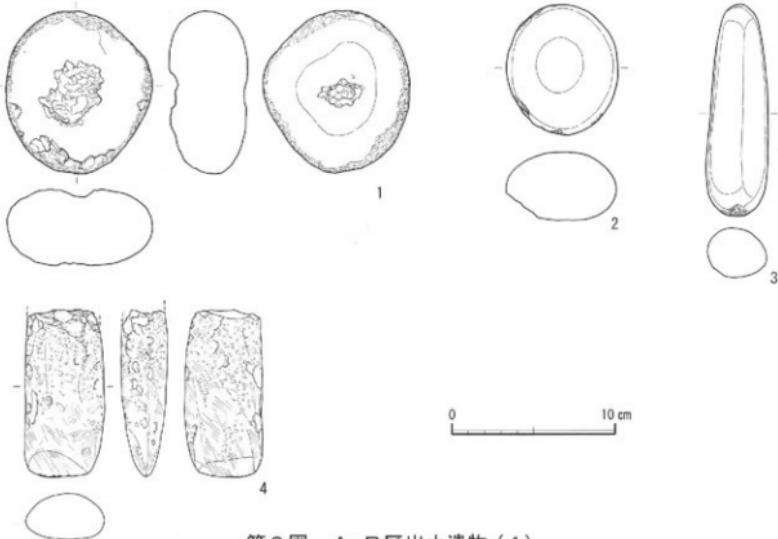
0 10 cm



5

0 10 cm

第8図 A・B区出土遺物（3）



第9図 A・B区出土遺物(4)

第1表 A・B区出土土器観察表

標印 番号	遺物 番号	断面 形状	記述・出土場所	器種	器 形	文 様	調 整	胎 土	備 考
第6回	1 20	IS区5層上層 Po21	深鉢?	直口橢形?	梯子状押型文。	内面ナデ。	砂粒少々含む。		
第6回	2 20	IS区5層 Po21		舌素に格子押型文。			砂粒あまり含まない		
第6回	3 20	IS区5層 Po14			粗円文 (0.8~0.9×0.4~0.5cm) 。斜位陥文。	内面条痕 (原体不明) ナデ。	石英、繊維含む。		
第6回	4 20	IS区5層上層 Po29		楕円文 (0.7×0.3~0.6cm) 、近似半円形。	内面条痕 (原体不明) ナデ。		砂粒少々含む。		
第6回	5 20	IS区5層上層 Po144		方形に近い楕円文 (0.9~1×0.9~1cm) 、一郭重ね。	垂直ナデ。		繊維含む。		
第6回	6 20	IS区5層上層 Po147		山円文 (透窓0.5cm、底窓0.3cm) 。傾位陥文。	内面ナデ。		白色砂粒含む。		
第6回	7 20	IS区5層上層 Po104		山円押型文。横位陥文。	内面ナデ。		白色砂粒含む。		
第6回	8 20	Po29		外面部格子押型文。	内面ナデ。		繊維少々含む。	砂粒少々含む。	
第6回	9 20	IS区5層上層 Po143		方形に近い山円文 (0.9~1×0.7~1.1cm) 。	内面ナデ。		石英多く含む。		
第6回	10 20	IS区5層上層 Po12		楕円押型文 (0.7×0.5cm) 。複数回重ね。	内面条痕。		繊維少々含む?	砂粒少々含む。	
第6回	11 20	IS区5層上層 Po102		楕円押型文 (楕円の大きさ1.1~1.2×0.5cm) 。	内面ナデ。		繊維少々含む。		
第6回	12 20	IS区5層 Po16		楕円凹跡の凸縁	山円押型文 (0.7~0.9×0.3~0.6cm) 。傾位陥文。	内面条痕 (透窓不明) 、外面部陥ナデ。		白色砂粒、繊維含む。	
第6回	13 20	NST-1 Po8			楕円押型文 (0.7~0.9×0.3~0.5cm) 。傾位陥文。	内面条痕 (原体不明) ナデ。		砂粒少々含む。	
第6回	14 20	BK区5層上層 Po25		楕円押型文 (0.8~0.9×0.5~0.6cm) 。	内面条痕。		繊維含む。	砂粒少々含む。	
第6回	15 20	NST-1東西斜溝区 5層	深鉢	直口橢形?	楕円押型文 (透窓に近い) 0.7~0.8×0.4~0.5cm 、外面部陥文。	内面条痕 (原体不明) 。	繊維少々含む。		
第6回	16 20	IS区5層			楕円押型文 (0.7~0.9×0.6cm) 。	内面条痕。	砂粒少々含む。	砂粒少々含む。	
第6回	17 20	NST-1 (東西斜溝区) 5層			楕円文 (0.6~0.9×0.4~0.5cm) 、板・斜位陥文。	内面条痕 (原体不明) ナデ。	西砂粒、繊維含む。		
第6回	18 20	IS区5層上層 Po23			楕円押型文 (0.7~0.8×0.6cm) 。	内面条痕ナデ。		繊維、砂粒少々含む。	
第6回	19 20	AS区5層上層 Po29			楕円押型文 (楕円の大きさ1.1~1.6×0.6~0.9cm) 。傾位陥文。	内面ナデ。		白色砂粒多く含む。	
第6回	20 20	IS区5層 Po10	深鉢	直口橢形?	楕円押型文 (透窓に近い) 0.8~1×0.7~0.8cm 、傾位・斜行陥文。	内面ナデ。	砂粒多く含む。		
第6回	21 20	IS区5層 Po117	深鉢	直口橢形?	外面部陥型押型文 (透窓に近い) 0.9×0.7cm 、外面部陥文。	内面ナデ。	繊維含む。		
第6回	22 20	NST-1 Po14 5層			楕円押型文 (内面の大きさ1.3~1.7×0.9cm) 。	内面ナデ。	白色砂粒多く含む。		

持回 番号	遺物 番号	図版	注記	出土地点	器種	石材	色調	文様	調査	治土	備考		
第6回	23	20	杭端区5層下～下 部Po153	杭端区5層下～下 部Po153	円錐形文 (1.1~1.7×1.2cm) 復数回複数。	褐色	茶色	円錐形文 (1.1~1.7×1.2cm) 復数回複数。	ナデ。	大粒の砂粒含む。			
第6回	24	20	A区底強区5層上 部Po133	浅い窓形？ 上部端面に複数の 可視性あり。	円錐形文 (窓内の大きさ0.9~1×0.4~ 0.8cm)。端部鋸歯。	褐色	茶色	円錐形文 (窓内の大きさ0.9~1×0.4~ 0.8cm)。端部鋸歯。	内面条痕+ナデ。	大小の白色砂粒多く 含む。	下部にスヌーブ。 縦溝孔 (焼成前跡 孔?)。		
第6回	25	20	底強区5層上層 Po75	外表面円錐形文 (一部ナデ消し)。				外表面円錐形文 (一部ナデ消し)。	内面条痕+ナデ。	褐砂粒含む。			
第6回	26	20	6層上面 Po35	円錐形文 (窓内の大きさ1.2~1.5×0.7 ~0.9cm)。端部丸太部は半球状。部位推 定。内面斜行沈縫。	褐色	茶色	円錐形文 (窓内の大きさ1.2~1.5×0.7 ~0.9cm)。端部丸太部は半球状。部位推 定。内面斜行沈縫。	ナデ。	下部は木栓ナデ消 し、内面ナデ。	褐色少量化。白色 砂粒多く含む。			
第6回	27	20	A区5層 Po11	円錐形文 (楕円内大きさ1.2~1.4×1cm)。 斜位推定。	褐色	茶色	円錐形文 (楕円内大きさ1.2~1.4×1cm)。 斜位推定。	ナデ。	楕円ナデでつぶれ る。内面ナデ。	楕円少量化。			
第6回	28	21	A区底強区5層上 部Po193	円錐形文 (窓内の大きさ1.2~1.5×0.7 ~0.9cm)。木栓頭部凹凸。端部鋸歯。	褐色	茶色	円錐形文 (窓内の大きさ1.2~1.5×0.7 ~0.9cm)。木栓頭部凹凸。端部鋸歯。	ナデ。	白砂粒。全表面多 く含む。				
第7回	1	21	A区底強区5層上 部Po74	口縁外反。	円錐形文 (1.3×1cm)。内面斜行沈縫 と斜面三角形。端部鋸歯。	褐色	茶色	円錐形文 (1.3×1cm)。内面斜行沈縫 と斜面三角形。端部鋸歬。	ナデ。	褐色含む。			
第7回	2	21	底強区5層上層 Po120	口縁外反。	円錐形文 (0.6~0.7×0.7cm)	褐色	茶色	円錐形文 (0.6~0.7×0.7cm)	内面条痕+ナデ。	砂粒少量化。			
第7回	3	21	底強区5層上層 Po144	口縁外反。	円錐形文ナデ消し。	褐色	茶色	円錐形文ナデ消し。	内外面ナデ。	微砂粒含む。			
第7回	4	21	底強区5層上層 Po107	口縁外反。	外表面円錐形文ナデ消し。口界から内 面に短沈縫。内面斜行沈縫。	褐色	茶色	外表面円錐形文ナデ消し。口界から内 面に短沈縫。内面斜行沈縫。	ナデ。	大粒の砂粒含む。			
第7回	5	21	A区5層上層 Po155	深鉢	口縁外反。	外表面円錐形文 (1.3~1.6×0.9~1cm)。 内面斜行沈縫と斜面三角形 端部鋸歬。	褐色	茶色	外表面円錐形文 (1.3~1.6×0.9~1cm)。 内面斜行沈縫と斜面三角形 端部鋸歬。	内面ナデ。	褐色含む。		
第7回	6	21	A区底強区5層 Po83・151	口縁外反。	円錐形文 (窓内に複数の 凹部)。	褐色	茶色	円錐形文 (窓内に複数の 凹部)。	内面ナデ。	褐色少量化。			
第7回	7	21	A区5層 Po23	底部に凹部、側 分。	円錐形文 (窓内に複数の 凹部)。	褐色	茶色	円錐形文 (窓内に大きさ0.8×1.1 cm)。斜行沈縫。	ナデ。	白色砂粒多く含む。			
第7回	8	22	底強区5層上層 Po124	口縁外反。	円錐形文 (0.1×0.6cm) 斜位施文。	褐色	茶色	円錐形文 (0.1×0.6cm) 斜位施文。	ナデ。	砂粒多く含む。			
第7回	9	22	底強区5～6層 Po158	口縁外反。	円錐形文 (0.9~1.2×0.6~0.8cm) +ナ ゼ。	褐色	茶色	円錐形文 (0.9~1.2×0.6~0.8cm) +ナ ゼ。	ナデ。	大粒の白色砂粒、薄 緑金粉含む。			
第7回	10	22	A区底強区5～6層 Po16	口縁外反。	粗大円錐形 (窓内の大きさ1.4×1cm×0.9 ×0.6cm)	褐色	茶色	粗大円錐形 (窓内の大きさ1.4×1cm×0.9 ×0.6cm)	内面ナデ。		外面上部は淡黄色 に変色。		
第7回	11	22	底強区5層上層 Po92	深鉢	口縁外反。口 界平滑。	外表面円錐形文 (1.3×0.9~1cm) 斜位施 (重複施文)。内面斜行沈縫。	褐色	茶色	外表面円錐形文 (1.3×0.9~1cm) 斜位施 (重複施文)。内面斜行沈縫。	内面ナデ。	大粒の砂粒多く含 む。		
第6回	1	22	A区底強区5層上 部Po53・64	深鉢	口縁外反。口 界平滑。	外表面円錐形文 (1.4~1.7×1~1.1cm) 内面斜行沈縫 (断面三角形) 端部鋸歬。	褐色	茶色	外表面円錐形文 (1.4~1.7×1~1.1cm) 内面斜行沈縫 (断面三角形) 端部鋸歬。	内面ナデ (円錐 形文ナデ消し)。	褐色少量化。		
第6回	2	23	A区底強区5層上 部Po64	深鉢	口縁外反。	外表面粗大円錐形ナデ消し。内面斜行 沈縫。	褐色	茶色	外表面粗大円錐形ナデ消し。内面斜行 沈縫。	内面ナデ。			
第6回	3	23	A区底強区5層上 部Po134	鉢	口縁外反。口 界斜行沈縫、斜 面鋸歬。	外錐形文ナデ消し+斜文。胸部的比字字形 模様。	褐色	茶色	外錐形文ナデ消し+斜文。胸部的比字字形 模様。	内面ナデ。	白色砂粒多く含 む。		
第6回	4	23	底強区4層 Po36	口縁やや肥 厚	口縁に沈縫。斜文。円錐形、円筒形 (原 体部)	河原石	灰色	河原石	内外面斜面柔度+ナ デ。	白色砂粒多く含 む。	内外面斜面柔度+ナ デ。		

第2表 A・B区出土石器観察表

持回 番号	遺物 番号	図版	注記	器種	石材	色調	高さ 長さ	幅 幅	厚さ 厚	重量 重	特徴
第6回	5	23	A区底強区5層上層 Po78	印石・磨石	河原石	灰色	13.2	6.7	4.6	752	研磨、側面に打痕。
第6回	6	23	A区底強区5～6層 Po157	印石・磨石	河原石	灰色	7.9	7.7	4.7	401	側面打痕。表面彫り痕。
第6回	7	23	A区底強区5層上層 Po73	磨石	河原石	灰色 (やや緑色)	9.9	7.9	3.9	489	研磨、側面に打痕。
第6回	8	23	A区底強区5～6層 Po118	印石・磨石	河原石	灰色	11.6	10.3	4.9	799	表面彫り痕 (平行)。側面打痕。
第9回	1	23	A区底強区5～6層 Po156	印石・磨石	河原石	灰色	10.0	9.8	4.7	592	表面中間に大きく凹む。(打痕)。側面打痕。表面彫り痕。
第9回	2	23	A区5層上層 Po28	印石・磨石	河原石	灰色	8.0	7.8	4.2	328	両端に打痕。表面平滑 (自然風の可能性あり)
第9回	3	23	A区底強区5層上層 Po131	印石	河原石	灰色	13.0	3.6	3.2	219	表面打痕。
第9回	4	23	A区底強区5層	磨石	安山岩	灰色	10.2	4.8	2.8	226	万能磨き研磨。他は超打痕。刃部に使用痕。

## 第2節 C区の調査 (第10～13図・図版7～11)

1. 上層の堆積状況と検出遺構 (第10・11図・図版7・8) トレンチN S T - 1以西、E W T - 3以北をC区とした。低位段丘の北西部に位置し、匹見川との比高差は約7mである。北西端では段差が約1mあり、上位水田との境界となっていた。N S T - 1では、中位段丘との境に河道の痕跡が確認されたが (2-1～2-5層)、遺物が出土しなかったことから、人間活動が行われる前に形成された河道と判断した。調査区中央では旧河道の河岸線が検出され、これより西も旧河道 (S R 3) と考えられた。

包含層 (第11図3～5層) は調査区東半分にあり、北西から南西方向に緩く傾斜して堆積していた。北西部が薄く、南西に向かうにしたがって厚くなり、S R 3まで続いている。ここでは、遺物の出土地点を細かく把握するため、2mグリッドを組んでグリッドごとに取り上げた。3～5

層を除去した段階で竪穴住居1とこの北側に接して石圓炉1を検出した。包含層、竪穴住居1とともに縄文後期の時期だが、両者の前後関係は調査時点では確認できなかった。なお、石圓炉1以外にも炉跡、集石遺構が存在した可能性もあるが、ここでは大小の河床礫が多く出土し、自然物と遺構との判別は困難であった。

S R 3は調査区西半にあり、河岸線は調査区中央部で東岸線が南北に検出された。西側の河岸線は検出できなかったが、おおむね現在の能登川に併行した流路である。調査時にはF区のS R 1とS R 1が合流していると考えたが、持ち帰った写真や図からC区からF区にかけてS R 3が存在すると推測された。主な理由は、S R 1、S R 2とともに西北端が不明瞭であること、F区西端が一様に凹むこと、EWT-3土層でS R 1を切って落ち込みがみられること（第11図2・図版8）、などである。C区西半とF区西端部では同様の河床礫が広がることから、両者は同一の河道と考えられる。土層の堆積状況や、S R 3の推定河岸線以西からは縄文土器が出土していないことから、S R 3はS R 1、S R 2を削りこんで形成されたと推定される。S R 3の堆積土層は、北端では黒色上が厚く堆積し、C区南端では下部に暗茶灰色土、その上に黄茶色砂質土が堆積していた。遺物が出土しなかったため形成時期は不明であるが、縄文時代後期以降と考えられる。

2. 竪穴住居1（第12・13図・図版9～11） C区中央のやや北寄りに位置している。包含層除去後、落ち込みがみられたため、竪穴住居跡と判断し調査を進めた。平面形は略方形で、南北約5.2m、東西約4.9mを測る。

土層は、大部分は暗茶灰色土（1層）が堆積しており、3層上面が床面と思われる。3層上面では、石圓炉の周囲で被熱した層（2層）が約2.6×1.7m以上の範囲で確認された。

底面には、柱穴と思われるピットが3個検出された。柱間は約1.8mとほぼ等間隔である。西南隅の柱穴は検出できなかったが、P 1～P 3は主柱穴の可能性がある。

石圓炉（第13図1・図版11）は、70cm×70cm程度の方形の土坑内に設置されていた。底面に平坦な礫を1個敷き、側面に大きな礫を5個以上、立て掛けで作られている。

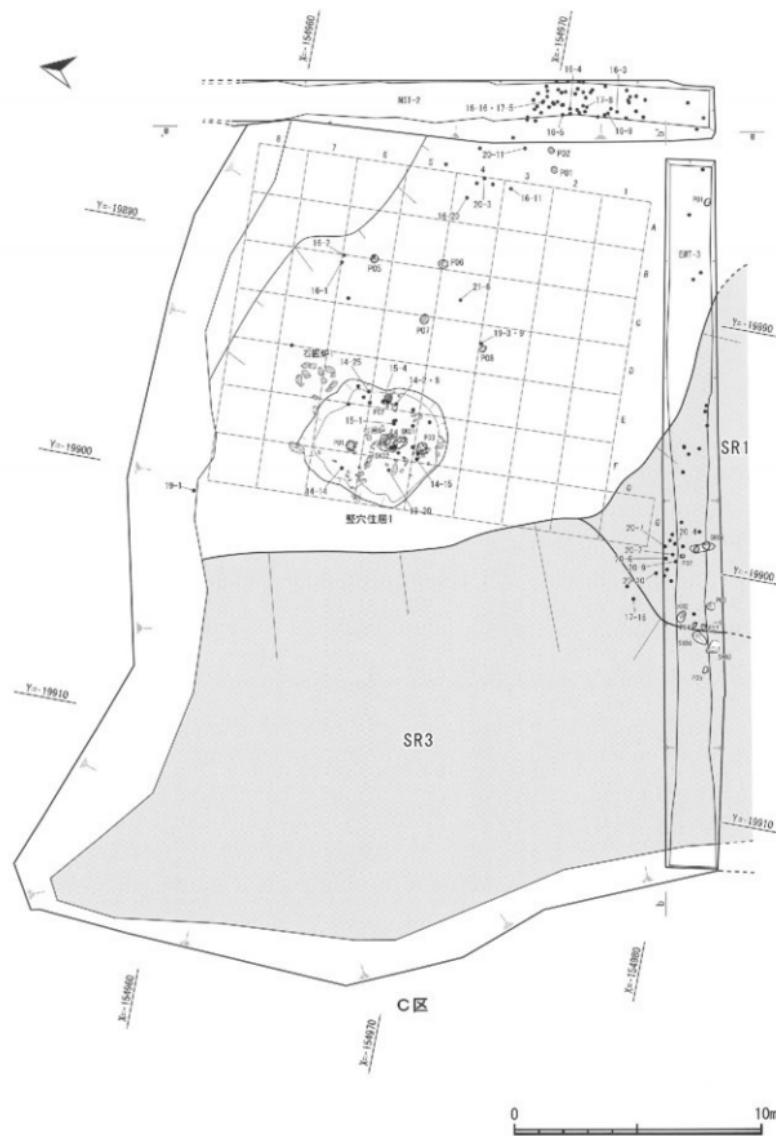
床面では石圓炉と、それと重複して上坑（SKO 1）が検出された。長軸約60cm、短軸約35cmを測る楕円形の上坑である。人頭大の円碟が南半に集積していたが、人為的な集積か混入かは判断できなかった。また、平板な礫が北端に建てられた状態で出土したが、これは位置的に石圓炉の一部と考えられる。発掘時には土坑の平面プランが先に検出できたが、北端部の立石が石圓炉の一部と考えられたことから、SKO 1は石圓炉より先行するものと考えられる。SKO 1が竪穴住居1内に設置された土坑か、偶然重複したものかは判断できなかった。

竪穴住居1出土遺物（第14・15図・図版24） 出土遺物は、住居跡内から分散して出土し、平面分布、垂直分布とも、とくに集中する箇所はなかった。

第14図1・2は中津式である。1はR L縄文による磨消縄文、2は沈線のみで意匠が描かれている。ともに正面に透かし孔がある。2の口唇部には短沈線状の刻み目文が施されている。

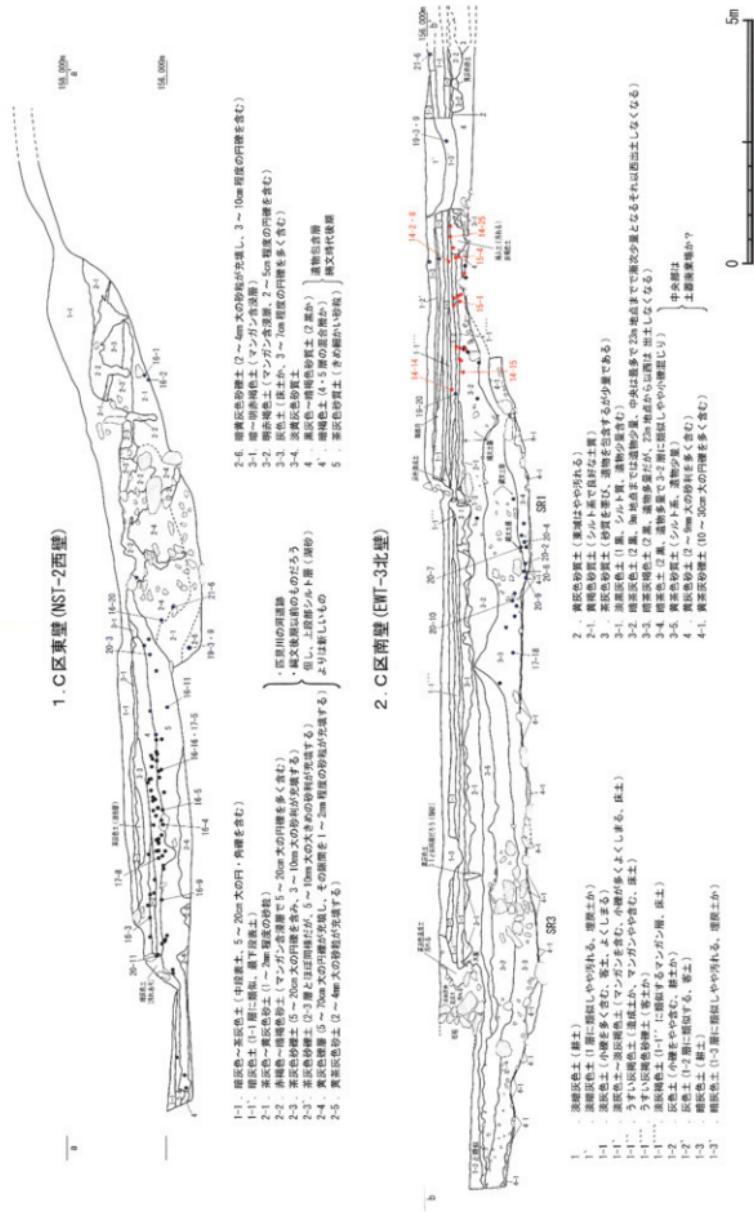
3～7は小池原上層式と思われる。4以外は磨消縄文で、口縁波頂部に刺突文が付加されている。3・5は頸部が長く、やや古いかもしれない。

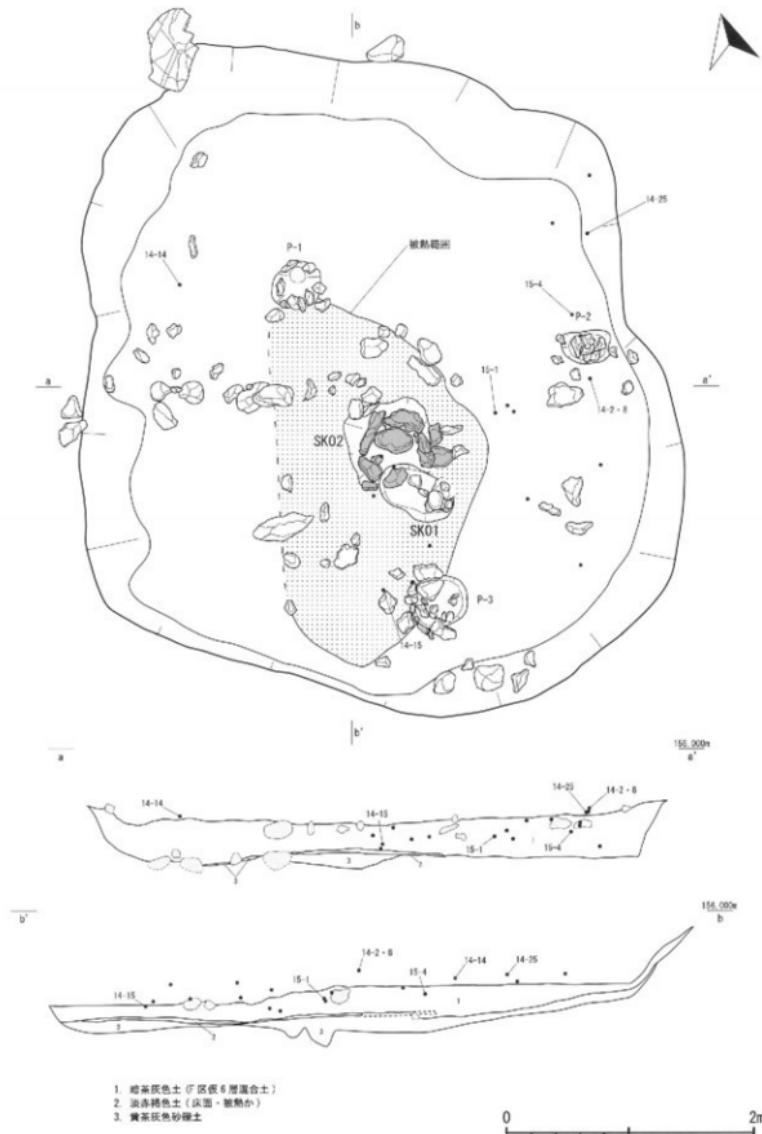
8～14は、西半式または太郎迫式と、それに近い時期の土器である。14は平行沈線文と垂下する蛇行文が描かれている。11は口縁部に不連続な逆弧文が描かれており、右町式かもしれない。8・12・13は、中部瀬戸内の彦崎K1式か四元式に近いと思われる。8は胴部全面にR L縄文が施され、12は口縁部に沿って沈線文が描かれている。13は内面に刺突文列を配した鉢形の土器である。



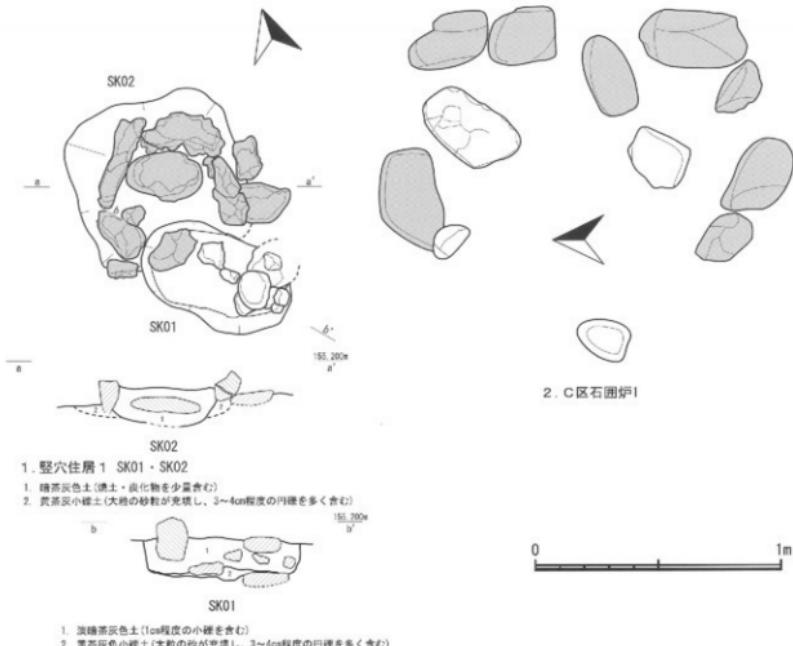
第10図 C区遺構・遺物検出状況図 (S=1/200)

第11図 C区土層堆積状況(S=1/100)





第12図 C区竪穴住居1(S=1/40)



第13図 C区竪穴住居1 SK01・SK02(石囲炉)・石囲炉1 (S=1/20)

16～18は粗製無文土器の胸部片である。16～17は内外面に巻貝条痕が、18には二枚貝条痕がみられる。

第14図19は姫島産黒曜石の剥片である。

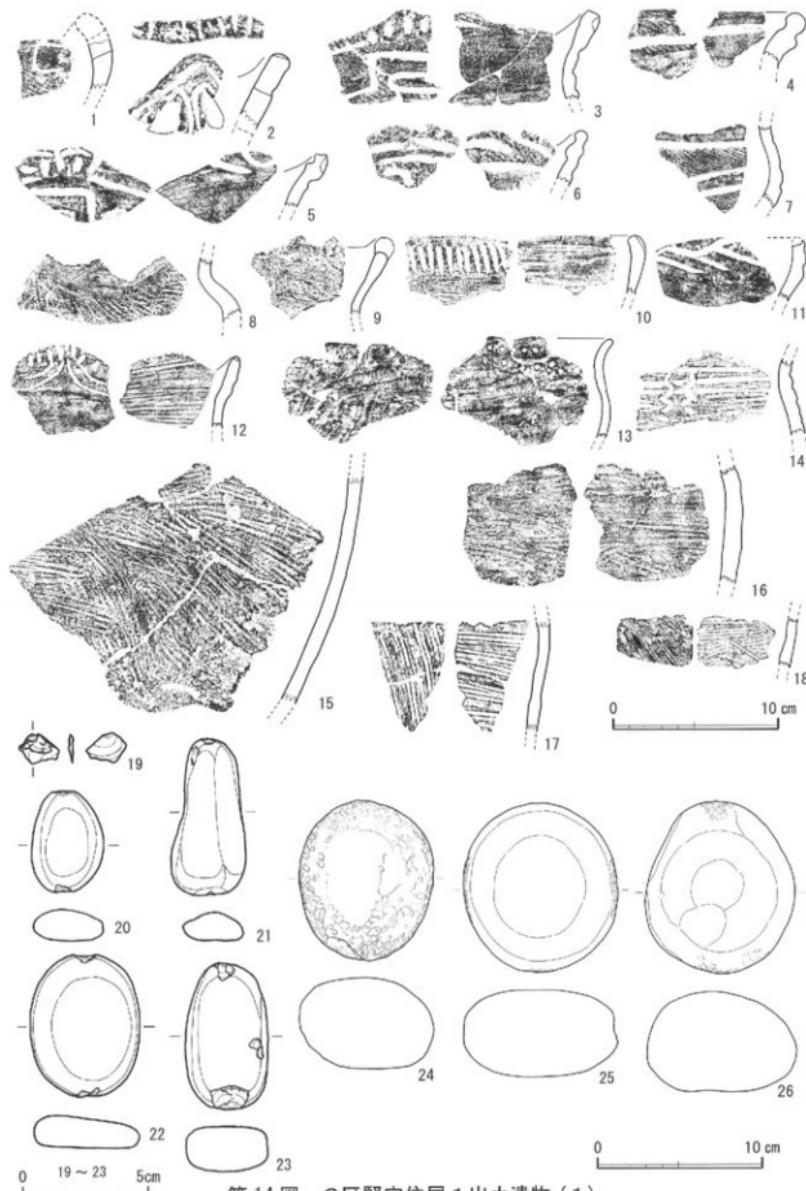
第14図20～23は石錘で、両端の加工は20・23が敲打、21が切目、22が打欠きによる。

第14図24～第15図3は磨石・叩石である。第15図2は使用痕がみられず、自然礫の可能性がある。第14図24～第15図1は端部と表面に、第15図3は両端部に打痕・擦り痕がみられる。

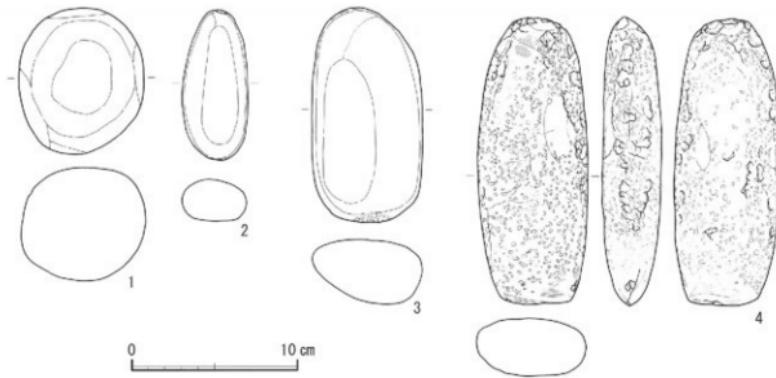
第15図4は磨製石斧である。刃部周辺に研磨痕、その他の部位に敲打痕がみられる。刃部にはわずかに使用痕が観察できる。

3. 石囲炉1（第13図2・図版11～6）竪穴住居1の北端に接して検出された。石囲炉1周辺の堆積土は、包含層（第11図4・5層）と同色・同質で、包含層発掘後に石の配列が確認された。地山面に掘り込みが確認されなかつたため、ここに住居跡があったかどうか不明である。炉跡の石は、20～40cm大の円礫または河床礫9個で構成され、平面形は楕円形または略長方形に並んでいる。各石は、ほぼ同じ高さに並んでいた。南側の石は欠落しているが、長軸約160cm、短軸約100cmの炉跡である。内部に2個の石があるが、これらは炉を構成する石より高い位置で検出されているので、石囲炉1とは直接関係ないと考えられる。

炉内から遺物が出土していないので詳細な時期は不明だが、周辺の包含層が繩文時代後期と判断



第14図 C区竪穴住居1出土遺物(1)



第15図 C区竪穴住居1出土土器 (2)

第3表 C区竪穴住居1出土土器観察表

番号	遺物 番号	回復 状態	沣配 出土地点	基 礫	基 礫	基 礫	文 種	調 査	治 土	備 考
第14回	1 24	S混合土	泥狀?	口縁内済。	泥狀文 (RL)。正面に円形窓か?。	内外面丁寧なナデ。	大粒の白色砂粒含む。			
第14回	2 24	Po1	泥狀?	波状口縁。口唇平坦。	口縁波状。正面に横円窓?。 透かし、文字文。	内外面ナデ。	白色砂、玄母等微妙粒多く含む。			
第14回	3 24	S混合土		口縁波状外反。波状口縁。	口縁波状外反。正面に横窓か?字状の章。口唇波状。	外表面ナデ。内外面具象痕アザ。	白色砂粒多く含む。			
第14回	4 24	S混合土			外正面波状文 (RL)。正面に横窓アザ。	外表面ナデ。内外面具象痕アザ。	白色砂粒、表面多く含む。外曲ス付裏。			
第14回	5 24	S混合土		口縁波状外反。口縁やや肥厚。透波状口縁。	口縁波状外反。透波状口縁。透波状文 (RL)。透波状孔を透り見る。	内外面具象痕+ナデ。	白色砂粒、雪母又は滑石の微細含む。			
第14回	6 24	S混合土		波状口縁。	透波状口縁。	内外面ナデ。	白色砂粒多く含む。			
第14回	7 24	S混合土		側面内済。	磨擦面文 (RL)。	外表面ナデ。内外面具象痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。			
第14回	8 24	Po1	跡	断面櫛状。	断面櫛状。	外表面ナデ。内外面具象痕+ナデ。	白色砂粒含む。			
第14回	9 24			透波状基底。口縁に山形突起。	透波状基底。口縁に山形突起。	外表面具象痕+ナデ。	大粒の白色砂粒含む。		内面にIm1の柄子丘頂。複数あり?	
第14回	10 24			口縁内済。	口縁内済。	外表面具象痕+ナデ。	外表面具象痕+ナデ。			
第14回	11 24	S混合土		口縁内済。	透行文 (透底文) +波状文。	外表面ナデ。内外面具象痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。			
第14回	12 24	S混合土		口縁内済。	透波状口縁。	透波状口縁。	白色砂粒、雪母含む。			
第14回	13 24	S混合土		口縁波状外反。	内外面具象痕 (參見斜面透波状文)。	内外面具象痕+ナデ。	大粒の白色砂粒含む。			
第14回	14 24	Po1		断面櫛状基底。	3条の平行透波文+2条の透行基底透波文。	外表面具象痕+ナデ。内面ナデ。	砂粒 (白色砂粒・金雲母) 多く含む。			
第14回	15 24	Po1~6 混合				外表面具象痕、内面ナデ。				
第14回	16 24	S混合土		側面内済。		内面基底は柔軟+ナデ。	白色砂粒多く含む。			
第14回	17 24	S混合土				内面基底柔軟。	白色砂粒多く含む。			
第14回	18 24	S混合土				内外面具象痕+ナデ。	白色砂粒含む。			

第4表 C区竪穴住居1出土石器観察表

番号	遺物 番号	回復 状態	注 記	基 礫	石材	色 調	法 量 (cm) 高さ 幅 厚さ (g)	手 感	特 徴
第14回	19 24	埴土内 5層真合土	鉢片	透明白色石	乳白色	1.2 1.6 0.3			
第14回	20 24	埴土内 5層真合土	敲打石器	河原石	从有	4.1 2.9 1.3 27		透明白色。	
第14回	21 24	C埋土内	切削石器	河原石	透明白色	6.4 3.1 1.2 37		一面は削出し、一面は打き。	
第14回	22 24	埴土内 5層真合土	打き石器	河原石	透明白色	5.9 4.3 1.3 54		透明白色单面 (使用面)。	
第14回	23 24	C埋土内	敲打石器	河原石	透明白色	6.0 3.3 1.9 58		一面は削り、一面は打き。	
第14回	24 24	C埋土内	中石・擦石	河原石	透明白色、孔多い	9.9 8.1 5.8 625		透明白色。一面削り出し、一部切削?	
第14回	25 24	A Po10	中石・擦石	河原石	透明白色	10.3 9.5 5.3 881		透明白色。背面に擦り面。	
第14回	26 24	D埋土内	[中石]・擦石	河原石	透明白色	10.7 9.0 6.1 801		透明白色。一面に打痕・擦り面。	
第14回	1 24	Po13	磨石	河原石	透明白色	9.0 7.5 7.0 690		全表面リ獲?	
第14回	2 24	D埋土内	[中石]	河原石	透明白色	9.2 3.9 2.6 143		一端に打痕? 自然縫の再生成性あり。	
第14回	3 24	C埋土内	中石・擦石	河原石	やや緑色、孔多い	13.3 6.7 3.9 563		背面に打痕・擦り面。	
第14回	4 24	茶灰色混合 Po19	磨装石器	安山岩 A	灰色	17.7 6.6 3.7 680		全部磨刃面。他は打痕。わずかに研磨。刃間に使毛溝。	

安山岩 Aは第5章2節参照

されることから、石臼炉1もこの時期と考えてよい。ただし、包含層の堆積前に設置されたのか、あるいは堆積後に包含層を掘りこんで設置されたのかは不明である。また、竪穴住居1と隣接しているが、これとの前後関係も確認できなかった。

#### 4. C区出土遺物（第16図～第21図・図版25～30）

押型文土器（第16図1～3） いずれも橢円押型文で、1は黄島式、2・3は高山寺式である。3の内面には斜行沈線文が施される。A・B区からの流入と考えられる。

後期初頭土器（第16図4～第18図6・16・17） 第16図5は滑石混入土器である。内面に巻貝条痕が残る無文土器で、阿高式の可能性がある。

第16図4・6～20は中津式である。磨消繩文の土器（6～10・13・15～20）と、沈線のみで意匠を描くもの（11・12・14）がある。11・12は貝殻条痕がみられ、粗雑な感がある。14は太い沈線文が描かれる比較的丁寧な作りの上器で、中津式ではないかもしれない。

深鉢（6～12・19）は頸部が緩くびれるもの（10・11など）のほか、直口器形のもの（12）がある。19は波頂部にW字状の短沈線が施されている。浅鉢（13～17・20）はボウル形の器形が目立ち、13にはテーブル状の、20には富士山状の突起がつく。また、20の突起直下にはコブ状の突起2個がつけられている。18は双耳壺で、耳部分に上下方向に孔があり、前面には円形の透かしがみられる。繩文の原体はRLが7点（6など）、LRが3点（13・15・20）、巻貝疑似繩文が1点（16）である。

第17図1～4は、宿毛式である。幅の狭い橢円形区画文を持つものを宿毛式とした。いずれも口縁部が短く、頸部が緩く屈曲する。4は円錐形の突起がつき、4方に透かしが設けられている。

第17図5～21は福田K2式に併行する土器で、沈線文端部が不連続な磨消繩文土器（5～15）と、内面に段を有する浅鉢（16・17）、および口縁が屈曲する浅鉢（18～21）がある。5～8は五明田式に、9・10は福田K2式の口縁部によく似た土器である。11～13・18～21は松ノ木式にもみられる器形の浅鉢で、一部が成立期縁帯文期に下る可能性もある。16～21の口縁部または肩部には、刻み目文が施されている。ここで掲載した刻み目文は、巻貝殻頂部を沈線状に引いたもので、工具を刺した刻み目文はみられない。

第17図22～24・第18図1～6・16・17は屋敷式である。屋敷式は、福田K2式から成立期縁帯文にまたがると思われるが、便宜上ここで扱う。口縁部が肥厚し、肥厚部に刺突文が施される。第18図2は口縁部の屈曲が顯著だが、その他は口縁部が肥厚してそのまま頸部につながる器形である。屋敷式は外面に肥厚するものとされるが、第18図16・17は内面も肥厚させている。全体形状から、これも屋敷式と判断した。肥厚部の刻み目状の文様は、巻貝殻頂部による刺突文（第17図22・24 第18図6）、同短沈線（第18図2）、巻貝側面の押圧文（第17図23・第18図1・3～5）などがある。第18図3・5・6は、口唇部にも巻貝側縁圧痕が施されている。

後期前葉土器（第18図7～15・18～23・第19図1～12・14・20） 第18図7～15・18～23・第19図1・10・11は成立期縁帯文と考えた。第18図23は松ノ木式の意匠を描く土器、第19図1は布勢式に似た渦巻き状突起である。第18図20・21・第19図10・11は口縁部が肥厚する上面施文の土器で、1～2条の沈線文が描かれる。その他は口唇部や口頸部に沈線文が描かれる土器である。これらは型式未設定の一群で、時期幅がある可能性がある。本州西端部に分布する在地の型式かもしれない。布勢式などの他地域の成立期縁帯文に比べ、口縁部の拡張が弱いという特徴がある。文様が頸部に展開しているもの（第18図7～12・14・18）や、突起部直下に前面から透かし孔が穿たれるもの（同9・11・13・18・19・第19図1）がある。

第19図2～9・12・19は、小池原上層式である。口縁部にS字状の沈線文（2・6）、胴部に渦巻き状（8）または鉤状（7）の意匠が描かれる。9・12は突起部以外に文様が施されないが、形状が似ていることからここに分類した。19は縄文地に全面短沈線が施される土器で、九州地方では小池原上層式に伴うらしい。

第19図14・20は、津雲A式に併行する上器か。14は口縁部が肥厚する、長方形区画文などを津雲A式に似た要素と考えた。20は全縄文の胴部片で、瀬戸内東部の縁帶文に伴う深鉢と思われる。

後期中葉上器 第19図13・15～18・21・22は、鎌崎式に後続し西平式より古相を示すと思われる。石町式（北久根山第二型式）に相当するかもしれない。13・16・18は卷貝疑似縄文、15はRL縄文が施される。17は頸部に卷貝殻頂部による刺突文、21は口縁部と頸部に卷貝側縁圧痕文、22は口縁部に二枚貝刺突文が施されている。

後期無文土器（第20図1～7） 粗製無文土器（1～5・7）と精製無文土器（6）がある。前者には、さらに口縁部が外反し頸部が緩くくびれるもの（1・3）と、内湾するものの（2・4・5）がある。1～3・5の口縁部には刻み目文が施される。1は卷貝側縁圧痕、2は二枚貝刺突、3・5は卷貝殻頂部による短沈線である。4は口唇部が薄く作られ、他より新しいと思われる。7は胴部片で、内外面に卷貝条痕が施される。6は精製無文土器で、口縁部は肥厚する。内外面ミガキ調整である。

注口上器（第20図8） 基部に凹線状のくぼみがあるが、文様かどうかは不明である。

土器底部（第20図9～11） いずれも高台状の底部である。9・10は深鉢または鉢、11は浅鉢の底部である。

石錘（第20図12～第21図2） いずれも河原石の両端を加工したもので、切目石錘（第20図15・19・22・23）、打欠石錘（第20図13・20・21・第21図1・2）、端部を敲打して純掛け部を作る敲打石錘（第20図12・14・16～18）がある。敲打石錘は、一端が敲打、一端が打欠きのものも含めた（同12・17・18）。打欠き石錘の変異と思われる。

第20図13・17～22・第21図2には純掛け部に磨滅が確認でき、使用痕と思われる。

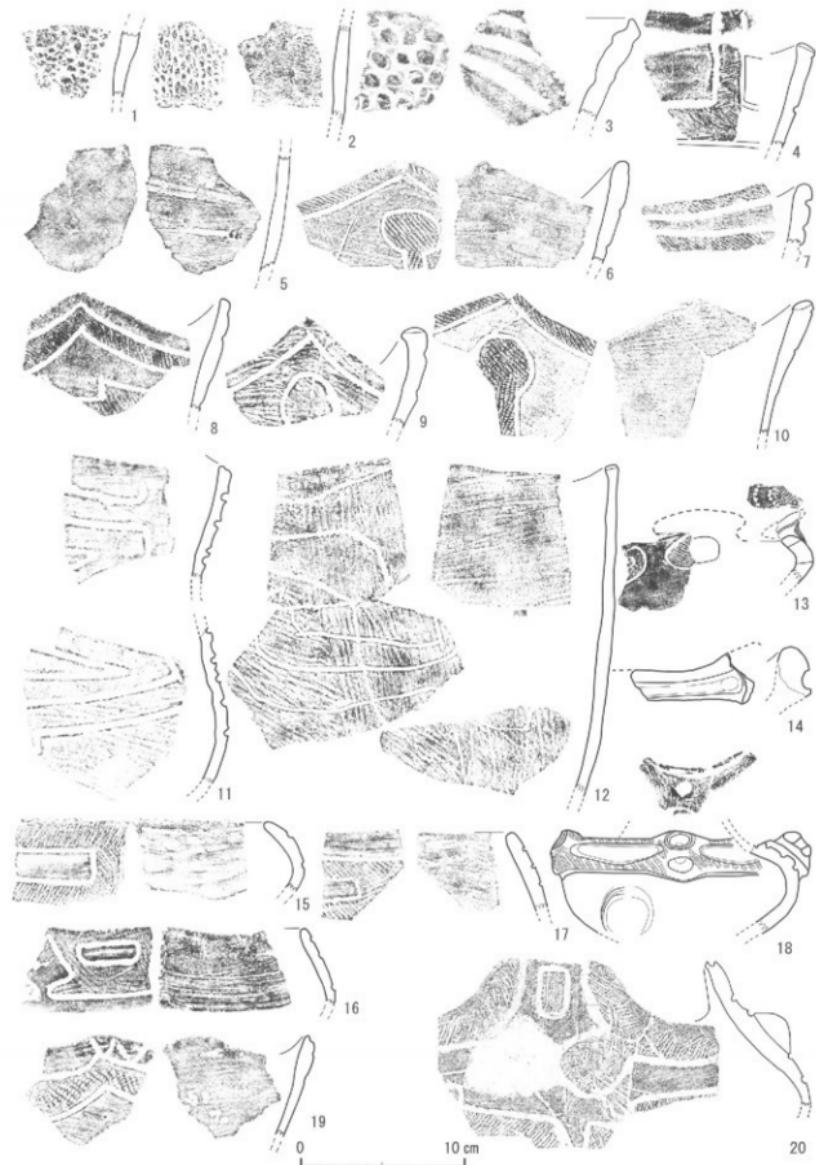
二次加工のある刺片（第21図3） サヌカイト製で、刃部片面から調整剥離が施されている。

磨石・叩石（第21図4・5） ともに河原石を利用している。4は径3.8cmを測り、磨石・叩石としては小型である。一面に平坦面がみられる。5は一端に打痕がみられる。

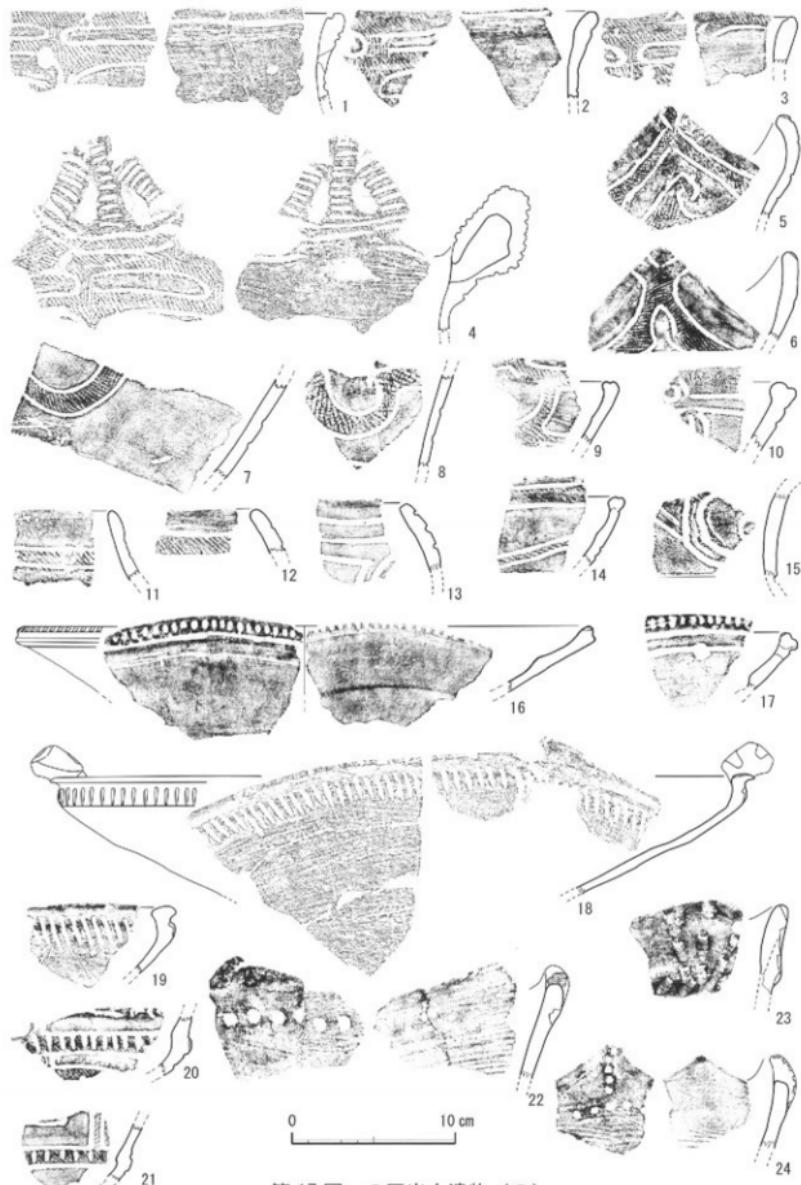
磨製石斧（第21図6～7） 表面に打痕を残し、刃部がていねいに研磨されている。6の刃部は斜行しており、刃部が再生された可能性がある。

磨製石斧軒用の打製石斧（第21図8～11） 欠損した磨製石斧を打製石斧に転用したものである。8は両面に敲打痕がみられ、刃部のみが再生されている。9・10は側面に剥離がみられるが、これは磨製石斧整形時の剥離と考えられ、8同様、刃部のみ再生されたと考えられる。図右面の大きな剥離面も磨製石斧製作当初の主要剥離面と思われる。なお、9には一部に縫合面が残されている。11は全体に薄く、欠損した剥片を利用したと考えられる。図右面は欠損時にできた主要剥離面と思われる。図左面は敲打痕と刃部再生のための剥離がみられる。

打製石斧（第21図12） 図左面に縫合面を大きく残す。剥離は、左面では縁辺のみにみられるが、図右面では全面に剥離が及んでいる。



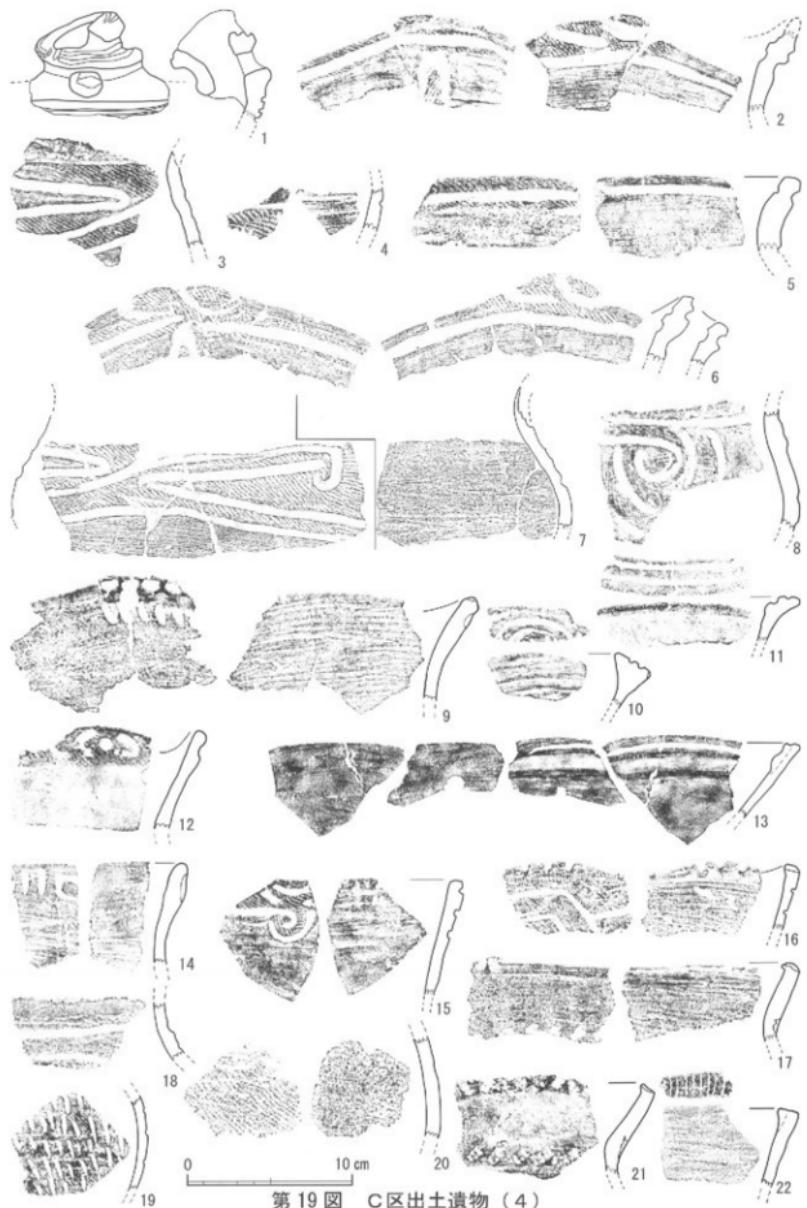
第16図 C区出土遺物(1)



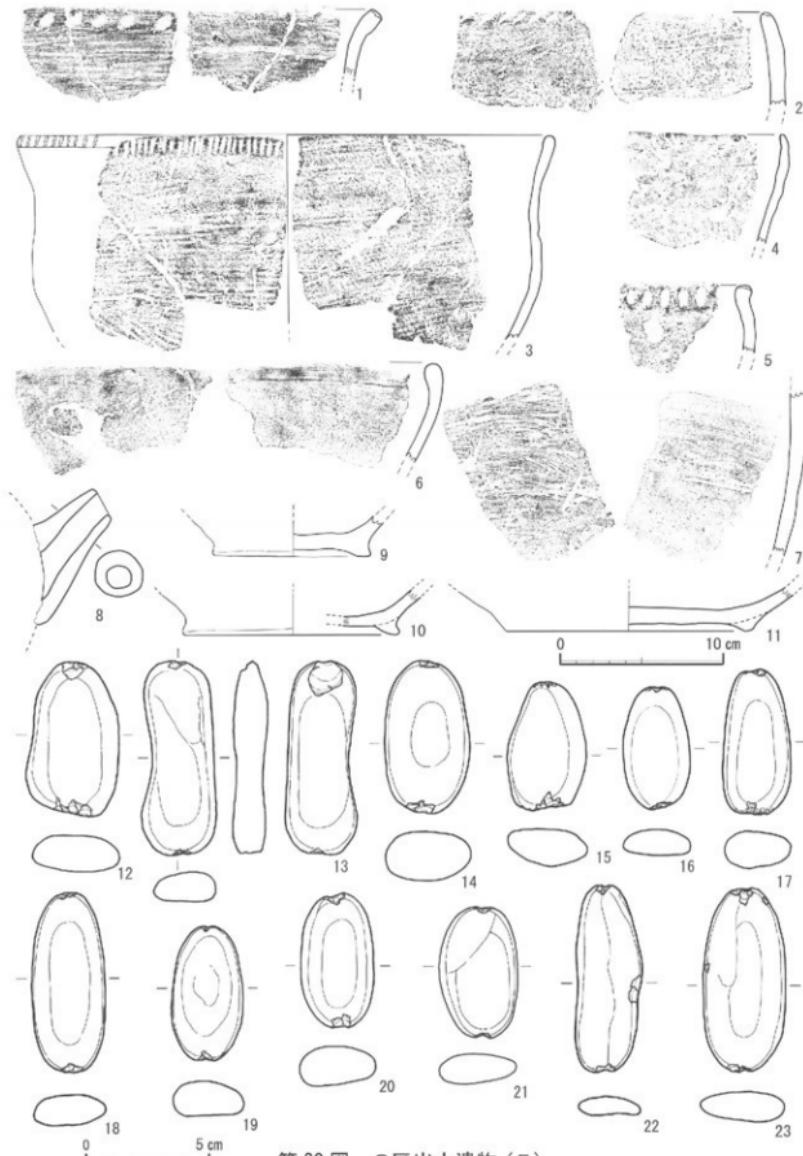
第17図 C区出土遺物（2）



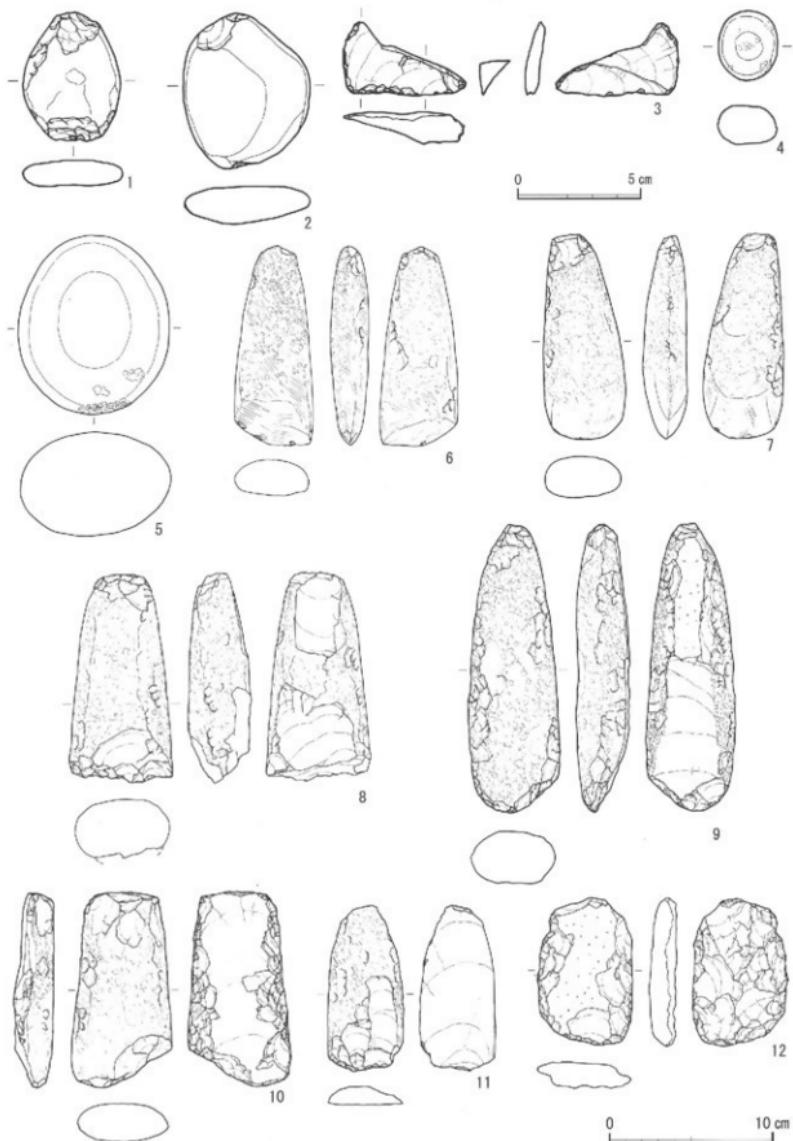
第18図 C区出土遺物（3）



第19図 C区出土遺物(4)



第20図 C区出土遺物(5)



第21図 C区出土遺物(6)

第5表 C区出土土器観察表

探査番号	層位番号	回復番号	記記出土点	器種	器形	文様	質	胎土	備考	
第16回	1	25	C6 4層 Po27			格子押型文(約0.6×0.4cm)。模倣施文。	内面条痕(原体不明)。	麻織、白色砂粒含む。		
第16回	2	25	C6 4層 Po26			横三文(0.6~0.8×0.6cm)。模倣施文。	内面条痕(原体不明)；ナデ。	麻織含む。		
第16回	3	25	NST-2 Po6			横円押型文(横円の大きさ1.1~1.4×0.5×1.2cm)。斜行文？ 内西斜行。模倣(模範印が工具？)。	内面ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第16回	4	25	NST-2 6層 Po51	深鉢	縦波状口縁。口唇平坦。	高海波文(同)。部非常に細かい。	外面若貝条痕+ナデ。内面ミガキ。	白色砂粒含む。		
第16回	5	25	NST-2 6層 Po50			波状口縁。	高海波文(同)。波頂部に粗波文。	内面ナデ。内面若貝条痕。	泥石混入。	
第16回	6	25	G8 3~4層	深鉢	波状口縁。	高海波文(同)。波底文後に細波文。	内面若貝条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。	第16回~10回同様の可能性。	
第16回	7	25	C5 3~4層上面		波状口縁。	高海波文(同)。波底文後に細波文。	外面ナデ。内面若貝条痕+ナデ。	石英、黄雲母入り。		
第16回	8	25	NST-2 6層 深鉢		波状口縁。口唇平。	高海波文(同)。	外面若貝条痕+ナデ。内面ナデ。	白色砂粒多く含む。金雲母含む。		
第16回	9	25	NST-2 6層 Po55	深鉢	家紋地。口唇平。	外面波文。波頂部に延波文。	外面若貝条痕+ナデ。内面若貝条痕。	大粒の砂粒含む。	第16回~10回同様の可能性。	
第16回	10	25	D7 3層	浅鉢	波状口縁。口唇平。	高海波文(同)。波頂部口唇に短波文。	内面若貝条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。	第16回~10回同様の可能性。	
第16回	11	25	4層 Po10	深鉢	口唇外反。頭部やぐり。頭部深鉢。横波状口縁。	内面荒筋(粗目)。菱形縞の荒筋(粗目)。	外面二枚貝条痕。内面条痕(登目)；ナデ。	下端は鋸口縁。		
第16回	12	25	C6 4層	深鉢	口唇外反。口唇平。	J字貫孔(跡跡尖るが一筆書き)。	内面若貝条痕。	白色砂粒多く含む。		
第16回	13	25	C6 4層	浅鉢	口唇内凹。テープ	唐海波文(同)。突起上に波状内側突。突起下に芦形透かし。	内面ミガキ。	白色砂粒。金雲母含む。		
第16回	14	25	B北側面4層		肥厚した口縁。	凹彎。太い波文。	ミガキ。	白色砂粒含む。		
第16回	15	25	NST-2 C区間ベルト上層	浅鉢	口縁波状(器内)。	唐海波文(同)。波文施文後に波文。	内面ミガキ。内面若貝条痕+ナデ。	鋸切刃削みに粘土含む。		
第16回	16	25	NST-2 Po47 6層	浅鉢	口縁波状。	唐海波文(同)。波底部に半字状の短波文。	内面ミガキ。内面若貝条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第16回	17	25	F6 3層	浅鉢	口縁内傾。	唐海波文(同)。充填。	内面ミガキ。内面若貝条痕+ナデ。	白色砂粒含む。		
第16回	18	25	EWT-3中央 5層 下段	双耳壺	玉ねぎ状の網目。	点钟の要消海波文(同)。把手に2方角柱状の突起。下部円筒形の厚皮(器内壁取り除き)。	外面部ミガキ。内面若貝条痕+ナデ。内面ナデ。	第16回~10回同一個体の可能性。		
第16回	19	25	NST-2 C区間ベルト上層	深鉢	波状口縁。	唐海波文(同)。波底部に半字状の短波文。	内面若貝条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第16回	20	25	NST-2 C区間ベルト4層 Po9	深鉢	7	山形口縁。2山の	唐海波文(同)。	内面ミガキ。	白色砂粒多く含む。	
第17回	1	26	E8 9~3層	鉢	口唇傾きや把紐。	唐海波文(同)。充填。	外面部ナデ。内面若貝条痕+ナデ。	大粒の砂粒含む。	明修作。第17回~14回同一個体の可能性。	
第17回	2	26	F7 3~4層		口唇傾きや外反。やや肥厚。内に有。	唐海波文(同)。方形区画文。円形透かし。	内面若貝条痕+ナデ。	大粒の白色砂粒多く含む。	第17回~14回同一個体の可能性。	
第17回	3	26	E7 3~4層		口唇傾きや外反。やや肥厚。内に有。	唐海波文(同)。方形区画文。	内面ナデ。	白色砂粒含む。	第17回~14回同一個体の可能性。	
第17回	4	26	F6 3層		円錐状突起。	突起部に4方の三角形波溝なし。體積短縮。唐海波文(同)。易州城區盤旋。	外面部ナデ。内面若貝条痕+ナデ。	白色砂粒含む。	第17回~14回同一個体の可能性。	
第17回	5	26	NST-2 Po47 6層	深鉢	口唇傾きや外反。	唐海波文(同)。波文施文後に波文。	外面部ミガキ。	大粒の白色砂粒含む。	第17回~14回同一個体の可能性。	
第17回	6	26	C7 4層	浅鉢	波状口縁。	唐海波文(同)。	内面ミガキ。	白色砂粒含む。	第17回~14回同一個体の可能性。	
第17回	7	26	C6 4層	浅鉢		唐海波文(同)。	外面部ミガキ。内面若貝条痕+ナデ。	白色砂粒。金雲母含む。	第17回~14回同一個体の可能性。	
第17回	8	26	NST-2 Po37 6層	浅鉢	外反する外反。	唐海波文(同)。易州城區盤旋。	内面ミガキ。	白色砂粒含む。	第17回~14回同一個体の可能性。	
第17回	9	26	R6 3~4層上面	波鉢	口唇傾きや外反。	内口唇上に外反唐海波文(同)。外面部に直線状の刻み目。	内面若貝条痕+ナデ。内面ミガキ。	白色砂粒含む。	第17回~14回同一個体の可能性。	
第17回	10	26	F8 4層	浅鉢	内口肥厚。	2本単位の洗練文。	内面ナデ。	砂粒少含む。		
第17回	11	26	NST-2 C区間ベルト4層(暗緑)鉢	鉢	口唇傾く直立。	唐海波文(同)。施文後縁に縞文。	内面ナデ。内面若貝条痕+ナデ。ミガキ。	白色砂粒含む。		
第17回	12	26	F8~F9~G8~G9 4層			唐海波文(同)。施文後縁に洗練文。	外面部ミガキ。内面条痕+ナデ。	白色砂粒。微粒含む。	第17回~14回同一個体の可能性。	
第17回	13	26	E8 3層	浅鉢	ボウル形の器形。	輪郭に円形文。	外面部ミガキ。内面ナデ。	大粒の白色砂粒。青褐色砂粒含む。		
第17回	14	26	C6 4層	浅鉢	口唇肥厚。内に有。	唐海波文(同)。	内面ミガキ+ナデ。	白色砂粒含む。	第17回~14回同一個体の可能性。	
第17回	15	26	E8 4層		口唇肥厚。器内に有。	2本単位の外反文。円形・渦巻き+斜行の外反。	内面ナデ。	砂粒少含む。		
第17回	16	26	C7 4層	浅鉢	内口唇上に口唇や肥厚。	口唇上に波溝上に波文。口唇内に直線状の刻み目。	内面ミガキ。	白色砂粒多く含む。		
第17回	17	26	F8 3層	浅鉢	口唇肥厚。	口唇1条の外反。再疊文状の刻み目。	内面ミガキ。	白色砂粒多く含む。	複修孔あり。	
第17回	18	26	EWT 3 C区間ベルト4層下段 Po32	浅鉢	口唇肥厚。口唇平。	突起部若貝条痕波文(同)。左側に直線状の刻み目。	内面若貝条痕+ナデ。内面ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第17回	19	26	G~H0 4層下層	浅鉢	口唇肥厚。口唇肥厚。	突起部若貝条痕波文(同)。左側に直線状の刻み目。	内面若貝条痕+ミガキ。	石英含む。		
第17回	20	26	E6 3~4層	浅鉢	口唇肥厚。内に有。	唐海波文(同)。底部内側に直線状の刻み目。	内面ミガキ。	白色砂粒含む。		
第17回	21	26	D7 4層	浅鉢	波状口縁。	唐海波文(同)。施文後縁に刻み目。	内面ミガキ。	白色砂粒含む。		

周回 番号	通路 番号	回数	江部 出土先地	基 礎	種 類	施 用	文 様	調 査	地 土	備 考
第17回	22	26	E6 3~4層	深鉢	柱地	柱地に加筆。山、 虎頭部に象鼻頭刺印。対応的刺印 に象鼻頭。三回輪文。	内外面具各面+ナデ。	白砂利多く含む。	日向砂利多く含む。	
第17回	23	26	D7 3層	深鉢	口縁肥厚、底、波 状口沿。	口縁肥厚。底、波 状口沿。	内面ナデ。	白色砂利多く含む。		
第17回	24	26	D7 3層	深鉢	口縫肥厚、底、山 形突起。	口縫肥厚。底、山 形突起。	口縫内外面ナデ。道面内外面 具各面。	内面ナデ。	白色砂利多く含む。	
第18回	1	26	D6 3層	深鉢	口縫肥厚、底、波 状口沿。	口縫肥厚、底、波 状口沿。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	2	26	A4 3~4層上面	深鉢	口縫肥厚、底、 突起。	口縫肥厚、底、 突起。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	3	26	E7 3~4層上面	深鉢	口縫肥厚、底、 突起。	口縫肥厚、底、 突起。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	4	26	D7 4層	深鉢	口縫肥厚、底、 突起。	口縫肥厚、底、 突起。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	5	26	D7 4層	深鉢	口縫肥厚に施墨。 突起。	口縫肥厚に施墨。 突起。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	6	26	C7 4層	深鉢	口縫部外方に 冠毛、 口縫半周切削。	口縫部外方に 冠毛、 口縫半周切削。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	7	27	EWT-3 GO-H0 4層下層	口縫	口縫わずかに 施墨。	口縫わずかに 施墨。	内外面具各面+ナデ。	砂利(多)、 金屬物含む。	砂利(多)、 金屬物含む。	第18回3~5は同 期の可能性。
第18回	8	27	F6 3層	深鉢	口縫や底部、波 状口沿。	口縫や底部、波 状口沿。	内外面具各面+ナデ。波状部口沿に 施墨輪状目詰文。	内外面具各面+ナデ。内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	9	27	D7 3~4層	深鉢	突起。	突起。	内外面具各面。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	10	27	D7 3~4層上面	深鉢	波状口沿、 口縫肥厚。	波状口沿、 口縫肥厚。	内外面具各面。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	11	27	D6G 3~4層 上面	深鉢	波状口沿。	波状口沿。	多層文(文)。突起上部に透かし、口唇部 波状大波状文(文)。(波状に施墨)。	内面ナデ。	内面ミガキ。	内面ナデ。
第18回	12	27	F7 3~4層	深鉢	口縫部底厚、正 方形が集った三角形の 突起。	口縫部底厚、正 方形が集った三角形の 突起。	内外面具各面。	内外面具各面+ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	13	27	B4 3~4層上面	深鉢	波状口沿。	波状口沿。	口唇部(文)、波状文、波状部に 施墨輪状文。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	14	27	E7 3~4層	深鉢	法輪文(長方)と周回文(文)	法輪文(長方)と周回文(文)	内外面具各面+ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	15	27	E7 3~4層	奥底	(1/2周回)	側邊部に小さな刺印。側邊に丸い浅溝。	全面ナデ	白色砂利多く含む。	白色砂利多く含む。	
第18回	22	27	北壁中央3層	深鉢	施墨の突起。	口唇、突起に施墨輪状目詰文(二枚 重ね)。	内外面具各面+ナデ。	白色砂利多く含 む。	白色砂利多く含 む。	
第18回	17	27	B4 3~4層上面	深鉢	波状口沿、内外面 具各面。	波状口沿、内外面具各面。	内外面具各面+ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	18	27	F7 3~4層	縦	口縫肥厚、縫隙部 に冠毛。	口縫肥厚、縫隙部 に冠毛。	口唇部(文)、波状文、直線文、 直線部に大きな円孔。万字形文。円孔内外、 縫隙部に円孔。	内外面具各面+ナデ。	金屬物、石炭多く 含む。	内面ナデ。
第18回	19	27	D5 3~4層上面	奥底	突起、 口縫肥厚、 内外面接縫にくぼ む。	突起、 口縫肥厚、 内外面接縫にくぼ む。	口唇部(文)、 卷貝輪状文、三葉形 文と頂部に透かし。	内面ミガキ、内面ナデ。	白色砂利、 骨粉等含む。	内面ミガキ、 白色砂利。
第18回	20	27	C7 4層	口縫底	口縫底。	口縫底。	上面文(文)、直線文、 直線部に透かし。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	21	27	B6 3~4層上面	口縫底	口縫底。	口縫底。	口縫底(2枚重ね)、直線文(文)。	内外面具各面+ナデ。	白色砂利多く含 む。	白色砂利多く含 む。
第18回	22	27	E8 3層	深鉢	口縫底。	口縫底。	口唇部(文)、 卷貝輪状文、(波状)突起?。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第18回	23	27	E7 3層	縦	口縫底。	口縫底。	口縫底。	内面ナデ。	内面ナデ。	内面ナデ。
第19回	1	27	H9 Po13	縦	横断(2段)、 上部は斜面、 突起は2段で、貫入する模様。 (波状)突起。	横断(2段)、 上部は斜面、 突起は2段で、貫入する模様。 (波状)突起。	内面ナデ。	内面ナデ。	白色砂利含む。	
第19回	2	27	D4 4層	縦	口縫底、 波状口沿、 波状輪状文。	口縫底、 波状口沿、 波状輪状文。	内回巻具各面+ナデ、内面ミ ガキ。	内面ナデ。	内面ナデ。	
第19回	3	27	C4 4層 Po15	縦	脛足内溝、 掌状輪 手の握り跡、 手の握り跡、 立体輪狀片。	脣足内溝、 掌状輪 手の握り跡、 手の握り跡、 立体輪狀片。	内面ナデ。	内面ナデ。	白色砂利、空氣 等教砂含む。	白色砂利、空氣 等教砂含む。
第19回	4	27	F6 3層	縦	頭部周回曲。	頭部周回曲。	頭部内面と頭部下壁に丸い浅溝(原 文)に施墨輪状文(RL)。	内面ナデ。	白色砂利多く含 む。	白色砂利多く含 む。
第19回	5	27	C6 4層	縦	口縫肥厚。	口縫肥厚。	口縫内面と頭部下壁に丸い浅溝(原 文)に施墨輪状文(RL)。	内面ナデ。	白色砂利、空氣 等教砂含む。	白色砂利、空氣 等教砂含む。
第19回	6	27	D4 4層	縦	口縫肥厚。	口縫肥厚。	頭部内面と頭部下壁に丸い浅溝(原 文)に施墨輪状文(RL)。	内面ナデ。	白色砂利多く含 む。	白色砂利多く含 む。
第19回	7	28	D4 4層	縦	頭部周回。	頭部周回。	頭部内面と頭部下壁に丸い浅溝(原 文)に施墨輪状文(RL)。	内面ナデ。	白色砂利。	白色砂利多く含 む。
第19回	8	28	F5 3層	縦	頭部周回。	頭部周回。	頭部内面と頭部下壁に丸い浅溝(原 文)に施墨輪状文(RL)。	内面ナデ。	白色砂利多く含 む。	白色砂利多く含 む。
第19回	9	28	C4 4層 Po15	深鉢	口縫外反。	口縫外反。	頭部、 腰下近底部(脣部記載?)。	内面ナデ。	白色砂利多く含 む。	白色砂利多く含 む。
第19回	10	28	F7 3~4層上面	深鉢	口縫外反。	口縫外反。	口縫外反。	内面ナデ。	白色砂利多く含 む。	白色砂利多く含 む。
第19回	11	28	D5 3~4層上面	縦	口縫底。	口縫底。	上面文(文)、波状文(文)。	内面ナデ。	白色砂利多く含 む。	白色砂利多く含 む。
第19回	12	28	63層	深鉢	半円形の突起、 口縫底。	半円形の突起、 口縫底。	上面文(文)、波状文(文)。	内面ナデ。	白色砂利多く含 む。	白色砂利多く含 む。
第19回	13	28	C6 4層	深鉢	口縫内面。	口縫内面。	口縫内面。	内面ナデ。	白色砂利。	白色砂利。
第19回	14	28	EWT-3 中央 ~E7 4層	縦	口縫外反、 やや斜 度。	口縫外反、 やや斜 度。	口縫外反、 やや斜 度。	内面ナデ。	白色砂利多く含 む。	白色砂利多く含 む。
第19回	15	28	EWT-3 4層下層	縦	口唇。	口唇。	波状文(RL)、V字、二字(眞体表 現)。	内面ナデ。	白色砂利。	白色砂利。
第19回	16	28	EB 3層	深鉢	口唇。	口唇。	波状文(RL)、V字、二字(眞体表 現)。	内面ナデ。	白色砂利。	白色砂利。
第19回	17	28	EB 3層	深鉢	頭部周回。	頭部周回。	口唇一部に当り周回周厚、頭部に透かし 頭部部を斜位に刺印。	内面ナデ。	白色砂利多く含 む。	白色砂利多く含 む。

件目 番号	遺物 番号	図版	注記 出土地点	器種	器形	文様	測定	備考
第19回	18	26	D7.4層	打製石斧	直刃種く頭曲面。 底面彫文（卷貝底似彫文）。彫刻横文。 底面後に横彫文。	内側溝ミガキ（ミガキ幅3~4mm）。	大粒の古色紅鉄 合む。	
第19回	19	28	C7.4層	剥離内芯	彫文（風）・短次彫。	外側溝ミガキ。	白砂多く含む。	
第19回	20	28	G5.4層P014 (SK1内?)	鉢	縁出し鉢	外側溝具底溝有ナデ。	石墨多く含む。骨 条纹+ナデ。	
第19回	21	28	D7.3層	深鉢	口縁厚、平折底。 口唇や把手、平 底等、剥離状跡み目文（二段舞 サル ホウタイアフ）。	内側溝具底溝ナデ。	白砂多く含む。金 雲母少含む。	
第20回	1	28	F6.3層	浅鉢	口外反。	内側溝具底溝。	大粒の白色砂粒 合む。	
第20回	2	28	EWT-3 HO-4 層下部 P022	深鉢	口唇に二枚貝による刺突状跡み目文。	外傷ナデ。内側溝具底溝ナデ。	砂粒多く含む。	
第20回	3	28	NST-2 4層	深鉢	口縁厚、研磨面。 外反。脚部内 凹。	口唇底沈鉢状刻み目文（苔原縞跡 部）。	内側溝二枚貝底溝。	白色砂粒含む。
第20回	4	28	EWT-3 HO-4 層下部 P024	深鉢	口唇厚。	内側溝ナデ。	外側溝ナデ。内側 溝底凹部鋸歯。	研磨孔・锯歯削痕 片含む。
第20回	5	28	G+HO 4層下部	深鉢	内溝する唇形。	口唇部既沈鉢状の底み目（底体要 質？）。	内側溝ナデ。	砂粒多く含む。
第20回	6	28	EWT-3 HO-4 層下部 P021	深鉢	口唇厚。	内側溝三方キ。	砂粒・全變色母 片含む。	
第20回	7	29	FWT-3 HO-4 層下部 P023	深鉢	外反。	外傷溝具底溝、内側溝具底 溝ナデ。	砂粒多く含む。	
第20回	8	29	A3 3~4層上部	刀口	进出口基部に刮擦状のくぼみ。	外側三方キ。	白色砂粒含む。基部剝離孔。	
第20回	9	29	EWT-3 HO-4 層下部 P031	面部	底台状の面部。	内側溝底ナデ。	砂粒少含む。底厚9.3cm。	
第20回	10	29	EWT-3 HO-4 層下部 P017	面部	両台状の面部。	内側溝底（底体不規ナデ）。	大粒の砂粒含む。底厚13cm。	
第20回	11	29	C8 NST-2 + C8 開ペレト4層P03	底台状	底台状の面部。	全周丁寧なミガキ。	白色砂粒多く含む。底厚15cm。	

第6表 C区出土石器観察表

件目 番号	遺物 番号	図版	注記	器種	石材	色調	法 長 (cm)	重量 (g)	特 徴
第20回	12	29	中段3~4層	敲打石錐	河原石	灰黑色	6.3 3.6 1.7	58	一端は敲打、一端は打欠き。
第20回	13	29	D4.4層	敲打石錐	河原石	灰黑色	8.0 3.0 1.4	57	機関車底面風（使用痕）。
第20回	14	29	EWT-3 GO-4層下	敲打石錐	河原石	灰白色	6.3 2.4 2.0	63	刃端打欠。
第20回	15	29	EWT-3 GO-4層下	切打石錐	河原石	褐灰色	5.2 3.2 1.5	37	一端打欠き。
第20回	16	29	F5 3層	切打石錐	河原石	茶灰色	5.0 2.7 1.0	24	敲打後残溝。
第20回	17	29	C5 4層	敲打石錐	河原石	灰黑色	5.9 2.7 1.4	36	一端4打欠。
第20回	18	29	C7 4層	敲打石錐	河原石	灰黑色	7.4 3.0 1.2	42	26打欠き。
第20回	19	29	GO-HO 4層下	切打石錐	河原石	灰黑色	5.5 2.9 1.4	34	複数打欠痕（使用痕）。
第20回	20	29	E7 4層	敲打石錐	河原石	灰黑色	5.5 3.1 1.6	39	複数打欠痕（使用痕）。被熱？
第20回	21	29	NST-2 + C8開ベルト4層	敲打石錐	河原石	灰黑色	5.3 3.1 1.3	33	刃端打欠き（海藻）。
第20回	22	29	C5 4層	自立石錐	河原石	褐灰色	7.7 2.7 1.1	31	複数打欠痕（使用痕）。
第20回	23	29	C5 4層	自立石錐	河原石	暗褐色	7.5 3.4 1.3	51	敲打、刃端打欠痕。
第21回	1	29	F5 3層	敲打石錐	河原石	多色、輪文縞	5.3 4.0 1.1	33	刃端打欠。
第21回	2	29	E5 4層	敲打石錐	河原石	灰黑色	6.4 5.1 1.5	67	複数打欠痕（使用痕）。
第21回	3	29	NST-2 + C8開ベルト	二次加工工具	サヌカイト	褐灰色	1.9 4.9 1.0	10	刃部に済磨痕。左側に擦痕。
第21回	4	29	EWT-3 GO 4層下	磨石	安山岩	灰黑色	3.8 2.4 1.6	13	一面に平凹面。
第21回	5	30	G7 3~4層	磨石	安山岩	灰褐色	11.0 9.2 6.4	929	被熱。
第21回	6	30	C4 P01	剥離石斧	安山岩	灰黑色	12.2 4.8 2.3	198	表面、侧面に打痕、研磨痕。刃部削痕痕、側 面削痕。
第21回	7	30	F7 3層	剥離石斧	安山岩	灰黑色	12.6 4.9 2.7	243	刃部研磨、刃に凹凸状の使用痕。他は打痕。
第21回	8	30	東半部4層下	打製石斧	安山岩	灰黑色	12.7 6.3 3.7	436	刃部磨削石斧の範用。刃部以外は打痕。使 用なし。
第21回	9	30	C8 4層	打製石斧	安山岩	灰黑色	17.7 5.5 3.3	457	欠損剥離石斧の範用。刃部若干被熱。
第21回	10	30	EWT-3 中央~東街5層	打製石斧	安山岩	灰褐色	12.0 6.2 2.4	254	刃部磨削石斧の範用。刃部に使用痕。刃部表 面は、一面3打痕、一面は大きな剝離。
第21回	11	30	3層	打製石斧	中安山岩	灰黑色	10.2 4.6 1.2	78	剥離石斧の範用。一面に斜打痕。刃側面に刃部 剥離。
第21回	12	30	EWT-3 5層	打製石斧	半安山岩C	白色	9.1 5.8 1.5	108	刃部・側面に使用痕。一面は大きく表面残存。

安山岩A・B・Cは、第5章2節参照。以上中村唯氏の鑑定による。

### 第3節 F区の調査

1. 上層と遺構検出状況（第22図～23図・図版12～15）C区の南側をF区とした。この調査区では、北西から南東方向の旧河道2条（S R 1・2）と、南北方向の旧河道1条（S R 3）が検出された。河道の配置をみると、当初東南方向に流れていた能登川が、次第に西に向きを変えて現在に至る様子がうかがえる。出土遺物は、S R 1出土土器が後期前葉主体、S R 2が後期中葉主体と、S R 2がやや新しい様相を示している。一方、第2節で述べたとおり、S R 1とS R 2を切ってS R 3が形成されたと考えられる。遺物の状況などから、S R 1→S R 2→S R 3の順で形成されたと推定される。

S R 1・S R 2とともに、発掘調査は遺物が出土しなくなった面で止めている。調査終了時の面では、河道側面と両河道に挟まれた部分に礫が集中し、河床には暗黄色砂質土が堆積した状態であった。礫群は、広い範囲で堆積していると思われ、これを削りこんでS R 1・S R 2が形成したと推測される。暗黄色砂質土は河床に堆積した土壌で、さらにその後に遺物包含層が堆積したと考えられる。

S R 1は、長さ約30m、幅約20m、深さ約1m、S R 2は長さ約15m、幅約15m、深さ約0.6mの規模で検出された。S R 1の下部には暗茶灰色土（第23-1図7～8層 図版13）が堆積し、これが遺物包含層であった。その上には黄灰色砂土（同図5層）がレンズ状に堆積しており、氾濫と堆積を繰り返しながら河岸段丘を形成したと考えられる。

出土遺物は、S R 1では東西ベルト付近の東岸面で多く出土した（図版13・14）。S R 2は、河床底付近で多く出土し、出土地点は南に偏っている。なお、F区では突帯文土器が出土しているが、これはS R 2付近で表土掘削時に出土したものが多い印象がある。

#### 2. S R 1出土遺物（第24図～第36図・図版30～37・46・47）

後期初頭土器（第24図1～26・第25図11～19）第24図1は滑石混入土器である。内外面ナデ調整の無文部分で、阿高式の可能性がある。

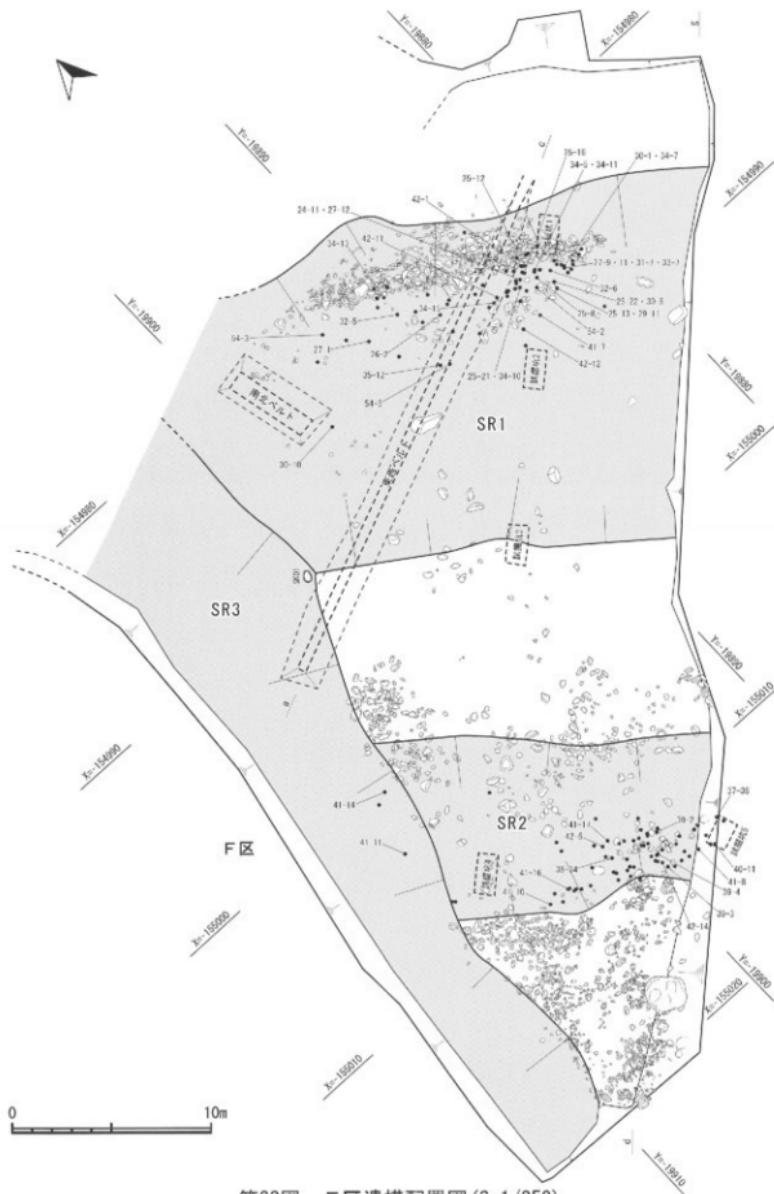
2～10は中津式である。磨消繩文で意匠を描くが、4は繩文が充填されていない。また、6の沈線文は下端で途切れ、刺突文が施されている。7の繩文は条・節ともに非常に細かく、一見条線にみえる。10は壺形に図示したが、90度回転して北白川C式にみられる富士山形の大波状口縁の可能性もある。

11～17・21は、福田K2式である。口縁部が屈曲、あるいはやや肥厚し、沈線末端が不連続の磨消繩文が描かれる。15・21は繩文が施されず、沈線文が硬直化している。16は胴部が屈曲する浅鉢である。

18～20は同一個体で、宿毛式あるいは松ノ木式と考えられる。隆帶で区画文・円形の意匠を描き、隆帶上に繩文が施されている。隆帶側縁は、沈線文で縁取りされている。

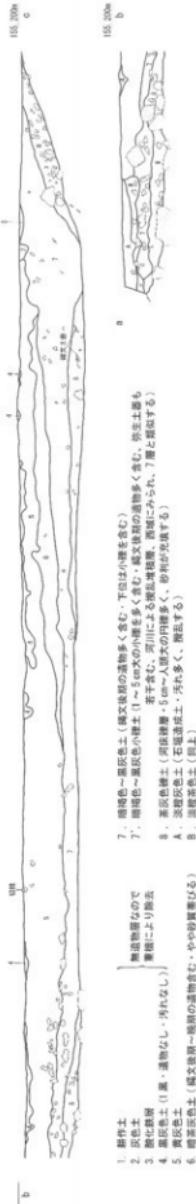
第25図11～19は、胴部が屈曲する浅鉢である。屈曲部に刺突文列（11）・平行沈線文間に短沈線文列（13・15～17）・短沈線文列（18・19）が施される。刺突文、短沈線文の原体は巻貝殻頂部と思われる。

第24図22～26は、屋敷式である。22・24は口縁外面がやや肥厚し、屈曲部分に巻貝による短沈線（22）や巻貝側面押圧文（24）が施されている。24は波頂部下にも巻貝側面押圧文、垂下沈線文がみられる。23・25・26は内面が肥厚するもので、口唇部に短沈線文列が施され、25・26には内面に沈線文が施される。内面が肥厚するものは、従来屋敷式には含まれていないが、24などよく似ることから屋敷式と考えた。



第22図 F区遺構配置図 (S=1/250)

1. F 区東西ベルト北壁 (SR1)



2. F 区南壁



第23図 F区土層堆積状況図 (S=1/100)

### 後期前葉土器（第24図27～31・第25図1～10・20～22・第53図1～4・6・第54図2・3）

第24図28～31・第25図1～10・第53図3は成立期縁帶文と思われる。第53図3は口縁部に入り組み文を描く土器で、サルガ鼻式の文様であるが、口縁部の肥厚具合から成立期縁帶文と考えた。第24図28～31・第25図1～7は、口唇部がやや肥厚し、そこに沈線文・刺突文・短沈線列が施される。第24図29～31・第25図3には卷貝殻頂部による刺突文、第25図5～7には二枚貝による刺突文列または短沈線列が施されている。

第25図8～10は、深鉢の突起部である。8は山形の突起で、口唇に沿った沈線文と波頭部に直交する短沈線がみられ、正面に橈円形の透かし孔が設けられている。9・10は杯状の突起で、10は渦巻き状を呈している。9は突起部頂部と口唇部に短沈線文列が施されている。

第24図27・第25図20～22・第26図1～12・第53図1・6・第54図3は津雲A式に似た土器だが、時期幅がある可能性がある。外面に肥厚する主文に、円形文とそれに取り付く橈円形区画文（第25図22・第26図1・3・第53図6）などは、津雲A式によく似た要素であるが、斜格子文（第26図2・7）、刺突文列（同6）、斜行短沈線文列（同5・9～12）などは、この地域独特の文様かもしれない。また、口縁部に羽状文を入れるもの（第53図1）や主文部分に方形文（第25図20）、垂下短沈線文（同21）を配するもの、東部瀬戸内地方ではあまり見られないようと思われる。第24図27・第54図3は口縁部外面が肥厚し、直線文と地文に細かい刺突文または撚り戻し繩文が施されている。同一個体の可能性がある。第54図2は垂下隆帯と沈線文が施される特異な土器である。型式は不明だが、縁帶文としておく。

第26図13・14は口縁部に縄文が施される土器で、同図15・16・第53図2はその胴部と思われる。第26図16は器壁が薄く、新しいかもしれない。

第26図17～19は、口縁内面が肥厚する上器で、口唇部に短沈線状の刻み目文が施されている。17・18は肥厚部が四線文状にくぼみ、19には沈線文が引かれている。17・18は成立期縁帶文の可能性もある。

第27図1・第53図4は、小池原上層式か。第27図1は3本沈線による磨消繩文で横走・蛇行意匠が描かれている。左端には矮小化したJ字文がみえる。第53図4は、頸部に垂下する縄文帯と円形刺突文列が施されている。

第27図2～15は後期前半と思われるが、型式不詳な十器群である。2・3は口縁に羽状の沈線文、口唇に短沈線状の刻み目文が施され、3は口縁がやや肥厚する。羽状文は、九州の系譜を引く文様であろうか。5は沈線文で曲線意匠を、7は平行沈線文間に卷貝殻頂部による円形・斜行刺突文が施される。津雲A式より古い印象がある。6は口縁・口唇に斜格子文が描かれ、文様は第26図2・7などと共通している。

第27図9・10は口縁が肥厚する浅鉢形の無文土器である。口縁部の肥厚形状は第25図22などと大きく違っており、両者が同時期かどうか不明である。

第27図11～13は二山の突起をもつ土器で、突起部は肥厚している。第27図11は卷貝殻頂部による刺突文を、12・13は多重沈線文によりW字意匠を描いている。上器の様相は、屋敷式などに近い印象を持つ。4は円形刺突文が4段以上に施される鉢形である。8は緩波状口縁のボウル形で、口縁に押引き状の刺突文、口唇に多重沈線による鋸齒状文が施されている。14・15はわずかに口縁部が屈曲する土器で、2本の沈線文が口縁部に沿って描かれている。14の波頭部にはさらにも円形刺突文が付加されている。4・8・14・15は、津雲A式より時期が下るかもしれない。

後期中葉土器（第27図16～35）16・17は彦崎K2式の注口または壺形である。16はRI繩文、17は卷貝疑似縄文で磨消縄文帯を構成している。16は右下に大きな円形意匠がうかがえ、その左

上に小さな円形文が配されている。17は上下端に斜行する二枚貝刺突文列、その間に連弧文が描かれるなど、16より新しい要素がみられる。

18・19は沈線文と巻貝疑似縄文が施される浅鉢で、彦崎K2式と思われるが、九州系土器群にも組成される可能性がある。

20~29は石町式（北久根山第二型式）である。20~25・27は口縁部がやや肥厚して横走する沈線文が描かれている。23は地文にRL縄文が施されている。26は隆帯とその脇に蛇行沈線文が垂下している。地文はRL縄文である。28・29は口縁部付近に巻貝疑似縄文が施されている。29は左端に垂下沈線文がみられる。

30~35は型式不詳の上器である。30・31・34は細沈線文で文様が描かれる土器で、30が張状、31が椭円形、34が梯子状の意匠を描いている。34はその右にさらに刺突文列が施されている。

32・33は直線文と不連続な連弧文が描かれている。連弧文が結節縄文の影響と考えるなら、一乘寺K式に併行あるいは後続すると思われる。

後期無文上器（第28図~第35図6） 第28図1や第30図1などは比較的丁寧にミガキまたはナデ調整された精製土器だが、ほとんどは粗製の土器である。器形は頸部がくびれて口縁部が外反するもの（第28図18など）と寸胴器形（第31図11など）があり、ある程度器形がわかる大きな破片をみると前者が18、後者が15と、ほぼ1:1の比率である。口縁部は波状口縁13、突起5を数えたほかは水平口縁である。突起は二山のもの（第30図9・13）と一山のもの（第29図5など）がある。口縁端部に刻み目文があるものは38点図示した。巻貝側縁を押塗したもの2点（第29図9・第30図8）、巻貝殻頂部による短沈線状の刻み目文24点（第28図17など）、二枚貝刺突文12点（第29図3など）の内訳である。口唇部無文は25点である。器面の調整は、ナデ調整と併用されるものも多いが、内外いずれかに巻貝条痕が観察されるもの64点（第30図10・第33図2・6・8など）、二枚貝条痕がみられるもの9点（第32図9・第33図9・10など）、条痕が観察できないものの3点（第28図1・第29図9・第30図6）で、約8割以上に巻貝条痕が観察される。

後期無文壺形上器（第34図5~7） 頸部が短く外反し脛部が張る器形で、内外面ともにていねいに調整されている。

底部（第34図8~17） 8~11は平底、12~14・16・17は高台状の底部、15は円板状の底部である。9の底外面には指による調整痕がみられる。15の底外面には、縁辺に砂粒圧痕が顕著で、折影右下には巻貝圧痕がみられる（図版48-8）。カワニナあるいはイソニナなど、ら肋がない種類の貝である。

無文浅鉢（第35図1~6） 口縁端部が屈曲氣味のもの（1・2）、わずかに外反して内面に稜をもつものの（4）などがある。5・6は底部または底部に近い破片である。6の外面は巻貝条痕を粗く残すが、大きく聞く器形であること、内面調整がていねいであることから浅鉢と判断した。

石器（第35図7~第36図2） 第35図7・8は石錘で、7は打欠き石錘、8は切口石錘である。ともに河原石が利用されている。

第35図9は剥片で、自然縫の縫部である。使途目的のある剥片ではないかもしれない。

第35図10・13は磨石・叩石で、ともに河原石が利用されている。10は使用痕が不明瞭だが、13は側面に打痕、表面に擦り痕がみられる。

第35図11は磨製石斧基部である。敲打痕、研磨痕が観察できる。剥離は欠損時のもの可能性がある。

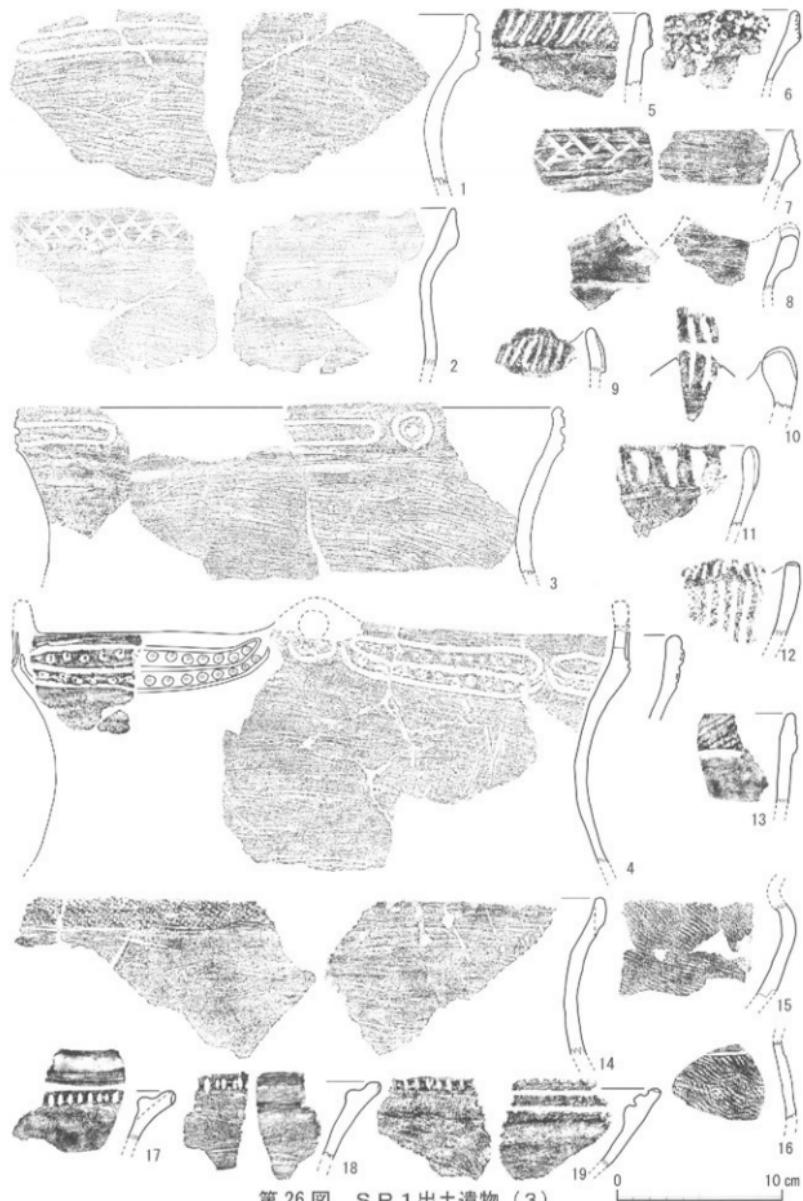
第35図12・14・15は打製石斧である。12・14の刃部・側縁には使用痕と思われる磨滅がみら



第24図 SR 1出土遺物(1)



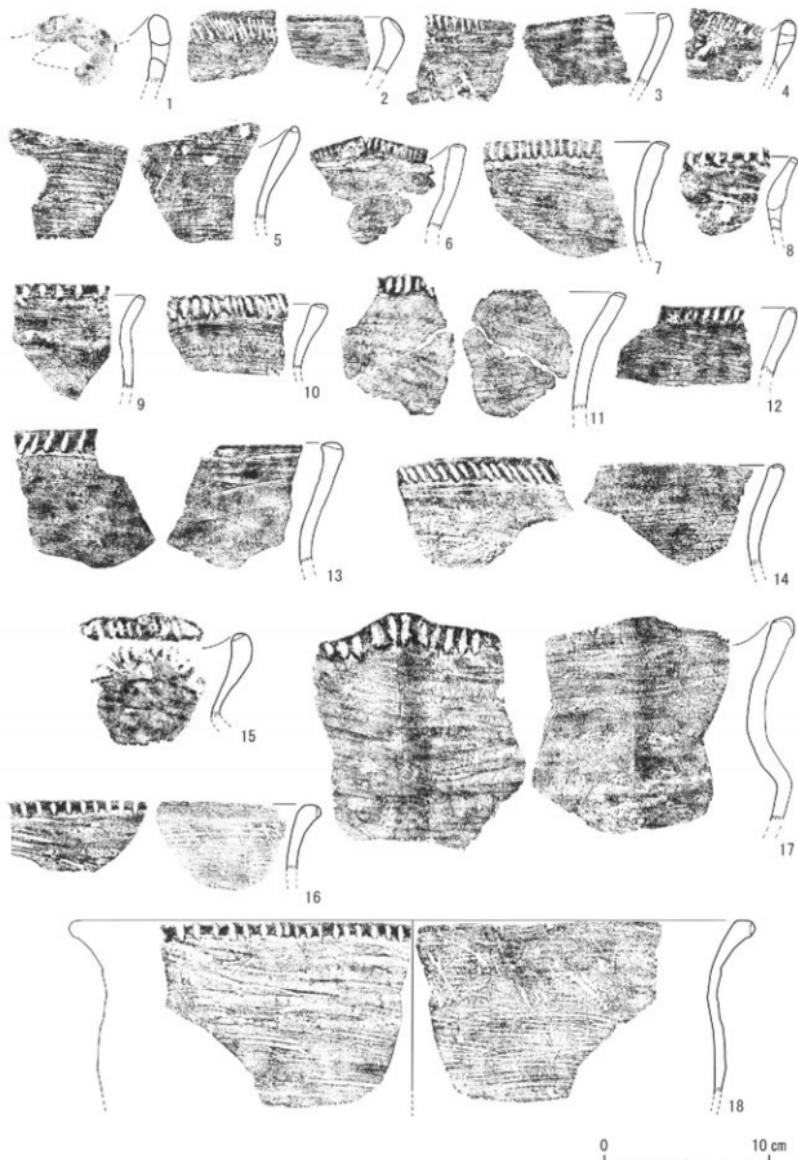
第25図 SR 1出土遺物(2)



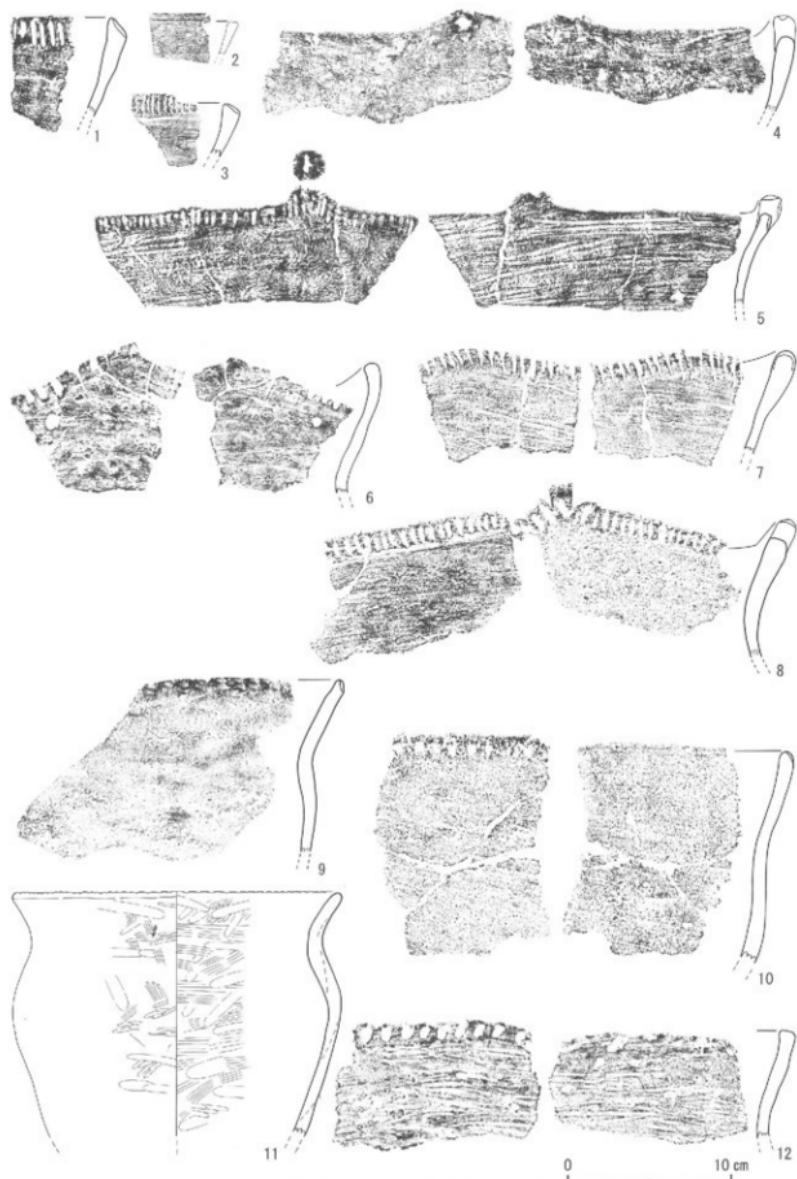
第26図 SR 1出土遺物 (3)



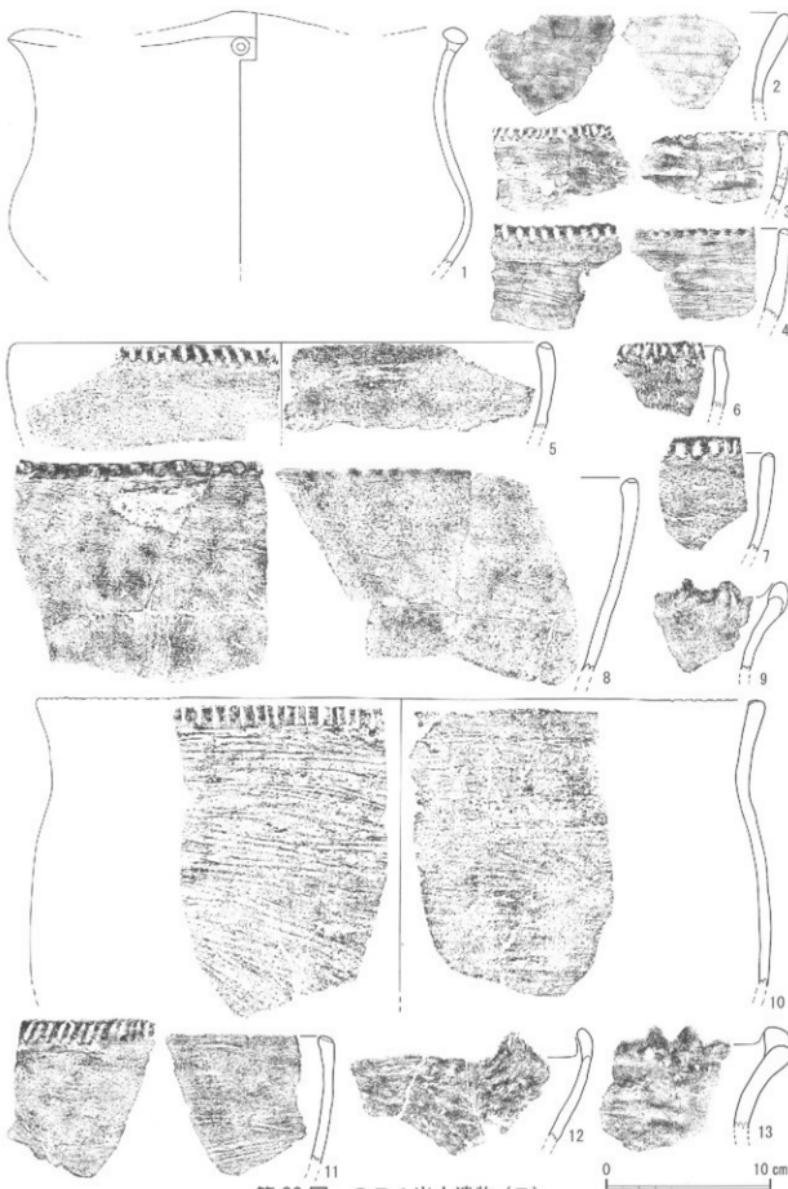
第27図 SR 1出土遺物(4)



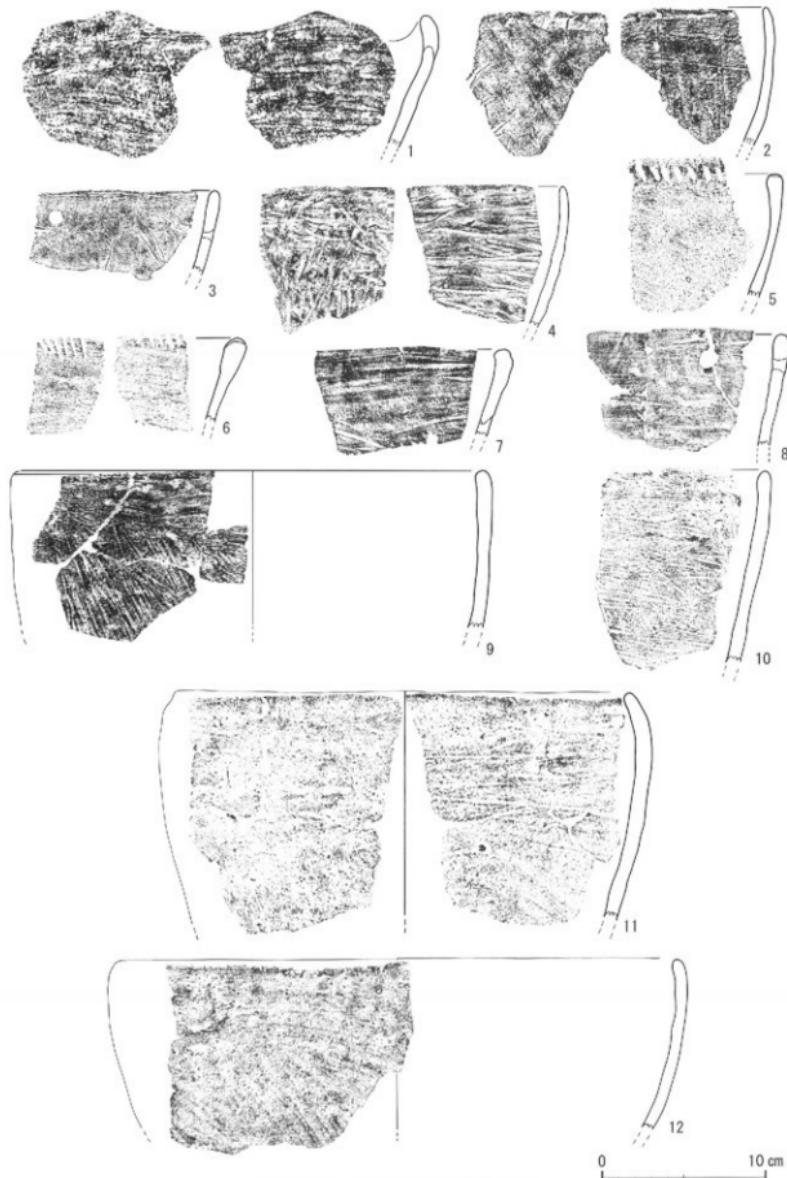
第28図 SR 1出土遺物(5)



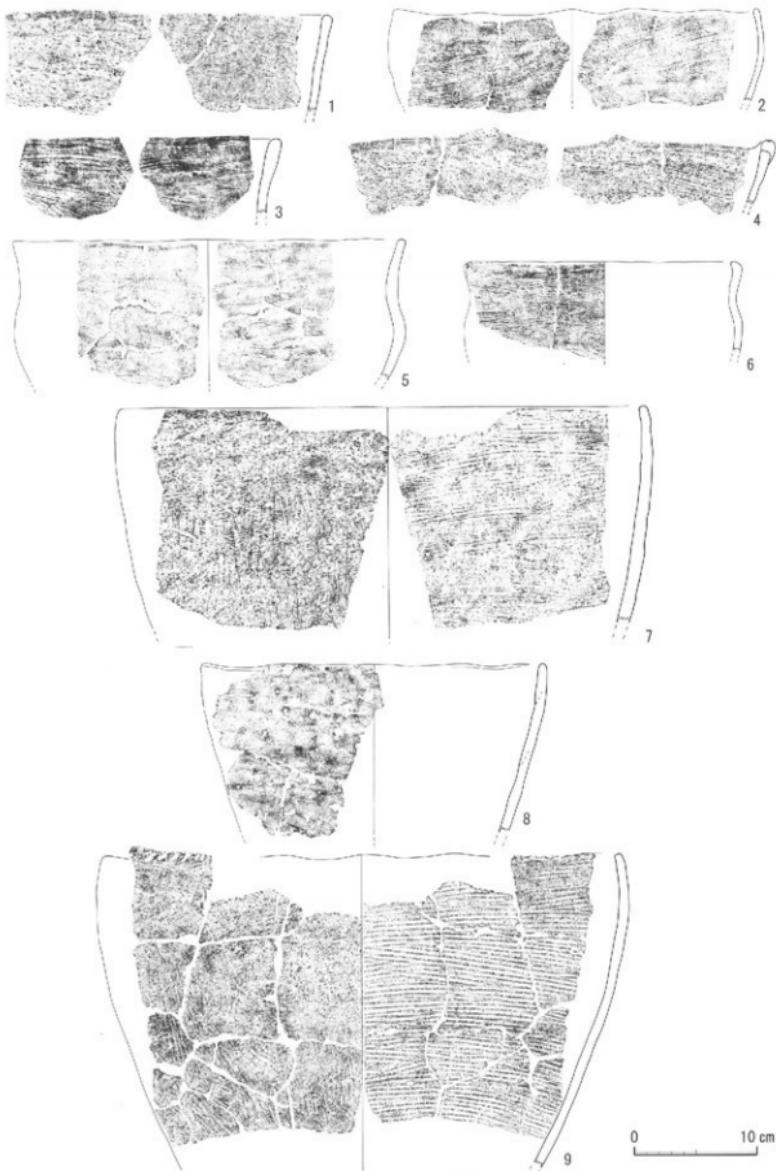
第29図 SR 1出土遺物 (6)



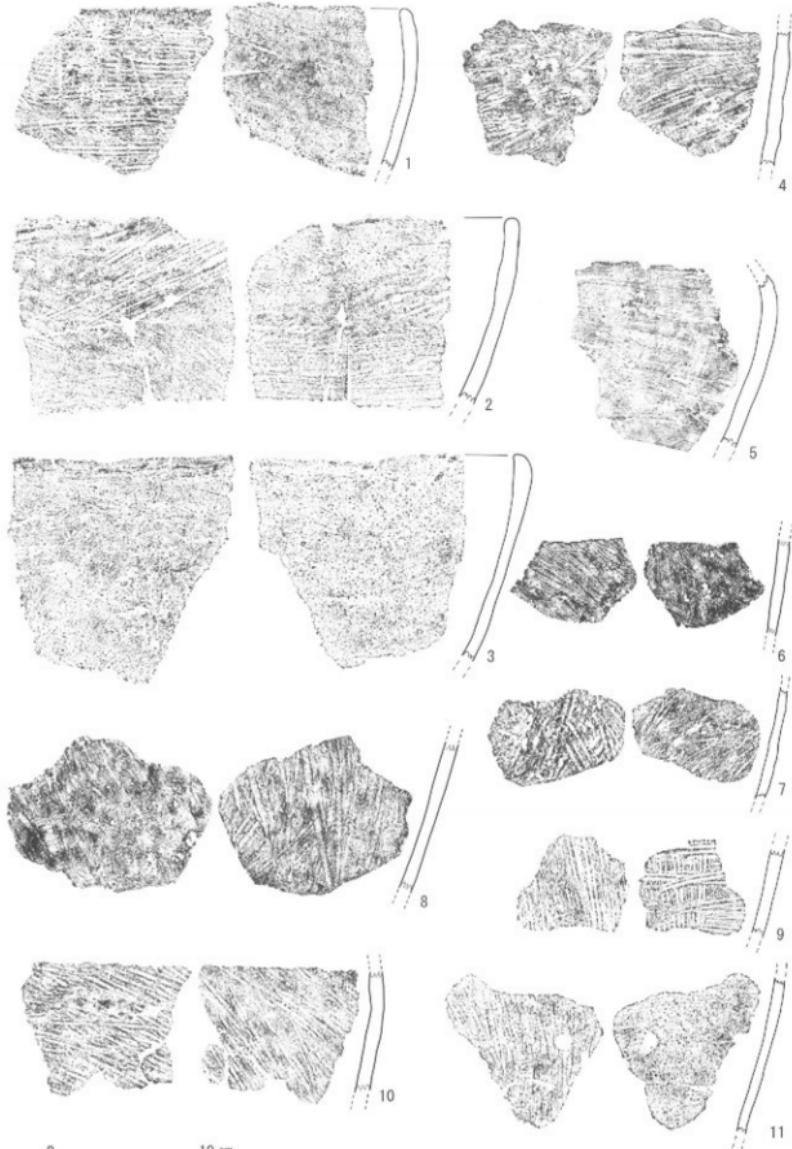
第30図 SR 1出土遺物(7)



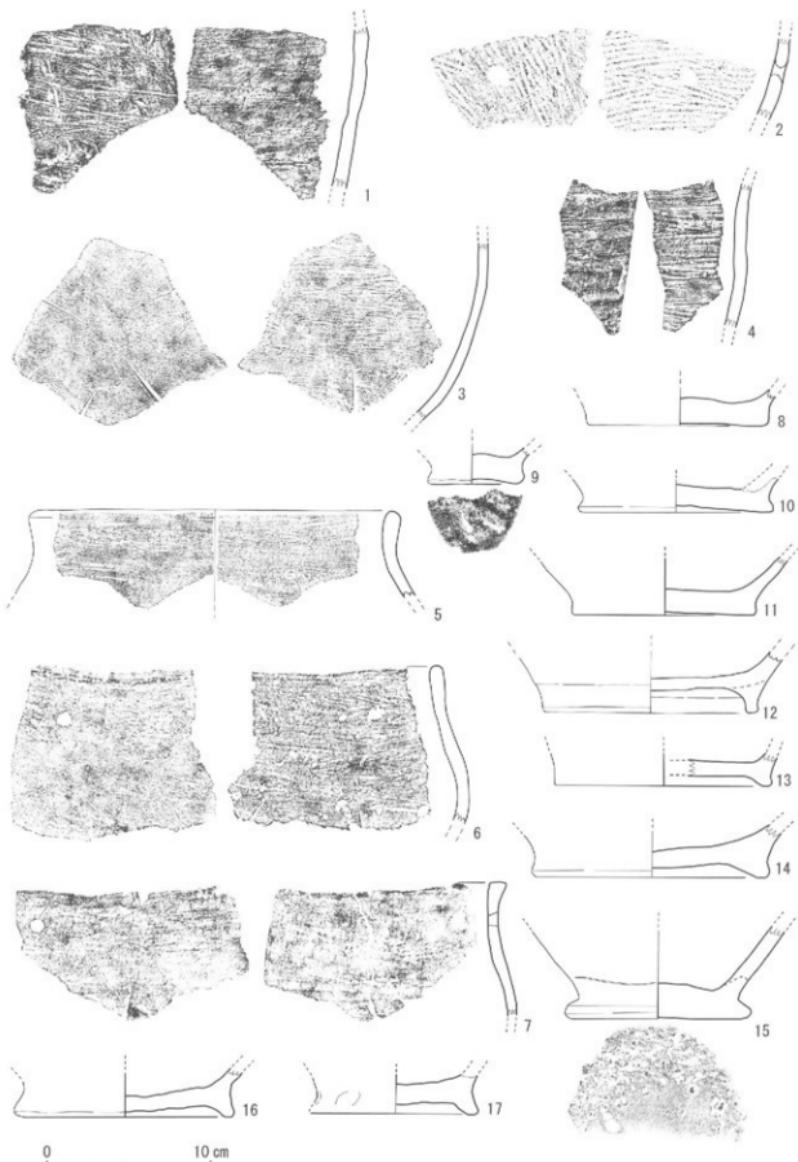
第31図 SR 1出土遺物(8)



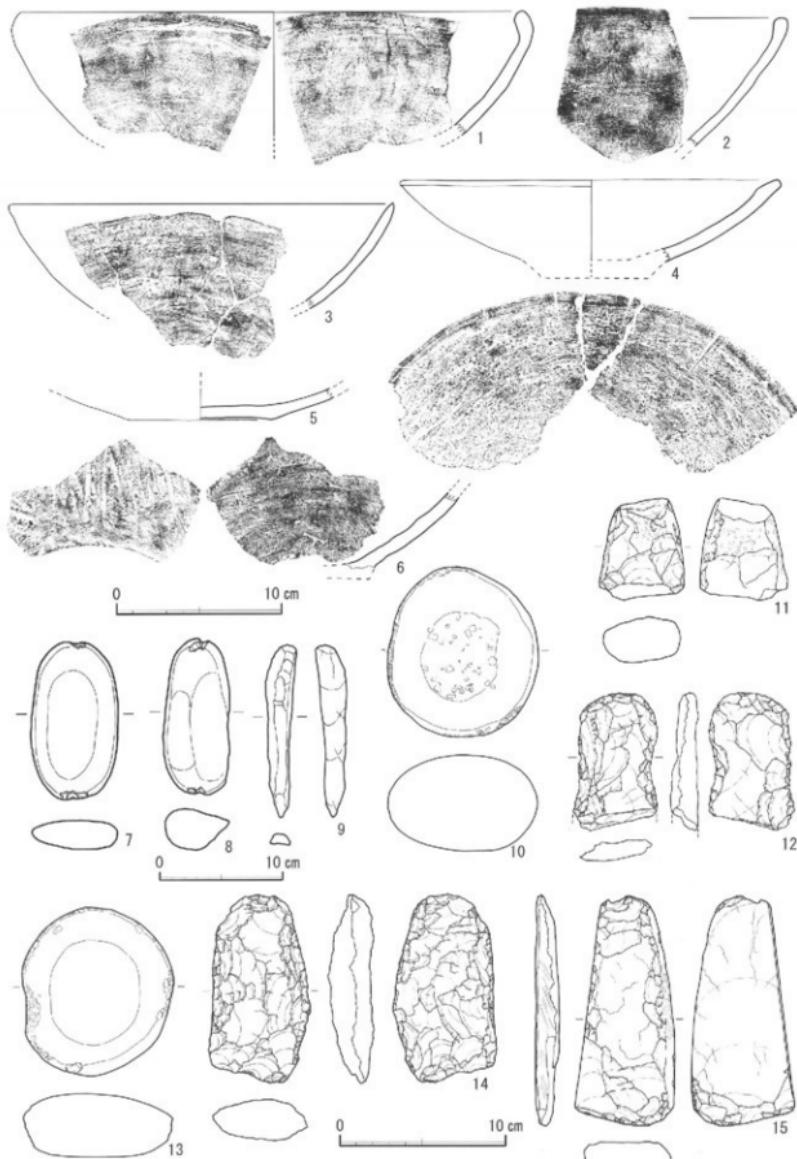
第32図 SR 1出土遺物 (9)



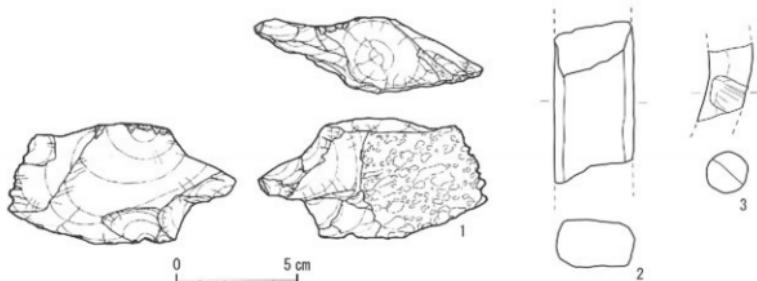
第33図 SR1出土遺物 (10)



第34図 SR 1出土遺物 (11)



第35図 SR 1出土遺物 (12)



第36図 SR1出土遺物 (13)

第7表 SR1出土土器観察表

件号	遺物 番号	形状	沿脚・ 底足地	器種	器形	文様	四輪	土色	備考
第24回	1	30	FR SR1 東西ペ ルト 5層				内外面ナデ。	青石青白。	
第24回	2	30	5層				内外面ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第24回	3	30	5~6層 土器盛り		波状口縁。	麻溝文 (R)。下部にも沈切。	内外面ナデ。	白色砂粒含む。	
第24回	4	30	5層~6層 土器盛り		波状口縁。口唇半 切脚。	沈切文 (波状基盤)。	内外面卷貝底ナデ。	大粒の白色砂粒含む。	
第24回	5	30	6層~7層 土器盛り			麻溝文 (R) (手取り)。	外表面ニガキ。内面ナデ。	大粒の白色砂粒含む。	
第24回	6	30	SR1 5層	波口か唇	唇内流。	唐津文 (赤字?)、クラシック文 (傳 わゆる目)。唇内斜削の突起文。	外表面ニガキ。内面丁寧な ナデ。	砂粒粒含む。	下部は錐口縁。
第24回	7	30	6層下位 黄灰色土	深鉢?	弧内底。	唐津文 (R) (跡非常に細かい)。	外表面ニガキ。内面ナデ。	白色砂粒含む。	
第24回	8	30	12層中央 6層下位	深鉢?	口縁内流。	唐津文 (R) (手取り)。	外表面ニガキ。内面ナデ。	白色砂粒含む。	
第24回	9	30	6層下位 黄灰色土	深鉢?	唇内流。	唐津文 (R) (充満?)	外表面ニガキ。内面底復 ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第24回	10	30	5層	注口か唇	玉形の器形が 透けた口縁 (波状口縁)。	唐津文 (R) (充満?)。	口縁ナデ。外表面ミガキ。 内面ナデ。	白色砂粒。金糞含む。	北白川式の尾口縁の可能性あり。
第24回	11	30	6層 Po90-1	深鉢	口縁強め内流。	唐津文 (R) (充満)。	外表面ナデ。内面卷貝底濃 ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第24回	12	30	6層下位	深鉢?	口縁肥厚・肩高。	若狭文 (R)。	内面ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第24回	13	30	東岸付近 5層		口縁内流。	波状二縫文 (R)。	外表面二段肩底窓、内 面卷貝底。	白色砂粒多く含む。	
第24回	14	30	東岸土器盛り	深鉢	口唇平坦。	東岸文 (R)。J字文崎部不 諦。	内外面ニガキ。	白色砂粒含む。	
第24回	15	30	5~6層		唇肥厚。	波状文。時刻文。	内面ナデ。	砂粒目立たない。	
第24回	16	30	6層下位	深鉢	唇肥厚底。内底厚。	唐津文 (R)。萬葉文後に次 文。	内外面ニガキ。	白色砂粒多く含む。	
第24回	17	30	5層	浅鉢	口縁外張。	内底に唐津文 (R)。万葉文。	内外面ニガキ。	砂粒目立つ含まない。	
第24回	18	30	東岸付近 5層	深鉢	ボルタル形の縁形? 口縁外張。	唐津文で底被り。円形に取り付 け。波状二縫文 (R)。	内外面ニガキ。	西伊勢・金糞多く含む。	18・19・20は同一 個体の可能性。
第24回	19	30	東岸付近 5~6層 土器盛り	注口か唇鉢	唇内流。	唐津文 (波状で縫取り)。波状文に取り付 け。波状二縫文 (R)。	内外面ニガキ。	砂粒含む。	外側に赤色斑点。
第24回	20	30	東岸付近 5層	深鉢	ボルタル形の縁形。	唐津文 (波状で縫取り)。波状文。	内外面丁寧なミガキ。	砂粒含む。	18・19・20は同一 個体の可能性。
第24回	21	30	北端中央 5~6層		口縁外張わずかに 肩高。波状口縁。	波状文 (内面) (スジ)。唇部に唇 底足と唇底足目見。	内外面卷貝底濃ナデ。	白色砂粒含む。	
第24回	22	30	5~6層上面 (東岸ペルト)	深鉢	口縁外張。	波状状の剥み目文 (傳 わゆる貝取模)。	内外面卷貝底濃ナデ。	白色砂粒含む。	
第24回	23	30	北端中央 5~6層	深鉢	口縁内張に肩厚。	口縁強度が弱め且又 (傳 わゆる貝取模)。	内外面卷貝底。	白色砂粒含む。	
第24回	24	30	5層	深鉢	口縁波状口縁。	波状文。頂部に唇底足目見。波頭 波状口縁。	内外面卷貝底濃ナデ。	白色砂粒。音母砂粒多 く含む。	
第24回	25	30	5層	深鉢	波状口縁。	波状文 (内面) に少い波下垂壁。唇部に 剥み目文 (傳 わゆる貝取模)。	内外面ナデ。	白色砂粒多く含む。	下縫は錐口縁。 24・25は同一 個体の可能性。
第24回	26	31	5層		内底厚。二山の 突起。	内底面。唇部内面に横状の浮文。 口縁波状 (傳 わゆる貝取模)。	内外面卷貝底濃ナデ。	白色砂粒含む。	
第24回	27	31	5層	深鉢	口縁外張に肩厚。	波状二縫の剥み目文 (傳 わゆる貝取模)。	内外面ナデ。		25・26は同一 個体の可能性。
第24回	28	31	6層		口縁厚。	口縁に不溝底の波状文。	内外面卷貝底濃ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第24回	29	31	5~6層		口縁外張に肩厚。	西脇に封文 (傳 わゆる貝取模)。	内外面卷貝底濃ナデ。	大小の白色砂粒含む。	
第24回	30	31	北端中央 5~6層	深鉢	口縁やや内溝。口 縁波状 (傳 わゆる貝取模)。	波状文 (内面) (スジ)。唇部に唇 底足と唇底足目見。	内外面卷貝底濃ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第24回	31	31	5~6層	深鉢	口縁肥厚。	上三段波。沈維文 + 卷貝底削型削 出目見。	内外面卷貝底濃ナデ。内 面卷貝底。	大粒の砂粒含む。	
第24回	32	31	5層		波状口縁。	波状底部やや肥厚。口唇才縮。波 状底部に2孔形。波底部に1孔所大きな 孔。	内外面卷貝底濃ナデ。	白色砂粒含む。	

繪圖 番号	物語 名	図版 番号	注記・ 出土点名	種類	器 物	文 横	質 素	胎 土	備 考	
第25回	2	31	5層	深鉢	口縁墨厚。鉢部外 反、縁に曲線。	古文文。	内外面卷貝条痕。	白色砂粒多く含む。		
第25回	3	31	北部中央 5~6層	深鉢	口縁墨厚。	口縁卷長による割目。	内外面卷貝条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第25回	4	31	5~6層	深鉢	口縁や内陶。	平行沈鉢+底下沈鉢文(擦痕二枚 目)。	内外面卷貝条痕+ナデ。	大粒の砂粒多く含む。		
第25回	5	31	北部中央 5層	深鉢	口縁粗ぐ混出。	口縁割裂突起込み目+絞り直邊文。鉢 底に凹凸の垂直溝。	内外面卷貝条痕。外圍は テグ例。	大粒の砂粒含む。		
第25回	6	31	東偏北近 5層	深鉢	口縁部外反。口各 面に凹凸の垂直溝。	上部に沈鉢文+底下目(底邊波状)。	外面卷貝条痕。内面卷貝 条痕+ナデ。	砂粒含む。		
第25回	7	31	5~6層 土崎湖 平野部	深鉢	口縁や内陶。口 平野部。	外周巻文。口唇沈鉢+削突沈鉢 文。口縁(二重貝折目)。	外周ナデ。内面卷貝+ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第25回	8	31	北部 Po143 土崎 湖底	深鉢	波状口縁。口肩平 坦。	口肩(丁)に凸凹形形成し。口唇・突起 部(丁)に凸凹形形成。	内外面卷貝条痕+ナデ。	大粒の白色砂粒多く含む。		
第25回	9	31	東偏北~6層 士 崎湖底	深鉢	井筒形突起。口唇平 坦。	井筒形突起。口唇平 坦。口肩波状。	外周上部。口唇波状沈鉢割裂目文 (卷貝頂部?)。	内面 卷貝条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第25回	10	31	5層	深鉢	井筒形突起。	井筒形突起。	全面ナデ	代調の白色砂粒含む。		
第25回	11	31	北部 5層	口鉢外腹。	井筒文(卷貝頂部)。毛記痕影。	井筒文(卷貝頂部)。毛記痕影。	内外面卷貝条痕。	白色砂粒含む。		
第25回	12	31	6層 Po88 深鉢	深鉢	里山口縁。	クランク状の波状文。以下に波状の 外周ナデ。内面ナデ+ミ カギ。	外周ナデ。内面ナデ+ミ カギ。	白色砂粒。金雲母含む。		
第25回	13	31	6層 Po105 土 器裏	深鉢	里山口縁。	波状文間に短沈鉢状波目文(卷貝 頂部)。	外周卷貝条痕+ナデ。内 面ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第25回	14	31	南端土越坂安 定 6層	深鉢	口縁外反。底部足 の残存。	無文。	内外面ミカギ。	大粒の砂粒含む。	被模。	
第25回	15	31	5層 下層~6層 土崎湖底	深鉢	奥底膨出。	奥底膨出。口唇沈鉢状波目文(卷貝頂 部)。	内外面ナデ。下唇に鋸口縫。	白色砂粒。全雲母含む。		
第25回	16	31	6層 Po89 深鉢	深鉢	底部膨出。内面に 凹。	底部膨出。内面に 凹。	外周面に波状文。以下に波状の 外周ナデ。内面ナデ+ミ カギ。	砂粒少。全雲母含む。復元口回31.6cm。		
第25回	17	31	5~6層	深鉢	難倒形突起。	難倒形突起。	外面ミカギ。内面ナデ	白砂粒多量に含む。審 査用。		
第25回	18	31	南端部 6層 士 崎湖底	深鉢	側面凹曲。	側面凹曲。	外周面ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第25回	19	31	5~6層	深鉢	口唇口縁。	口唇口縁。	外周面に短波状(全体波状)。下唇 の「の」字底。	外周面に短波状(全体波状)。下唇 の「の」字底。	大粒の白色砂粒。全雲母含む。	
第25回	20	31	5~6層 上 間 (東西ベルト)	深鉢	口唇膨出。	口唇膨出。	内外面卷貝条痕+ナデ。	白砂粒含む。		
第25回	21	31	南端部 6層 Po55	深鉢	口縁部肥厚。口唇 平坦。	口縁部肥厚。口唇 平坦。	外周面波状文+底下沈鉢文(条)。口 唇部肥厚。	外周卷貝条痕。		
第25回	22	32	6層 Po86 深鉢	深鉢	山形尖端。口唇外 反。底部足の残存。 波状文。	山形尖端。口唇外 反。底部足の残存。 波状文。	内外面ミカギ。白色砂粒含む。	白色砂粒含む。	内面ス付着。	
第26回	1	32	5層	深鉢	口縁墨厚。鉢部 外反。縁に残存。	口縁沈鉢文2條。	内外面卷貝条痕。	白色砂粒含む。		
第26回	2	32	5層 Po129 深鉢	深鉢	口縁墨厚。鉢部外 反。縁に残存。	鉢柄子文。	内外面卷貝条痕。	白色砂粒。金雲母(少) 含む。		
第26回	3	32	5層	深鉢	口縁墨厚。口唇 外反。縁に残存。	山形山區面文、圓形文(中央に巻貝 頂部)。	内外面卷貝条痕。	白色砂粒含む。		
第26回	4	32	5層	深鉢	口縁墨厚。口唇 外反。縁に残存。	山形山區面文+瓶底文+剥皮文。(卷貝 頂部)。	内外面卷貝条痕。	被砂含む。		
第26回	5	32	6層 下位	深鉢	口縁墨厚。口唇平 坦。	口唇墨厚。口唇平 坦(原体巻貝版底記)。	内外面卷貝条痕+ナデ。	砂粒多く含む。		
第26回	6	32	5~6層	深鉢	口縫墨厚。	39の剥皮文(原体巻貝版底記)。	内外面ナデ。内面卷貝 条痕+ナデ。	砂粒多く含む。		
第26回	7	32	5層	深鉢	口唇外縫に肥厚。	口縫に斜切字文(原体巻貝版 底記)。	内外面卷貝条痕。	被砂粒多く含む。		
第26回	8	32	5~6層	深鉢	口縫肥厚。山形突 起または波状口縫。	内外面卷貝条痕。	内外面卷貝条痕+ナデ。	被砂粒含む。		
第26回	9	32	北部中央 6層下位	深鉢	口縫内凹。	平行沈鉢(原体巻貝版底記)。	内外面ナデ。	白色砂粒含む。		
第26回	10	32	6層 下位	深鉢	口縫内凹。	平行沈鉢(原体巻貝版底記)。	内外面ナデ。	白色砂粒含む。		
第26回	11	32	5~6層	深鉢	口縫や口底。	平行沈鉢(原体巻貝版底記)。	内外面ナデ。	大粒の砂粒含む。		
第26回	12	32	5~6層	深鉢	波状口縫。口唇平 坦。	波状口縫。口唇平 坦(原体巻貝版底記)。	内外面ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第26回	13	32	東西ベルト 5層	深鉢	口縫墨厚。	無文。	内外面ミカギ。	白色砂粒。金雲母含む。		
第26回	14	32	5層	深鉢	C形墨厚。外反。 原体記入。	無文(R)。	内外面卷貝条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第26回	15	32	6層 下位	鉢	原体記入。	無文(R)。	内面ナデ。	砂粒含む。	下唇は鋸口縫。	
第26回	16	32	6層 下位	深鉢	原体記入。口唇 外反。	原体記入。	外周ナデ。内面卷貝条痕。	大小の白色砂粒含む。		
第26回	17	32	北部中央 5層	深鉢	口縫墨厚。大き く外反。	原体記入上面に凹縫跡。堆積に近矩形 状の凹縫跡。	内面ナデ。	白色砂粒含む。	原体内部一部開口。	
第26回	18	32	5~6層	深鉢	口縫内凹に肥厚。	口縫墨厚底凹・鉢部に短い波 状の凹縫跡。	内外面卷貝条痕+ミカ ギ+ナデ。	白色砂粒多い。被砂母 含む。		
第26回	19	32	東岸付近 5層	深鉢	口縫内凹に肥厚。	内面墨厚底凹文(原体巻貝版)。口 縫内凹に肥厚(原体巻貝版)。	内外面ナデ+ミカギ。	白色砂粒含む。		
第27回	1	32	5層 Po123 深鉢	深鉢	リウル形の器皿。	塵消清文(風呂窓)。	外周卷貝条痕+ミカギ。 内面卷貝条痕+ナデ。	砂粒多く含む。	横写真に赤色添付。	
第27回	2	32	北部~中央 5層	吉口?	吉口?	口縫墨厚底凹。	内外ナデ。内面卷貝条痕。	白色砂粒含む。		
第27回	3	32	北部~中央 5層	口縫墨厚、餘。	口縫墨厚、餘。	口縫墨厚底凹(原体記入)。	口縫墨厚底凹。	青砂母。白色砂粒含む。		
第27回	4	32	奥縁部 6層	深鉢	口縫墨厚外反。	口縫墨厚底凹。	内面卷貝条痕+ナデ。	大粒の白色砂粒含む。		
第27回	5	32	5層	鉢	原体記入。	無文(R)。	内面ナデ。	白色砂粒含む。		
第27回	6	32	北部中央 5~6層	口縫墨厚。	口縫墨厚。	口縫墨厚底凹字文。	内面卷貝条痕。	白色砂粒多く含む。		
第27回	7	32	5層	口縫墨厚。	口縫墨厚。	口縫墨厚底凹字文。	内面ナデ。	大粒の白色砂粒含む。		
第27回	8	32	5層 下層~6層 土崎湖底	口縫墨厚。	口縫墨厚。	波状波口縫。	波状波口縫(原体巻貝版)。口縫 墨厚に近底沈。	卷貝条痕。ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第27回	9	32	6層 Po83~2 土 鉢つまり	口縫墨厚。	口縫墨厚。	無文。	内外面卷貝条痕+ナデ。	砂粒少含む。		

順番 番号	遺物 番号	類別	法記・ 出土地点	性 標	材 形	文 样	被 覆	施 上	備 考	
第27回	10	32	5~6層	深鉢?	口縁部厚。無文。		内外面具条痕+ナデ。	大粒の白色砂多く含む。		
第27回	11	32	東西ベルト層P03 土器裏面	深鉢	二山の突起。突起上に竹骨状刻突(縮葉質?) 1~2mm。		内外面具条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第27回	12	32	6層P09~12	深鉢	口縁部厚。U字型。多差差縫によるW字形の目皿。		内外面具条痕+ナデ。	大粒の砂粒含む。		
第27回	13	32	6層	深鉢	口縁部厚。二山の突起?		外面部二枚見? 玄済+ナデ。内外面具条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。	補修孔	
第27回	14	32	東西ベルト5層	深鉢	口縁部や内底。無	半円形底文(原体底文)。被頂部口 縁部厚。	内外面具条痕+ナデ。	白色砂粒含む。		
第27回	15	32	中央5層	深鉢	口縁部くぼ。底	沈済文(律体文)。部分的引き戻し。	外面部具条痕+ナデ。内 面具条痕。	白色砂粒含む。		
第27回	16	33	東岸付近5~6層	深鉢	口縁部厚。二山の突起?	沈済文(律体文)。部分的引き戻し。	内外面具条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第27回	17	33	南面1層~下層	鉢	口縁部厚。	毫海済文(卷体底文選文)。上下に 枝状刻突。彌栄文式未完成形。	内外面具条痕+ナデ。	微妙粒多く含む。	37~38と同一作 の可能性	
第27回	18	33	8層下位	浅鉢	凸形の底部。	毫海済文(卷体底文選文)。沈済招 康文(卷体底文)。沈済編に書類 類別判別用。	外面部具条痕+ナデ。内 面具条痕。	白色砂粒含む。		
第27回	19	33	北部中央5層	深鉢	口縁部や内底。無	小正山文。彦文。目皿疑似毫文。	外面部ミガキ。	白色砂粒多く含む。		
第27回	20	33	東岸付近5~6層	深鉢	口縁部内薄	沈済編に書類文(見文)。	外面部具条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第27回	21	33	5層下層~6層	深鉢	口縁部厚。	直線文。	内外面具ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第27回	22	33	東西ベルト5層	深鉢	口縁部厚。	彦済文3条。	内外面具条痕。	白色砂粒多く含む。		
第27回	23	33	5層下層~6層 土器裏面	深鉢	口縁部や内底。	麻済文(原体底文選文)。口縁部 厚。内底部厚。	内外面具条痕+ナデ。	白色砂粒含む。		
第27回	24	33	北部中央5層	深鉢	口縁部厚。段。	大いに沈済(原体底文選文)?	内外面具条痕+ナデ。	白色砂粒含む。		
第27回	25	33	北部中央5層	深鉢	口縁部扁平。	大正山文(原体底文選文)。上部削 除。内底部厚。	外面部具条痕+ナデ。内 面具条痕。	白色砂粒多く含む。		
第27回	26	33	6層下位	口縁厚。	口縁部厚。	彌栄文(見文)。事文。彌栄に 属する。	内外面具条痕+ナデ。	大粒の白色砂粒含む。		
第27回	27	33	6層下位	口縁厚。	口縁部厚。	大正山文3条。	内外面具条痕+ナデ。	大粒の白色砂粒含む。		
第27回	28	33	北部5層	深鉢	口縁部厚。口唇平 坦。	春日拟毫文。口唇部吹き抜きのみ文。 口唇部吹き抜き。	内外面具条痕+ナデ。内 面具条痕(ハナタリタ イザヤ他)。	白色砂粒多く含む。		
第27回	29	33	5層	口唇厚。	彦済疑似毫文。左側に横筋の二筋文。	内底丁字ナデ+ミガキ。	金背母子含む。			
第27回	30	33	中央5層	深鉢	口縁部くぼ。	重慶文(ナデ消し)。	外面部ナデ。内外面具条痕 (ナデ)。	白色砂粒含む。		
第27回	31	33	東西ベルト5層	内底部削除。	内底部削除。	内外面具条痕+ミガキ。ナ デ。	内底ミガキ+ナデ。	白色砂粒含む。		
第27回	32	33	6層下位	鉢	口縁部くぼ。	彦文(引手)。弱確定。	内外面ナデ。	微妙粒。金背母子含む。		
第27回	33	33	東西5~6層下層	内底に削 除。	口縁部厚。	彦文(引手)。弱確定。	内外面ナデ。	微妙粒。金背母子含む。		
第27回	34	33	中央5層	深鉢?	開口内底。	銘文(見文)。方舟記文(内底に削下) 彦文(引手)。弱確定。	内外面ナデ。内底ミガキ。	白色砂粒多く含む。		
第27回	35	33	5層	口縫やや厚。口 唇厚。	口縫やや厚。口唇厚。	口縫部吹き抜き目文(二枚見?)	内外面具ナデ。	砂粒含む。		
第28回	1	33	深鉢	山形突起。	正方形山形突起の窓か。	内面ナデ。	砂粒含む。	口跡ス付筆。		
第28回	2	33	中央5層	口縫部厚。	短辺吹き抜き目文(巻貝?)	外面部ナデ。具条痕。	白色砂粒多く含む。			
第28回	3	5~6層	深鉢	口縫部厚。	口縫部内薄。	口縫部吹き抜き目文(二枚見消す)。	外面部具条痕+ナデ。内 面具条痕。	白色砂粒含む。		
第28回	4	5~6層	深鉢	口縫部厚。波 状凹。	口縫部吹き抜き目文(二枚見?)	内外面具条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。	突起部面に小穴孔 (崩かし?)		
第28回	5	東西ベルト5層	深鉢	口縫部厚。口縫部 やく厚。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	内外面具条痕。	白色砂粒多く含む。		
第28回	6	5層下層~6層 土器裏面	深鉢	口縫部厚。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	卷貝奈須+ナデ。	白色砂粒含む。		
第28回	7	5~6層	深鉢	口縫部厚。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	内外面具条痕。内面ナデ。	白色砂粒少量含む。	直径5.4cm	
第28回	8	東岸5~6層 士 器裏面	深鉢	口縫部厚。口縫部 やく厚。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	内外面具条痕。	白色砂粒含む。		
第28回	9	東岸5~6層 士 器裏面	深鉢	口縫部厚。口縫部 やく厚。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	内外面具条痕+ナデ。	白色砂粒含む。		
第28回	10	東岸5~6層 士 器裏面	口縫部厚。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	内外面具条痕+ナデ。	大小の白色砂粒含む。		
第28回	11	5層下層~6層 土器裏面	深鉢	口縫部外厚。口縫部 やく厚。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	内外面具条痕+ナデ。	大小の白色砂粒含む。		
第28回	12	東岸5~6層 土器裏面	深鉢	波状凹。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	内外面具条痕+ミガキ。内 面具条痕。	大粒の白色砂粒含む。		
第28回	13	北部中央5層	深鉢	波状凹。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	内外面具条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。含 蓄母子。		
第28回	14	東岸付近5~6層	深鉢	口縫部外反。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	内外面具条痕+ナデ。	白色砂粒。含蓄母子。		
第28回	15	33	5~6層	深鉢	口縫部外反。厚。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	外面部二枚見+ナデ。内 面具条痕。	大粒の白色砂粒多く含 む。	16~18は同一低 (全)	
第28回	16	東岸付近5~6層	深鉢	口縫部外反。厚。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	外面部具条痕+ナデ。	大粒の砂粒含む。		
第28回	17	33	6層下層	深鉢	口縫部外反。厚。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	外面部具条痕。	外面部具条痕+ナデ。		
第28回	18	33	東岸付近5~6層	深鉢	口縫部外反。厚。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	外面部具条痕+ナデ。内 面具条痕。	白色砂粒多く含む。	復元口径41.8cm, 16~18は同一低 (全)	
第28回	19	1	5層	深鉢	口縫部厚。断面三 角形。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	外面部ナデ。ミガキ。内 面具条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。	外面部一起合造。	
第28回	20	2	中央5層	深鉢	口縫部厚。	無文。	外面部ナデ。ミガキ。内 面具条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第28回	21	3	5~6層	深鉢	口縫部厚。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	外面部具条痕+ナデ。内 面具条痕。	大粒の白色砂粒含む。		
第28回	22	4	33	東西ベルト5層	深鉢	山形突起。口縫部外。	外面部二枚見。内面具条 痕。	外面部二枚見。内面具条 痕+ナデ。	白色砂粒多量に含む。	
第28回	23	5	33	5層	深鉢	山形突起。口縫部外。	口縫部吹き抜き目文(口縫部不 規則)。	内外面具条痕+ナデ。	白色砂粒少量化。	

標記番号	寄生種名	回数	採取・出土地点	基準	形態	文様	習性	特徴	拾土	備考
第29回 6	東洋付近 5~6層	深鉢	波状口縁。	波足部口唇に3条の短辺縫。	内外面巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒多く含む。	補修孔あり。			
第29回 7	33 東洋付近 5~6層	深鉢	口縁肥厚。	口縁波状波状縫込み目(波足二枚貝?)	内外面巻貝束縛+ナデ。	砂粒多く含む。				
第29回 8	5~6層	深鉢	口縫やや広く外反。	山形突起。	口縫波状目文。(唐体二枚貝?)	砂粒・全殻面多く含む。				
第29回 9	33 東洋付近 5~6層	深鉢	縫隙部屈曲。	口縫部に巻貝真江文。	内外面ナデ。					
第29回 10	東洋付近 5~6層	深鉢	口縫部屈曲屈曲。	口縫部に波足波状縫込み目文(波足?)	内外面巻貝束縛+ナデ。	大粒の砂粒多く含む。種子圧痕あり?				
第29回 11	34 6層付近 Po105	深鉢	口縫波状外反、須	口縫波状の剝込み目。	内外面巻貝束縛+ナデ。	大粒の白色砂粒(多)、肉質有り。				
第29回 12	5~9層上面 (波足ペシット)	深鉢	口縫外反。	口縫0字に近い御み目文(原本ニ枚貝)	内外面巻貝束縛。	白色砂粒多く含む。				
第30回 1	6層下面 Po126-2	鉢	口縫肥厚、口縫部外反、野良目文。 波足(波足?)	無文。	外面部丁寧なミガキ、内面 巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒、全殻面含む。				
第30回 2	東洋付近 5層	深鉢	口縫部外反。口縫やや肥厚。	無文。	内外面相いミガキ。	白色砂粒、全殻面含む。				
第30回 3	5~6層	深鉢	口縫波状内縫。	口縫波状波状の剝込み目。	内外面巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒含む。	補修孔。			
第30回 4	5層	深鉢	寸胴内縫。	口縫波状の波足目文(波足?)	内外面巻貝束縛+ナデ。	大粒の砂粒含む。				
第30回 5	東洋付近 5~6層	深鉢	口縫内縫、肥厚。	口縫波状の波足の鶴見目。	内外面巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒(少)、要定期。				
第30回 6	東洋付近 5~6層	深鉢	口縫内縫。	口縫波状の波足目文。	内外面ナデ。	白色砂粒多く含む。				
第30回 7	東洋付近土産屋通り	深鉢	口縫内縫。口唇平	口縫波状波状剝込み目文(原体伴貝類) 波足。	内外面巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒、要定期。				
第30回 8	34 6層 Po86	深鉢	西口。	口唇巻貝斜度斑。	内外面ナデ。	大粒の白色砂粒多く含む。				
第30回 9	34 東洋5~6層 士 産屋通り	深鉢	二山の突起。口縫内縫。	無文。	内外面巻貝束縛+ナデ。	砂粒多く含む。				
第30回 10	34 6層下面 Po60	深鉢	後筋波状外反。 須が缺く屈曲、筋 筋波状。	口唇刺突状剥込み目(原体二枚貝?)	内外面巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒多く含む。	外面ス付職。			
第30回 11	5層	深鉢	-	-	内外面巻貝束縛+ナデ。	大粒の白色砂粒、全殻面含む。				
第30回 12	北部中央 5~6層	深鉢	二山の突起。口唇 蓋い。	無文。	内外面巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒含む。				
第30回 13	34 5~6層	深鉢	二山の突起。	無文。	内外面ナデ。内壳波状+ナデ。	白色砂粒、全殻面含む。				
第31回 1	北部~中央 5層	深鉢	口縫内縫。	山形波製。	内外面巻貝束縛(波状波足)。	白色砂粒含む。				
第31回 2	東洋付近 5~6層	深鉢	やや内渦する寸胴 波形。	無文。	外面部巻貝束縛 7、内面巻 貝束縛+ナデ。	白色砂粒、全殻面含む。				
第31回 3	北部~中層	深鉢	-	-	内外面丁寧なミガキ。	白色砂粒多く含む。	補修孔あり。			
第31回 4	34 北部中央 5~6層	深鉢	やや内渦する寸胴 波形。	無文。	内外面巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒、要定期。				
第31回 5	東洋付近 5層	深鉢	口縫肥厚。	口縫波状。	外面部巻貝束縛+ナデ。内面 巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒含む。	補修孔あり。			
第31回 6	34 北部 5層	深鉢	口縫肥厚。	口縫波状。	外面部巻貝束縛+ナデ。外 面巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒多く含む。				
第31回 7	6層付近 6層 Po83	深鉢	口縫やや屈曲。	無文。	外面部巻貝束縛(波状波足)。	白色砂粒含む。	補修孔。			
第31回 8	土産屋通り 5層付 近~6層	深鉢	-	-	外面部巻貝束縛+ナデ。	大粒の白色砂粒多く含む。	補修孔有。			
第31回 9	34 北部中央 5層	無文	直口器形。	無文。	外面部巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒含む。				
第31回 10	5~6層 (東西 ベルト)	深鉢	直口器形。	無文。	外面部巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒含む。				
第31回 11	東洋付近 5層	深鉢	口縫内縫。	無文。	外面部巻貝束縛+ナデ。	砂粒含む。				
第31回 12	35 5層	深鉢	口縫内縫。	無文。	外面部巻貝束縛+ナデ。内 面巻貝束縛+ナデ。	砂粒含む。				
第32回 1	東洋 5~6層	深鉢	直口。	無文。	外面部巻貝束縛+ナデ。 (波状波足) 内面巻貝 束縛+丁寧なナデ。	大粒の砂粒多く含む。				
第32回 2	5~6層	深鉢	口縫内渦。波状波足。	無文。	外面部巻貝束縛+ナデ。内 面巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒多く含む。」				
第32回 3	北中部~中央 5層	深鉢	口縫やや屈曲。	無文。	外面部巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒多く含む。				
第32回 4	東洋 5~6層	深鉢	山形突起。	突起上面に巻貝頭部剥離。	外面部巻貝束縛+ナデ。内 面巻貝束縛+ナデ。	大粒の砂粒含む。				
第32回 5	35 5層 Po119	鉢?	口縫部屈曲外反。 須が缺く。	無文。	外面部巻貝束縛+ナデ。 波足(波足)。	白色砂粒含む。	口徑30.8cm			
第32回 6	35 6層 Po85	鉢?	口縫肥厚。口縫部外 反、須が缺く。	無文。	外面部巻貝束縛。内面巻貝 束縛+ナデ。	白色砂粒多く含む。	口徑21.6cm			
第32回 7	35 5~6層上面	深鉢	直口。	無文。	外面部巻貝束縛。内面巻貝 束縛+ナデ。	大小の白色砂粒多く含 む。	口徑41.2cm			
第32回 8	東洋 5~6層	深鉢	寸胴器形。口縫や や内渦。	無文。	外面部巻貝束縛? (波状 波足)。	波足粒含む。	馬子円底? 口徑26.8cm			
第32回 9	35 北側~中央 5層	深鉢	口縫内渦。	口縫波状剥込み目文。	外面部巻貝束縛。内面二枚 貝(波足)。	砂粒多く含む。	口徑40.8cm			
第33回 1	35 東洋 5~6層	深鉢	口縫内渦。	無文。	外面部巻貝束縛。	砂粒多く含む。				
第33回 2	36 5~6層 (東西 ベルト)	深鉢	直口器形。	無文。	外面部巻貝束縛+ナデ。	大粒の白色砂粒多く含 む。				
第33回 3	35 5層	深鉢	口縫やや屈曲。	無文。	外面部巻貝束縛+ナデ。	白色砂粒多く含む。				
第33回 4	東洋 5~6層	深鉢	直口器形。	無文。	外面部巻貝束縛+ナデ。	大小の白色砂粒多く含 む。				
第33回 5	5層下~6層 土産屋通り	深鉢	やや内渦する寸 胴。	無文。	外面部巻貝束縛+ナデ。	大小の白色砂粒多く含 む。				
第33回 6	6 屋根付近 5~6層	深鉢	-	-	外面部巻貝束縛。	大粒の砂粒多く含む。				
第33回 7	7 屋根付近 6 層 Po83-1 (土産屋 通り)	深鉢	-	-	外面部巻貝束縛。内面巻貝 束縛+ナデ。	白色砂粒多く含む。				
第33回 8	36 東洋付近 5層	深鉢	-	-	外面部巻貝束縛。	白色砂粒含む。				

堆積 番号	遺物 番号	回数	測定・ 出土地点	器種	器 形	文 標	調 査	胎 土	備 考
第33回	9	36	東岸付近 5~6層	打製石斧	河原石	灰色(やや緑色)	内外面に斜貝具条痕(サルボフライ)。	黄粉粒・金雲母含む。	
第34回	10	36	東街 5~6層	深鉢		無文。	内外面に斜貝具条痕(サルボフライ)。	白色砂粒多く含む。	
第34回	11		東岸付近 5層	深鉢?			外面を引手柄。内面斜貝具条痕アラ。		
第34回	1		東西ペレット 5層	深鉢			内外面に斜貝具条痕+ナデ。	白色砂粒含む。	
第34回	2		5~6層				内外面に斜貝具条痕(サルボフライ)。	大粒の白色砂粒少數含む。	
第34回	3		6層 下位		内湾する器形。		外面白貝具条痕+ミガキ。	表面多く含む。	
第34回	4		東岸付近 5~6層	盤部	ややくびれる。		ナデ。内面貝具条痕ナデ。	ナデ・ミガキ。	
第34回	5	36	5層 Po34	盤?	口縁近く外反。		外面白貝具条痕+ナデ。内面貝具条痕。	白色砂粒含む。	
第34回	6	36	5層 鳩灰色土	盤?	口縁附近。	無文。	内外面に斜貝具条痕+ミガキ。	白色砂粒多く含む。	
第34回	7	36	6層下面 Po126 -1	盤?	口縁部極く外反。 口縁や把厚(上 面)有り。	無文。	外面白貝具条痕ナデ。	白色砂粒含む。	頭部に補修孔。
第34回	8		中央 5層	盤部	平底。		全周ナデ。	白色砂粒多く含む。	底径10.9cm。底面粗 さ注意。
第34回	9		北端中央 6層下 位	底部	底部平ら。底面翻 肉有り。		乳頭加花押。西ナデ。 低外周に斜貝具条痕。	白色砂粒含む。	
第34回	10	36	6層下面 Po55	盤部	底面と縁外方にせ り出す。		内外面凹丁目ナデ。	微粒粒含む。	底径12cm。反戻境 界線口縫。
第34回	11	36	5層 Pa312	盤部			内外面に斜貝具条痕ナデ。 凹面周辺ケズリ状に凹 入。	微粒粒含む。	
第34回	12	36	5層	盤部	高台状の底乳。		内面貝具条痕ナデ。尚 ナデ。	白色砂粒含む。	底径11cm。二次焼 成あり。
第34回	13	36	5層 Po134	盤部	高台状の底乳。		内外面に斜貝具条痕ナデ。 凹面周辺ケズリ状に凹 入。	白色砂粒(多く)、金雲 母部に斜貝具条痕。	底径13.2cm。
第34回	14	36	5~6層	盤部	高台状の底乳。		外面白貝具条痕ナデ。尚 ナデ。	大粒の白色砂粒多く含 む。	底径7.4cm。
第34回	15	36	Po59	盤部	底面周縁外方にせ り出す。		内外面に斜貝具条痕ナデ。 底面周辺斜貝具条痕の周辺で 焼れています。(「動かない 世界の火の魔女」)。中央 はナデ。	白色砂粒含む。	底径11.4cm。
第34回	16		東岸付近 5層	盤部	高台状の底乳。		外面白貝具条痕ナデ。尚 ナデ。	大粒の白色砂粒含む。	底径13.3cm。
第34回	17		東岸付近 5層	底部	高台状の底乳。		内外面ナデ。	白色砂粒少數含む。	底径10cm。
第35回	1	37	東岸付近 5層	洗鉢	口縁附近に内湾。	無文。	外面白貝具条痕ナデ。	白色微粒砂粒含む。	復元口径30cm
第35回	2	37	東岸付近 5~6層	洗鉢	口縁内湾。口縁や 把手厚。	無文。	内外面ミガキ。	白色砂粒。表面多く含 む。	
第35回	3	37	東街 5~6層	洗鉢	口縁内湾。	無文。	外面白貝具条痕。尚 ナデ。内面斜貝具条 痕ナラ。	大粒の白色砂粒含む。	
第35回	4	37	東岸付近 5~6 層	洗鉢	底部平坦? 口縁 やや外反。内面に 凹。	無文。	外面白貝具条痕ナデ。尚 ナデ。内面斜貝具条 痕ナラ。	大型の白色砂粒含む。	底径13.3cm。
第35回	5	37	北端中央 5層	洗鉢底部	平底		内外面ミガキ。底外面 ナデ。	白色砂粒含む。	底径9cm。
第35回	6	37	東岸付近 5層		底部に近い部分。		外面白貝具条痕。内面斜貝 具条痕。	大粒の白色砂粒含む。 下部は滑り跡。	

第8表 SR1出土石器・土製品観察表

堆積 番号	遺物 番号	回数	測定・ 出土地点	器種	石 材	色 調	法 量 (cm) 長さ 幅 厚さ	重 量 (g)	特 徴
第35回	7	37	北端中央 5~6層	打ひき石斧	河原石	灰(やや緑色)	6.4 3.5 1.3	50	側面に斜貝具条痕(使用痕)。
第35回	8	37	5層	刃切石鋸	河原石	灰白色	6.4 2.7 1.6	35	
第35回	9	37	北部 5層	剥片	河原石?	灰色	7.1 1.1 0.7	5	自然模の球體?
第35回	10	37	東岸付近 5層	中石	鷹石	灰(やや緑色)	10.5 9 5.9	815	用途未明瞭。
第35回	11	37	北端東西ペレット 5~6層	打製石斧	安山岩 A	灰褐色	6.3 5.2 2.7	115	側面に刀痕、研磨痕。基部に近い部位。熱熱?
第35回	12	37	東西ペレット 5層 Po115	打製石斧	テイサイト ~汚陥岩	灰(やや緑色)	8.5 5.1 1.6	81	刃部に使用痕。
第35回	13	37	5~6層	刃石・磨石	刃石	灰(やや緑色)	10.4 9.2 4	499	側面に刀痕。表面に刃痕。表裏に研磨痕。
第35回	14	37	北端東西ペレット 5~6層	打製石斧	安山岩 B	灰(やや緑色)	11.6 6 2.4	233	側面削痕。刃部磨滅なし(刃部再手)。
第35回	15	37	5~6層	打製石斧	安山岩 A	灰(やや緑色)	14.1 6 1.4	183	使用痕なし。漆面。主要側面顔面大きず残る。側 面一部に剥離痕。
第36回	1	37	5~6層	石板	サヌカイト	墨灰色	5 9.4 2.5	104	一面上に墨状の吸収。金山産?
第36回	2	37	5層	石刀?	安山岩 A?	灰(やや緑色)	6.6 3.3 1.8	72.2	研磨跡。刃部磨滅なし。
第36回	3	47			土質				下部に大きな凹み。

\*は中科院崔秉史の鑑定による。安山岩 A・Bは第5章2秒参照。

れる。14の刃部には使用痕がなく、刃部が再生されたと思われる。15の右面には大きな剥離面があり、側縁には一部に打痕が観察できる。

第36図1はサヌカイト製の石核である。一面に礫面が残り、礫面は層状をなしている。

第36図2は、断面梢円形ないしは長方形の磨製石器である。非常にきれいに仕上げられている。断面形が長方形であることから、石刀の可能性を考えた。

第36図3（岡版47）は、器種不明の土製品である。上偶などの造形物の破片なのか、焼粘土塊なのかは判断できなかった。平面形は緩く湾曲し、断面形は円形である。一面の下部に長軸に斜行するように大きな抉りが施されている。

### 3. S R 2 出土遺物（第37図～第40図・岡版38～40）

後期初頭上器（第37図1・2）ともに中津式で、1は沈線のみで、2は磨消繩文で意匠を描く。1の波頂部に短沈線が引かれている。

後期前葉土器（第37図3～12）3は内外面が肥厚し、肥厚部に短沈線状の刺突文列が施される土器で、屋敷式と思われる。波頂部内面に弧状の沈線文が描かれている。

4～6・8は小池原上層式である。6・8はRL繩文が施されるが、それ以外は沈線文のみで施文される。8は橋状把手がつく。

7・9～11・16は、錐嶺式である。口唇が肥厚し、沈線文のみで文様が描かれている。

後期中葉土器（第37図12～15・17～第39図4・第39図8・10）第37図12～14は、彦崎K2式あるいは四元式に似た土器である。12は口縁が屈曲する器形で、重孤文が描かれている。13は重孤文に直線文が取りつく意匠が描かれた胸部片である。14は頸胴部境界に段を設け、胴部にRL繩文が施された鉢形土器である。

第37図18・22・25・27は、四元式または彦崎K2式に近く、西平式・太郎迫式にも組成する可能性がある。25は真正の磨消繩文だが、蛇行状の意匠は西平式・太郎迫式に似る。27は沈線文のみで文様が描かれた土器で、後期末の可能性もある。

第37図36～40・第38図1・2・26・31～33は、彦崎K2式または元住吉山1式に似た土器である。第37図36・38は巻貝による疑似繩文が、第38図32はRL繩文が施されている。そのほかは沈線文と刺突文列だけが施される土器である。

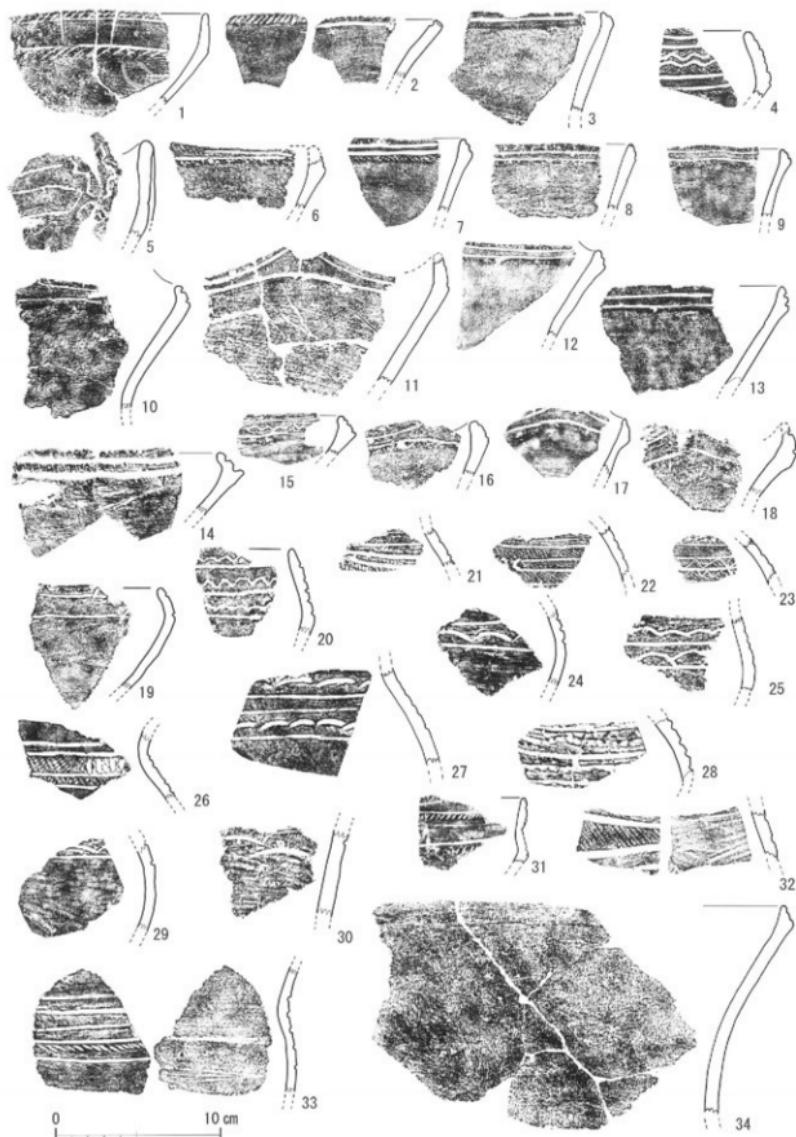
第37図23・24・28～35・第38図3～25・27～30・34・第39図1～4は、西平式または太郎迫式である。深鉢、鉢は口縁部が短く屈曲し、胴部が張る器形が多い（第39図4など）。口縁部がやや長めのもの（第37図34・35・第38図14など）も同類に含めたが、時期幅があるかもしれない。浅鉢は口縁部が長く屈曲する器形である（第37図20・第38図19・20など）。文様は、蛇行文（第37図20・21・30・33など）や連孤文（第38図24・25・27・29・30など）が目立つ。第38図22は、胴部に二字状の対向孤文がみられる。第37図19・24・29・第38図6・7などはRL繩文、第38図21・29・30などは巻貝による疑似繩文が施されているが、沈線文のみ描かれるものが多い。

後期後葉土器（第39図5～16・19）凹線文とそれに近いものを集めた。口縁部と肩部に横走する意匠が多いが、6は四点文に取り付く区画意匠が、7は頸部に斜行意匠が描かれている。扇状圧痕文はみられないが、13は垂下短沈線が引かれており、扇状圧痕の代替と思われる。19は内面に沈線文と口唇部に二枚貝刺突文列が施される土器で、やや古いかもしれない。

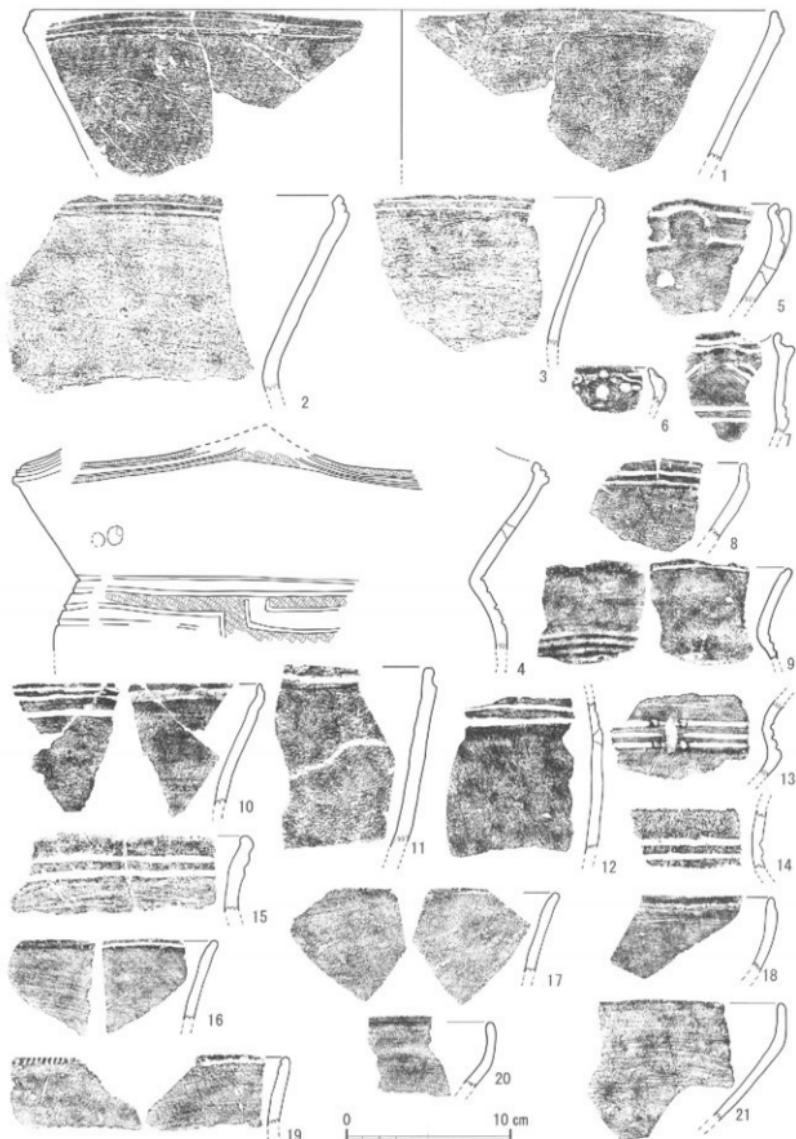
後期無文土器（第39図17・18・20～21・第40図1～7・9・10）第39図18・20・21は、無文浅鉢で、内外面ていねいな調整が施されている。第39図17・第40図4～6



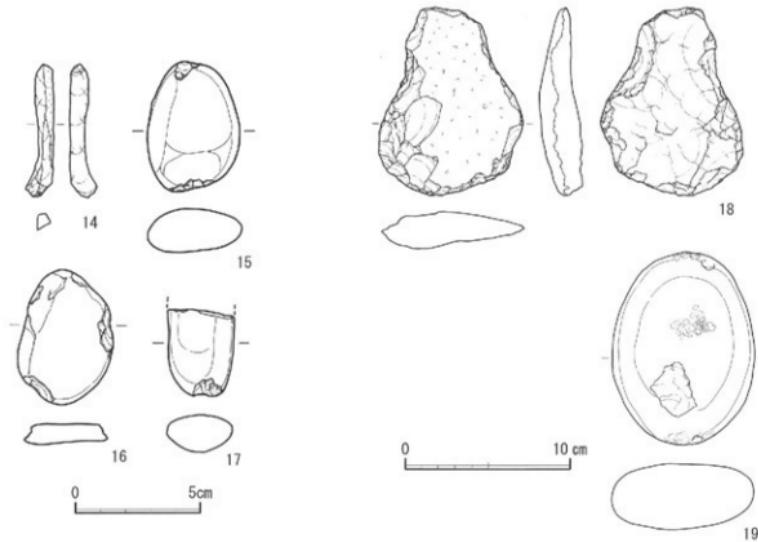
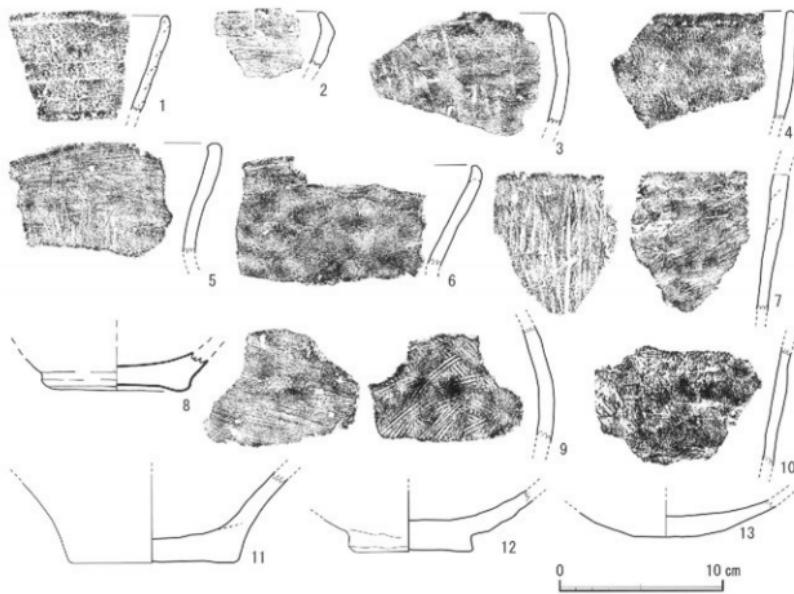
第37図 SR2出土遺物(1)



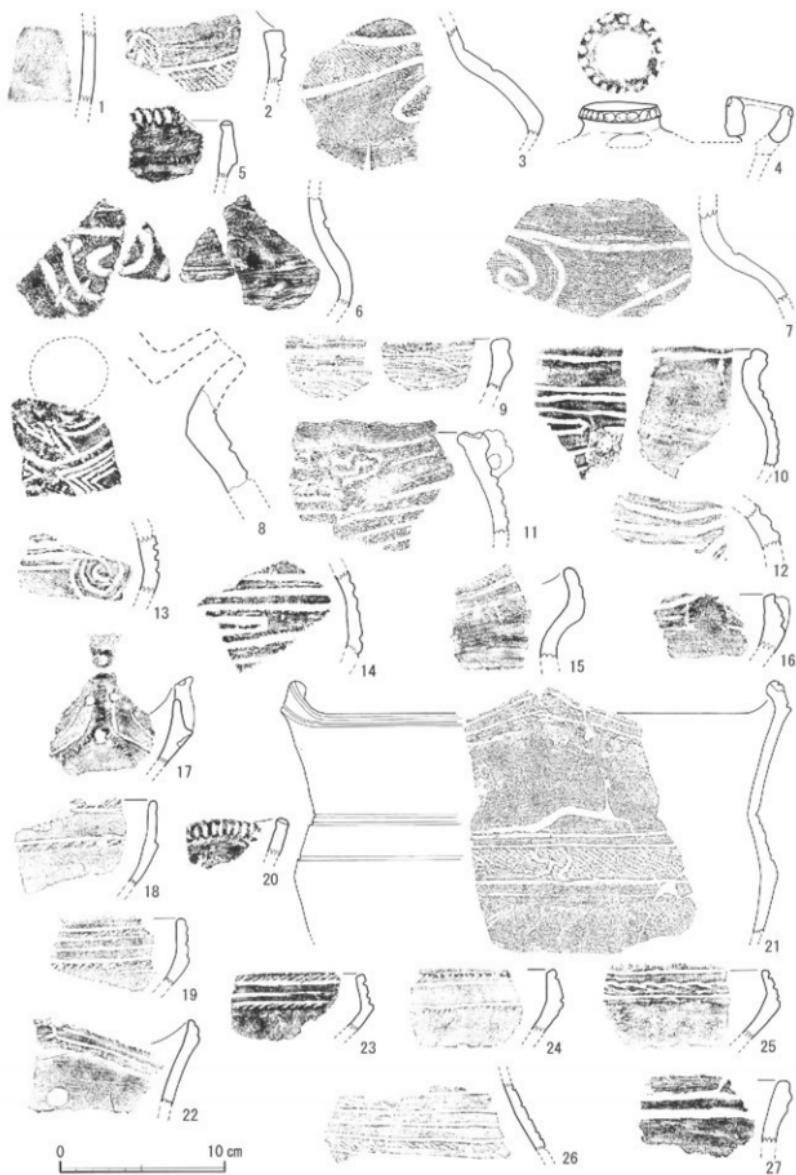
第38図 S R 2出土遺物(2)



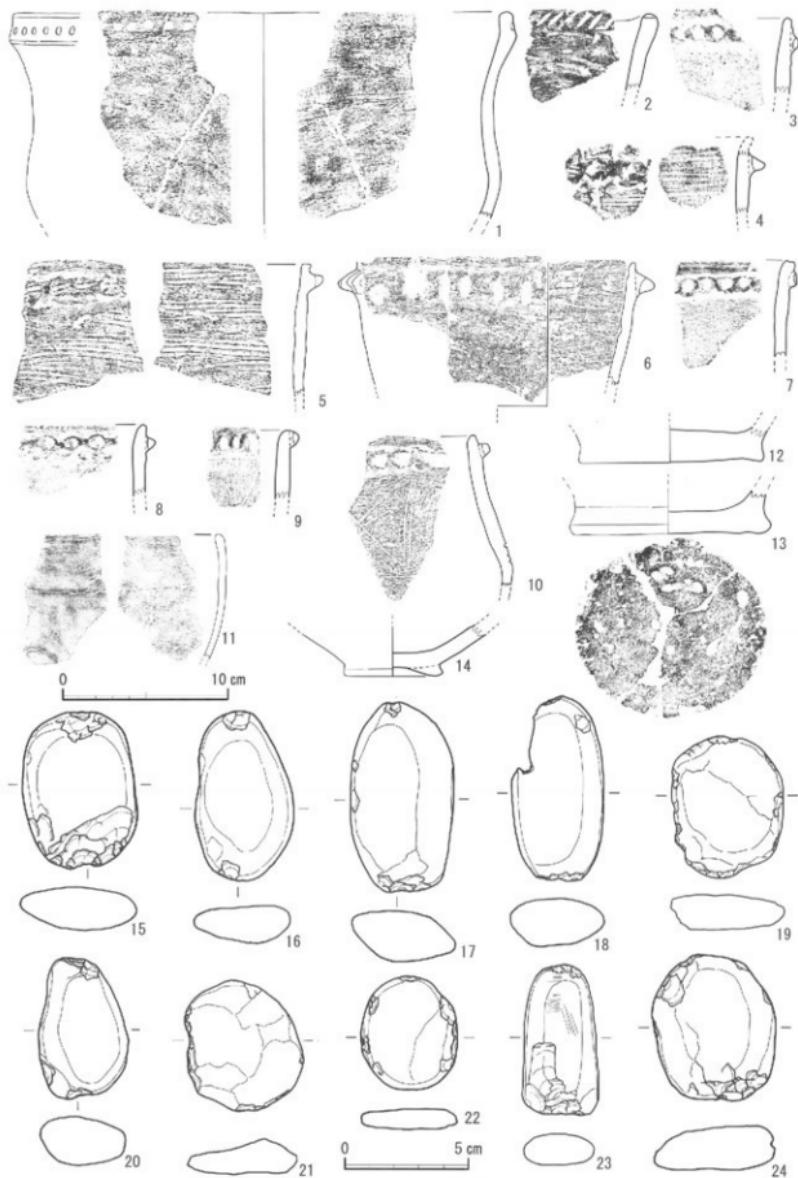
第39図 SR 2出土遺物(3)



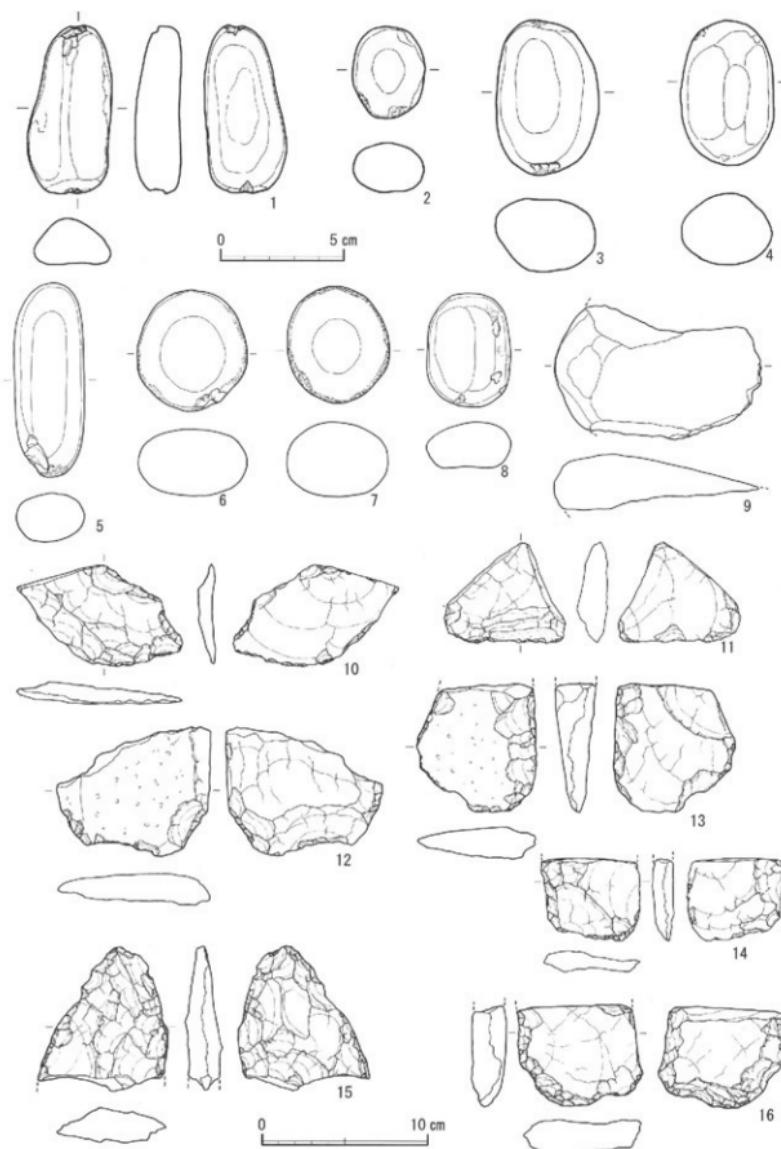
第40図 SR2出土遺物(4)



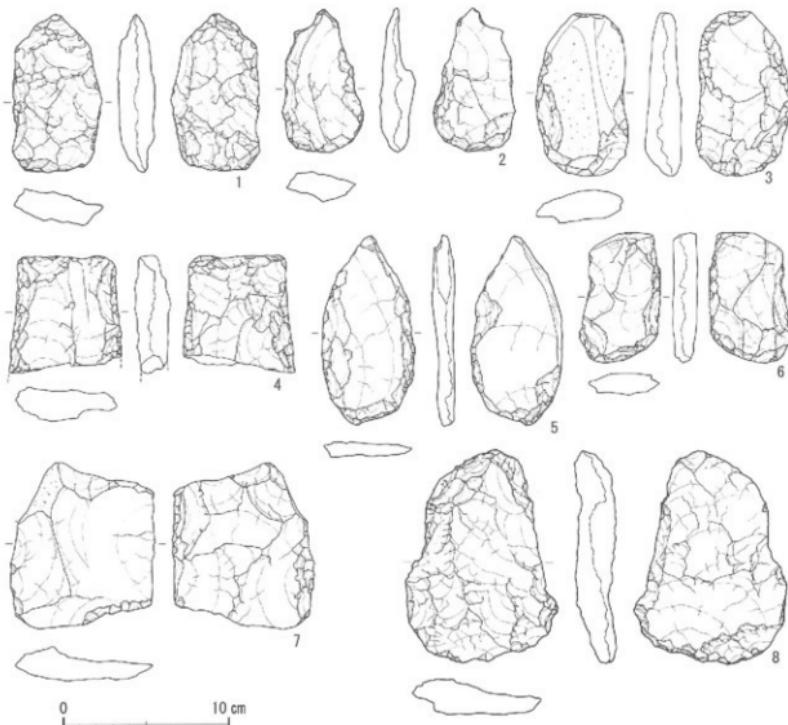
第41図 F区出土遺物(1)



第42図 F区出土遺物(2)



第43図 F区出土遺物(3)



第44図 F区出土遺物(4)

は精製無文深鉢である。他は粗製無文深鉢で、第40図1の外面には粘土紐接合痕が残る。同図2の口縁部は短く屈曲している。同図7は外面卷貝条痕が顕著、同図10は内外面ナデ調整の土器である。同図9は卷貝条痕(外面)と二枚貝条痕(内面)が併用されている。

底部(第40図8・11~13) 8はやや上底風で、浅鉢の底部と思われる。11・12は平底で、12は円盤状に厚く作られている。11の底外面には砂粒の圧痕が顕著にみられる。13は丸底である。

石器(第40図14~19) 14は端部に微細剥離がみられる片刃で、刃器等の欠損品かもしれない。15~17は石錘で、15・17は打欠き、16は敲打による。18は打製石斧で、左面に礫面、右面に主要剥離面を大きく残す。刃部に使用痕と思われる磨滅が観察できる。19は磨石・叩石で、両端に打痕、表面に擦り痕がみられる。

4. F区出土遺物(第41図~第44図、第53図~第54図 図版41~43) F区出土ではあるが、出土地点が特定できないものをここに掲載した。

後期初頭土器(第41図1~3・第53図5) 第41図1は滑石混入土器である。内面に原体不明の条痕がみられる無文土器で、阿高式の可能性がある。

第41図2・3・第53図5は中津式である。第41図2は深鉢で口縁に沿って帶縄文が描かれる。

第9表 SR2出土土器観察表

件目 番号	遺物 番号	図版	注記 出土形式	器 形	文 席	認 定	胎 土	備 考
第37回 1	38	南端 6層上面		波状口縁。	沈底文(桔梗茎葉文)。波状口縁に波状底。	外面部具条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第37回 2	38	南西部6層			上文(沈底文 R)。	内外面具条痕+ナデ。	白色砂粒、白色多く含む。	
第37回 3	38	南西部6層		口縁削平。内外に波状底。	波状底に直角状文、内外面に波状底。	外面部具条痕+ナデ、内面部具条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第37回 4	38	6層		口縁削平。底部へ外反。	人字彫。	内外面ナデ。	白色砂粒、白色含む。	
第37回 5	38	4層下層		口縁削平。底部へ外反。	沈底文を有する、クランク状文。	内外面ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第37回 6	38	南西部6層		口縁削平。底部へ外反。	直角状文。右側に竹节状刻(真珠項垂形)。	内外面ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第37回 7	38	6層上面		口縁削平。底部へ外反。	外面部具条痕にランク状文。内面に山並具条痕+ナデ。	内面山並具条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第37回 8	38	南西部6層		口縁削平。底部へ外反。構造把手。	把手を取り落すように沈底文。底消溝文(鉢)。口縁内面に沈底文。	内外面ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第37回 9	38	6層		口縁削平。底部へ外反。	口縁内面に沈底文。	内外面ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第37回 10	38	中央部6層下面	深鉢	口縁削平。底部へ外反。	口縁に對向する沈底文。底部に沈底。	外面部具条痕+ナデ、カエル目具条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。黑色状の鉄物含む。	
第37回 11	38	南西部5~6層		脚部折断。	多量沈底による水平及び平行意匠。	外面部ナデ、カエル目具条痕+ナデ。	白色砂粒含む。	
第37回 12	38	南西部6層		底部へ外反。口縁削平。	人字彫。沈底文に輪廓文。	内外面ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第37回 13	38	南端 6層上面		脚部へ外反。	弧状要匠に直角文をりつく。	外面部ナデ。内面直角文+ナデ。	白色砂粒含む。	
第37回 14	38	南西部6層	深鉢	直角に段。脚部折断。	純文(鉢)。	外面部ナデ。	白色砂粒、金雲母等含む。	
第37回 15	38	南端 6層上面		脚部内凹。	底面文。軒行文。	沙的三方ナ。内面ナデ。三方ナ。	白色砂粒含む。	
第37回 16	38	4層下層			沈底文。右側は斜行沈底文。	外面部ナデ。内面直角文。	白色砂粒含む。	
第37回 17	38	4層下層		口縁削平。底部へ外反。	底面文。軒行文。	外面部直角条痕+ナデ。内面ナデ。	白色砂粒含む。	
第37回 18	38	4層下層		口縁削平。底部へ外反。	長方形直文。	内外面ナデ。		
第37回 19	38	6層上面		口縁削平。	底面文(鉢)。(課文施文後に沈底。	外面部ナデ。内面直角文+ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第37回 20	38	6層	浅鉢	口縁削平。	直角底文(鉢)。(課文)。平行・旋行沈底文。	外面部ミガキ。内面口縁部分に直角ナ。内面ナデ。	白色砂粒含む。	38-4と接合。
第37回 21	38	6層上面		手取る。	平行・旋行文。平行沈底文。	内面直角文+ナデ。カエル目。	白色砂粒多く含む。	
第37回 22	38	6層		經波狀口縁?	口縁内凹。	内外面具条痕。	内外面具条痕。	
第37回 23	38	4層下層			押し引き状の刻対?	直角底文(鉢)。直角底文。	外面部直角ナデ+ミガキ。	白色砂粒含む。
第37回 24	38	南端 6層上面		脚部・脚部屈曲。	底面文(鉢)。底面文。	内面ミガキ。内面ナデ+ミガキ。	浅黄色含む。	
第37回 25	38	試掘15~5~6層		内済する器。	底面文(鉢)。底面文。	外面部ミガキ。	白色砂粒、金雲母多く含む。	
第37回 26	38	6層	深鉢	強弱筋屈曲。	底面文(鉢)。直角底文(鉢)。刻文例(二枚目)。	内面直角文+ミガキ。内面ナデ。	白色砂粒含む。	
第37回 27	38	6層上面	深鉢	口縁削平。	沙的文。	外面部ナデ。内面直角文。	白色砂粒含む。	
第37回 28	38	6層上面	深鉢	脚部内凹。	沈底文。	外面部ミガキ。内面ナデ。	白色砂粒含む。	
第37回 29	38	4層下層	深鉢	脚部内凹。	底面文(鉢)。底面文。	内面ミガキ。内面直角文。	白色砂粒含む。	
第37回 30	38	南端 6層上面	深鉢	直角底文。底面文(鉢)。	直角底文。底面文(鉢)。	外面部ミガキ。	白色砂粒含む。	
第37回 31	38	南端 6層上面		縦條文?	(鉢)。	内面直角ナデ。	白色砂粒含む。	
第37回 32	38	4層		口縁削平。	底面文(鉢)。直角底文(三方ナ。直角底文)。刻文例(二枚目)。	内面ナデ。内面直角文+ナデ。	白色砂粒含む。	
第37回 33	38	南端 6層上面		口縁削平。	沙的文。	外面部ナデ。内面直角文。	白色砂粒含む。	
第37回 34	38	6層上面	深鉢	口縁削平。	口縁と底面部に沈底。	外面部直角文+ナデ。内面直角文。	白色砂粒含む。	
第37回 35	38	6層	深鉢	脚部内凹。	底面文(鉢)。	内面直角文+ナデ。	白色砂粒含む。	
第37回 36	38	南端 6層上面	汁口	底部凸出。	底面文。底面文(鉢) (軒行文)。・昔晉文(直角底文)。	内面直角文+ナデ。	白色砂粒、電母等含む。	38-38は接合。SR1の27-17と同一個体の可能性。
第37回 37	38	南端 6層上面	深鉢	脚部内凹。	直角底文。	外面部直角文+ナデ。内面直角文。	白色砂粒、電母等含む。	
第37回 38	38	5~6層 F99	汁口		脚部に留め彫。沈底未満に凹点。下部に直角底文(二枚目)。	外面部ミガキ。内面直角文。	白色砂粒多く含む。	36-38は接合。SR1の27-17と同一個体の可能性。
第37回 39	38	4層下層		口縁屈曲。波状凸出。	左側に小さな凹状文(直角底文)。右状直角底文(直角底文)。底面文(直角底文)。	外面部直角文+ナデ。ミガキ。	白色砂粒多く含む。	37-39は接合。同一個体の可能性。
第37回 40	38	6層上面		口縁屈曲。	波状底文(直角底文)。直角底文。	外面部直角文+ナデ。	白色砂粒、露母含む。	36-38は接合。SR1の27-17と同一個体の可能性。
第38回 1	38	4層		口縁屈曲。	沈底文+二枚目刻状刻み目文。	内外面ミガキ。	白色砂粒多く含む。	
第38回 2	38	4層下層		口縁平底。	口口口+一枚目刻状刻み目文。	内外面直角文。	白色砂粒含む。	
第38回 3	38	4層下層		口縁削平屈曲。	口口口+直角底文。	内外面直角文。	白色砂粒含む。	
第38回 4	38	4層下層		口縁削平。	底面文(鉢)。直行文。	内面直角文。	白色砂粒含む。	
第38回 5	38	南端 6層上面		口縁削平内凹。	「ノ」字状の彫痕。口縁に直角底文。直角底文。	内外面直角文。	白色砂粒含む。	37-20と接合。

標印 番号	遺物 番号	回版	注釈 出土地点	器種	圖形	文様	施鑿	施土	備考
第36回	6	38	6層上面	口縁短く屈曲。 鋼文(RL)・純正透彌文。			内外面三ガキ。	白色砂粒、金雲母含む。	
第38回	7	38	6層上面	口縁肥厚。 離透彌文？ (RL)			外面部具条痕+ナデ。 内面丁寧なナデ。	白色砂粒含む。	
第38回	8	38	6層上面	口縁短く三角形。 鋼透彌文。			外面部三ガキ。	白色砂粒多く含む。	
第38回	9	38	6層	口縁短く屈曲。 鋼透彌文 (RL)。			外面部三ガキ。 内面丁寧なナデ。 金雲母含む。	白色砂粒含む。	
第38回	10	38	6層上面	頭部くびれ。 口縫短く屈曲。 波状口縁。			外面部三ガキ。 内面ナデ。	石英粒多く含む。	外にスス付。
第38回	11	38	4層	口縁短曲。 波状口縁。			外面部具条痕。 内面条痕+ナデ。	砂粒多く含む。	
第38回	12	38	南壁6層上面	口縁肥厚、短く屈曲。 口縫短く屈曲。		二枚貝透彌文+波彌文。 摺接縫は隙縫？	外面部三ガキ。 内面ナデ。	白色砂粒、電母等透彌文多く含む。	
第38回	13	38	4層下層	深鉢？	口縁短く屈曲。 銀透彌文2条。		外面部三ガキ。 内面新具条痕+ナデ。	金雲母。 白色砂粒多く含む。	3-1と同一個体
第38回	14	38	5~6層	口縁短く屈曲。 直線文。			内外面部具条痕+ミガキ。	白色砂粒含む。	
第38回	15	38	南壁付近4層	浅鉢	口縁短く屈曲。	波彌文。 波頂部に小さな円形透彌文。	外面部三ガキ。	白色砂粒含む。	
第38回	16	38	南壁付近4層	鉢	口縁短く屈曲。 波状口縁。	二枚貝透彌文+波彌文。 摺接縫は隙縫？ (繩文の司紋？)	外面部三ガキ。 内面ナデ。	白色砂粒含む。	外にスス付。
第38回	17	38	南壁6層上面	鉢？	口縁肥厚。	波彌文？ 疑似透彌文？	外面部三ガキ。 内面新具条痕+ミガキ。	白色的砂粒多く含む。	
第38回	18	38	4層	口縁短曲。 波状口縁。		波彌文部に垂下短次彌文(茎部具条痕)。 波彌文2条。	外面部三ガキ。	白色砂粒多く含む。	
第38回	19	39	4層下層	浅鉢	口縁短く屈曲。	直線文。	外面部具条痕+ミガキ。	白色砂粒含む。	
第38回	20	39	4層	浅鉢	口縁短く屈曲。	波彌文+直線文が3段。	外面部ナデ。 内面新具条痕+ナデ。	白色砂粒含む。	
第38回	21	39	6層上面			唐南透彌文(巻貝透似彌文)。	外面部ナデ。	白色砂粒含む。	
第38回	22	39	4層下層			唐南透彌文 (RL)。 向右旋文。	外面部三ガキ。	白色砂粒多く含む。	
第38回	23	39	4層下層			唐南透彌文 (RL)・平行弦文。	外面部丁寧なナデ。	白色砂粒。 金雲母等透彌文多く含む。	
第38回	24	39				唐南2重透彌文2段以上 (上端に唐南文の下端通り)。	外面部具条痕+ナデ。 内面ナデ。	白色砂粒含む。	
第38回	25	39	4層	穿孔強化。		蛇文+二枚貝透彌文2段以上重ね。	外面部具条痕+ナデ。 内面ナデ。	砂粒多く含む。	
第38回	26	39				頭部くびれ。 頭部透彌文 (RL)。 部分的に垂下する短張る。	外面部丁寧なミガキ。	白色砂粒含む。	
第38回	27	39	南壁6層上面			頭部くびれ。 頭部透彌文+直線文。	外面部丁寧なミガキ。	白色的砂粒含む。	
第38回	28	39	4層	頭部張る。		波彌文。 垂下引し文 (平行文)。	外面部三ガキ。	金雲母。 自然物粘り物。	
第38回	29	39	4層	頭部内渦。		透彌文。 直線文。 引し文引け状の疑似透彌文？	外面部具条痕+ミガキ。 内面丁字ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第38回	30	39	6層上面			唐南透彌文+二枚貝透彌文引目文。	外面部ナデ。 ミガキ。 内面砂粒+ナデ。	白色砂粒。 金雲母等透彌文含む。	
第38回	31	39	南壁6層上面	浅鉢	口縁、頭部屈曲。	直線文。	外面部三ガキ。 内面新具条痕。	白色砂粒含む。	
第38回	32	39	中央部4層下層			唐南透彌文 (RL)。	外面部三ガキ。 内面新具条痕。	白色砂粒多く含む。	
第38回	33	39	6層上面	浅鉢	頭部短くくびれ。 朝向法。	直線文。 番下段に刻出刺目文。	外面部具条痕+ナデ。	金雲母多く含む。	
第38回	34	39	5~6層	Po94	口縁短く屈曲。 例文。		外面部具条痕+ナデ。	磨耗粒含む。	
第39回	1	39	6層	深鉢？	口縁短く屈曲。	口縁に横彌文2条。	外面部三ガキ。 内面新具条痕+ナデ。	金雲母。 白色砂粒多く含む。	
第39回	2	39	4層下層 Po76	深鉢？	口縁短く屈曲。 口縫平底屈曲。 内面積短頭部界隈。	口縫に細彌文2条。 下端(頭部)に溝孔。	外面部具条痕+ナデ。	磨耗粒含む。	39-1・2は複合。
第39回	3	39	4層 Po46	深鉢？	口縁短く屈曲。	口縫に細彌文2条。	外面部具条痕+ナデ。 内面ナデ。	磨耗粒+ナデ。	
第39回	4	39	5層 Po102	深鉢？	口縁短く屈曲。 簡易装飾。 頭部張る。	口縫に細彌文2条。 頭部ランクク状垂糸。	外面部三ガキ。 内面新具条痕+ナデ。	金雲母。 金雲母多く含む。	補修孔2。
第39回	5	39	南壁6層上面		口縫内渦。	口縫に半円形浮文。 織維文取り回し。	外面部丁寧なナデ。 ミガキ。	白色砂粒多く含む。	
第39回	6	39	4層下層		口縁短く屈曲。	呂点文。 剣突文 (巻貝配頂文)。 取り扱い。	内面ナデ？ 外面部三ガキ。	白色砂粒多く含む。	外に丸葉子庄隣？
第39回	7	39	南壁付近4層	鉢？	口縫・頭部屈曲。	呂点文。 剣突文 (巻貝配頂文)。 取り扱い。	外面部丁寧なナデ。 内面新具条痕+ナデ。	白色砂粒含む。	
第39回	8	39	4層	鉢	口縁短く屈曲。	口縫に細彌文2条。 平底屈曲。	外面部具条痕+ミガキ。	白色砂粒多く含む。	
第39回	9	39	南壁6層上面	浅鉢	頭部屈曲。	頭部内渦。 (内面再開創部)。 口縫内面彌文。 極端に歪曲。	外面部三ガキ。	白色砂粒含む。	
第39回	10	39	6層上面	深鉢？	口縫わざかに内渦。	波彌文 (内面にスリ)。	口縫内面再開創部。 外面部ナデ。	白色砂粒多く含む。	補修孔。 F区41-16と同一個体の可能性。
第39回	11	39	4層	鉢	直口。	口縫に浅い凹透彌文。	内面ナデ。	内面ナデ。	
第39回	12	39	6層上面	深鉢？	口縫文 (内面にスリ)。	口縫透彌文内面凹透彌文。 そこに凹面透彌文文様付。	外面部丁寧なナデ。 内面新具条痕+ナデ。	白色砂粒含む。	
第39回	13	39	4層下層	深鉢？	頭部屈曲。 頭部外観。	口縫透彌文2条。 内面太い波彌文。	内面ナデ？ 外面部三ガキ。	白色砂粒多く含む。	補修孔。
第39回	14	39	4層		頭部短く屈曲。	太い波彌文 (内面再開創？)。	外面部具条痕+ナデ。 内面新具条痕+ナデ。	磨耗粒含む。	
第39回	15	39	4層下層	深鉢？	口縫短く外観。	外面部太い波彌文2条。 内面太い波彌文。	内面新具条痕+ナデ。	白色砂粒多く含む。	
第39回	16	39	南壁付近4層		口縫外反。	口縫内面3次彌文。	内面三ガキ。	白色的砂粒多く含む。	
第39回	17	39	南壁付近4層		口縫内面に細彌文。	内面三ガキ。 内面削りミガキ。	内面新具条痕+ミガキ。	白色的砂粒多く含む。	
第39回	18	39	4層下層	浅鉢	口縫内渦。 口縫平底。	口縫丁寧なミガキ。 内面新具条痕+ミガキ。	外面部丁寧なミガキ。	白色砂粒含む。	
第39回	19	39	南壁付近4層		口縫内面2枚貝刺突文列。 口縫内面剥き引状透彌文。	外面部丁寧なナデ。 ミガキ。	金雲母多量。 金雲母少量。	白色的砂粒含む。	
第39回	20	39	6層上面	浅鉢	口縫短く屈曲。	直線文。	外面部具条痕+ミガキ。	白色砂粒多量。 金雲母少量。	
第39回	21	39	4層下層	浅鉢	口縫短く屈曲。	直線文。	外面部具条痕+ナデ。 ミガキ。	白色砂粒含む。 金雲母含む。	

辨別番号	遺物番号	回数	注記 出土地点	器種	器形	文様	構造	胎土	備考
第40回	1	40	6層上部	深鉢	口縁圓形。	無文。	外面二枚貝+条底+ナデ。内面ナデ。	砂粒少量含む。	外割粘土接合痕等。
第40回	2	40	南端 4層下層	口縁短く屈曲。	無文。		外面卷貝条痕+ミガキ。内面ミガキ。	白色砂粒含む。	
第40回	3	40	南壁付近 4層	深鉢?	口縁内側に内窪。 口縁や薄い。	無文。	内外面卷貝条痕+ナデ。	白色砂粒、金霞母等微細粒含む。	外割粘土接合痕等。
第40回	4	40	4層下層	直口。	無文。		内外面ナデ。	微細粒含む。	
第40回	5	40	南西部6層	口縁部外傾。	無文繡製。		外面巻貝のミガキ+卷貝条痕。内面卷貝条痕(ハケタリタイプ)等。	白色砂粒含む。	
第40回	6	40	南端6層上面	口縁短く屈曲。口縁外格。	無文繡製。		内外面ナガキ。	淡黄色含む。	崩落跡下で非繡帶部分見出。
第40回	7	40	南西部6層	深鉢?			外面卷貝条痕。内面卷貝条痕+ナデ。	白色砂粒含む。	内割粘土接合痕等。
第40回	8	40	南壁付近 4層	深鉢?	底面や上底。		内面卷貝条痕。外面ナデ。	白色砂粒含む。	
第40回	9	40	南西部6層	胴部内窪。			外面卷貝条痕。内面二枚貝条痕。	白色砂粒含む。	
第40回	10	40		深鉢?			内外面ナデ。	白色砂粒含む。	
第40回	11	40	4層下層 Po73	底部	平底。		外側ナデ。内面卷貝条痕(「ら筋」なし)+ナデ。底面砂粒多量。	白色砂粒多く含む。	直径10.4cm、高さ1.5cm(表さず)、厚さ0.4cm(複数個)。
第40回	12	40	4層	底部	平面。内窪状に凹い。		内面卷貝条痕+ナデ。外側凹凸繩。	白色砂粒多く含む。	
第40回	13	40	4層下層	底部	丸底。		内外面ナデ。	砂粒少量含む。	

第10表 SR2出土石器観察表

辨別番号	遺物番号	回数	注記	器種	石材	色調	法 直 (cm)	特 観
							長さ 幅 厚さ	重量 (g)
第40回	14	40	南端 6層上部	削片	サヌカイト	灰色	5.5 0.9 0.6	3
第40回	15	40	南西部6層	打突式石鍬	河原石	灰色	5.3 3.8 1.8	50
第40回	16	40	5~6層	敲打式石鍬	河原石	暗灰色	3.9 5.6 0.9	27
第40回	17	40	4層上~下層	打突式石鍬	河原石	灰色	3.6 2.7 1.6	24
第40回	18	40	南西部4層下層	打突式石鍬	安山岩A	白色	11.6 8.7 2.1	216
第40回	19	40	4層下層	石刀・石磨	河原石	灰色	11.9 8.7 4.1	605

同図3は玉葱状の胴部に磨消繩文で曲線的な意匠を描く。鉢か注口上器の可能性がある。第53図5は突起で、口縁部に平行して管状に作られている。

第41図5は屋敷式である。口縁部が肥厚し、段をなす。口唇部には短沈線列が施される。

後期前葉土器(第41図4~14・第42図1) 第41図4は成立期縫帶文で、環状の突起である。上面に巻貝殻頂部による刺突文列が施され、前面には梢円形の透かし孔がある。

第41図6・7は小池原上層式である。ともに強く張る胴部片で、渦巻き状の意匠が描かれている。6・7は巻貝殻疑似繩文が施されている。

第41図10~14は錐峠式である。胴部が張り、口頭部は短く外反する(10)か、無頭(11)である。硬直した沈線文を多重に施し、部分的に渦巻き文が描かれている(12・13)。11にRL繩文が施されるほかは、沈線文のみの施文である。11には構造把手がつけられている。

第42図1は口縁部が肥厚する縫帶文土器で、津雲A式の口縁部に似る。巻貝殻頂部による刺突文列が施されている。第41図8は注口土器で、注口部周間に多重沈線による意匠が描かれている。

第41図9は口縁部がやや屈曲する無文土器で、型式不詳である。

後期中葉土器(第41図15~27) 15・17~19・23・24・26は彦崎K2式に似た上器である。屈曲した口縁部に、細い沈線文が2~3条描かれている。15は沈線の上下にRL繩文が施され、そのほかは、二枚貝による刺突文列が施されている。17は波頭部から垂下する隆帶と巻貝殻頂部による刺突文がみられる。26は胴部片で最下段の直線文間に短沈線状の刻み日文が施されている。

16・21・22・25は、西平式あるいは太郎迫式で、21・22は磨消繩文(RL)である。21の波頭部には巻貝殻頂部による刺突が、22には小さな「ノ」の字状文が附加され、25は直線文間に波状文が描かれている。

27は太い沈線文が描かれている。沈線文は一部に再調整が施されており、凹線文に近い形状である。後期後葉まで下る可能性がある。

後期無文土器(第41図20・第42図2・11) 第41図20・第42図2の口唇部に短沈線文列が施

されている。第42図11は寸胴器形で、比較的丁寧なナデ調整が施されている。

晚期突帯文土器（第42図3～10） いずれも突帯上に刻み目が施されるもので、3・7・8が「O」字形、4・5が「D」字形、6が「V」字形の刻み目文である。4・5は放射状のある二枚貝を施工具としている。

9・10は、中山B式である。頭部に沈線文が描かれ、9の突帯直下にはさらに短沈線文列が施されている。

底部（第42図12～14） 12・13は平底で、ともに後期か。13の底面には楕円形・円形の圧痕が多数みられる（図版48-7）。植物種子の圧痕かもしれない。14は浅鉢の底部と考えられる。

石錐（第42図15～24・第43図1） 第42図15～20は端部打欠き、22～24は端部敲打、第43図1は切口石錐である。いずれも河原石が利用されている。

叩石・磨石（第43図2～8） 3～5は端部に打痕が、6～8は表面に擦り痕、端部に打痕がみられる。いずれも河原石が利用されている。2は自然礫の可能性がある。

石皿（第43図9） 上面に擦り痕がみられ、平滑になっている。

刃器（第43図10・11） 10は刃部に二次剥離が、11は微細剥離がみられる。

打製石斧（第43図12～16・第44図1～8） 第43図12・13・第44図3の一面には礫面が残り、第43図12～14・16・第44図2・5・8には主要剥離面と思われる大きな剥離面が残っている。礫面の状況からは、母岩からの剥片、または適度な形の礫が利用され、この周間に調整剥離が加えられたと考えられる。刃部・側縁に使用痕と思われる磨滅が観察できるものが多いが、第43図12・第44図8には使用痕がみられない。第43図12は左圓面ではほとんど調整剥離が施されないことから、未製品の可能性がある。第44図7は刃部の調整剥離があり施されていないが、これは欠損品の再加工品かもしれない。

第11表 F区出土土器観察表

器名 番号	遺物 番号	図版	江戸 出土地点	基 礫	形 状	文 様	調 整	治 土	備 考	
第41回、1	41	東西ヘルト北 東京・中央5層					内外面ナデ。	漢石室入。		
第41回、2	41	丸窓5層	口押半円曲。	虎斑模文（HL）。鶴文→蝶模。			内外面ナデ。	褐色粒多く含む (石灰質)。		
第41回、3	41	中央5層下面	鋸	玉茎刀の刺部。	薄荷模文（RL）。刃削挫傷後に模文。	外唇ミガキ・ナデ。内面柔 張・ナデ。		白色の砂粒多 く含む。		
第41回、4	41	中央5層	丸中	笠状突起。	上面に導引削跡跡底。	企画ナデ		大粒の白砂粒多 く含む。		
第41回、5	41	北側5層	深鉢	口縁斜厚・鋸。	崩壊模様の剥離目（全体巻貝？）。	内外面ナデ。		白色砂粒含む。		
第41回、6	41	北側5層	鋸	刺部後退。	崩壊模文（巻貝崩壊文）。	外唇ナデ。内面巻貝底痕 ナデ。		白色砂粒含む。		
第41回、7	41	東西5層Po38		刺部底。	崩壊模文（巻貝崩壊文）。	小運ナデ。内面ミガキ・ナデ。		白色砂粒多く含む。		
第41回、8	41	北側5層上面	口		刃底文+多挫波模様。刃底面上に風紋 (LR)。	内面油ナデ。		石墨粒多く含む。		
第41回、9	41	南北西4層下面		口縁斜・舟形に接 尾。			内外面剥離角挫。		白色砂粒多く含む。	
第41回、10	41	東西4層下階 Po70	口縁向外・灰 斑。	口縁向外・灰 斑。	沈文。		外唇ナデ。内面巻貝底痕 ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第41回、11	41	東西4層Po3	鉢	口縁斜・舟形・ 刺部張る。堆砂把。	崩壊模文（HL）。クラック底の意匠。	外唇ナデ。内面巻貝底痕 ナデ。		白色砂粒含む。		
第41回、12	41	中央5層下面			平行波模文・円形文。	外唇ナデ。内面巻貝底痕 ナデ。		少量母多く含む。		
第41回、13	41	南北4層Po1		刺部内凹。	多量の縦によじ溝文書き（巻貝巻貝？ 一部にナツリ模）。	内面ナデ。		白色砂粒多く含む。		
第41回、14	41	西4層Po1		刺部内凹。	沈文。		外唇ナデ。内面巻貝底痕 ナデ。	白色砂粒含む。		
第41回、15	41	西半部4層上面	鉢	波状口縁。口縁削 鉢。刃底部後退に 接。	崩壊模文（RL）。沈底西凹再剥離。		外唇・口縁ミガキを含むナ デ。底部ミガキまたは巻貝 底痕。足部ケズリ模。内 面ナデ。		S R2 39-5と 同一個体の可能 性。	
第41回、16	41	西側4層Po8		口縁茎足。口西平 凹面。	主に半円形の浮文。内縁に複複文3 曲がり模。	内外面ナデ。		黒砂粒含む。	S R2 39-5と 同一個体の可能 性。	
第41回、17	41	西側4層Po24		口縁茎足。波状口 縁。刃底部から巻 底残文。	薄荷上彎。下彎。上彎に巻貝刺部削 鉢。刃底部に二段刃削鉢。沈底 底彎文。	内外面ナデ。		白色砂粒多く含 む。	S R2 37-39- 40と同一個体の可 能性。	
第41回、18	41	西側5層		口縁張り削鉢。	沈文文+刺突状乳み目文（二枚 重）。	外唇ミガキ。内面巻貝底痕 ナデ。		黒砂粒含む。	SR2 38-1と同 一個体の可能 性。	
第41回、19	41	西側5層		口縁凹曲。	沈文文+刺突状乳み目文（二枚 重）。	外唇ミガキ。内面ナデ。		白色砂粒含む。	沈底再削離。	
第41回、20	41	北側5層	縦波口縁？		短沈縁状の剥離目（全体巻貝？）。	内外面ナデ。		大粒の白色砂粒含 む。		

編 號	遺 物 名	出 土 地 點	地 形	器 種	部 形	文 様	質 感	動 土	備 考
第41回	21 41	西側4層	溝跡	甕状石器、口沿、側面彫刻、側縫部。	口縫部磨擦面圖(?)、波状部磨擦面圖(?)、半凹輪(?)、側縫部字彫刻。	口縫部磨擦面圖(?)、波状部字彫刻、半凹輪(?)、側縫部磨擦面圖(?)、側縫部字彫刻。	内外面ミガキ。	大粒の白色粒粉少 量含む。	
第41回	22 41	西側5層	縫	二縫横縫に肥厚し、波状口縫。	周縫縫文(?)、波状部に側縫文、底部下にの字彫刻状。波状磨擦面再構築。	内外面ミガキ。外蓋のミガ クが3mm。	微細粒化。	補修孔あり。	
第41回	23 41	西半部4層中面	口縫部広角。	口縫部広角。	波状父(差)、(波状男剪頭)、刺突大筋、み柱父(二枚貝?)。	外蓋表面ミガキ。外蓋磨削ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第41回	24 41	西半部4層下面	口縫部扁平。	口縫部扁平。	刺突状の孔み目(波状二枚貝?)。	内外面丁寧なナデ。	白色砂粒含む。		
第41回	25 41	西南部4層中~下層	波狀	底面口縫。	上部に押し引き状の波状文。その間に連続性。	内外面粗目余分ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第41回	26 41	西半部4層中~下層	波狀	波狀。	波状父(差)、輕括抜状の孔み目(原体不明)。	内外面粗目余分ナデ。	砂粒(多く)、金糸母含む。		
第41回	27 41	北端5層	口縫伊弉諾	波状伊弉諾。	波状伊弉諾の波状文。内面底面端部、底面正面にスリ。	内外面粗目余分ナデ。	大粒の白砂粒多く含む。		
第42回	1 41	東側1層 Po31	縫?	口縫部肥厚、側縫部外張、側縫部張る。	唇状突起部剥落。	外蓋ナデ。内蓋表面柔軟ナデ。	白色砂粒、食母含む。		
第42回	2 41	北側1層 Po31	縫	波狀大縫縫。	波狀大縫縫。	内蓋表面具備ナナデ。	白色砂粒含む。		
第42回	3 41	西半部4層下層	波狀	突起文。	0字付近-刺目(原体不明)。	外蓋ナデ。内蓋表面ナナデ。	白色砂粒含む。		
第42回	4 41	光明院中央 4層下 下	波狀	0字刻み突起文。	0字突起文、底体サルボウタライ?、新形に波状下凹形。	内外面二枚貝表面(サルボウタライ?)。	白色砂粒含む。		
第42回	5 41	西南4層 Po23	波狀	口縫部肥厚。	口縫部肥厚(二枚貝による0字削み目)。	内外面二枚貝表面。	大粒の白砂粒含む。		
第42回	6 41	西南4層中~4層	波狀	口縫部削形。	刺目表面文(?)。	内外面具備ナナデ。	白色砂粒含む。		
第42回	7 41	西端部4層下層	波狀	突起文。	突起文、突起部に0字削み目。	外蓋ナデ? 内蓋表面具備ナナデ。	砂粒(多く)含む。		
第42回	8 41	西半部4層中面	波狀	突起文。	0字表面目。	内蓋表面ナナデ。	白色砂粒含む。		
第42回	9 41	西半部4層上面	波狀	突起文。	0字刻み目文、波状塗焼、斜行涂焼文。	外蓋ナナデ。	大粒の白砂粒多く含む。		
第42回	10 41	西南部4層下層	波狀	頭部凸部。	突起文(0字目)。沈縫文(顎歯)、頭部(刃部)、内蓋表面。	内外面二枚貝表面。	白色砂粒多く含む。		
第42回	11 42	東側5層 突起 色 Po28	波狀	内窓する形態。	鉛文。	内外面具備ナナデ。	白色砂粒多く含む。		
第42回	12 42	F区 東側 5層 Po27	頭部	頭部凹窓。	内窓する形態に沿り凹窓。	内外面ナナデ。	白色砂粒多く含む。		
第42回	13 42	北側5層	波狀	頭部凹窓。	内窓する形態に沿り凹窓。	内外面ナナデ。	白色砂粒多く含む。		
第42回	14 42	西側4層 Po20	南部	底台状の底部。		外蓋表面ミガキ。内蓋ミガ キ・ナナデ。	白色砂粒含む。	底面60%。	

第12表 F区出土石器観察表

預 留 番 号	遺 物 名	図版	注 記	器 種	石 材	色 調	法 量 (cm)		重 量 (g)	特 徴
							高 さ	幅 さ		
第42回	15 42	西南部4層下層	打き石鉢	河原石	灰白色	6.5	4.5	1.8	73	両端打き。
第42回	16 42	中央・西側6層	打き石鉢	河原石	灰色	6.95	4.1	1.5	67	両端打き(空洞)。
第42回	17 42	西側6層中~4層下層	打き石鉢	河原石	褐色文様、褐色(?)	7.8	4.1	2.2	101	横斜け打き溝(使用痕)?。
第42回	18 42	西南部4層中~4層	打き石鉢	河原石	褐色(?)	8.6	3.8	2.1	78	斜け打き溝。
第42回	19 42	東西ベント4層	打き石鉢	河原石	褐色	5.9	4.5	1.5	58	両端打き。
第42回	20 42	東西ベント4層下層	打き石鉢	河原石	灰白色	5.8	3.6	2.1	56	両端打き。
第42回	21 42	西側6層中~4層下層	打き石鉢	河原石	灰白色	5.4	4.7	1.4	44	一端打き、一端打き欠け。
第42回	22 42	中央・西側4層下層	打き石鉢	河原石	灰白色	4.7	3.8	0.9	26	両端打き。
第42回	23 42	中央・西側6層下層	打き石鉢	河原石	灰褐色	6.1	3.1	1.3	45	一端打き、一端打き欠け。
第42回	24 42	東西ベント4層	打き石鉢	河原石	灰褐色	6	5	1.8	78	両端打き。
第43回	1 42	東西ベント4層下層	打き石鉢	河原石	褐色	6.9	3.2	1.9	62	両端打き溝。
第43回	2 42	東西ベント4層	打き石	河原石	褐色	3.8	2.9	2	31	自然縫の可能性あり。
第43回	3 42	東西ベント4層下層	打き石	河原石	褐色	6.4	4.2	3.1	125	両端打き溝。
第43回	4 42	東西ベント4層下層	打き石	河原石	褐色	5.9	3.8	2.9	104	端部に打き、自然縫の可能性あり。
第43回	5 42	北側5層	打き石	河原石	灰白色	12	4.1	3	241	一端打き。
第43回	6 42	東西ベント4層	石刀・磨石	河原石	灰白色	7.4	6.7	4.1	294	両面に打き、表面に擦り削り痕。
第43回	7 42	東西ベント4層	中石・磨石	河原石	灰白色	7.1	6.1	4.6	276	表面に擦り痕(使用痕)。端部打痕。
第43回	8 42	東西ベント4層	磨石	河原石	褐色	7	5.2	2.9	168	側面に打痕。
第43回	9 42	東西ベント4層下層	磨石	河原石	淡褐色	12.6	7.7	3.4	355	一端に擦り痕(平面部)。
第43回	10 42	東西ベント4層下層	磨石	河原石	褐色	6.2	10	1	59	一端は削りなし。
第43回	11 42	東西ベント4層	石刀等砾物多 く含む	石刀等砾物多 く含む	灰白色	6.1	7.5	1.8	90	一方に自然縫跡、一部に縫隙残る。母岩は大きめ川石か?
第43回	12 42	中・5層	打製石片	砂岩C	やや緑色	8	9.4	1.8	177	一度は大粒縫跡。未製品?
第43回	13 42	西半4層	打製石片	安山岩C	白色	7.9	7.3	2.2	137	一面縫隙大きく残す。刃部や側面。
第43回	14 42	東西ベント4層下層	打製石片	安山岩C	白色	5	4.9	1.3	37	側面、刃部に使用痕。
第43回	15 42	東西ベント4層下層	打製石片	安山岩B	やや緑色	9	7.6	2	123	露出見られない。
第43回	16 42	東西ベント4層	打製石片	安山岩B	やや緑色	6.2	7.5	2.2	136	刃部、側面に使用痕。刃部に使済痕のない大きな川石か?
第44回	1 42	東西ベント4層下層	打製石片	安山岩C	白色	9.7	5.4	1.8	108	刃部に使用痕。一部に擦痕残る。
第44回	2 42	東西ベント4層	打製石片	安山岩B	灰や緑色	8.9	4.9	2	72	刃部擦痕。盆地凹部。
第44回	3 42	東西ベント4層下層	打製石片	安山岩C	白色	10	5.6	2.1	140	一面擦痕大きく残す。刃部、側面に使用痕。
第44回	4 42	東西ベント4層下層	打製石片	安山岩B	灰や緑色	7.2	6.8	1.8	125	基部か(使用痕なし)?
第44回	5 43	東岸北堆5層	打製石片	～泥質岩	灰	11.7	5.5	1	90	大きな剣形が煮材。刃部や底面。
第44回	6 43	中央5層	打製石片	泥質岩		8	4.9	1.3	81	刃部わずかに擦痕(使用痕?)。
第44回	7 43	東西ベント4層下層	打製石片	安山岩C	白色	10.2	8.6	2.1	196	穴後再利用。擦痕面に使用痕。一型に経年残る。
第44回	8 43	西半部4層中面	打製石片	安山岩A	灰	11.3	9.1	2	298	底面無なし。

注は中村史氏の標識による。安山岩A・B・Cには第5章2節参照。

## 第4節 D・E区の調査（第45～48図 図版16～19）

1. 土層の堆積状況（第45図） 調査区東半部のうち、一段高い部分をD区、一段低い部分をE区とした。調査前は4～5段に水田が作られており、比較的大きな段が河岸段丘の痕跡と考えられたため、これをD区とE区の境とした。調査の結果、本来の地形は北西から南東に向かって次第に低くなる緩斜面と思われ、段差は水田造成に伴うものと考えられた。D区では遺構、遺物は検出されず、E区で竪穴住居2、石圓炉2が検出された。

D区では耕作直下で黄灰色砂質土や砂礫層が検出され、遺物包含層（第45図4～5層）はE区西南部に限定的に堆積していた。竪穴住居1下部では河床礫が多く出土したことから、D・E区の地山は砂質土と礫層が互層状に堆積しているように思われた。

竪穴住居2などの遺構は、包含層下で検出された。遺構は第45図6層上面から掘り込まれているが、この層も包含層の分布とほぼ一致している。竪穴住居1の地山はやや粘質の綿まとった土層で、比較的安定しているように思われた。この部分では河床礫層があまり表れていないことから、礫群が表出した場所を避けて住居が作られたのかもしれない。

2. 竪穴住居2（第46～47図・図版17～19） E区西南で検出された。平面形は円形で、3.4m×3.4m、深さ45cmの規模である。当初、不整形に第47図5層が確認されたため（図版17）土坑などの遺構と考えて調査したが、底面で土器埋設炉が出土したことから、これが竪穴住居跡と判断された。

この時点で改めて遺構プランを精査したところ、一次堆積土と考えられる第47図6層の平面形が上述の範囲で認められ（図版17）、これが住居跡原形に近い形状と思われた。なお、当初竪穴住居2が検出された面は第47図b-b'ラインで段差を有しているが、これは南側の水田造成に伴って削平された段と思われる。

この段差部分で現表土から土層を観察することができ（第47図・図版18）、竪穴住居跡2はやはり粘質の黄色土上面から掘り込まれていることが判明した。この上位では黒味の遺物包含層（第45図5層）が堆積しており、この層を除去した上で、竪穴住居2のプランが確認されることになる。

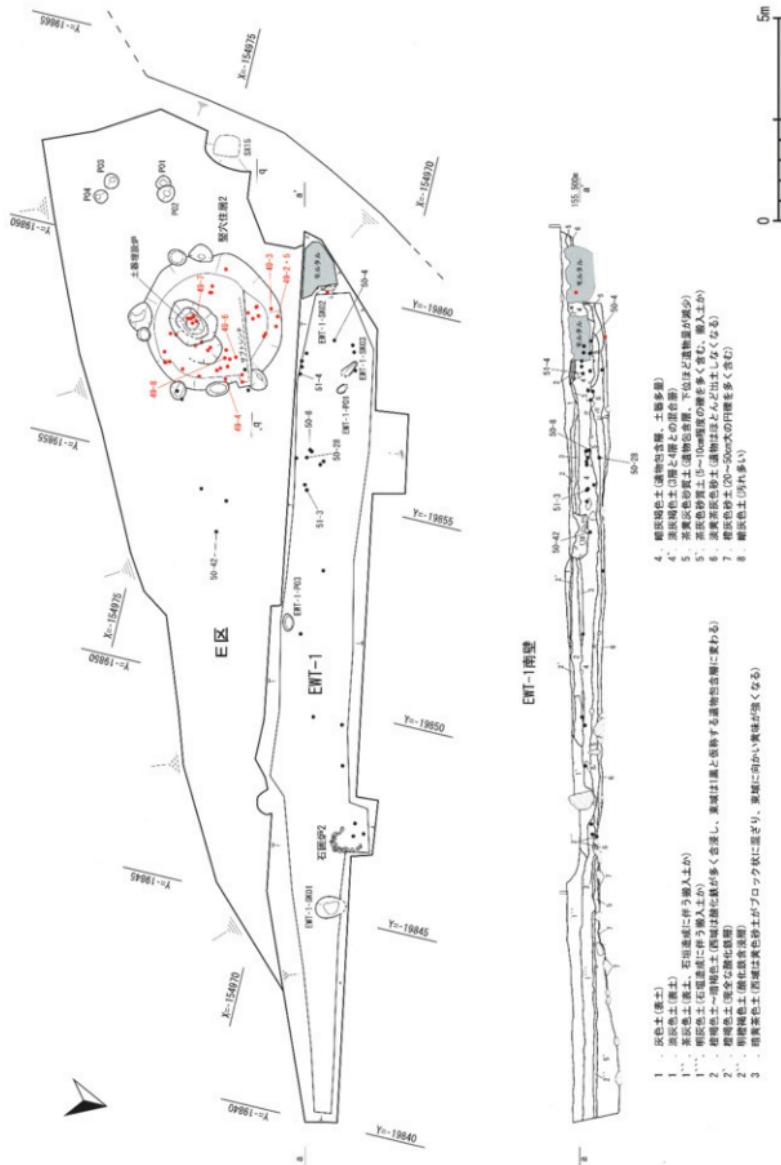
竪穴住居2では、底面南側で土器埋設炉が設置されている（第47・48図 図版18・19）。土器埋設炉の周囲では小礫が集積し東側に落込み状に土が変色していたため、この礫群が人為的かどうかに注意を払い調査を進めた。現地の観察では、礫群が水平に広がる様相を見せたことから、この部分の石や土の変色は自然堆積と判断された。竪穴住居2では、炉跡を設置するため床面の一部を掘り下げ、下位の河床礫を除去しながら土器埋設炉を設置したと思われる。

上器埋設炉（第48図1・図版19）は、平面形楕円形の土坑中央に、口縁部と底部を打ち欠いた上器が据えられていた。土坑の規模は、長軸1.6m、短軸1m、深さ15cmで、土器の径は30cmである。土器外側の土は裏込め土、内側の土は住居跡埋設時に堆積したものと考えられる。土器内の底面には円礫が出土した。これは炉底に敷かれたように思われる。

壁際で柱穴状のピットが7個検出された（第46図）。これらは壁面を取り巻く形で配置されているが、竪穴住居2と関連があるかどうかは判断できなかった。

出土遺物は、おもに一次堆積土で出土した。いずれも散在的で、とくに集中する箇所は見られなかつた。

S101出土土器（第49図・図版43・44） 1・3は元住吉山I式に似た土器である。1は注口土



第45図 E区・EWT-1遺構・遺物出土状況図 (S=1/120)

器または壺で、口縁部が屈曲し、橢円形区画文内に放射肋のない二枚貝による刺突文が施される。3は口縁部が屈曲し、無節縄文Lと沈線文が施される。調整がやや難で深鉢と考えたが、天地が逆で、注口土器または壺の胴部の可能性もある。

4は左上端に沈線で円形意匠が描かれる土器で、これも天地が逆の可能性がある。四元式に近い土器と思われる。

2は石町式の浅鉢と思われる。三角形の区画文内に縄文LRが施され、蛇行文などが描かれている。

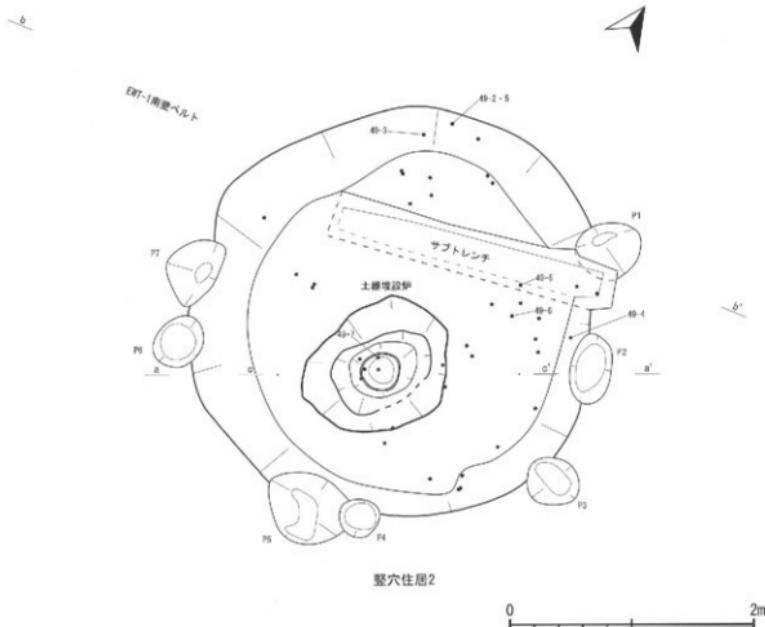
5は口縁部がわずかに屈曲する器形で、内面は凹線状に段がついている。1~4よりやや新しいように思われる。

6は浅鉢で、内外面に赤色顔料による弧状の文様が描かれている。1~4に近い時期と思われるが、小片のため詳細な時期は不明である。

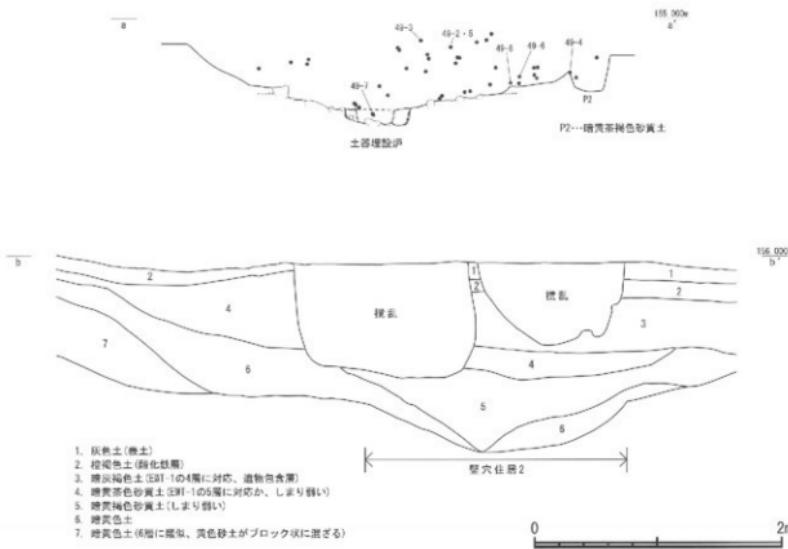
7・8は無文土器である。7は深鉢で、口縁部がやや薄く作られている。8は肩部が屈曲する器形で、浅鉢と思われる。

9は埋設炉に使用された土器である。無文粗製で、寸胴の器形である。口縁部、胴部下半は埋設時に打ち欠かれたと思われる。内面は比較的ていねいな調整が施されている。

3. 石窯炉2（第48図2・図版19） EWT-1で検出された石窯炉である。平面形橢円形を呈し、長軸75cm、短軸60cmを測る。北部ではやや大きな礫2個が使用されているが、その他は小さ



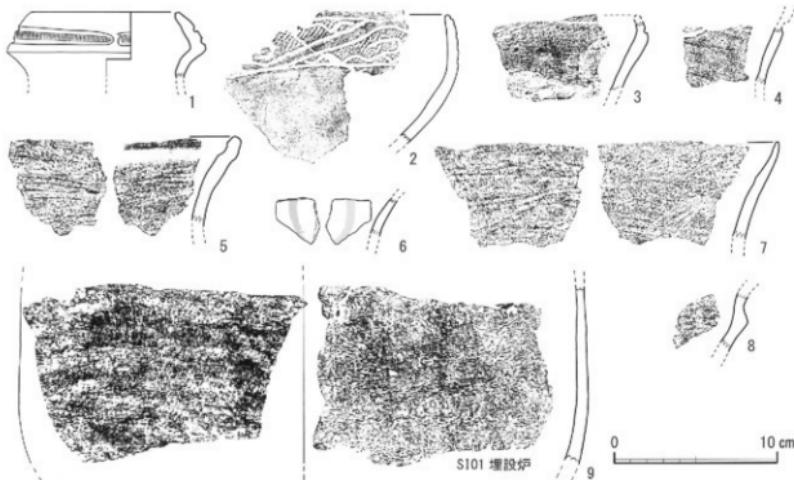
第46図 E区竪穴住居2(SI01)平面図(S=1/40)



第47図 E区竪穴住居2 断面図 ( $S=1/40$ )



第48図 E区竪穴住居2 土器埋設炉・EWT-1石圓炉2 ( $S=1/20$ )



第49図 E区竪穴住居2(SI01)出土遺物

第13表 E区竪穴住居2出土土器観察表

調査 番号	遺物 番号	直轄 地盤	注記・ 出土地点	器種	器形	文様	調査	船土	備考
第49区	1 43	4層下層	注口が豐	口縁屈曲	内側に二枚貝 刺突アリタイプ。	外縁ミガキ、内面ナデ。	微粉粒含む。	口径8.9cm。	
第49区	2 43	N41	浅鉢	口縁屈曲	磨消繩文(下段)、三角形 底辺次に平行沈線文。	外縁ミガキ。	微粉粒多く含む。		
第49区	3 43	N33	深鉢?	口縁屈曲	繩部繩文、(左の)可視性あ り。波紋。	外縁ミガキ、内面帯貝条痕 +ナデ。	白色微粉粒多く含む。	口縫にタール状の付着物。	
第49区	4 43	N17		外反。	上縁に円凹文。		微粉粒多く含む。		
第49区	5 43	N41	深鉢?	口縫わずかに屈曲。	口縫内面に目隠状のくぼ み、段。	内面ナデ、内面帯貝条痕+ナ デ。	白色微粉粒多く含む。	外縫直角直角。	
第49区	6 43	N.1	浅鉢	外反。	内外型、青色顔料で質状 模様を描く。	内面ミガキ。	微粉粒含む。		
第49区	7 43	EWT-2 番例標 記SX12 P005	深鉢	外反、口縫わずかに 内彎。	繩文。	内外帯貝条痕+ナデ。	石英・雲母含む。		
第49区	8 43	N63	浅鉢?	深鉢屈曲。	繩文。	外縫貝条痕+ナデ、内面 ナデ。	大粒の砂粒多く含む。		
第49区	9 44	SI01 樹脂設置	深鉢	寸幅無形。	繩文。	内面ナデ。		最大径17.2cm	

な磯11個以上が配されている。ここではケーブル基地の基礎が隣接して設置されていたため、面的な観察ができなかった。そのため、周囲で住居跡の痕跡は確認できず、これが住居跡に伴うものかどうかは不明である。石畳炉を構成する石の下部から、平底の土器底部が出土しており、この遺構は繩文時代後期と考えられる。

#### 4. D・E区出土遺物（第50図～第52図 図版44～46）

前期土器？（第50図1） C字爪形文を3列に配す小片で、内湾する口縫部である。羽島下層Ⅲ式であろうか。

後期初頭～前葉土器（第50図2～6） 第50図2は胴部が屈曲する浅鉢で、平行沈線文間に半円形文と刺突文が描かれている。器形は福田K2式・成立期縁帶文の浅鉢である。同6は胴部片で、磨消繩文帶で長方形区画意匠を描く。松ノ木式の胴部か。

第50図3～5は口縁部が肥厚する深鉢で、口縁形態は津雲A式に似る。沈線下あるいは沈線間に繩文が施されている。3は上部に対向する意匠、下部に半円の意匠が描かれている。4は棒状の垂下浮文が付され、5は長方形区画文とその下に短沈線文が連続している。

後期中葉土器（第50図7～32） 第50図7～10は、四元式に似る。口縁部がやや内湾し、繩文と2条の沈線文が描かれている。

同19・20は、彦崎K2式に似る。19は浅鉢、20は注口または壺である。19は巻貝回転による、20は二枚貝刺突による疑似繩文が施されている。

同11は肥厚した口縁部に羽状文が施された、型式不詳の上器である。28は単純口縁に巻貝疑似繩文が施され、石町式と思われる。12～18・21～27は西平式から太郎迫式にかけての土器で、18・21が巻貝による疑似繩文、25が二枚貝刺突による疑似繩文、12～17・22・24・26・27は繩文が施されている。32は口縁部がやや長く屈曲し、沈線が太目であることから、やや新しいかもしだれない。

後期後葉土器（第50図33～43・第51図1～8） 四線文、またはそれに準じたものを集めた。明瞭な扇状圧痕がみられないことから、いずれも九州系の凹線文土器と考えた。三万田式から御領式に相当すると思われる。第50図33・40・43などは明瞭な凹線文だが、第51図7・8などは幅狭で凹線と呼ぶには躊躇されるものもある。

深鉢は口縁部が「く」の字形に屈曲して外反気味なものが多く（第50図33～43）、第51図1のみは内傾する口縁である。浅鉢は胴部が屈曲して口頭部が長いもの（第51図3・4）と、口縁部が「く」の字形に屈曲するもの（第51図5）がある。凹線文は2条引かれるものが多く、第50図33は3条引かれている。第50図43・第51図1は凹線文が山形をなし、第51図5は凹線文上に筋錐形の凹点文が付加されている。

晩期土器？（第51図9） 口縁部がわずかに屈曲し、胴部に稜がつく無文の土器である。口縁部形態が凹線文上器口縁部の名残りを思わせることから、後期末にさかのぼる可能性もある。

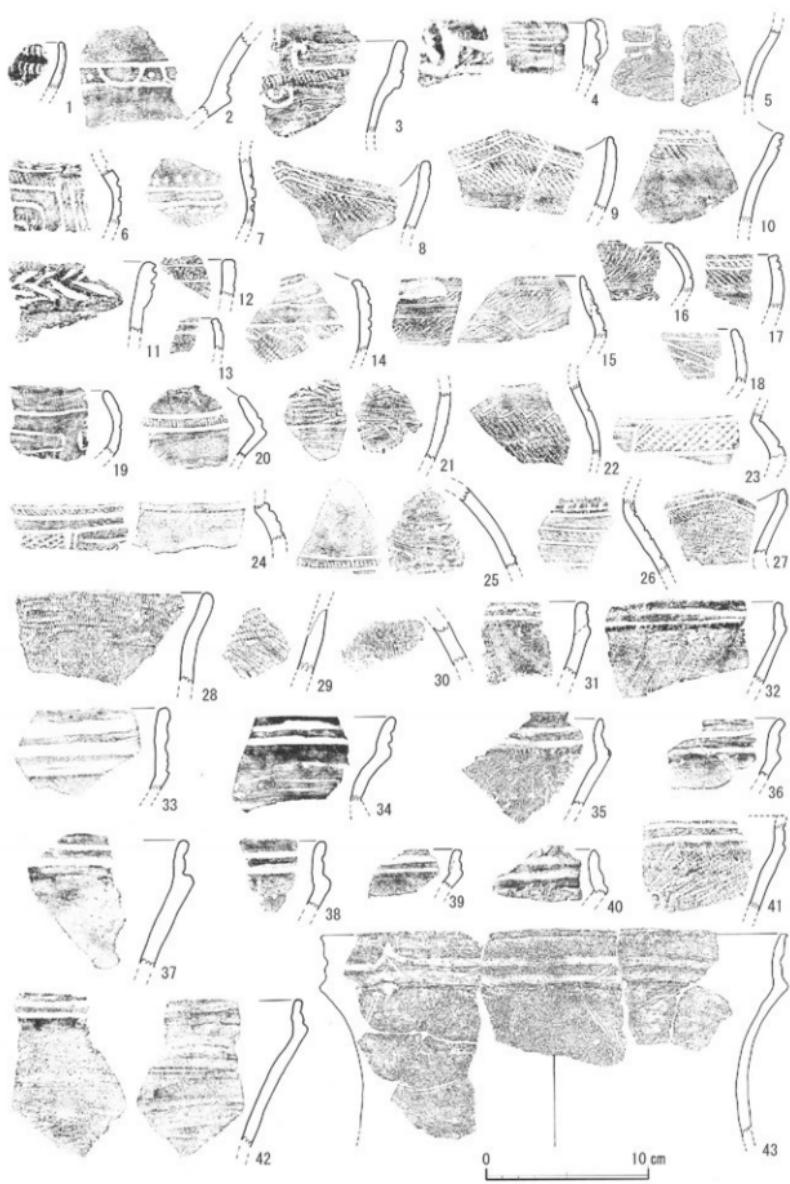
後期無文土器（第51図10） 寸胴器形の無文土器で、内面に二枚貝条痕が残る。口縁部が厚いことから、晩期まで下らないと判断した。

底部（第51図11） 浅鉢の底部と思われる。

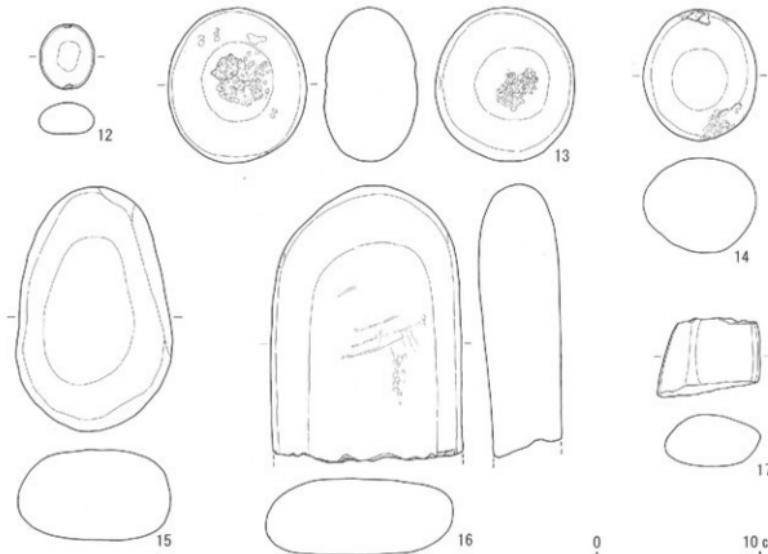
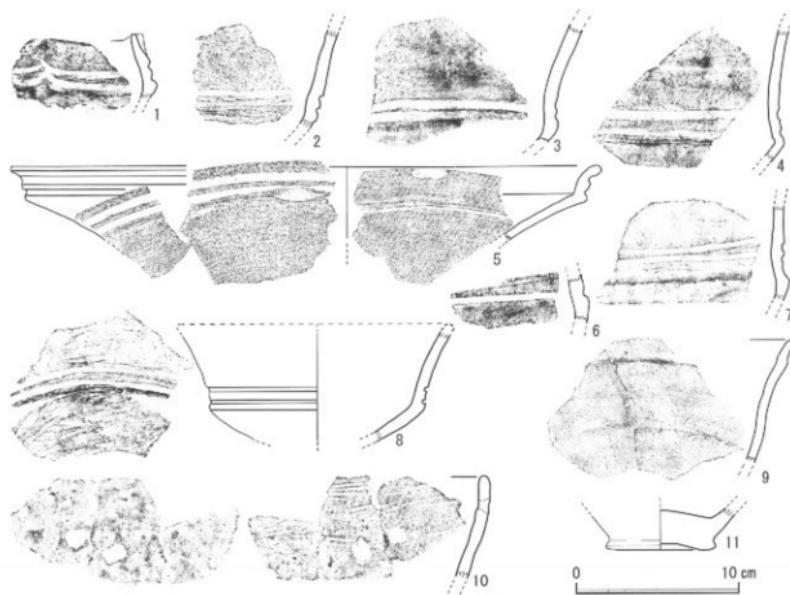
石鍬（第51図12） 両端に敲打痕がみられる。

磨石・叩石（第51図13～17） 13は両面に擦り痕・打痕、14は端部に打痕、15・16は表面に擦り痕がみられる。16は磨石としては大型で、他器種の可能性もある。17は打痕・擦り痕は確認できず、自然礫の可能性がある。

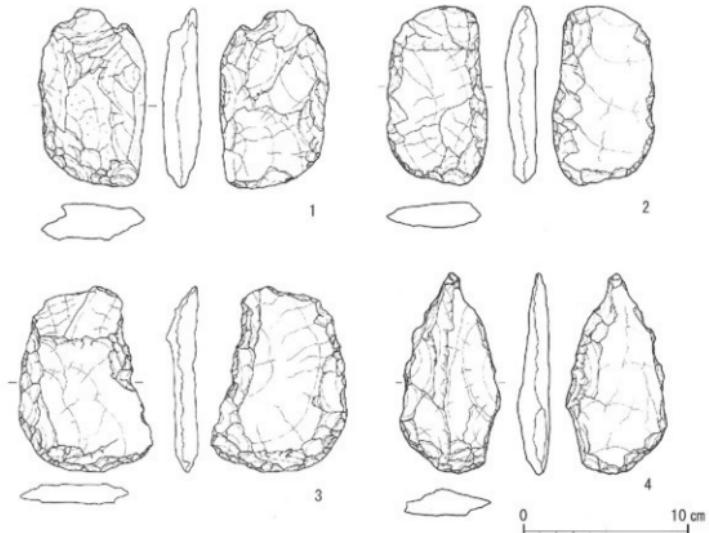
打製石斧（第52図1～4） 1は左面に礫面を、2～4は主要剥離面を一面に残す。縁辺には二次剥離が施され、刃部には使用による磨滅がみられる。



第 50 図 D・E 区出土遺物 (1)



第51図 D・E区出土遺物(2)



第52図 D・E区出土遺物(3)

第14表 D・E区出土土器観察表

種類 番号	遺物 番号	区域	記述・ 出土地点	器種	形	文様	調査	胎土	備考
第5008	1 44	DWT-1層		口縁内湾。	C字形文(?)	内外面ナデ?	白色砂岩、金雲母含む。		
第5009	2 44	DWT-1側斜面 区3層	浅鉢	直壁文間に鉗状文、 唇部脛形	内外面ナデナミナガキ。		白色砂岩、金雲母等微 粒混在。		
第5010	3 44	DWT-1側斜面 区西側3層(暗 色土)	口縁厚底。	口縁厚底。	外面部貝皿痕ナナデ。	磨砂岩(白色砂岩・金 雲母)。吉。			
第5011	4 44	DWT-1層 Poi1	口縫や内湾?	棒状の突起。端部に凹 状に凹入。縫合部に残り?	内面二枚貝痕底。		白色砂粒含む。		
第5012	5 44	DWT-1側斜面 区3~4層	深鉢	口縫内湾?	稍D字形直縁。是難文? 行手 行手向の鉗状縫。	外面部貝皿痕ナナデは ナカニ。内面部貝皿痕ナ ナデ。	大粒の砂粒含む。		
第5013	6 44	DWT-1層上面		直縁内湾。	直縁文(?)。方形直縁(?)				
第5014	7 44	DWT-1側斜面 区3~4層上面		内湾した表面。	波状文上に貝皿貝痕側面に沿 る剝離。	外面部貝皿痕。			
第5015	8 44	DWT-1層 Poi3層	深鉢	口縫や内湾。直状 縫。	波状文(?)。	外面部三ガキ。	白色砂粒粘合。		
第5016	9 44	DWT-1側斜面 区3層 黒色土	口縫内湾。	縫文(?)。直縁文(?)。直縁文 上に波状縫。	内面部ナデ。		西砂粒含む。		
第5017	10 44	DWT-1側斜面 区3~4層	深鉢	口縫やや肥厚。	縫文(?)。後に直縁文(?)。直 縁文。	外面部ミガキ。	白色砂粒多く含む。		
第5018	11 44	DWT-1側斜面 区4層	深鉢	口縫肥厚。	羽狀縫文(底面二枚貝?)。	内外面ナデ。	砂粒多く含む。		
第5019	12 44	DWT-1側斜面 区3~4層	口縫平底圓。	直縁縫文(?)。	直縁文後に波 状縫。	外面部ナデ。内面部ミガキ。	白色砂粒多く含む。		
第5020	13 44	DWT-1側斜面 区3~4層上面		口縫平切面。	直縁縫文(?)。波状縫切面。	内外面ナデ。			
第5021	14 44	DWT-1層		口縫平切面。	直縁縫文(?)。波状縫切面。	内外面ミガキ。	大粒の砂粒含む。		
第5022	15 44	DWT-1側斜面 区3~4層上面	浅鉢	波状口縫。口縫内 縫。	直縁縫文(?)。直縁文 (3~4層は絞り三段竹管、下層 は貝皿貝痕縫?)。	内面部ミガキ。	白色砂粒多く含む。赤 色砂粒付着。		
第5023	16 44	DWT-1~2層		口縫内湾。	直縁縫文(?)。直縁文 (2層は貝皿貝痕縫?)。	内外面ミガキ。	白色砂粒含む。		
第5024	17 44	DWT-1層		口縫内湾。口縫平 底。	直縁縫文(?)。直縁文 (1層は貝皿貝痕縫?)。	内外面ミガキ。	白色砂粒粘合。		
第5025	18 44	DWT-1中央~西 側斜面	浅鉢	口縫内湾。口縫平 底。	直縁縫文(?)。直縁文 (1層は貝皿貝痕縫?)。	内外面ナデ。内面部貝 皿貝痕縫。	白色砂粒含む。		
第5026	19 44	DWT-1側斜面 区3~4層		口縫内湾。	直縁縫文(?)。直縁文。	内外面ナデ・ミガキ。	白色砂粒含む。		
第5027	20 44	DWT-1側斜面 区西側3層	注口ナ ミガキ	口縫内湾。	直縁縫文(?)。直縁文。	内外面ミガキ。内面部ナデ。	磨砂岩。		
第5028	21 44	DWT-1側斜面 区4層		波状口縫?	直縁縫文(?)。	内面部ミガキ。	白色砂粒含む。		

施設 番号	遺物 番号	回取	記述・ 出土点	器種	形 式	文様	西 型	当 土	備考
第50回	22	44	EWT-1 3層	鉄張器	環状孔。	環狀文RL文後に複数した波状文。外圓ミガキ・毛貝条、波状文。	環砂粒含む。		
第50回	23	44	EWT-1 3~4層上部	鉄張	錐形。	ランク状の波状・斜格子文。	内外面共々丸。	毛貝粒多く含む。	赤色砂粒含む。
第50回	24	45	EWT-1 北側底盤 区3層	錐形	錐形内面に縁。	上部齊頭建文（R1）。磚文底文留め。	外圓ミガキナナ子。	鐵頭粒・錐形多く含む。	
第50回	25	45	EWT-1 (北側底盤 区) 3層	口沿付 錐形	錐形内面に縁。	下半部は斜格子文。	内圓ミガキナナ子。	鐵頭粒・錐形多く含む。	
第50回	26	45	EWT-1 (北側底盤 区) 3~4層	錐形	錐形内面に縁。	上部齊頭建文（R1）。磚文底文後に波状文。	外圓ミガキナナ子。	白色砂粒多く含む。	
第50回	27	45	EWT-1 中央~西 側底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文下に横文（R1）。虎地月邊。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒多く含む。	
第50回	28	45	EWT-1 西側底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文下に横文（R1）。虎地月邊。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒多く含む。	
第50回	29	45	EWT-1 中央~西 側底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文下に横文。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒多く含む。	
第50回	30	45	EWT-1 (北側底盤 区) 3~4層	錐形	口沿付錐形。	波状文下に横文。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒多く含む。	
第50回	31	45	EWT-1 3層	口沿付錐形。	口沿付錐形。	波状文。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	
第50回	32	45	EWT-1 西側底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文2条。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒多く含む。	
第50回	33	45	EWT-1 3層	深鉢	深鉢口形。	当建文3条（底面に肋脚）。	外圓ナナ子、内圓ミガキナナ子。	大粒の白色砂粒含む。	
第50回	34	45	EWT-1 西側底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文2条（内面未剥離）。	外圓錐具条痕・ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	
第50回	35	45	EWT-1 西側底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文2条（内面未剥離）。	外圓ナナ子、内圓ミガキナナ子。	白色砂粒多く含む。	
第50回	36	45	EWT-1 中央~西 側底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文（内面未剥離）。	外圓ミガキナナ子。	被砂粒含む。	
第50回	37	45	EWT-1 底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文（内面未剥離）。	外圓ナナ子。		
第50回	38	45	EWT-1 底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文。	外圓ナナ子、内圓ミガキナナ子。	大粒の粒状含む。	
第50回	39	45	EWT-1 底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文（内面未剥離）。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	
第50回	40	45	EWT-1 北側底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文（内面未剥離）。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	
第50回	41	45	EWT-1 3層	錐形	口沿付錐形。	波状文（内面未剥離）。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	
第50回	42	45	EWT-1 南側底盤 区3層	深鉢	口沿付錐形。	波状文（内面未剥離）。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	
第50回	43	45	EWT-1 南側底盤 区3層	深鉢	口沿付錐形。	波状文（内面未剥離）。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	
第51回	1	45	EWT-1 南側底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文（内面未剥離）。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	外蓋入付。
第51回	2	45	EWT-1 南側底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文（内面未剥離）。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	外蓋入付。
第51回	3	45	EWT-1 3層 Po9	錐形	口沿付錐形。	波状文（内面未剥離）。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	
第51回	4	45	EWT-1 3層 Po15	汽鉋足	汽鉋足。	波状文2条（内面未剥離）。	外圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	
第51回	5	45	EWT-1 北側底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文2条（内面未剥離）。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	外蓋入付。
第51回	6	45	EWT-1 中央~東 側底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文（内面未剥離）。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	
第51回	7	45	EWT-1 3層	錐形	男原型由・縫。	波状文2条（内面未剥離）。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	
第51回	8	45	EWT-1 3層	錐形	男原型由・口沿付 外縫。	波状文2条（内面未剥離）。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	内圓ミガキナナ子。
第51回	9	45	EWT-1 北側底盤 区3層	錐形	口沿付錐形。	波状文（内面未剥離）。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	白色砂粒含む。
第51回	10	45	EWT-1 中央~西 側底盤 区3層	錐形	寸胴錐形。	無文。	内圓ミガキナナ子。	大粒の白色砂粒含む。	
第51回	11	45	EWT-1 北側底盤 区3層	錐形 (注)	底盤の錐形。	無文。	内圓ミガキナナ子。	白色砂粒含む。	底盤6.6cm。

第 15 表 D・E 区出土石器観察表

施設 番号	遺物 番号	回取	注記	器種	基準	材 料	色 調	法 量 (cm) 長さ 幅 厚さ			特 徴
								重量 (g)			
第51回	12	46	3層中~下位	鉄石	河原石	灰色	4	3.4	2	40	角鋸跡。
第51回	13	46	EWT-1 北側底盤区 3~4 層上	鉄石	河原石	灰色	9.5	8.5	4.6	681	表面中央打抜。表面擦り痕。
第51回	14	46	EWT-1 北側底盤区 3~4 層	鉄石	河原石	暗灰色。多孔質	8	7	5.9	442	側面に打痕。
第51回	15	46	EWT-1 底盤底盤区 3~4 層	鉄石	河原石	灰白色	15.1	9.5	5.7	1166	表面に擦り痕（使用痕）。
第51回	16	46	EWT-1 南側底盤区 西側 3層	鉄石	河原石	灰白色	17	11.7	4.7	1709	表面擦れ痕。段間に薄い刻痕。堅硬な表面。
第51回	17	46	EWT-1 北 3~4 層	高石	次砂岩	淡黄色	4.8	6.3	3.2	133	表面凹凸の凹凸性あり。
第52回	1	46	EWT-1 南側底盤区 1~2 層	打製石	玄武岩	台白色	11	6.6	2.1	186	全面に使用痕。閑便化し。
第52回	2	46	EWT-1 南側底盤区 (4~5 層) 前側 3~4 層	打製石	安山岩C	白色	11	6.1	1.9	130	打製痕（使用痕）。
第52回	3	46	EWT-1 南側底盤区 3層	打製石	次砂岩	淡灰色	11.4	8.2	1.6	168	表面わずかに擦痕（使用痕）。
第52回	4	46	EWT-1 南側底盤区 3層 (注)	打製石	玄武岩B	やや緑色	12.4	5.9	1.7	128	表面わずかに擦痕（使用痕）。

## 第5節 追加資料・出土地点不明資料（第53・54図 図版46・47）

挿図作成時に漏れものと、出土地点が不明な出土遺物をここに掲載する。

第53図1～4・6・第54図2・3はS R 1、第53図5・6はD・E区、第53図5・第54図7はF区から出土した資料である。これらは、各出土地点の項ですでに紹介している。

第53図7・8・10・第54図1は、西平式または太郎迫式である。第53図7の胴部にはオ字状の対向弧文が描かれている。同7・10にはRL縦文が施されるが、第53図8・第54図1は沈線文のみの施文である。

第53図9は彦崎K2式と思われるが、口縁上部が段を設けて内傾するのは一乗寺K式に似ている。沈線文間に二枚貝による刺突文列が施されており、これを疑似縄文とみなせば文様的には元住吉山1式と共通している。

第53図11は後期無文土器である。波頂部に短沈線状の刻み目文が施されている。

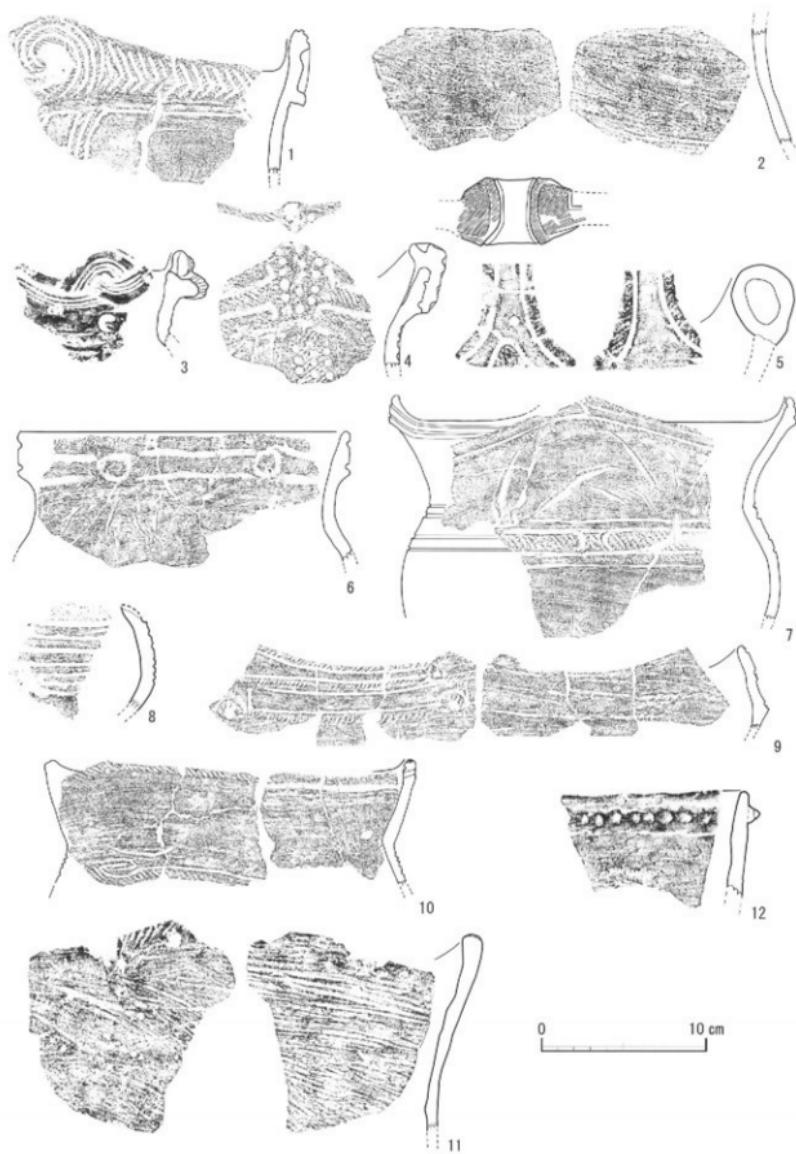
第53図12は突堤文土器で、突堤上に〇字刻み目文が施されている。

第54図6・8は石鎚、同10は剥片で、いずれもサヌカイト製である。同11・12は打製石斧で、12の刃部には使用痕と思われる磨滅がみられるが、11には磨滅がみられない。13は礫面が残るサヌカイトの剥片で、端部に使用痕と思われる微細剝離がみられる。

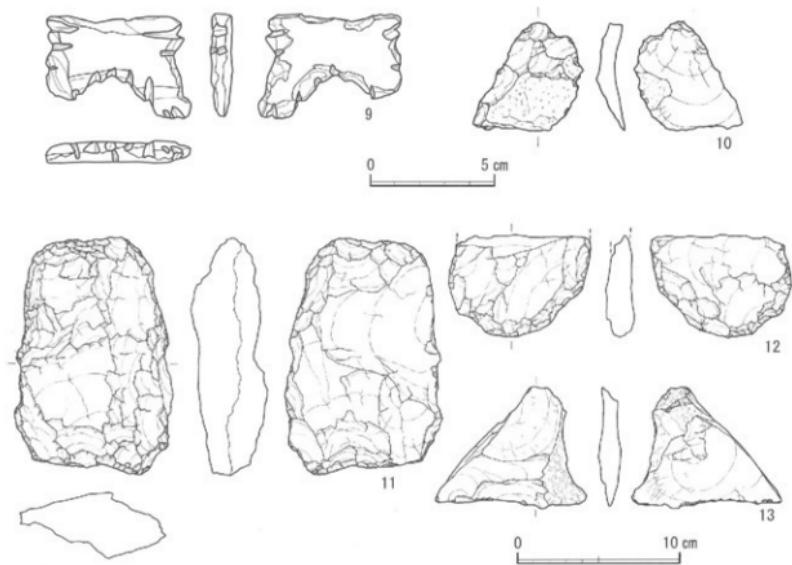
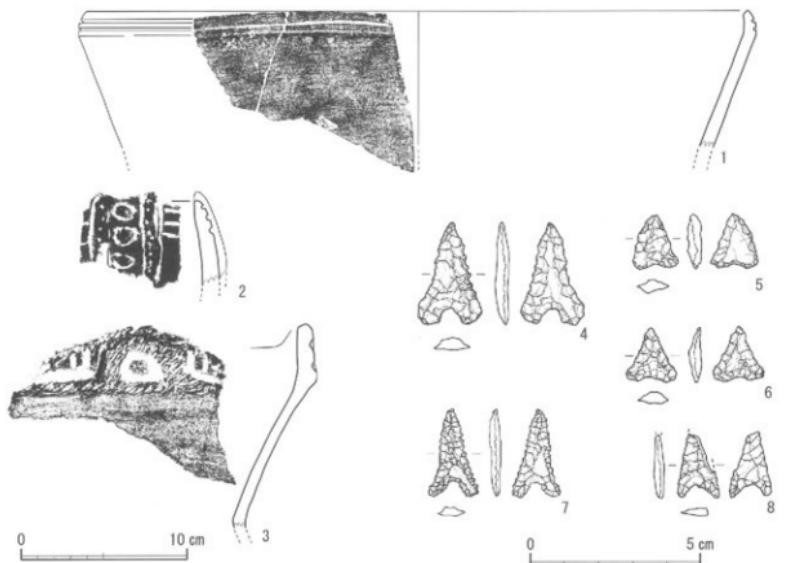
第54図9は、側縁と下部に2～3条の溝溝がみられる石器である。上端は欠損ではなく、この形で完形と思われる。呪術具としては不整形であるが、砥石など生活用具としては整った形をしている。呪術具の木製品の可能性が考えられる。

第16表 追加資料・出土地点不明土器観察表

序区 番号	復古 番号	回数	法記・ 出土地点	器種	器形	文 緯	因 症	地 士	備 考	
第53図 1	46	S R 1	深鉢	口縁外面部に肥厚。山形灰陶。	口縁部に横沈線文（RL）。口 縁部に肥厚。山形灰陶。	内外ナデ、内面三万キ ナデ。	白色砂粒付内む。			
第53図 2	46	S R 1	集 磐灰色土 上部に揮文（周）。			上部に揮文（周）。	外面部貝塚面+ナデ。内 面貝塚面。	砂粒、全表面多く含む。		
第53図 3	46	S R 1	深鉢	口縁肥厚。山形 灰陶。	多角沈線による入り組み文。頭部 に肥厚。頭部下に浮突。	頭部 に肥厚。頭部下に浮突。	内面ミガキ。	着印粒、全表面含む。	外面赤色陶。	
第53図 4	46	S R 1	口縁外 部に肥厚。 頭部に 突出。突起部肥 厚。	口縁外 部に肥厚。 頭部に 突出。突起部肥 厚。	口縁外 部に肥厚。 頭部に 突出。突起部肥 厚。	口縁外 部に肥厚。 頭部に 突出。突起部肥 厚。	口縁外 部に肥厚。 頭部に 突出。突起部肥 厚。	内面ナデ。	大粒の白色砂粒含む。 頭部ス付垂。	
第53図 5	46	F区	黄灰灰陶。		磨痕（RL）。側面、内面に もみ文。	側面（RL）。側面、内面に もみ文。	外面部ナデ、ミガキ。 砂粒ほとんど含まない。			
第53図 6	46	S R 1	深鉢	口縫外壁広い も厚。頭部に 突出。頭部に 突出。	口縫外壁広い も厚。頭部に 突出。頭部に 突出。	口縫文に取り付く沈線文。滑文 （縦列）。	内面ナデ。内面貝塚面 （縦列）。	大粒の砂粒含む。全表面 含む。		
第53図 7	46	なし		口縫出筋。滑文有 る。波打付。	口縫出筋。滑文有 る。波打付。	唇面文（RL）。波打付下部 に「/」字状文。脣面対内波文。	内面貝塚面+ナデ。内 面「/」字状文。全表面多く 含む。			
第53図 8	46	なし	浅鉢	口縫出筋。	口縫出筋。	口縫沈線文。構円文。	内面三万キ。内面神戸溝 面+ナデ。	滑物粒（白色砂粒、金露 粒）。青む。		
第53図 9	46	なし	浅鉢	瓶底曲。波打 付。波打部に 凹起。	瓶底曲。波打 付。波打部に 凹起。	波打二段貝刺突文。波打部、 波打部に凹起。	外面部ナデ。外面部貝塚面 （縦列）。	白色砂粒が含む。		
第53図 10	46	なし		波打口縫。	波打口縫。	口縫横文（RL）。丘部に河津文 （波打）小さな内面組み文。波 打部に凹起。内面波文。	内外面貝塚面+ナデ。	白色砂粒多く含む。		
第53図 11	46	なし	深鉢	口縫外壁。口縫 肥厚。波打付。	口縫外壁。口縫 肥厚。波打付。	波打口縫に沿う細長い組み目 文（波打貝刺突文）。	外面部貝塚面。			
第53図 12	46	なし	深鉢	口縫。	口縫。	奥文。丁字組み目（原体二枚 貝？）。	内外面ナデ。	白色砂粒。金露母海帶印 組合む。		
第54図 1	47	なし	深鉢	口縫側面。	口縫側面。	内面貝塚面+丁寧な ナデ。	内面ナデ。	白色砂粒含む。	便元口徑28.8cm。	
第54図 2	47	S R 1 5-6周 P o122	留	留下壁等上端が 突起になる。	留下壁等上端が 突起になる。	留下壁等上端が 突起になる。	留下壁等上端が 突起になる。	内面貝塚面+ナデ。外 面貝塚面。		
第54図 3	47	S R 1 (馬上面 土番垂り) P o59	深鉢	口縫外面上に肥 厚。	口縫外面上に肥 厚。	口縫側面。口縫側面。	内面貝塚面+ナデ。	内面貝塚面+ナデ。		



第53図 追加資料1 (1~4・6・SR1 5・F区)・出土地点不明土器 (7~12)



第54図 追加資料2 (2~4・SR1 5、6・EWT-1 7・F区)・出土地点不明遺物(1・8~13)

第17表 追加資料・出土地点不明石器観察表

地図 番号	遺物 番号	回収 場所	注記	器 種	石 材	色 調	寸 寸 寸 寸			特 徴	
							高 さ	幅 幅	厚 さ		
第54回	4	47	SRI Po117	石器	サヌカイト	碧灰色	2.9	1.8	0.35	一面に大きな削痕。	
第54回	5	47	EWT1 Po10	石器	石英	透明白	1.6	1.3	0.4	一面に大きな削痕。	
第54回	6	47	EWT1 Po3	石器	石英	透明白	1.6	1.4	0.35		
第54回	7	47	打製石ベルト Po114	石器	黑曜石	黒色	2.5	1.4	0.3	刃面に挫傷がある。	
第54回	8	47	不明	石器	サヌカイト	白色	1.9	1.25	0.3		
第54回	9	47	不明	硯臼具 または墨石	玄武岩?	暗灰色	4.2	3.8	0.8	ほぼ全形、側面に凹溝、不規則。形状複雑未製品の可能性あり。	
第54回	10	47	不明	刮片	サヌカイト	白色	4.5	4.5	0.7	14	一面に縫合(多孔)。
第54回	11	47	打製石斧 Po108	火成岩? (漂い更生?)	赤色 (光沢有り)	14.6	9.5	3.7	612	一般鋸面か? 無用痕なし。	
第54回	12	47	不明	打製石斧 Po109	安山岩?	赤色	6.3	8.5	1.5	105	刃削れ感、基部欠損。
第54回	13	47	不明	使用済み片	サヌカイト	赤~黒灰色	7.5	9.1	1.4	器内に刃こぼれ様の剥離物残。鋸面を見る。	

## 第5章 考 察

### 第1節 山崎遺跡における後期初頭から後期前葉の土器様相 - C区出土土器の検討より -

幡中光輔（山口市文化財課）

山崎遺跡C区では、後期前葉から後期中葉頃の石圓炉を持つ竪穴住居跡SX1が検出された。近年、津和野町大蔵遺跡でも石圓炉を伴う後期中葉頃の竪穴住居跡が2棟検出され（宮田編2010）、今回の山崎遺跡での検出遺構は大蔵遺跡の事例とあわせて山陰地方西部の石圓炉の受容と展開を知る上で興味深い。

さて、C区では遺構のほかに出土土器からも重要な情報を得ることができる。石圓炉では後期前葉から後期中葉頃の土器が確認されているが、C区全体を見ると、後期初頭から後期前葉の土器の山上が目立つ。その中で注目されるのは、複数系統の土器が入り交じて存在する点である。その分布の中心を東部瀬戸内に持ち、山陰地方でも広く分布する中津式・福田KII式やそれに後続する成立期の縁帶文土器、また本州西端部域を中心に出土する屋敷式やこの地域の在地系と思われる成立期縁帶文土器、そして北部九州で主に展開する小池原上層式も一定量存在するなど、複数系統の土器型式が確認できる<sup>13</sup>。

C区の出土土器には層位的な情報が付与されているほか、2mメッシュのグリッドが調査区内に設定されており、それに基づいて土器が取り上げられている。そのため、各出土土器の層位状況と出土位置が同時に把握でき、型式別にみた場合の情報も整理しやすい。すなわち、C区での各型式の出土層位と出土位置の情報を総合的に詳しく検討することで、複数系統が入り交じった後期初頭から後期前葉の山崎遺跡の土器様相を解説し手掛かりを得ることができる。以上の前提をもとに具体的な検討を進めていくが、ここでは報告書掲載の土器以外の未報告資料も対象にして検討を実施している。

**型式別出土層位（第55図）** 最初にグリッドごとに取り上げられた土器の型式別出土層位を検討してみたい。C区では3層と4層が主な遺物包含層であるが、出土時の記録を見ると、その他にも4層下層と3～4層の上層付近で比較的まとまって確認されており、この4つの段階で上器型式の層位的な出土状況をトレースできる。

まずは、東部瀬戸内・山陰系の後期初頭の中津式・福田KII式、そして東部瀬戸内系と在地系が混在する後期前葉の成立期縁帶文の層位状況を確認してみたい。中津式は大半が4層下層と4層上層であり、統く福田KII式では4層下層からの出土は認められず、3～4層上面出土の割合が増加していく。そして成立期縁帶文の時期になると、その傾向はさらに顕著になり、多くの土器が3～

4層上面で出土している。つまり、層ごとに土器型式が明確に分離されている訳ではないが、土器型式の変遷と各層からの出土量の変化が対応している様子が窺える。

その状況を踏まえて、本州西端部域を中心に分布する屋敷式を見ていきたい。屋敷式については、単独の型式として存在せずに各遺跡の中で中津式・福田K II式や縁帶文土器に伴うことが指摘されている（中村1999・2005）。しかし、これまで遺跡内では共伴するものの層位的な情報は乏しく、屋敷式の時期比定に有効な資料状況に恵まれなかつた。今回、確実とは言えないが、第55図に示された屋敷式を含む当該期の山上層位の傾向から、その時期的な位置づけの有益な情報を得ることができる。第55図のなかで、屋敷式は3～4層上面からの山上が半数近くを占め、3層出土が2割程度、4層出土が3割程度である。この山上傾向は、3～4層上面出土と4層出土の土器がそれぞれ半数程度である福田K II式と、3～4層上面出土の土器が7割以上、4層出土の土器が1割強である成立期縁帶文との間に位置付けられることとなろう。つまり、これら山崎遺跡C区の出土層位の状況と、単独で出土しないという中村氏の指摘を踏まえると、屋敷式は福山K II式から成立期縁帶文にかけて共伴する上器型式の可能性を持つと考えることができる。

一方、九州系の後期前葉の小池原上層式は、3層出土のものが全体の半数近くに達しており、屋敷式や成立期縁帶文と比べて3～4層上面の上器の割合が減少している。これは、小池原上層式が土器型式編年のなかで屋敷式や成立期縁帶文土器よりも後の時期に位置付けられることと対応する。なお、C区以外の出土土器を俯瞰すると、この時期以降に九州系の土器群が優勢になっており、山崎遺跡全体の中で九州系の様相が後期前葉以降に徐々に色濃くなっていくことが分かる。

**型式別出土地点**（第56～58図）これまで型式別の出土層位に注目して検討を進めてきたが、その内容を踏まえてグリッドごとの型式別出土地点について見てみたい。中津式はC区の北西部から南東部にかけて出土しており、その中心となるC6、D7グリッド付近に特に集中している（第56図左）。福田K II式になると、中津式と概ね同じ地点から出土しているものの、C6、D7グリッド付近からの集中した出土状況は見られなくなる（第56図右）。このように東部瀬戸内・山陰系の後期初頭の中津式から福田K II式にかけては、土器出土量とその分布域が徐々に縮小していく様子が見て取れる。

次に屋敷式のグリッド別出土地点の様相はどうであろうか。第57図左でその状況を見てみると、福山K II式とある程度類似した出土分布の広がりを示していることが読み取れ、屋敷式が遺跡内で福田K II式と共に存在したことを想起させる。その一方で、土器量が減少して集中部が見られなくなる福田K II式とは対照的に、屋敷式はD7・E7グリッド付近を中心として量的にまとまっていることが分かる。この点を積極的に評価すれば、本州西端部域に展開する屋敷式と東部瀬戸内・山陰系の福田K II式とは、遺跡内で共伴しながらも両者は系統を異にして別々に展開していたと捉えることができよう。

成立期縁帶文は東部瀬戸内・山陰系の福田K II式に後続する系統と、この地域の在地系と考えられる系統が存在する。その出土地点を第57図右から読み取ると、成立期縁帶文全体としての分布の広がりは福田K II式や屋敷式に類似しているが、在地系のものはD7・E7グリッド付近にまとまり、屋敷式の集中地点と概ね重なっている。これまで在地系の成立期縁帶文土器は出土例が少なく実態が不明瞭であったが、この状況は、在地系の成立期縁帶文が屋敷式と一部で併存していたことを予想させると共に、在地系の成立期縁帶文の成立については屋敷式の影響を少なからず考慮する必要性を物語っているのかもしれない。この点については現段階では判然とせず、今後、福田K II式・成立期縁帶文との関係性を含めた屋敷式の型式学的検討が鍵を握ってくる。

一方、九州系の小池原下層式においては、他の上器型式と山上地点の状況が異なり、堅穴住居

SX1内やその付近のグリッドを中心として出土している（第58図）。この状況は、小池原上層式がこれまでの土器型式とは系譜が異なり、東部瀬戸内・山陰系や在地系の成立期縁帶文が展開した後に新しく流入してきたことを示唆していると思われる。

**まとめと考察** これまでC区グリッド取土上器の山上層位と山上地点の様相を型式別に検討してきたが、その内容を整理しつつ、山崎遺跡の後期初頭から後期前葉における土器様相の展開を考えてみたい。

出土層位の状況をトレースすると、後期初頭の中津式・福田KⅡ式、後期前葉の成立期縁帶文や小池原上層式までの土器型式の変遷と各層における出土量の変化が対応することを確認でき、それに照らし合わせてみると、本州西端部域を中心に分布する屋敷式は福田KⅡ式から成立期縁帶文に併行する可能性を考えることができた。

グリッドごとの出土地点では、中津式から福田KⅡ式までの東部瀬戸内・山陰系は概ね同じ地点で展開するが徐々に後退していき、その一方で、屋敷式は福田KⅡ式と類似した分布傾向を示しつつも福田KⅡ式とは対照的に、出土土器の集中地点が顕在化する様相を呈するため、両者は共伴しながらも別系統として存在したことが強調される。また、屋敷式の出土土器地点は併行する可能性のある在地系の成立期縁帶文と類似しており、実態が不明瞭な成立期縁帶文と屋敷式との関係性については今後の検討を要することが課題として浮上した。小池原上層式に関しては、出土地点の中心が他の土器型式と異なるため、新しく流入した別系譜の土器型式であることが印象付けられる。このようなC区での土器群の在り方から、山崎遺跡での後期初頭から後期前葉の上器様相については、以下のような動態を考えることができる。

複数系統の土器が入り交じる状況のなかで、後期初頭では東部瀬戸内・山陰系の中津式・福田KⅡ式が優勢であるが、それが本州西端部系の屋敷式と共存しながらも次第に後退し、次に屋敷式と在地系の成立期縁帶文が顕在化して展開していく。その後には、東部瀬戸内・山陰系や本州西端部系と入れ替わるようにして九州系の小池原上層式が流入して浸透し、やがて山崎遺跡全体で九州系の色合いが濃くなっていくという、後期初頭から後期前葉までのダイナミックな文化的動態が上器様相から想定できよう。

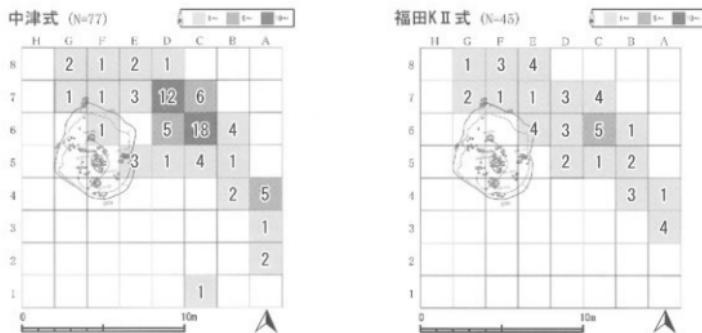
なお、山陰地方西部では屋敷式や九州系の土器群を有する遺跡が散見されるが、山崎遺跡のC区の土器様相は、山陰地方西部の屋敷式や九州系土器群の展開を含めた後期初頭から後期前葉の文化的動態の一端を具体的に示していると考えられる。

#### 【註】

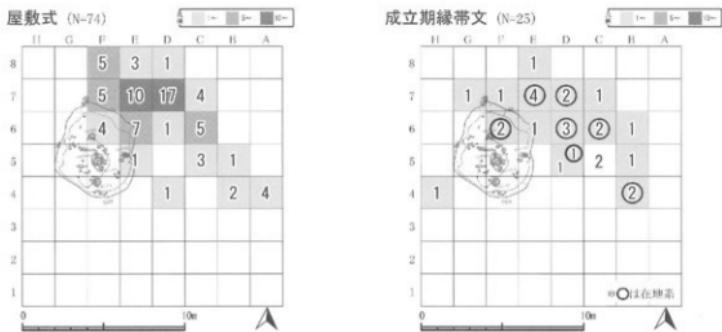
- 1) その他、後期初頭から後期前葉の土器型式としては、山陰中央部における福田KⅡ式併行の五明田式も確認されているが、それほど多くはないため、今回の検討では福田KⅡ式の中に含めた。また、宿毛式や松ノ木式が少量ながら確認されるなど、西南四国に特有の系統も認められる。なお、九州系の小池原上層式は、小片になると直前の小池原下層式との判別が困難な場合があるため、検討のなかで小池原上層式とした土器群の中には小池原下層式も一部で含んでいる可能性がある。

#### 【参考文献】

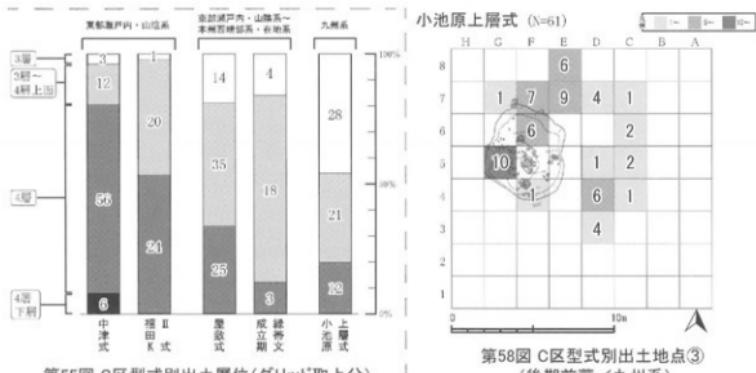
- 中村友博1999「山口県縄文時代研究の現状と課題」『中・四国縄文時代研究の現状と課題』中四国縄文研究会10周年記念大会資料、中四国縄文研究会、21-23頁  
中村友博2005「屋敷式上器について」『やまぐち学の構築』創刊号、山口大学研究推進体「やまぐち学」構築プロジェクト、1-18頁  
宮田健一編2010「大蔭遺跡 第1・2・4・6・7・8次発掘調査報告書」津和野町埋蔵文化財報告書第14集、津和野町教育委員会



第56図 C区型式別出土地点①(後期初頭／東部瀬戸内・山陰系)



第57図 C区型式別出土地点②(後期初頭～前葉／東部瀬戸内・山陰系～本州西端部・在地系)



第55図 C区型式別出土層位(グリッド取上分)

第58図 C区型式別出土地点③  
(後期前葉／九州系)

## 第2節 山崎遺跡発掘の成果と意義

柳浦俊一（島根県立古代出雲歴史博物館）

益田市匹見町では、これまで70箇所を超える縄文時代の遺跡が存在することが知られている（幅中2014）。匹見町は島根県内でも有数の縄文遺跡が密集する地域であるが、これまでには比較的狭い面積の発掘調査が多かった。今回、発掘調査が河岸段丘のほぼ全域に及んだことにより、当地の縄文集落の全体像が明らかになったことに最大の意義がある。

ここでは、山崎遺跡の発掘調査で得られた成果・意義と、今後の展望について述べる。

**遺跡の立地・景観と居住域** 山崎遺跡は、匹見川とその支流の能登川の合流地点に立地している。早期段階では上位河岸段丘に立地し（A・B区）、遺跡は匹見川に面していた想像される。現在の匹見川とA・B区との比高から考えると、約7000年の間に匹見川は約14m低下したことがある。後期初頭から中葉段階では旧能登川（S R 1・2）に、後期中葉から後葉段階では匹見川に面して居住していたと考えられる。後期段階では、大河川とその支流の合流点付近を好んで集落が設営された可能性が考えられる。

C区では竪穴住居1や石圓炉1が検出されており、少なくとも後期中葉には川に面した集落景観が想定できる。C区からF区にかけて、後期初頭から後期中葉の土器がまとまっていることから、この間連續して居住域となっていたと考えられる。

一方、D・E区で検出された竪穴住居2は、竪穴住居1よりやや新しい様相がみられるものの、両者はほとんど時期差がないように思われる。また、包含層出土の土器も両地区とともに後期中葉土器がまとまって出土している。竪穴住居1・2が同時併存していたかどうかはともかく、後期中葉・石町式（あるいは元住吉山I式）の段階では、C区・F区とD・E区は同時期に2つの居住域が存在していた可能性は高い。

D・E区では、後期後葉の凹線文土器がまとまって出土した。この時期の土器は、F区S R 2でもまとまって出土しており、この時期も2か所で居住していた可能性がある。

黎明前半の土器は、皆無に近い。この時期には、山崎遺跡は居住に利用されなかつた可能性が高いと思われる。

晩期後半の突縁文土器は、F区だけで出土した。これらはS R 2埋没過程で混入したと思われ、本来は調査区西側に展開していた可能性がある。晩期後半の遺構・包含層は、S R 3によって流失した可能性が考えられる。

山崎遺跡では竪穴住居跡を2棟、石圓炉2所が検出された。石圓炉の詳細な時期は不明だが、石圓炉1は竪穴住居1に近接していることから、これが住居内に設けられた炉跡とすると、両者は重複関係にあり、同時併存は考えられない。竪穴住居1・2と石圓炉2は位置的にみて同時に存在した可能性があるが、竪穴住居1と竪穴住居2は若干時期差がみられることから、山崎遺跡では一時期に最大2棟の住居跡で集落が構成された可能性を考えたい。検出できなかった住居跡の存在も想定されるので、厳密に集落の構成を知ることはできないが、山崎遺跡の集落は中国地方で一般的な小規模集落だったと考えることができる（柳浦2009）。

**石圓炉** 山崎遺跡では竪穴住居1のほか2か所で石圓炉が検出された。また、竪穴住居2では土器埋設炉が検出されたが、これは石圓炉の変容と考えられる。

本稿では竪穴住居1の年代を後期中葉・石町式とした。ここからは後期前葉・小池原上層式もまとまって出土しており、この住居跡が後期前葉に作られた可能性も否定できない。この年代が問題となるのは、石圓炉の伝播に関してである。石圓炉は東方から伝播してきたとされ、中期末に鳥

坂県東部・智頭枕山遺跡（智頭町教委2006）に、後期前葉に島根県東部・林原遺跡（島根県教委2007）に達している。これまで、津和野町大陰遺跡で石町式の豊穴住居跡で石団炉が検出され（津和野町教委2010）、島根県西端部では導入がやや遅れると考えられていた。しかし、豊穴住居1が後期前葉の時期となると、島根県西端部に石団炉が伝播した時期は島根県東部と同時期となる。今回の調査で、この地域でも東部瀬戸内地方の型式である津雲A式（後期前葉）が存在していることが明らかになったが、石団炉の分布拡大もこれと連動しているのだろうか。あるいは、もう少し後になるのか。石団炉は文化伝播のありかたを解明する素材となりうるので、新たな事例に注目したい。

**早期上器** A・B区では早期・高山寺式がまとまって出土した。若干の黄島式が混じるが、ほぼ高山寺式のみが出土している。高山寺式のほぼ単純な出土は島根県内では初めてで、ここでは無文土器が組成していない。これにより早期の編年が、①無文土器→黄島式→高山寺式、あるいは②無文土器→無文土器+黄島式→高山寺式、となる可能性が高まった。この状況は周辺地域の状況と同調している。

**後期上器** 中津式から円線文土器まで、後期全般にわたって各型式が出土している。とくに、近畿・東部瀬戸内地方に広く分布する後期中葉・津雲A式と、同中葉・元住吉山I式と同じ系譜の土器が多数出土したことが注目される。私は以前から「島根県西端部の土器は、一貫して九州系の型式」としてきたが（柳浦2010など）、本遺跡の出土状況からはこれを撤回せざるを得ない。

第18表で、山崎遺跡各遺構・包含層から出土した土器を大雑把にカウントした。これによると、九州系の土器型式が当地を席巻するのは、後期中葉・西平式あるいは太郎迫式以後である。津和野町大陰遺跡（津和野町教委2010）で石町式が主体となる住居跡が検出されているので、九州系の型式が多数を占めるのはもう一型式前の段階かもしれない。

今回の調査で得られた成果の一つとして、東部瀬戸内地方に分布する後期前葉・津雲A式類似土器（第25図22など）が多数出土したことである。これまで、この時期は小池原上層式、鐘崎式など、九州系の型式が主体を占めると考えていたが、この時期には東方系の型式がかなりの部分を占めることが判明した。ただし、同一の系譜を引くとはいえ、東部瀬戸内の津雲A式、山陰中部の崎ガ鼻式とは趣きが違う。山口県を含めた本州西端部域は独自の分布圏を形成していた可能性があり、この時期に九州・東部瀬戸内のいずれの影響が強かったのか、見極める必要があろう。

**石斧石材** F区では打製石斧、磨製石斧（打製石斧転用を含む）が多数出土した。これらの所属時期が不明なのは残念だが、注目されるのは器種によって石材が選択されている可能性が高いことである。中村唯史によると、打製・磨製とも安山岩が使用されているが、両者の産地は違う可能性があるという。本報告では石斧石材について、安山岩A・同B・同Cと表記した。磨製石斧は安山岩Aが、打製石斧は安山岩Bが多い。これは中村の鑑定をもとに柳浦が分類・判断した。安山岩Aと同Cは、肉眼でも大きな違いがあり、同じ岩石でも産出する場所が違う可能性が考えられた。中村によると、安山岩Cは津和野町青野山周辺で産出する岩石に似ているという。なお、安山岩Bはやや緑色であるが、安山岩Cに近い。

石器石材は、露頭または河川での採取が想定される。黒曜石やサヌカイト以外の石材についても、産地を究明する必要があろう。

以上、山崎遺跡の発掘成果と今後の展望について述べてきた。残された課題は多いが、本報告が西日本の縄文研究に有効な基礎資料となるべく、活用されることを期待したい。

## 【参考文献】

- 島根県教育委員会2007『林原遺跡』  
 智頭町教育委員会2006『智頭枕田遺跡Ⅰ』  
 福井市2014『山陰地方の縄文時代遺跡データベースと型式別遺跡数の推移』『山陰地方の縄文社会』  
 島根県古代文化センター  
 柳浦俊一2009『山陰地方における縄文時代後・晩期の集落景観』『一山典遷歴記念論集 考古学と地域文化』  
 柳浦俊一2010「4. 山陰」『西日本の縄文土器 後期』千葉県編 真陽社  
 津和野町教育委員会2010『大陰遺跡 第1・2・4・6・7・8次調査』

第18表 出土地点別出土点数表

時期区分	型式名	C区	F区	SRI	SR2	D・E区	全体	時期区分	型式名	C区	F区	SRI	SR2	D・E区	全体
		縄文 丸印内系 圓印内系 圓印内系	縄文 圓印内系 圓印内系 圓印内系	縄文 圓印内系 圓印内系 圓印内系	縄文 圓印内系 圓印内系 圓印内系	縄文 圓印内系 圓印内系 圓印内系	縄文 圓印内系 圓印内系 圓印内系			縄文 丸印内系 圓印内系 圓印内系	縄文 圓印内系 圓印内系 圓印内系	縄文 圓印内系 圓印内系 圓印内系	縄文 圓印内系 圓印内系 圓印内系	縄文 圓印内系 圓印内系 圓印内系	縄文 圓印内系 圓印内系 圓印内系
I 中津		15		8	2		25	I 阿高							1
II 福田K2		16		7		1	24	II (虎毛・瀬波)		8		4			12
III 成立期縁帯文		6	1	28			35	III 小池原下層		22	1	5			28
IV 沖開A		1	1	16		1	19	IV 小池原上層		9	4	1	4		18
V 岩崎K1				6			6	V 稲崎				5		5	10
VI 口凹					7	7	14	VI 石町 (久保根山)		3		12		1	16
VII (垂岡K・元住吉山口)			8	1	11	4	24	VII 西平・太郎頭				2		45	6
IX 四縁文 (元住吉山2・吉澤)							0	IX (御櫛文 (三下田・鳥居足・瀬波))					10	21	31

## 第6章 まとめ

山崎遺跡の発掘調査では、竪穴住居跡や能登川の旧河道などが検出された。これらの時期を以下にまとめておく。

**竪穴住居1** 出土上器は、中津式、小池原上層式、石町式などがある。数的に多いのは小池原上層式だが、石町式が最も新しく、この住居跡の時期を反映している可能性がある。

**竪穴住居2** 元住吉山式、石町式など、後期中葉を主体とする。後期後葉上器がわずかに混じり、竪穴住居1よりやや新しい様相がうかがえる。

**S R 1** 福田K2式、津雲A式併行などを主体として、後期中葉の石町式が少數混じる。後期初頭～前葉に形成されたと考えられるが、C区包含層よりやや新しい様相がみられる。

**S R 2** 中津式、小池原上層式、鐘崎式など、後期初頭から前葉の上器が少數混じるが、主体となるのは石町式、西平式、元住吉山I式、四縁文土器など後期中葉から後葉の上器である。S R 2は、後期中葉～後葉に形成されたと考えられる。

**S R 3** 遺物がまったく出土しなかったため、時期は不明である。S R 1・2やC区・F区包含層を削りこんでいることから、少なくとも縄文時代晩期以降に形成されたものである。

包含層から出土した土器は、各調査区で様相が違う。包含層の時期は、以下のとおりである。

**A・B区包含層** 早期押型文がまとまって出土した。黄島式はごくわずかで、高山寺式が主体を占める。これに続く土器は出土していない。住居跡などは検出されなかったが、高山寺式期の居住域と考えられる。

**C区包含層** 中津式、福田K2式、成立期縁帯文などを主体とし、後期中葉土器がわずかに混じる。C区包含層は、後期初頭～前葉に堆積したと考えられる。

**F区包含層** 小池原上層式、鐘崎式などの後期前葉土器と、元住吉山I式、西平式などの後期中

葉土器が主体で、S R 1 や S R 2 などの下部遺構の時期が反映されていると考えられる。全体としては、C 区包含層よりやや新しい様相がうかがえる。F 区からは晩期突帯文土器が出土しているが、これらは F 区西南部で出土しており、S R 2 埋没過程で混じったと思われる。

D・E 区包含層 元住吉山 I 式併行と四線文土器が主体となる。山崎遺跡では、もっとも新しい時期の生活域と考えられる。

以上から、山崎遺跡では早期・高山寺式期に、上位段丘に当たる A・B 区が居住域として利用されたと思われる。前・中期に中断した後、後期初頭から C 区が居住域となった。居住域は C 区・F 区から、後期後葉には D・E 区に移ったと考えられる。

C 区・F 区では、現在の能登川が後期段階では東寄りに流れていたと考えられる。後期前葉（S R 1）から中葉（S R 2）にかけて次第に流路を西に変えていった。S R 1・2 埋没後に再度流路を変えて（S R 3）、現在に近い流れになったようである。

山崎遺跡では、匹見川とその支流・能登川の合流地点が、縄文時代の居住域として選地されている。今回の調査では、居住域の変遷と河川の変遷が明らかになり、縄文時代の集落景観を知る上で重要な知見が得られた。

なお、本書での縄文土器の記述は、以下の参考文献によった。

#### 【参考文献】

- 小林達雄編『総覧 縄文土器』2008 アムロプロモーション  
千葉 豊編『西日本の縄文土器 後期』2010 真陽社

## 附章 自然科学分析

### 第1節 花粉分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が益田市からの委託を受け、山崎遺跡（益田市匹見町）での古植生変遷を明らかにする目的で実施・報告した分析報告書の概報である。山崎遺跡は、島根県西部の益田市匹見町澄川に位置し、匹見川右岸能登川との合流点付近の斜面に立地する。

#### 分析試料について

分析試料は益田市教育委員会文化財課との協議の上、文化財調査コンサルタント（株）が採取した。また、益田市教育委員会文化財課より提供を受けた原図をもとに調査区平面図（図1）及び断面図（図2）を作成した。調査区平面図（図1）中には試料採取地点を示し、各地点断面図（図2）中には試料採取位置を丸印の試料番号で示した。これらのうち、EWT-6では北面東端で試料を採取したが、断面図がないことから南壁断面図の同層準に試料採取位置を投影して示した。NST-1では、試料No.9を深掘りトレチの東壁で採取したが、断面図がないことから西壁断面図の同層準に、試料採取位置を投影して示した。さらに試料No.8はトレチ北部の5層（P12：第5図参照）

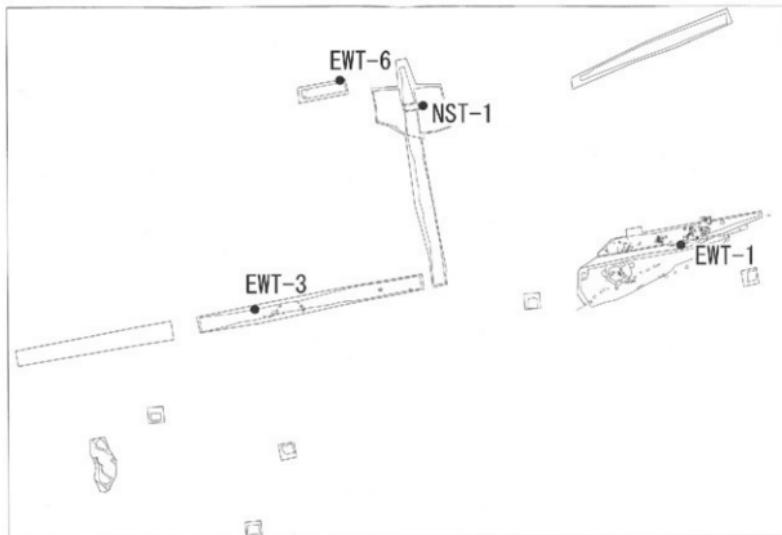


図1 調査区平面図（試料採取地点）

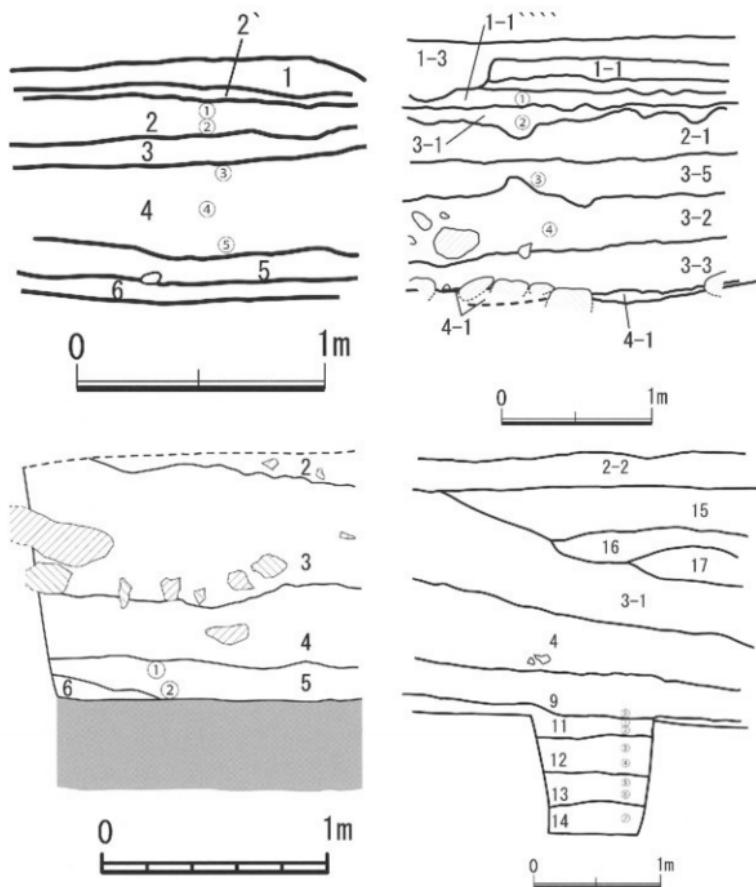


図2 試料採取地点断面図（試料採取位置）

各層の層相記載は本編及び模式柱状図を参照

上左：EWT-1 地点 上右：EWT-3 地点

下左：EWT-6 地点

下右：NST-1 地点

下部で採取しているが、図2の断面図の範囲から外れたために、省略した。また、それぞれの地点の花粉ダイアグラム（図3～10）中に、模式柱状図及び試料採取層準を示している。

## 分析方法

### (1) 微化石概査

花粉分析用プレパラート、及び花粉分析処理残渣を観察し、花粉（胞子）、植物片、炭片、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を5段階で示す。

### (2) 花粉分析

渡辺（2010）に従って、観察用プレパラートを作成した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分している。

## 分析結果

### (1) 微化石概査

微化石概査結果を表1に示す。

NST-1では微化石の含有量が少なく、火山ガラスが多量に含まれていた。その他の地点では、火山ガラスの含有量が多いが、炭片の含有量も多い。花粉や珪藻の含有量は少なく。プラント・オーパール（植物珪酸体）の含有量は、これらに比べ多かった。

### (2) 花粉分析

花粉分析結果を図3～10の花粉ダイアグラム（百分率）及び花粉ダイアグラム（粒数）に示す。また、表2に全試料のデータ（カウント数、計算値）を示した。

花粉ダイアグラム（百分率）では、分類群ごとの百分率（百分率の算出に際して、木本花粉総数を基準にした。）を、木本は黒、草本・藤本は白抜き、胞子は右上がり斜線のスペクトルで表した。分類群ごとのグラフの右側には「針葉樹」、「広葉樹」、「草本・藤本」と「胞子」の割合を示すグラフを示している。

花粉ダイアグラム（粒数）では、分類群ごとに算出した含有量（湿潤試料1g中の粒数）を、木本は黒、草本・藤本は白抜き、胞子は右上がり斜線のスペクトルで表した。分類群ごとのグラフの右側には「木本」、「草本・藤本」、「胞子」とこれらの合計（「花粉・胞子」）について、含有量（湿潤試料1g中の粒数）の変化を表すグラフを示している。

以下に、地点ごとの花粉化石群集の特徴を示す。また、花粉化石群集の変遷が分かるように、下位から上位に向かって記している。

#### ① EWT-1地点

花粉・胞子化石の含有量が最高で試料No1の3074粒/g、最低で試料No5の78粒/gと、通常の堆積物の1/10～1/1000の量であった。また、胞子（化石）の割合が全体の50～70%と高く、草本花粉は16～36%、木本花粉は6～23%であった。

試料No5～3では、木本花粉の検出量が100粒に満たなかったが、アカガシ亜属が卓越傾向に有り、スギ属と伴っていた。また、草本花粉ではイネ科（40ミクロン未満）が、胞子ではシノブ属とオシダ科・チャセンシダ科が高率を示していた。

試料No2、1では、木本花粉の検出量が100粒を越えたことから、ダイアグラムにスペクトルで示している。ここではコナラ亜属とアカガシ亜属が20～30%、スギ属が15%程度の出現率を示す。

表1 微化石概査結果

地点	試料No.	花粉	炭	植物片	珪藻	火山ガラス	プラント・オパール
EWT-1	1	○	△	○	△×	○	○
	2	○	○	○	×	○	△
	3	△	○	○	△×	○	△
	4	△	○	○	×	○	△
	5	△	○	○	×	○	△
EWT-3	1	○	△	○	△×	○	○
	2	○	○	○	×	○	○
	3	△×	○	△	×	○	△
	4	△	○	○	×	○	△
EWT-6	1	△×	○	△	×	○	△
	2	△×	○	△×	×	○	○
NST-1	1	△	△	△×	×	○	△
	2	△×	△	△×	×	○	△×
	3	△	△	△×	×	○	△×
	4	△	△	△×	×	○	△×
	5	○	△	△×	×	○	△×
	6	△	△	△×	×	○	△×
	7	○	△×	△×	×	○	△×
	8	△	○	△×	×	○	○
	9	△×	△×	○	×	○	△

凡例 ○：十分な数量が検出できる ○：少ないが検出できる △：非常に少ない  
 △×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

## ② EWT-3地点

花粉・胞子化石の含有量が最高で試料No2の1450粒/g、最低で試料No3の121粒/gと、通常の堆積物の1/50~1/500の量であった。また、胞子（化石）の割合が全体の40~70%程度と高く、草本花粉は20~40%、木本花粉は6~18%であった。

試料No4、3では、木本花粉の検出量が100粒に満たなかったが、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属が卓越傾向にあった。また、草本花粉ではイネ科（40ミクロン未満）が、胞子ではシノブ属とオシダ科・チャセンシダ科が高率を示していた。

試料No2、1では、木本花粉の検出量が100粒を越えたことから、ダイアグラムにスペクトルで示している。ここではアカガシ亜属が30~40%、コナラ亜属が10~20%スギ属、ニレ属・ケヤキ属、ツガ属が10%程度の出現率を示す。

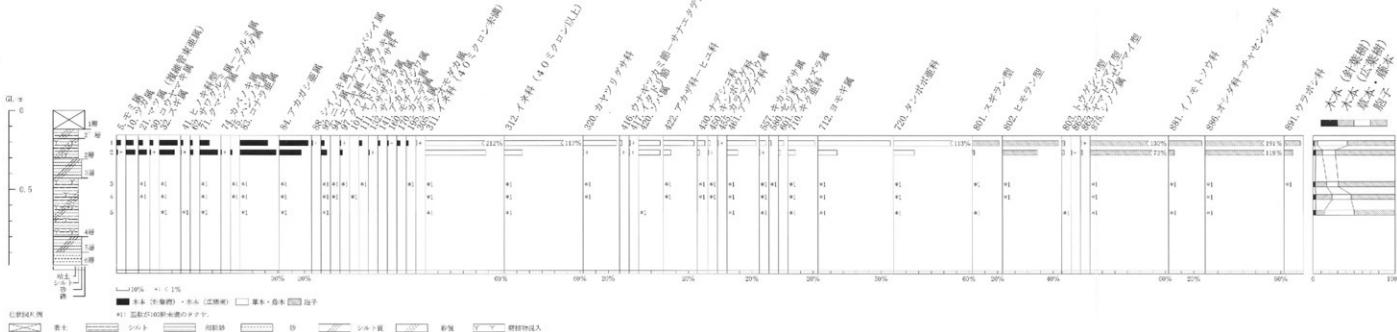
## ③ EWT-6地点

いずれの試料も、花粉・胞子化石の含有量が100粒/gより少なく、検出量も24、39粒と少量であった。このような中で、両試料ともにスギ属花粉が数粒検出されていた。

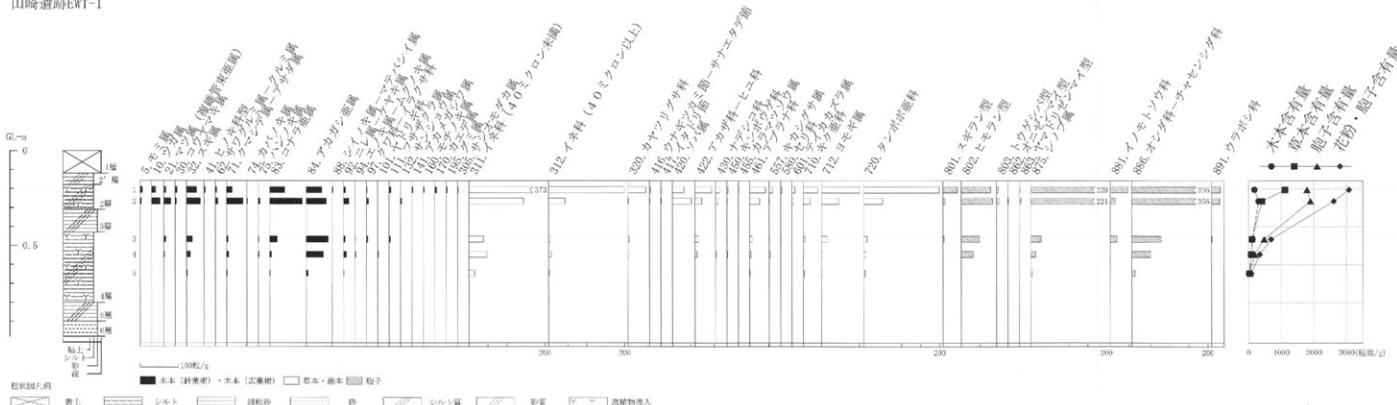
## ④ NST-1地点

花粉・胞子化石の含有量の最高が試料No7の394粒/gで、数粒/gの試料もあった。試料No5、7では木本花粉で100粒以上の検出量があり、試料No7ではアカガシ亜属が180粒、試料No5ではスギ属が131粒と突出した検出量を示した。

山崎遺跡EWT-1



山崎遺跡EWT-1



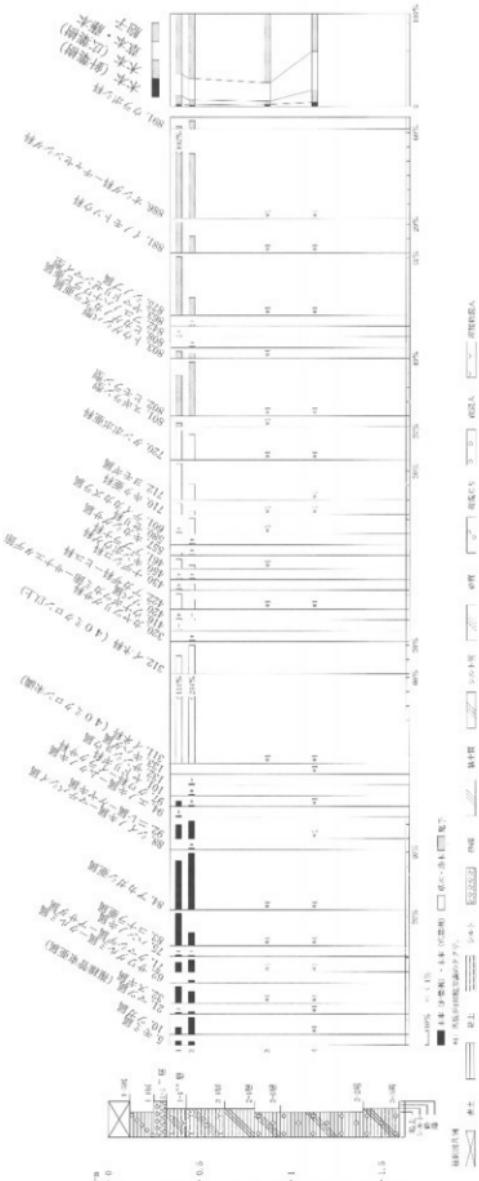
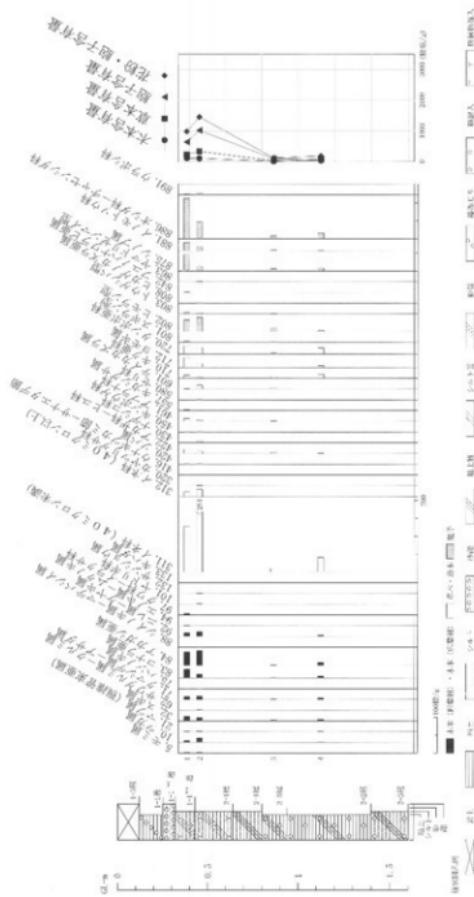


図 5 EWT-3 の花粉ダイアグラム（百分率）

図 6 EWT-3 の花粉ダイアグラム（含有量）



山崎遺跡EWT-6

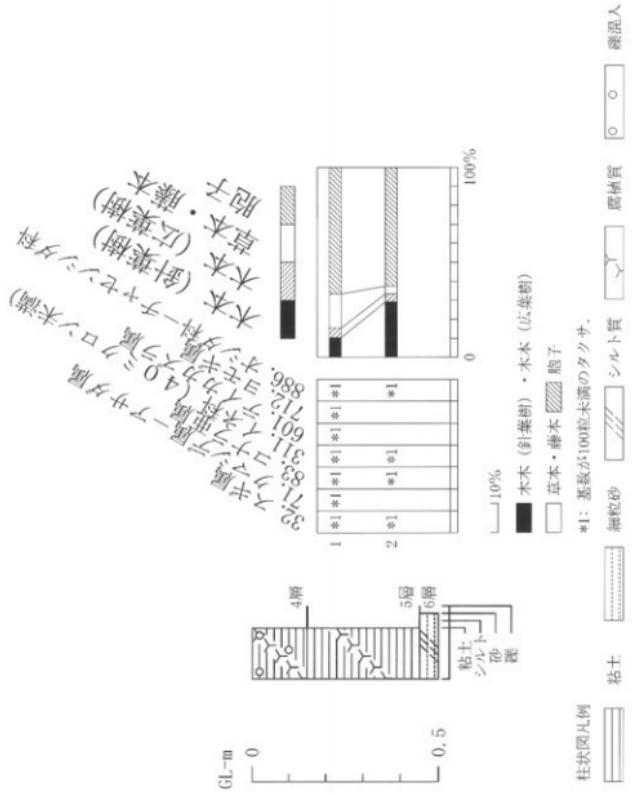


図 7 EWT-6 の花粉ダイアグラム（百分率）

## 山崎遺跡EWT-6

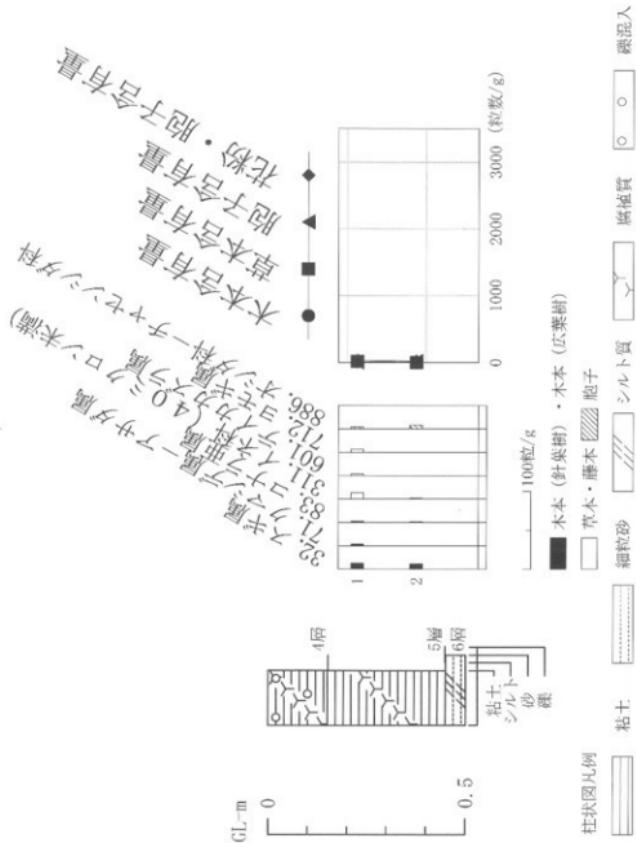


図 8 EWT-6 の花粉ダイアグラム (含有量)

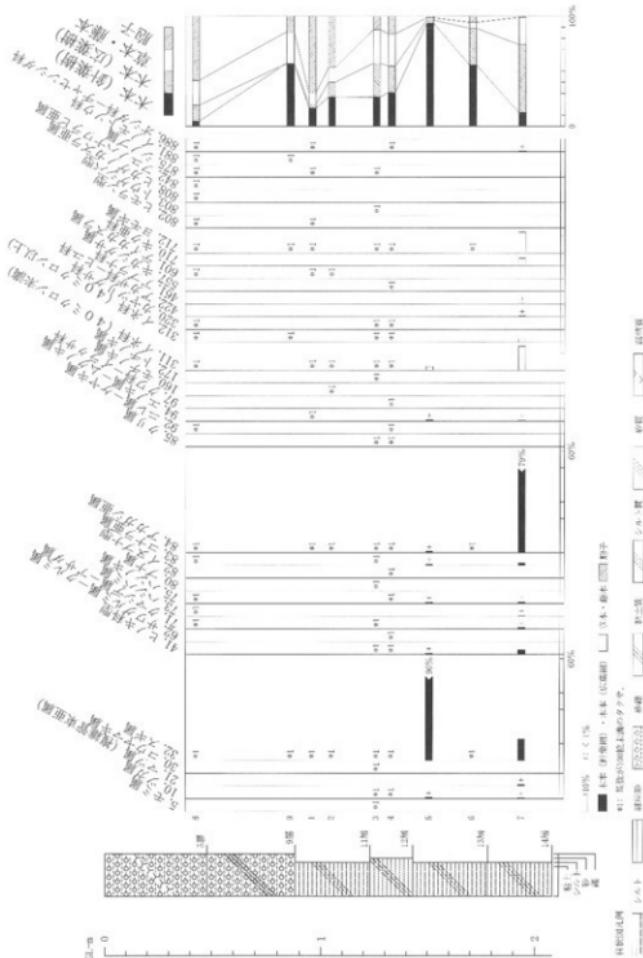


図9 NST-1の花粉ダイアグラム（百分率）

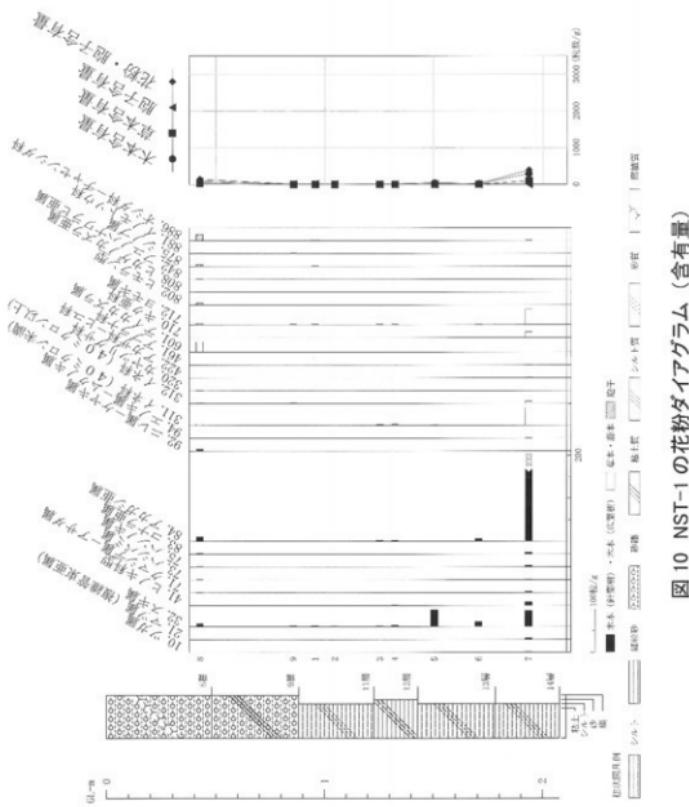


図10 NST-1の花粉ダイアグラム（含有量）

## 花粉化石群集解析の有効性について

一般に明確な古土壤堆積物（いわゆる暗色帯、土壤学的なA層）が認められた場合、花粉化石の含有量は下位（土壤学的なB層、C層）に向かって対数的に減少することが知られている。これは、下位ほど堆積後の化学変化が進み、花粉化石が劣化・消滅、あるいは判定不能になる個体が多いことに由来する。また、本来花粉化石が含まれていない層準に、上位からの根等による擾乱作用によって付加された場合にも、同様の減少傾向が認められる。数枚のA層（別の古土壤堆積物）が認められると、本来ここ（別の古土壤堆積物）に存在した花粉化石に、擾乱によって上位の古土壤から新たな花粉化石が付加され、対数的な減少過程が亂れることになる。

今回の分析では、EWT-1で後者の現象が顕著に認められる。試料No1と2の間で草本花粉が急激に減少するのに対し、木本花粉や胞子は増加する。このことは、試料2の草本花粉の多くが上位からの混入であるのに対し、木本花粉、胞子は試料2の堆積時の植生を示していると考えられる。同様の視点から花粉ダイアグラムによる植生解析を行うことによって、擾乱による混入花粉（胞子）化石と本質的な花粉（胞子）化石を区別することができる。

## 古植生復元

地点ごとに層序（層名）に基づき、古植生を推定する。植生の変化を明確にするために、下位から上位に向かって（時代を遡って）記す。

### (1) EWT-1地点

#### ① 4層堆積時期（縄文時代後期初頭から後葉）

試料5、4、3を4層から採取している。木本花粉の検出量が少なかったものの、アカガシ亜属が上位の試料2（2層）と同程度の含有量を示す。このことから、上位から花粉粒が混入した可能性が低く、アカガシ亜属花粉化石の多くは、本来この層に含まれていたと考えられる。現在の調査地点の標高はTP+160m前後で、暖温帯の気候帯に含まれている。一方周囲の山地はTP+450～600mあるいはこれより高く、冷温帯の気候帯に入る可能性がある。

現在の調査地点の標高や周辺の山地の標高を考慮すると、周辺の山地低所にはカシ林（照葉樹林）が分布していたと考えられる。また、僅かに検出されるアカマツ、スギ、ヒノキなどの針葉樹が、カシ林に混淆した可能性がある。また、山地高所に温帯針葉樹林やミズナラ林が分布した可能性もある。一方、コナラ亜属や針葉樹の含有量、出現率が、上部、更に上位の2層に向かい増加する。4層では、これらの増加がそれほど顕著ではないが、周辺の二次林化、あるいは冷涼化に伴う温帯針葉樹林やミズナラ林の拡大が進行していたことが示唆される。

#### ② 2層堆積時期（縄文時代後期初頭から後葉）

試料No2、1を2層から採取している。4層上部から認められるように、コナラ亜属、クマシデ属-アサダ属の含有量、出現率が高くなり、アカガシ亜属をしのぐようになる。また、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属などの針葉樹の含有量、出現率も高くなる。現在の調査地点の標高や周辺の山地の標高を考慮すると、周辺の山地低所にはカシ林（照葉樹林）が分布し、モミ、ツガ、アカマツ、コウヤマキ、スギ、ヒノキなどの針葉樹はカシ林に混淆していたものと考えられる。コナラ類やクマシデ類は自然植生下において、いわゆる「二次林」の要素である。照葉樹林が森林火災などに起因して広範囲に消滅し、照葉樹林の跡地に「二次林」であるコナラ林が広がったと考えられる。既に人間活動が認められることを考慮すると、人間の管理下で「薪炭林（いわゆる里山）」として、あるいは「焼き畑」跡地の「二次林」として分布が拡大した可能性も指摘できる。さらに、調査地近辺の照葉樹林が縮小したことによって、山地高所に分布した温帯针葉樹林や冷温帯林（ミズナラ

表 2 花粉化

林)の要素が相対的に増えることも、忘れてはならない。一方で繩文時代後期は、「弥生小海退期」に向かう気温の低下期である。温暖な繩文海進期から一転した気温の低下によって、植生帯の垂直分布が低下し、それまで山地高所に分布していた温帶針葉樹林やミズナラ林が分布を拡大した可能性も指摘できる。また、これらの事柄が単独で起きた可能性もあるが、恐らく幾つかの事柄が複合した結果と考えられる。

草本花粉ではイネ科（40ミクロン以上）花粉が上部の試料№1で多量に検出されるほか、両試料ともソバ属花粉が検出される。2層上部の堆積時には、調査地あるいは近辺で稲作が行われていたほか、ソバが裏作、あるいは畑作や畦などをを利用して栽培されていたと考えられる。ただし、本層は縄文時代後期に堆積したもので、「稲作」の開始時期が他地域に比べ早いことになる。試料№1では花粉化石の含有量が少ないとから、分析を行っていない上位の2'層や1層から、イネ科（40ミクロン以上）花粉を含めた多くの草本花粉が混入した可能性が指摘できる。このことを踏まえると、今後の追従が必要不可欠である。

一方2層下部(試料2)では、イネ科(40ミクロン以上)花粉が対数的に減少するのに対し、ソバ属は増加する。このことから2層下部堆積時には、調査地あるいは近辺でソバ栽培が行われていたものと考えられる。「縄文時代後期」に日本列島内でソバ栽培が行われていたことは、既に知られているが、今後、追従の必要があろう。

## (2) EWT-3地点

石組成表

① 3-2層堆積時間（縄文時代後期初頭から中葉）

試料No.4を、3-2層から採取している。上位の3-5層に比べ花粉化石含有量が増加し、検出された花粉粒の多くが本来3-2層に含まれていたものと考えられる。検出された木本花粉の種類はEWT-1地点の4層に類似する。また、針葉樹種やコナラ平尾の割合がやや高いが、2層ほど高率にはならない。

本層から上位の3-1層が縄文時代後期初頭から中葉、前述EWT-1地点の4層から2層が縄文時代後期初頭から後葉と、出土遺物から推定される堆積時期に重なりがあるものの、一致していない。EWT-1地点での花粉化石群集の変化を有為なものと考えると、縄文時代後期初頭から後葉にかけての植生の変化を示していると考えられる。このことは、EWT-3地点でも同じである。また、両地点での推定時期の時間的な広がりから、EWT-3地点の花粉化石群集は、EWT-1地点の一部に重なるものと考えられる。これらのことから、3-2層の堆積時期は、EWT-1地点の4層が堆積した時期に重なると考えられる。

上記のように、本層の堆積時期はEWT-1地点の4層の堆積時期と重なり、同様の植生が復元できる。したがって、周辺の山地低所にはカシ林（照葉樹林）が分布していたと考えられる。また、僅かに検出されるツガ、アカマツ、スギなどの針葉樹が、カシ林に混生した可能性がある。また、山地高所に温帯针葉樹林やミズナラ林が分布した可能性もある。更にEWT-1地点の植生変遷を踏まえると、周辺の二次林化、あるいは冷涼化に伴う温帯针葉樹林やミズナラ林の拡大が進行していた。

ことが示唆される。

### ② 3-1層堆積時期（縄文時代後期初頭から中葉）

試料No2を3-1層から採取している。木本花粉化石群集は下位の3-2層（試料No4）やEWT-1地点の4層、2層に類似する。ただし、コナラ亜属の含有量、出現率は2層ほどは高くならない。これらのことから、3-1層の堆積時期が、EWT-1地点の4層上部と重なる、あるいは4層と2層の堆積した時期の間に位置すると考えられる。

上記のように、本層の堆積時期はEWT-1地点の4層上部の堆積時期、あるいは4層と2層の堆積時期の間に重なる。また、植生の変化は3-2層及びEWT-1地点の4層から続くことから、周辺の山地低所には引き続きカシ林（照葉樹林）が分布していたと考えられる。また、モミ、ツガ、アカマツ、スギなどの針葉樹が、カシ林に混生したと考えられる。更に山地高所には温帯針葉樹林やミズナラ林が分布した。EWT-1地点の植生変遷を踏まえると、周辺の二次林化、あるいは冷涼化に伴う温帯針葉樹林やミズナラ林の拡大が進行していたことが示唆される。

一方草本花粉化石ではイネ科（40ミクロン未満）花粉の含有量が高い。僅かにカヤツリグサ科やセリ科が検出されることから、やや湿った環境下で堆積し、ヨシ類（イネ科）やホタルイ類（カヤツリグサ科）、セリ類などが近辺に生育していた可能性がある。また、ソバ属もごく僅かであるが検出されており、EWT-1地点2層に先立つ可能性があるこの時期に、ソバが栽培されていた可能性が示唆される。

### ③ 1-1''層堆積時期（時期未定）

試料No1を1-1''層から採取している。本層からは遺物が検出されず、堆積時期が不明である。木本花粉化石群集は下位の3-1層（試料No2）やEWT-1地点の4層上部、2層に類似する。コナラ亜属の含有量、出現率は3-1層や（試料No2）やEWT-1地点の4層上部（試料No3）に比べ高いが、EWT-1地点の2層に比べ低い。EWT-1地点の2層では下位の試料No2をピークとして試料No1ではコナラ亜属の含有量、出現率が低下することから、EWT-1地点の2層（縄文時代後期初頭から中葉）に先立つ時期、あるいはEWT-1地点の2層堆積後、間もなく堆積した可能性が示唆される。一方1-1''層は水田床上とされ、現在に近い時期に堆積したことが示唆されており、一見矛盾が生じる。床土の形成には、水田を造成するために耕作土の底に粘土を貼り付け、不透水層を造った場合と、自然堆積物が踏み固められて、自然に形成された場合がある。床土が貼られたものとすると、床上の母材が、別の場所からもたらされ占い時期の堆積物であると考えられる。また、自然に形成されたとしても、床土の母材が堆積してから水田耕作が行われる間に、何らかの原因で時期差が存在した可能性も指摘できる。

1-1''層が試料採取地点で自然に堆積したものとすると、3-1層、あるいはEWT-1地点2層に続き、周辺の山地低所にはカシ林（照葉樹林）が分布していたと考えられる。また、僅かに検出されるモミ、ツガ、アカマツ、コウヤマキ、スギ、ヒノキなどの針葉樹が、カシ林に混生したと考えられる。更に山地高所には温帯針葉樹林やミズナラ林が分布した。本層の堆積時期が3-1層に続く時期と仮定すると、周辺の二次林化、あるいは冷涼化に伴う温帯針葉樹林やミズナラ林の拡大が進行していたことが示唆される。一方EWT-1地点2層に続く時期と仮定すると、コナラ林（二次林）の遷移が進み、極相林である照葉樹林が回復したものと考えられる。

一方草本花粉化石ではイネ科（40ミクロン未満）花粉の含有量が高い。僅かにカヤツリグサ科やセリ科が検出されることから、やや湿った環境下で堆積し、ヨシ類（イネ科）やホタルイ類（カヤツリグサ科）、セリ類などが近辺に生育していた可能性がある。また、ソバ属もごく僅かであるが検出されており、EWT-1地点2層に先立つ可能性のあるこの時期にソバが栽培されていた可能性

が指摘できる。

(3) EWT-6地点

遺物が検出されなかつたことから堆積時期が不明で、花粉化石もほとんど検出できなかつた。このため、詳細を明らかにすることが、できなかつた。

(4) NST-1地点

出土遺物から5層（試料8）が縄文時代後期以前、9層（試料9）が縄文時代早期に堆積したとされている。また、遺物が検出されていないものの、9層の下位に当たることから11～14層は縄文時代中期以前に堆積したと考えられる。

試料5（13層上部）、7（14層）、8（5層）では、その外の層準に比べ花粉（胞子）化石の含有量が多かつた。

試料8は、疊層である5層下底の暗色部から採取した。概査結果では、5層からは外の試料に比べ炭片やプラント・オパールが多く検出され、占土壤であったものと考えられる。ここではスギ属、アカガシ亜属、ニレ属・ケヤキ属が10粒を越える検出量を示し、調査地周辺にこれらを要素とする林分が分布していたと考えられる。

試料7では、アカガシ亜属、スギ属の外、多くの種類が含有量のピークを成す。アカガシ亜属の卓越は、現代と同程度の気温を示唆する。縄文時代早期以前という堆積時期を考えると、最終間氷期（7～12万年ほど前）の植生を示す可能性もある。

11層から下位（特に14層：試料№7）については、今後年代測定も含めて、追従の必要がある。

### まとめ

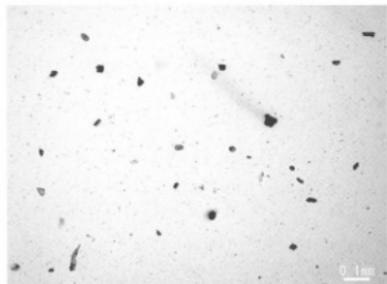
平成22年度山崎遺跡発掘調査において花粉分析を行い、以下の事柄を推定した。

- (1) 花粉化石の含有量が、通常の堆積物の1/10～1/10,000と少なかつた。このことは、堆積時の土壤化作用と堆積後の化学変化に起因すると考えられる。
- (2) 各地点の花粉分析結果を基に古植生を以下のように推定した。当該地域で初めて花粉分析を行つたことから、今後の追従が必要である。
  - ・周辺の山地低所にはカシ林（照葉樹林）が分布していたと考えられる
  - ・モミ、ツガ、アカマツ、コウヤマキ、スギ、ヒノキなどの針葉樹は山地高所に温帯針葉樹林を成したり、カシ林に混生したりしていたものと考えられる。
  - ・山頂部にはミズナラ林が分布した可能性がある。
  - ・縄文時代後期にソバが栽培されていたと考えられるほか、人間による森林の開発（薪炭林化や焼き畑）の可能性が指摘できる。

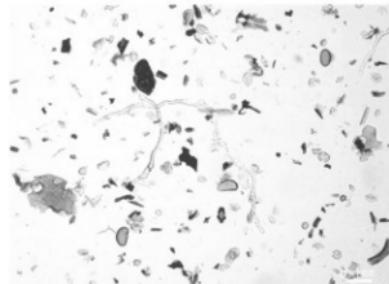
### 【引用文献】

中村 純（1974）イネ科花粉について、特にイネを中心として、第四紀研究。13, 187-197.

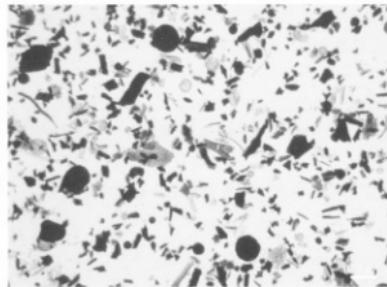
渡辺正巳（2010）花粉分析法、必携 考古資料の自然科学調査法、174-177、ニュー・サイエンス社。



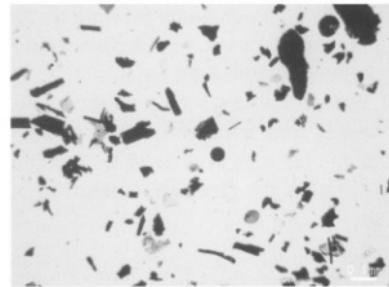
NST-1 試料No.7(花粉化石含有状況)



EWT-1 試料No.1(花粉化石含有状況)



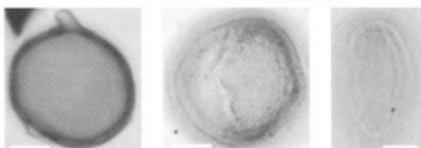
EWT-1 試料No.3(花粉化石含有状況)



EWT-6 試料No.2(花粉化石含有状況)



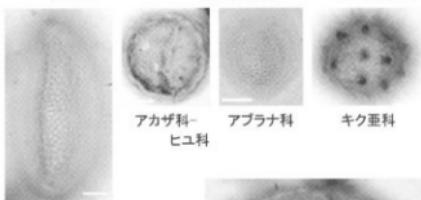
ツガ属



スギ属

アカガシ亜属

コナラ亜属



アカザ科-  
ヒュ科

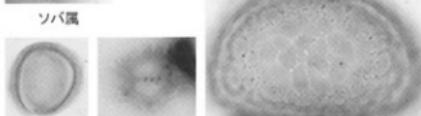
アブラナ科

キク亜科



イネ科 (40ミクロン以下)

イノモツソウ科



ソバ属

ヨモギ属

タンポポ亜科

シノブ属

スケールはすべて0.01mm



山崎遺跡全景(発掘調査後 北東から)

図版 2



発掘調査後の全景(南から)



発掘調査前の状況(A・B区およびC・F区)



C区・F区発掘調査前の状況



D・E区およびA・B区発掘調査前の状況

図版 4



D・E区発掘調査前の状況



A・B区発掘調査後の状況(東から)



B区発掘調査後の状況(東から)



A・B区土層堆積状況(NST1北端)

図版 6



A区土層堆積状況



A区遺物出土状況

図版 7



C・F区発掘調査後全景(南から)

図版 8



C区発掘調査後の状況



SR1とSR3 土層切り合い状況(EWT-3)

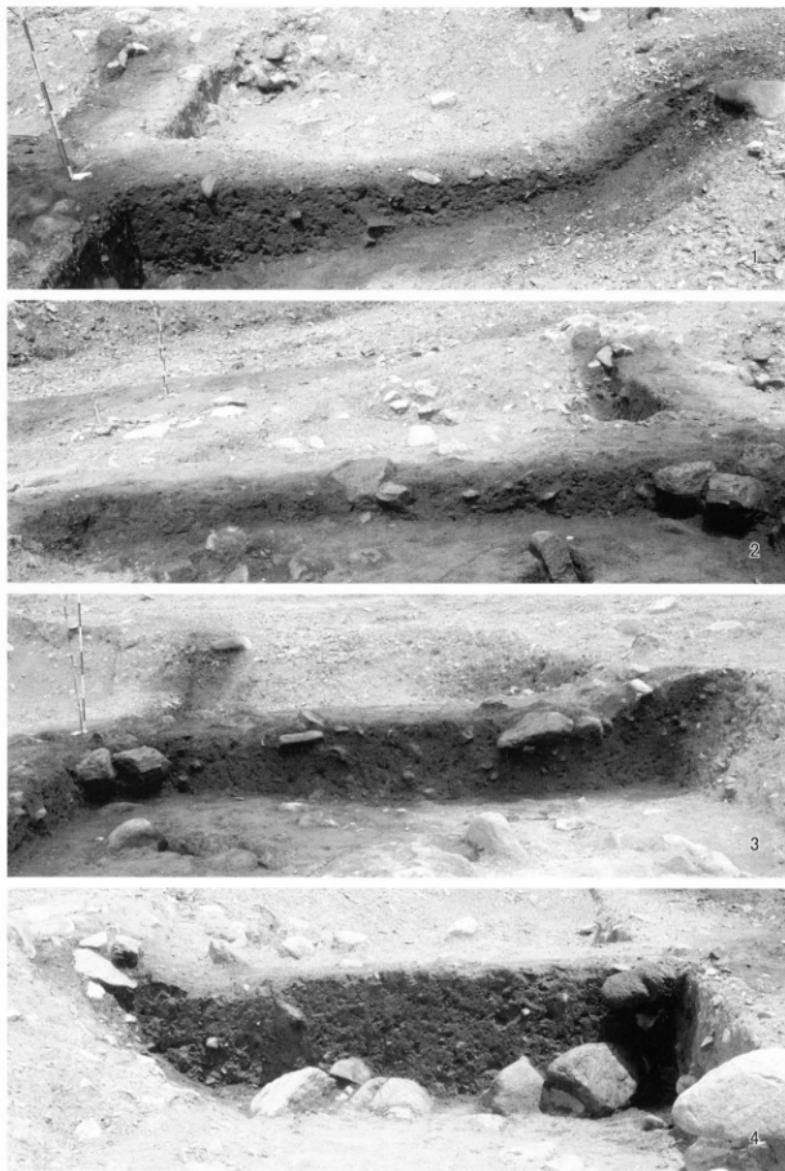


竪穴住居1検出状況(北から)



竪穴住居1完掘状況(北から)

図版 10



竪穴住居1土層堆積状況

(1.南北ベルト北半 2.同南半 3.東西ベルト東半 4.同西半)



1



2



3



4



5



6

SK01(1・2) 竪穴住居1石囲炉(3~5) 石囲炉1(6)

図版 12



F区発掘調査後の状況(北から)



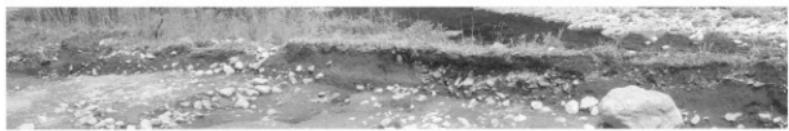
F区 SR1・SR2



1. SR1土層(東西ベルト 南から)



2. SR1土層(南壁 北から)



3. SR2土層(南壁 北から)



4. SR1遺物出土状況(C区SR3との切り合い部分)

図版 14



SR1遺物出土状況



SR1遺物出土状況



1. EWT-4



2. SR1 試掘坑1



3. SR1 試掘坑2



4. SR1 試掘坑3



5. SR1・2間 試掘坑4



6. SR2 試掘坑5

EWT-4・SR1・SR2河床部下層の状況

図版 16



D・E区発掘調査後の状況



D区発掘調査後の状況



竪穴住居2 検出当初の状況



竪穴住居2 一次堆積土検出状況

図版 18



竪穴住居2 完掘状況



竪穴住居2 土層堆積状況

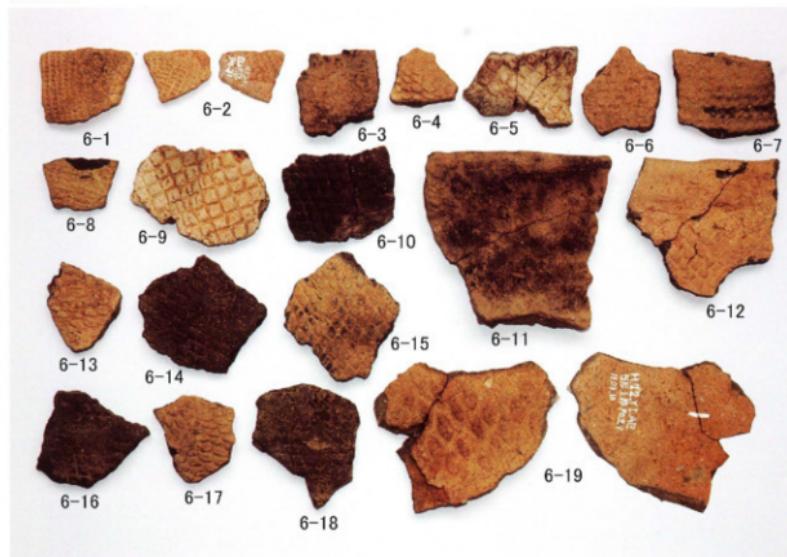


竪穴住居2 土器埋設炉

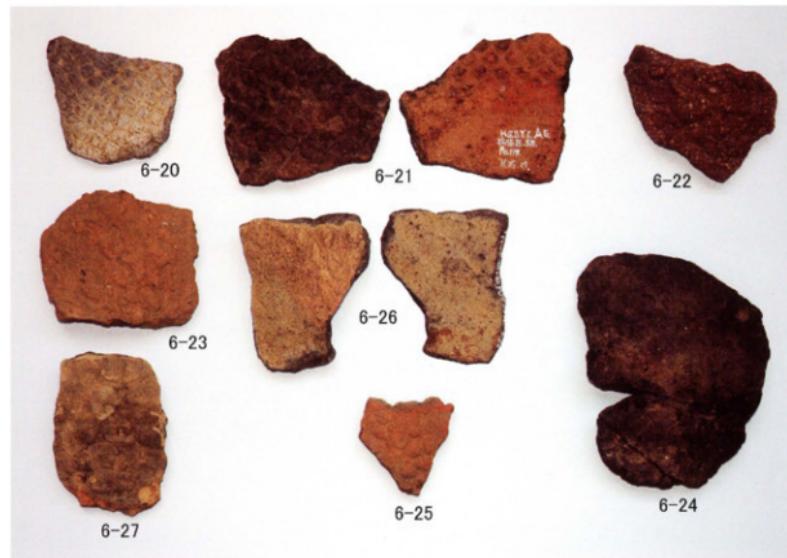


E区 石圍炉2

図版 20



A・B区出土土器(1)



A・B区出土土器(2)



A・B区出土土器(3)



A・B区出土土器(4)

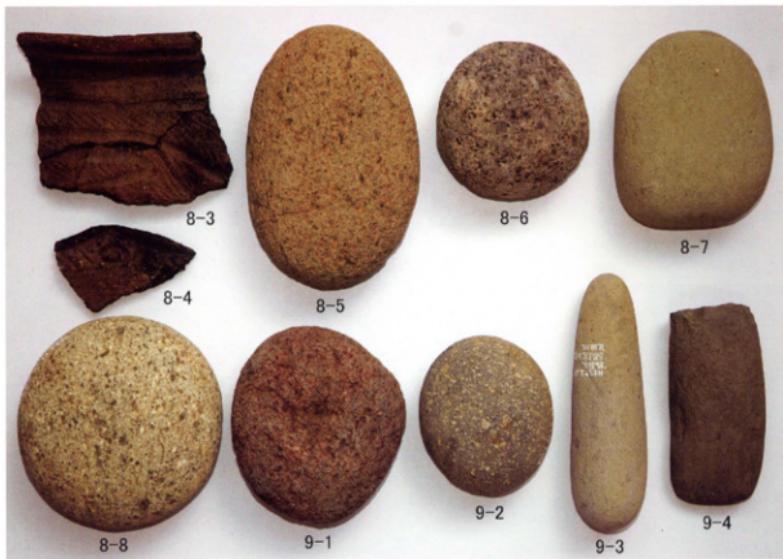
図版 22



A・B区出土土器(5)



A・B区出土土器(6)

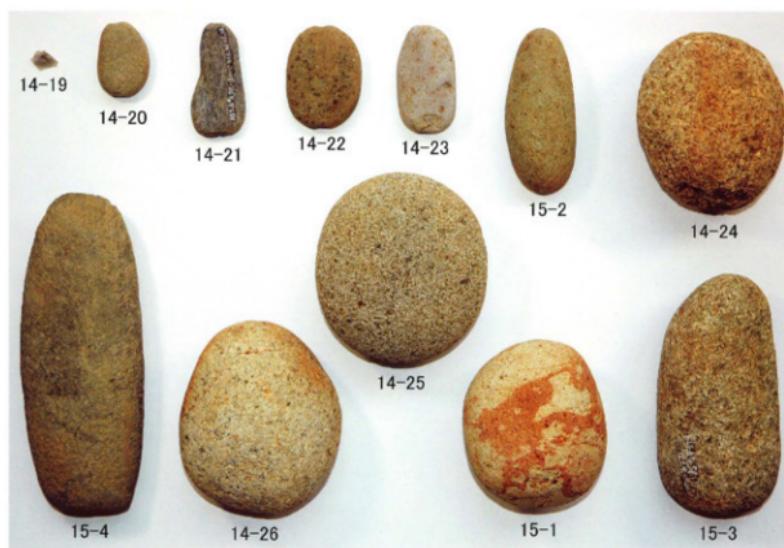


A·B区出土遗物

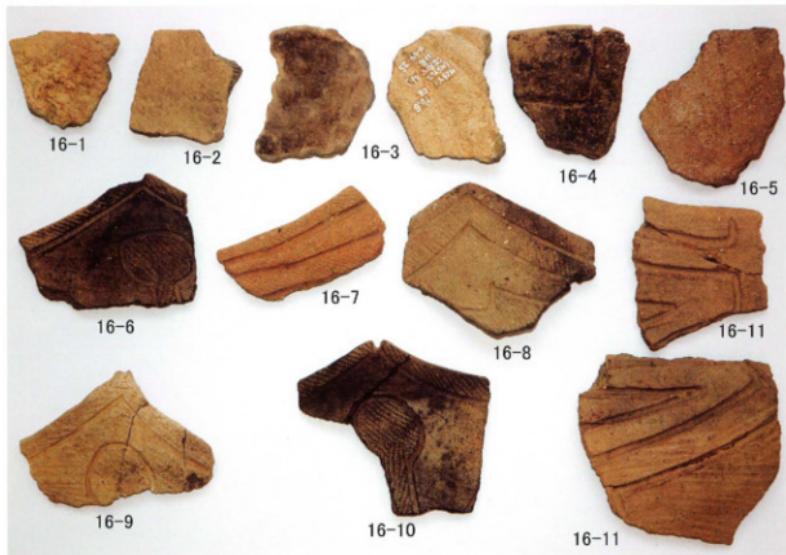
图版 24



竖穴住居1出土土器



竖穴住居1出土石器



C区出土土器(1)



C区出土土器(2)

図版 26



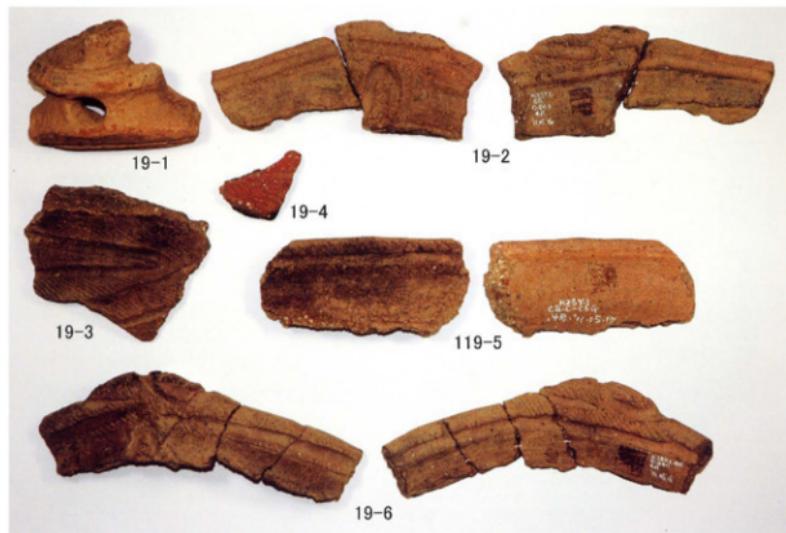
C区出土土器(3)



C区出土土器(4)



C区出土土器(5)

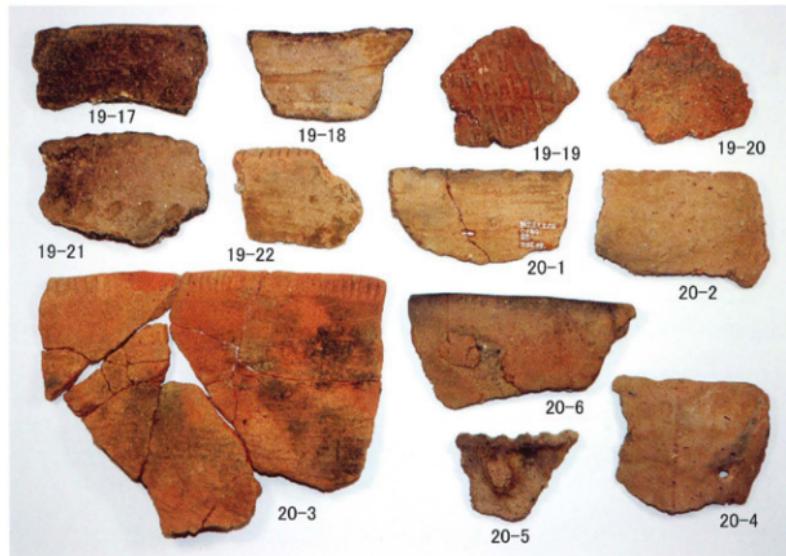


C区出土土器(6)

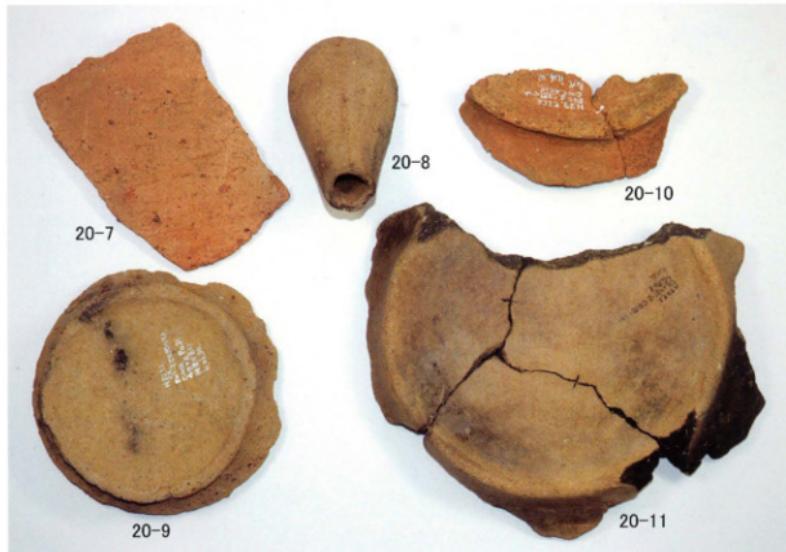
图版 28



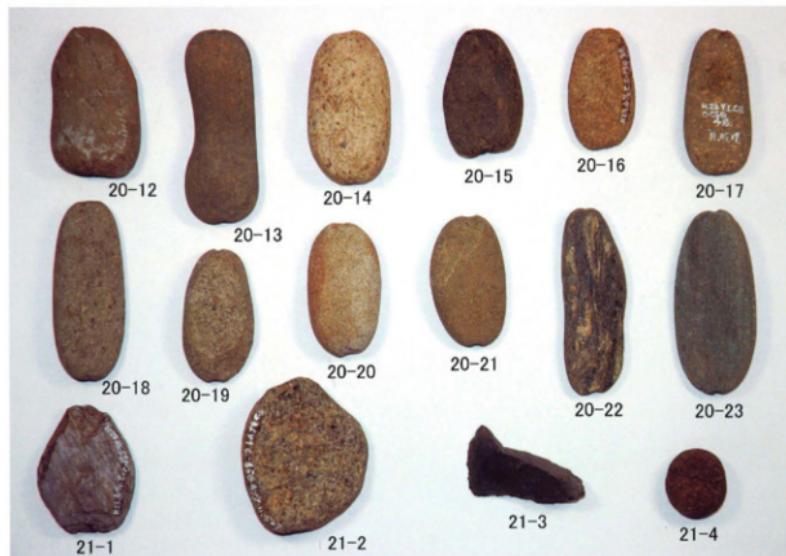
C区出土土器(7)



C区出土土器(8)



C区出土土器(9)

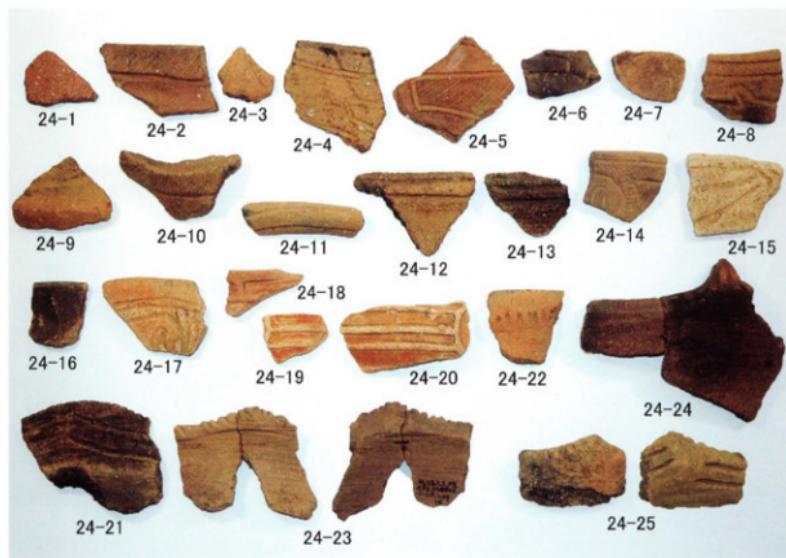


C区出土石器(1)

图版 30

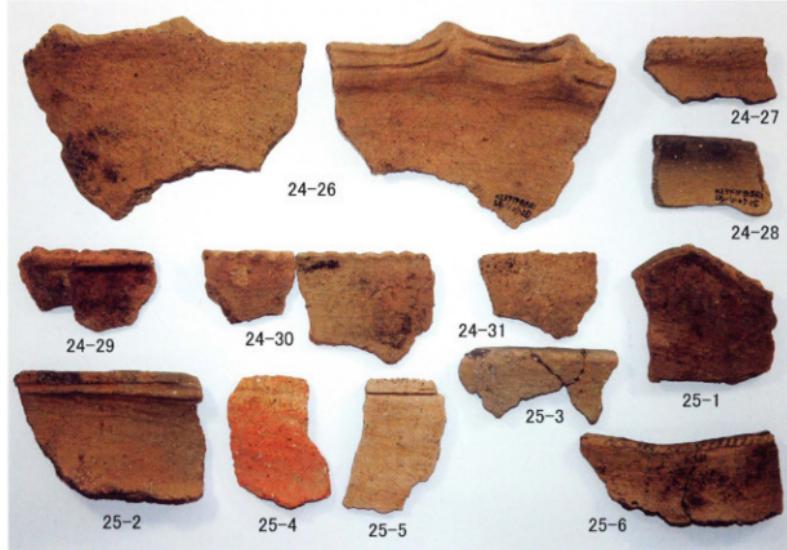


C区出土石器(2)

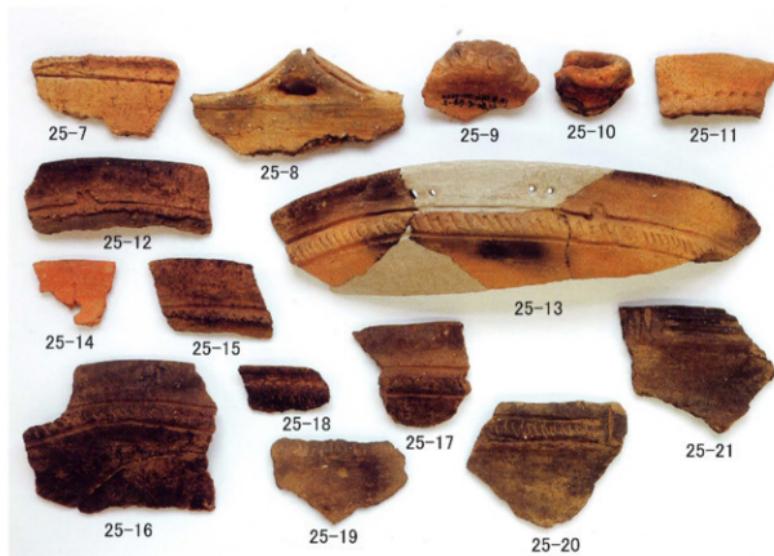


SR1出土土器(1)

図版 31



SR1出土土器(2)



SR1出土土器(3)

図版 32



SR1出土土器(4)



SR1出土土器(5)



SR1出土土器(6)



SR1出土土器(7)

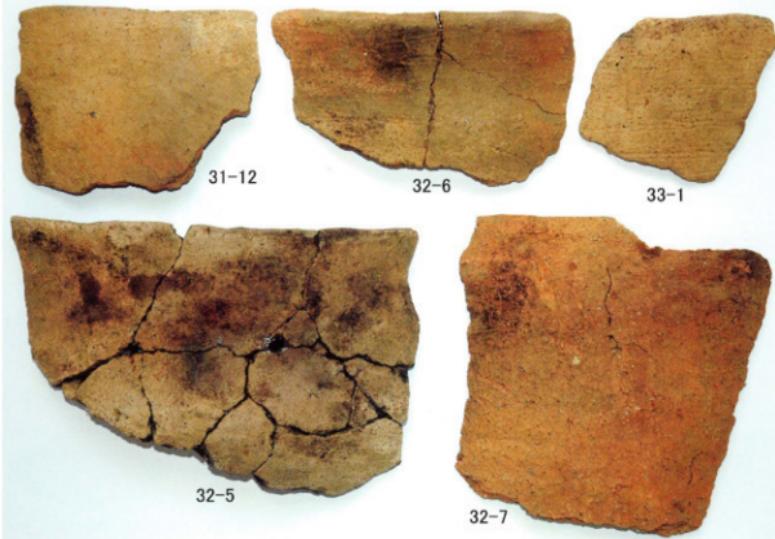
图版 34



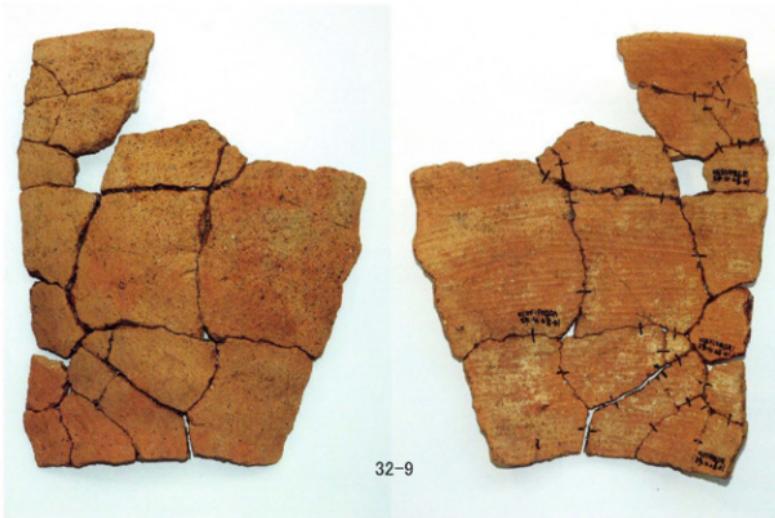
SR1出土土器(8)



SR1出土土器(9)

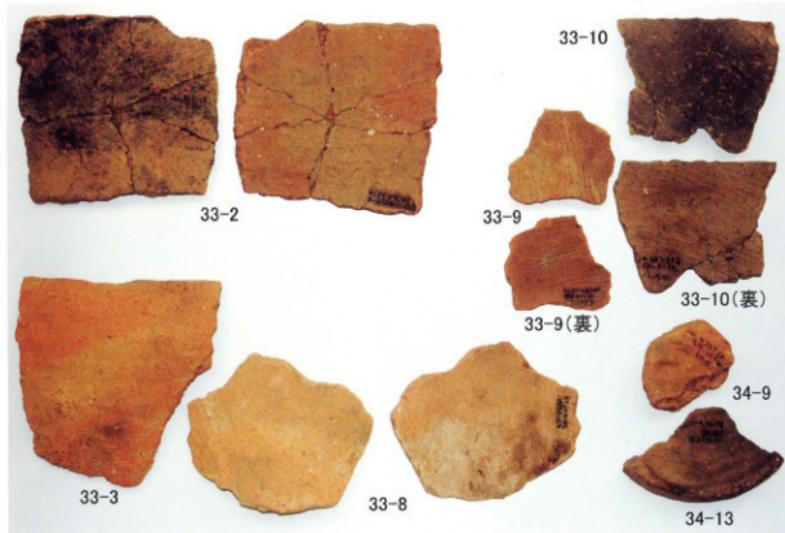


SR1出土土器(10)



SR1出土土器(11)

図版 36



SR1出土土器(12)



SR1出土土器(13)



SR1出土土器(14)

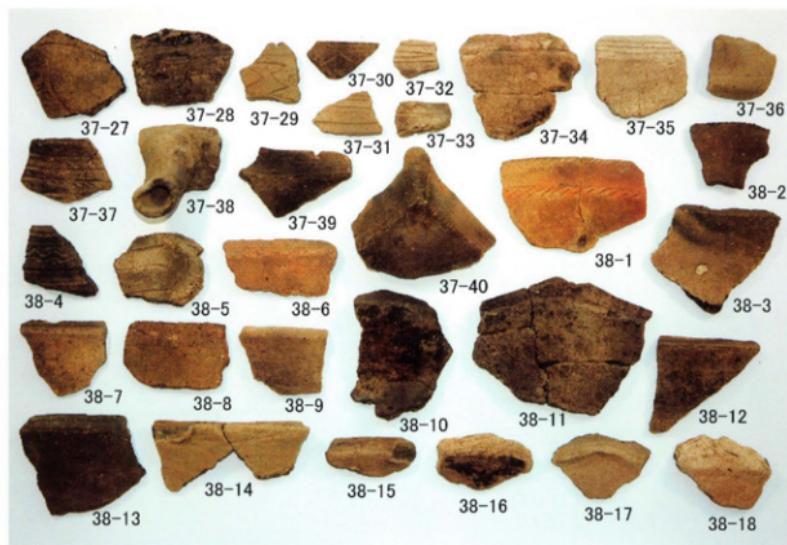


SR1出土石器

図版 38



SR2出土土器(1)



SR2出土土器(2)

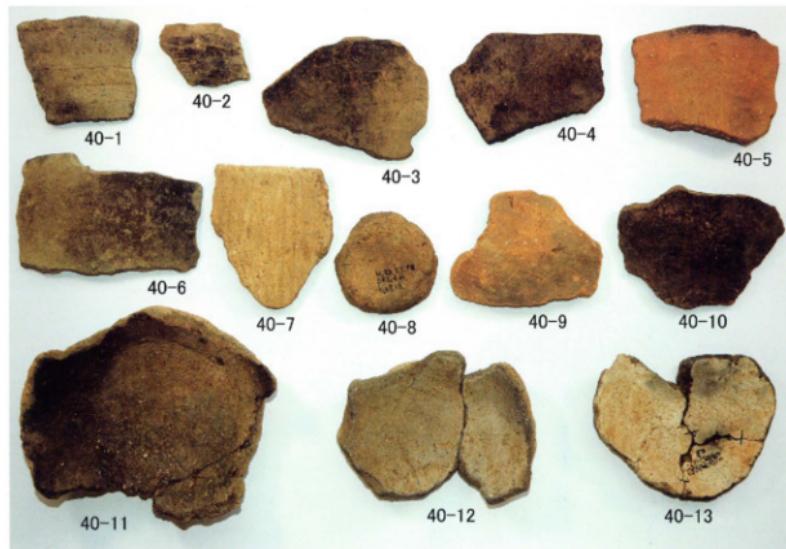


SR2出土土器(3)

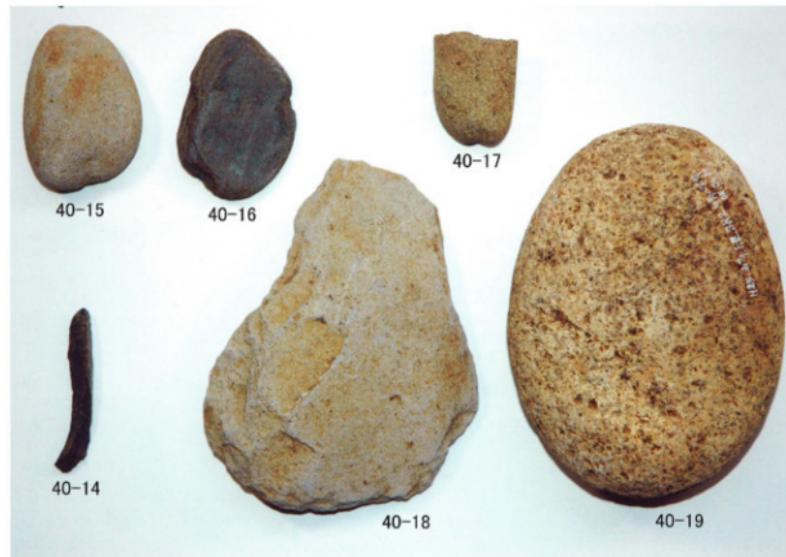


SR2出土土器(4)

图版 40



SR2出土土器(5)



SR2出土石器

图版 41



F区出土土器(1)



F区出土土器(2)

図版 42



F区出土土器(3)



F区出土石器(1)



F区出土石器(2)

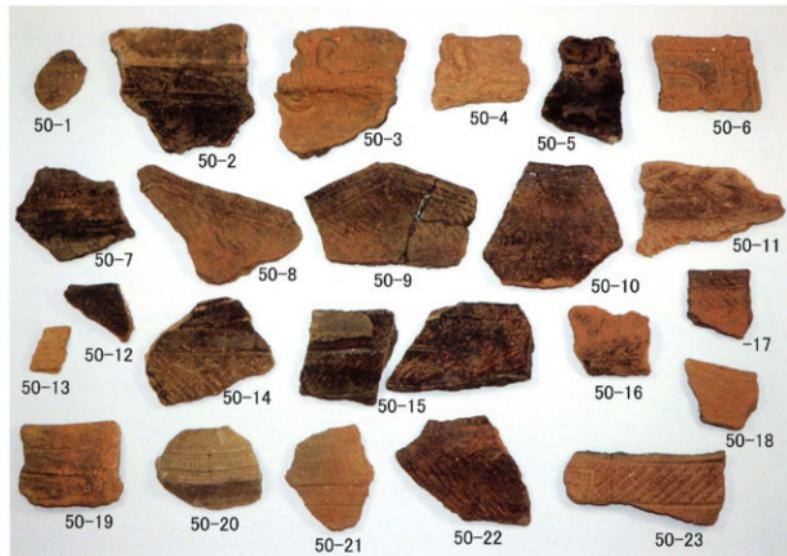


竖穴住居2出土土器

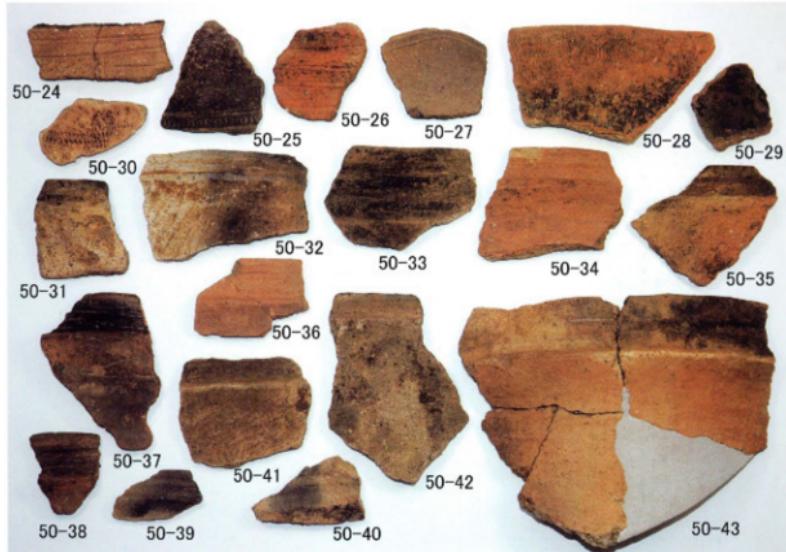
図版 44



竪穴住居2 土器埋設炉の土器



D・E区出土土器(1)



D·E区出土土器(2)



D·E区出土土器(3)

图版 46



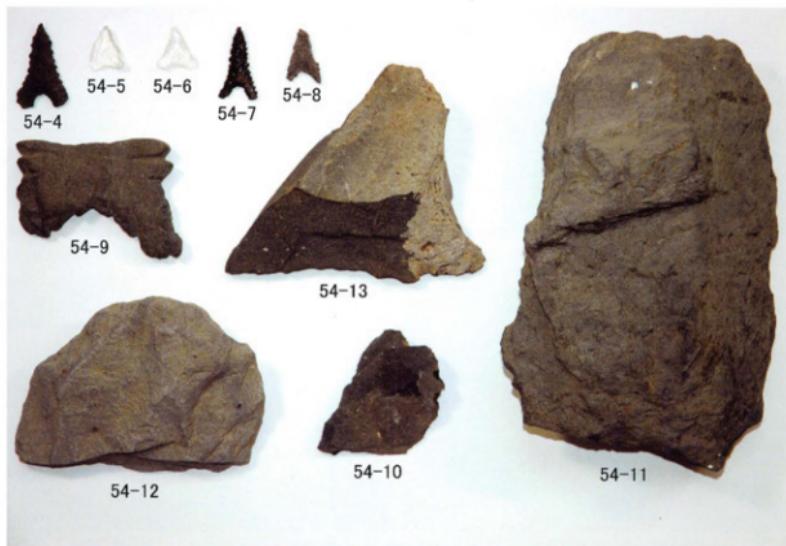
D·E区出土石器



追加資料·出土地点不明土器(1)



追加資料・出土地点不明土器(2)



追加資料・出土地点不明石器

図版 48 土器施文・圧痕



1. 卷貝殻頂部刺突・側面押圧
2. 二枚貝腹縁刺突
3. 卷貝条痕
4. 二枚貝条痕
5. 撤り戻し縄文
6. 卷貝疑似縄文
7. 底部圧痕(種子か)
8. 底部卷貝圧痕

## 報告書抄録

ふりがな	やまさきいせき							
書名	山崎遺跡							
副書名	国道488号長沢バイパス社会資本整備総合交付金（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	山本浩之							
編集機関	益川市教育委員会							
所在地	〒698-8650 島根県益田市常盤町1番1号 0856-31-0623							
発行年月日	2015年3月20日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山崎遺跡	島根県 益田市 匹見町 瀬川	32204	S212	34° 36° 10"	131° 57' 0"	2010.11.8 ~ 2011.8.12	4,000m <sup>2</sup>	国道488号長沢 バイパス社会資 本整備総合交付 金（改良）工事
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
山崎遺跡	集落跡	縄文	竪穴住居、石垣、 土器埋設坑、土坑、 柱穴	縄文土器、縄文石器			縄文時代後期の 集落遺跡	

## 山崎遺跡

国道488号長沢バイパス社会資本整備総合交付金（改良）工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27（2015）年3月発行

編集・発行 益田市教育委員会

島根県益田市常盤町1番1号

印刷 有限会社 原自刷

浜田市下府町327-77

